長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

—上伊那郡辰野町その2—

昭和48年度

日本
長野

信州大学附属図書館
3470205349

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

―上伊那郡辰野町その２―

昭和４８年度

信州大学図書館

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

序

昭和48年度長野県中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として、上伊那郡辰野町内その２地区14遺跡の発掘調査が、４月19日から10月23日にかけて実施された。

この辰野町は、伊那盆地の最北端に位置し、南は天竜川・横川川を中心に発達した盆地とその周辺に形成された複合扇状地と河岸段丘からなり、北は、狭まる天竜川両岸に緩傾斜地が続き、これを切る数条の沢は、いくつかの峠に続く路筋にもあたり、古くから交通の分岐点とし重要視され、考古学的に見ても特色ある地域として注目されている。中央自動車道は、町の南で天竜川を渡り、樋口の段丘面から天竜川左岸山麓傾斜面を通過しており段丘面では昨年度の樋口五反田遺跡の大成果のため、傾斜地域では遺跡の特質究明のため今回の調査には大きな期待がかけられていた。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように縄文時代中期、弥生時代後期、奈良・平安時代、中世の住居址 140軒以上が重複し、各期にわたる集落構成に大きな示唆を与え、城郭の一画さえ確認された樋口内城館址遺跡、山裾の小扇状地に立地した平安時代の小集落の発見をみた沢入口・沢頭・藤の森遺跡・山麓の崖錐面に立地した縄文時代前期の集落、整った配石を備えた中世の墓址群を確認した堂ケ入遺跡等、 各所発見された遺物も、 豊富かつ多岐にわたり学界に新知見をもたらすものさえあって、この発掘調査の成果は極めて多大であった。

報告書刊行に当って、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた日本道路公団名古屋建設局、同伊那工事事務所、余寒未だ去りやらない４月から、炎暑を経て寒ささえ覚えはじめる10月末にかけて、長期間この発掘調査に精励された大沢団長を始めとする調査団の各位、この調査のためにご協力いただいた伊那中央道事務所、辰野町当局ならびに同町中央道用地被買収者組合等関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

昭和49年３月20日

長野県教育委員会教育長　小　松　孝　志

例　　言

1．本書は、昭和48年度に日本道路公団と、長野県教育委員会との契約に基づいた発掘調査のうち、辰野町内その２地区14遺跡の調査報告書である。

2．本書は、契約期間内(昭和49年３月20日)にまとめることが要求されており、従って調査結果について充分、検討・研究する時間がとれないため、調査によって検出された遺構、遺物などをより多く図示することに重点をおいて、山田が編集した。

3．本書中の樋口内城館址遺跡は、時を同じにして、中央道関連事業である圃場整備事業が行なわれるため、辰野町教育委員会による発掘調査が実施された。樋口内城館址遺跡の全貌を知るよい機会に恵まれたわけで、辰野町教育委員会及び発掘担当者中村竜雄氏の好意でその調査資料を借用し得て、本書に一括記載できたことはありがたいことである。

　従って、本書中の住居址 101号住居址以降、小竪穴28以降、土壙75以降、特殊円形竪穴７は借用した調査資料によるものである。

4．遺構関係の図類は、山田・市沢・一条が製図した。

　遺構図中のドットは焼土を表わし、住居址内の◎は埋甕、埋甕炉を表わしている。またピット内及びその附近の数字は、深さをcmで表わしている。縮尺については図に示してある。

5．土器の実測は、山田・山岡・市沢・八木が当たり、整図は山岡が担当した。

6．土器拓本は、小松原・山岡・堀調査補助員が担当し、その整図には山田・山岡が当たった。

7．土器の復元は福沢が担当した。

8．石器実測・整図は主として八木が担当し、一部、市沢・一条が担当した。

　石器実測に当って、擦痕の表現は、使用によると思われる擦痕は↗、調整によるものと思われる擦痕は↙と区別した。また、側縁が使用磨滅しているものは← →で範囲を示し、磨滅部をIIIIで表記した。特殊磨石については、A面－巾0.5～３cm前後の細長い磨面、B面－A面以外の磨面、C部－敲打器として使用されている部分、D部－凹石様の凹部、E部－台石様のダメージ部と区別し、A～Eの記号で表示してある。

9．土製品・金属器類の実測・整図は、山岡が担当した。

10．写真撮影は、今村・山田・木下が担当した。

11．執筆は調査員が分担し、それぞれの文末に文責を記した。

12．遺物・実測図類は、辰野町平出、辰野東小学校内、中央道遺跡調査団本部に保管してある。

目　　次

序
例言
Ⅰ　調査状況……1
1．調査にいたるまで……1
1）中央道関係の経過……1
2）発掘調査委託契約……10
3）発掘調査開始までの準備……16
2．調査の実施と経過……17
1）調査の期間と経過……17
2）発掘調査協力者……18
3）現地指導・現地視察者……18
3．発掘調査の方法……19
Ⅱ　辰野町の概況……20
1．辰野町の環境……20
2．辰野町の遺跡……22
Ⅲ　調査遺跡……33
1．手長神社旧跡遺跡（ＴＺＢ）……33
1）位置……33
2）遺構と遺物……33
ア．ロームマウンド……33
イ．土壙……35
ウ．出土遺物……35
3）まとめ……35
2．若宮遺跡（ＷＫＣ）……35
1）位置……35
2）遺構と遺物……35
ア．平安時代の遺構と遺物……37
ア）１号住居址……37
イ）２号住居址……38
ウ）３号住居址……39
エ）土壙……39
3）まとめ……39
3．荒神社矢沢遺跡（ＹＷＢ）……41
1）位置……41
2）遺構と遺物……41
ア．縄文式時代の遺構と遺物……41
ア）１号址……41
イ）２号住居址……41
ウ）３号住居址……43
エ）４号住居址……50
イ．その他の出土遺物……54
3）まとめ……54
4．樋口内城館址遺跡（ＨＺＣ）……55
1）位置……55
2）遺構と遺物……58
ア．縄文式時代の遺構と遺物……58
ア）２号住居址……58
イ）３号住居址……58
ウ）４号・11号・17号住居址……58
エ）10号住居址……63
オ）９号住居址……65
カ）12号住居址……65
キ）19号・27号・28号住居址……65
ク）25号住居址……74
ケ）30号住居址……77
コ）38号住居址……77
サ）47号住居址……80
シ）48号住居址……80
ス）45号住居址……82
セ）62号住居址……82
ソ）64号住居址……89
タ）67号・86号・92号住居址……92
チ）66号・80号住居址……92
ツ）78号住居址……94
テ）70号・76号・73号・82号住居址……94
ト）81号住居址……101
ナ）87号住居址……109
ニ）74号住居址……109
ヌ）88号住居址……109
ネ）84号住居址……109
ノ）90号住居址……116
ハ）94号住居址……116
ヒ）16号住居址……116
フ）102号住居址……116
ヘ）107号住居址……118
ホ）115号住居址……122
マ）117号住居址……124
ミ）119号住居址……125
ム）120号・121号住居址……128
メ）122号住居址……130
モ）123号住居址……133
ヤ）125号住居址……135
ユ）127号住居址……135
ヨ）128号住居址……141
ラ）131号住居址……141
リ）133号住居址……142
ル）134号・135号住居址……145
レ）136号住居址……146
ロ）138号住居址……147
ワ）140号住居址……148
ヲ）141号住居址……148
ン）その他の遺構と出土遺物……154
ａ）土壙……154
ｂ）土壙出土遺物……162

c）その他の出土遺物…… 162
イ．弥生式時代の遺構と遺物…… 181
ア）1号住居址…… 181
イ）5号住居址…… 181
ウ）6号住居址…… 181
エ）7号住居址…… 184
オ）8号・43号住居址…… 184
カ）13号住居址…… 190
キ）18号住居址…… 190
ク）21号住居址…… 197
ケ）22号住居址…… 197
コ）23号・24号住居址…… 198
サ）26号住居址…… 198
シ）29号・31号住居址…… 203
ス）32号・35号住居址…… 203
セ）33号・44号・46号住居址…… 206
ソ）39号・42号・49号住居址…… 209
タ）50号・57号・71号住居址…… 213
チ）51号住居址…… 217
ツ）52号・53号住居址…… 217
テ）55号・56号住居址…… 217
ト）58号・65号・79号住居址…… 223
ナ）59号住居址…… 225
ニ）60号・61号・68号住居址…… 225
ヌ）63号・91号・85号住居址…… 230
ネ）69号・93号住居址…… 230
ノ）72号・75号住居址…… 231
ハ）77号住居址…… 235
ヒ）83号住居址…… 235
フ）89号住居址…… 235
ヘ）101号住居址 …… 235
ホ）103号・110号住居址…… 239
マ）106号住居址 …… 241
ミ）108号・118号住居址…… 241
ム）109号住居址 …… 243
メ）111号住居址 …… 245
モ）112号住居址 …… 246
ヤ）113号住居址 …… 246
ユ）116号住居址 …… 246
ヨ）124号住居址 …… 246
ラ）126号住居址 …… 251
リ）129号住居址 …… 252
ル）130号住居址 …… 252
レ）132号住居址 …… 252
ロ）137号住居址 …… 252
ワ）139号住居址 …… 254
ヲ）その他の出土遺物…… 258
ウ．古墳時代の遺構と遺物…… 261
ア）34号住居址…… 261
イ）54号住居址…… 261
エ．平安時代の遺構と遺物…… 262
ア）14号住居址…… 262
イ）20号住居址…… 262
ウ）15号住居址…… 262
エ）36号住居址…… 267
オ）104号住居址 …… 267
カ）105号住居址 …… 267
キ）114号住居址 …… 267
ク）142号住居址 …… 268
ケ）古墳・平安時代のその他出土遺物 268
オ．中世の遺構と遺物…… 269
ア）住居址…… 269
a）37号住居址…… 269
b）40号住居址…… 269
c）41号住居址…… 270
イ）中世小竪穴…… 270
ウ）特殊円形竪穴…… 275
カ．その他の遺構と遺物…… 275
ア）墓址…… 275
a）土壙墓1…… 275
b）火葬墓1…… 275
イ）溝状遺構…… 275
ウ）柱列遺構…… 277
エ）その他の出土遺物…… 281
3）まとめ…… 282
5．大久保尻遺跡（OUC）…… 284
1）位置と赤羽焼の歴史…… 284
2）赤羽焼の窯址と遺物…… 284
3）まとめ…… 285
6．神送遺跡（KYC）…… 289
1）位置…… 289
2）平安時代の遺構と遺物…… 289
ア．1号住居址…… 289
イ．2号住居址…… 289
ウ．3号住居址…… 292
エ．その他の出土遺物…… 295
オ．土壙…… 295
3）まとめ…… 295
7．公家塚遺跡（KLB）…… 296
1）位置…… 296
2）縄文式時代の遺物…… 296
3）まとめ…… 296
8．牧垣外遺跡（MCA）…… 297
1）位置…… 297
2）遺構と遺物…… 297
ア．縄文式時代の遺構と遺物…… 297
イ．平安時代の遺構と遺物…… 297
ア）1号住居址…… 297
3）まとめ…… 298
9．大窪遺跡（OAA）…… 298

1）位置…… 298
2）縄文式時代の遺物…… 298
3）まとめ…… 301
10. 堂ケ入遺跡…… 301
1）位置…… 301
2）遺構と遺物…… 304
ア．縄文式時代の遺構と遺物…… 304
ア）1号住居址…… 304
イ）2号住居址…… 304
ウ）土壙　1～9…… 305
エ）集石　1～3…… 306
オ）その他の出土遺物…… 317
イ．中世の墓址と遺物…… 318
ア）墓址と遺物…… 318
イ）溝状遺構…… 319
ウ）その他の出土遺物…… 326
3）まとめ…… 326
11. 藤の森遺跡（HUA）…… 329
1）位置…… 329
2）遺構と遺物…… 329
ア．縄文式時代の遺物…… 330
イ．弥生式時代の遺物…… 330
ウ．平安時代の遺構と遺物…… 330
ア）1号住居址…… 330
イ）その他の出土遺物…… 330
3）まとめ…… 330
12. 沢頭遺跡（SWB）…… 333
1）位置…… 333
2）遺構と遺物…… 333
ア．縄文式時代の遺物…… 333
イ．平安時代の遺構と遺物…… 333
ア）1号住居址…… 333
イ）その他の出土遺物…… 333
3）まとめ…… 335
13. 沢入口遺跡（SCB）…… 335
1）位置…… 335
2）遺構と遺物…… 335
ア．縄文式時代の遺物…… 335
イ．平安時代の遺構と遺物…… 336
ア）1号住居址…… 336
イ）2号住居址…… 337
ウ）3号住居址…… 337
エ）4号住居址…… 337
オ）5号住居址…… 345
カ）その他の遺構と遺物…… 347
3）まとめ…… 348
14. 上の原遺跡（UEB）…… 348
1）位置…… 348
2）縄文式時代の遺物…… 348
3）まとめ…… 349
あとがき…… 350
石器計測表…… 351

挿　図　目　次

第1図　辰野町遺跡分布図……23
第2図　遺跡地形図（若宮・手長神社跡旧遺跡）……27
第3図　遺跡地形図（荒神社矢沢・大久保尻・大窪遺跡）……28
第4図　遺跡地形図（樋口内城館址遺跡）……29
第5図　遺跡地形図（神送・公家塚・牧垣外遺跡）……30
第6図　遺跡地形図（堂ケ入遺跡）……31
第7図　遺跡地形図（藤の森・沢頭・沢入口・上の原遺跡）……32
第8図　手長神社旧跡遺跡遺構実測図および石器……34
第9図　若宮遺跡遺構実測図……36
第10図　若宮遺跡3号住居址カマド実測図および土壙1～4実測図……37
第11図　若宮遺跡1～3号住居址出土土器および鉄器……38
第12図　若宮遺跡2号住居址出土土器……40
第13図　荒神社矢沢遺跡遺構全体図……42
第14図　荒神社矢沢遺跡1号住居址出土土器……43
第15図　荒神社矢沢遺跡2・3号住居居址実測図……44
第16図　荒神社矢沢遺跡2号住居址出土土器……45
第17図　荒神社矢沢遺跡2号住居址出土土器……46
第18図　荒神社矢沢遺跡2号住居址出土土器……47
第19図　荒神社矢沢遺跡3号住居址出土土器……48
第20図　荒神社矢沢遺跡3号住居址出土土器……49
第21図　荒神社矢沢遺跡4号住居址実測図……50

第22図　荒神社矢沢遺跡４号住居址出土土器……51
第23図　荒神社矢沢遺跡４号住居址およびその他出土土器……52
第24図　荒神社矢沢遺跡出土石器……53
第25図　荒神社矢沢遺跡出土石鏃・小形土器他……54
第26図　樋口内城館址遺跡遺構全体図……56
第27図　樋口内城館址遺跡縄文期遺構全体図……57
第28図　樋口内城館址遺跡２・10号住居址実測図……59
第29図　樋口内城館址遺跡２号住居址出土土器……60
第30図　樋口内城館址遺跡３号住居址・特殊円形竪穴１・４・11・17号住居址・土壙54～57実測図……61
第31図　樋口内城館址遺跡３・４号住居址出土土器……62
第32図　樋口内城館址遺跡11・17号住居址出土土器……63
第33図　樋口内城館址遺跡10号住居址出土土器……64
第34図　樋口内城館址遺跡９号住居址出土土器……66
第35図　樋口内城館址遺跡２・３・４・11・10・９号住居址出土石器……67
第36図　樋口内城館址遺跡12・21号住居址、土壙８・60実測図……68
第37図　樋口内城館址遺跡12号住居址出土土器……69
第38図　樋口内城館址遺跡18・19・27号住居址、小竪穴17実測図……70
第39図　樋口内城館址遺跡19・27号住居址出土土器……71
第40図　樋口内城館址遺跡27号住居址出土土器……72
第41図　樋口内城館址遺跡28号住居址出土土器……73
第42図　樋口内城館址遺跡28号住居址出土土器……74
第43図　樋口内城館址遺跡12・19・27・28・25号住居址出土石器……75
第44図　樋口内城館址遺跡２・３・11・17・10・９・12・27・28・25号住居址出土石器および土製品……76
第45図　樋口内城館址遺跡25号住居址、小竪穴７・８・９・10実測図……77
第46図　樋口内城館址遺跡25号住居址出土土器（その１）……78
第47図　樋口内城館址遺跡25号住居址出土土器（その２）……79
第48図　樋口内城館址遺跡25号住居址出土土器（その３）……80
第49図　樋口内城館址遺跡30号住居址出土土器……81
第50図　樋口内城館址遺跡38号住居址出土土器……82
第51図　樋口内城館址遺跡47・48・39・49・42号住居址、小竪穴19、土壙26・40・41、溝状遺構１実測図……83
第52図　樋口内城館址遺跡47号住居址出土土器……84
第53図　樋口内城館址遺跡48号住居址出土土器……85
第54図　樋口内城館址遺跡30・38・47・48・45・62・64・67・86・92・73号住居址出土石器……86
第55図　樋口内城館址遺跡38・47・45・67・92・82・81・74・88号住居址出土石器および土製品……87
第56図　樋口内城館址遺跡45号住居址出土土器……88
第57図　樋口内城館址遺跡64・85号住居址、小竪穴21、土壙11・12・15・16・17実測図……89
第58図　樋口内城館址遺跡62・64号住居址出土土器……90
第59図　樋口内城館址遺跡67号住居址出土土器……91
第60図　樋口内城館址遺跡78・81・92号住居址実測図……93
第61図　樋口内城館址遺跡92・66号住居址出土土器……94
第62図　樋口内城館址遺跡78号住居址出土土器……95
第63図　樋口内城館址遺跡70・73号住居址実測図……96
第64図　樋口内城館址遺跡70号住居址出土土器（その１）……97
第65図　樋口内城館址遺跡70号住居址出土土器（その２）……98
第66図　樋口内城館址遺跡70号住居址出土土器（その３）……99
第67号　樋口内城館址遺跡70・73号住居址出土土器……100
第68号　樋口内城館址遺跡82号住居址出土土器（その１）……102
第69号　樋口内城館址遺跡82号住居址出土土器（その２）……103
第70号　樋口内城館址遺跡82号住居址出土土器（その３）……104
第71号　樋口内城館址遺跡81号住居址出土土器（その１）……105

第72図　樋口内城館址遺跡81号住居址出土土器（その２）…… 106
第73図　樋口内城館址遺跡81・87号住居址出土土器…… 107
第74図　樋口内城館址遺跡70・81・74・87・88・84・90・94号住居址出土石器…… 108
第75図　樋口内城館址遺跡74・77・36号住居址、特殊円形竪穴２実測図…… 110
第76図　樋口内城館址遺跡74号住居址出土土器…… 111
第77図　樋口内城館址遺跡88・84・90・94号住居址、特殊円形竪穴３・４・５・６実測図…… 112
第78図　樋口内城館址遺跡88号住居址出土土器…… 113
第79図　樋口内城館址遺跡84号住居址出土土器…… 114
第80図　樋口内城館址遺跡90・16号住居址出土土器…… 115
第81図　樋口内城館址遺跡94号住居址出土土器…… 117
第82図　樋口内城館址遺跡102号住居址実測図 …… 118
第83図　樋口内城館址遺跡102号住居址出土土器（その１） …… 119
第84図　樋口内城館址遺跡102号住居址出土土器（その２） …… 120
第85図　樋口内城館址遺跡107・106号住居址、土壙76実測図…… 121
第86図　樋口内城館址遺跡107号住居址出土土器…… 122
第87図　樋口内城館址遺跡115・119号住居址、小竪穴38、土壙77実測図および115号住居址出土土器 …… 123
第88図　樋口内城館址遺跡117号住居址出土土器 …… 124
第89図　樋口内城館址遺跡119号住居址出土土器 …… 125
第90図　樋口内城館址遺跡120・121・142号住居址実測図 …… 126
第91図　樋口内城館址遺跡120号住居址出土土器 …… 127
第92図　樋口内城館址遺跡102・117・120・127号住居址出土石器…… 128
第93図　樋口内城館址遺跡121号住居址出土土器 …… 129
第94図　樋口内城館址遺跡122号住居址、小竪穴30・31・32実測図 …… 130
第95図　樋口内城館址遺跡122号住居址出土土器（その１）…… 131
第96図　樋口内城館址遺跡122号住居址出土土器（その２）…… 132
第97図　樋口内城館址遺跡122号住居址出土土器（その３）…… 133
第98図　樋口内城館址遺跡123・125・124号住居址、小竪穴33・37実測図 …… 134
第99図　樋口内城館址遺跡123・125号住居址出土土器…… 135
第100図　樋口内城館址遺跡127号住居址実測図 …… 136
第101号　樋口内城館址遺跡127号住居址出土土器（その１）…… 137
第102図　樋口内城館址遺跡127号住居址出土土器（その２）…… 138
第103図　樋口内城館址遺跡127号住居址出土土器（その３）…… 139
第104図　樋口内城館址遺跡127号住居址出土土器（その４）…… 140
第105図　樋口内城館址遺跡84・90・102・107・117・122・127・135・136号住居址出土石器および土製品 … 141
第106図　樋口内城館址遺跡128号住居址・炉址および小竪穴35実測図…… 142
第107図　樋口内城館址遺跡128号住居址出土土器…… 143
第108図　樋口内城館址遺跡130・131号住居址、土壙86実測図…… 144
第109図　樋口内城館址遺跡131号住居址出土土器…… 145
第110図　樋口内城館址遺跡132・133号住居址実測図 …… 146
第111図　樋口内城館址遺跡133号住居址出土土器…… 147
第112図　樋口内城館址遺跡134・135号住居址実測図…… 148
第113図　樋口内城館址遺跡134号住居址出土土器…… 149
第114図　樋口内城館址遺跡135・136号住居址出土土器 …… 150
第115図　樋口内城館址遺跡137・138・139号住居址実測図 …… 151
第116図　樋口内城館址遺跡138号住居址出土土器…… 152
第117図　樋口内城館址遺跡140号住居址、小竪穴39、土壙87実測図…… 153
第118図　樋口内城館址遺跡141号住居址出土土器…… 153
第119図　樋口内城館址遺跡16号住居址、土壙4・5・6・42・43・46・47・48・49・50・53・67・68・69、火葬墓１実測図　157
第120図　樋口内城館址遺跡土壙13・19・20・21・22・34・35・36・37・38・61・71・73・74実測図…… 158
第121図　樋口内城館址遺跡土壙28・29・30・31・32・33・36・37・38・73・74実測図…… 159

第122図　樋口内城館址遺跡30号住居址、土壙墓1、土壙51・52・59・72実測図…… 160
第123図　樋口内城館址遺跡土壙80～86・90～98実測図 …… 161
第124図　樋口内城館址遺跡土壙出土遺物（その1） …… 163
第125図　樋口内城館址遺跡土壙出土遺物（その2） …… 164
第126図　樋口内城館址遺跡土壙出土遺物（その3） …… 165
第127図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その1） …… 166
第128図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その2） …… 167
第129図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その3） …… 168
第130図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その4） …… 169
第131図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その5） …… 170
第132図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その6） …… 171
第133図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その7） …… 172
第134図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その8） …… 173
第135図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その9） …… 174
第136図　樋口内城館址遺跡その他出土石器（その1） …… 175
第137図　樋口内城館址遺跡その他出土石器（その2） …… 176
第138図　樋口内城館址遺跡その他出土石器（その3） …… 177
第139図　樋口内城館址遺跡その他出土石器（その4） …… 178
第140図　樋口内城館址遺跡その他出土石器（その5） …… 179
第141図　樋口内城館址遺跡その他出土石器（その6） …… 180
第142図　樋口内城館址遺跡その他出土石器および土製品 …… 178
第143図　樋口内城館址遺跡弥生期遺構全体図 …… 182
第144図　樋口内城館址遺跡1号住居址出土土器…… 183
第145図　樋口内城館址遺跡A地区53列および54列土層断面図 …… 184
第146図　樋口内城館址遺跡5・15号住居址実測図および15号住居址土層断面図 …… 185
第147図　樋口内城館址遺跡5号住居址出土土器 …… 186
第148図　樋口内城館址遺跡6・7号住居址、小竪穴3・16・20実測図 …… 187
第149図　樋口内城館址遺跡6・7・13・18号住居址出土土器 …… 188
第150図　樋口内城館址遺跡8号住居址、小竪穴15、土壙44・45・70実測図 …… 189
第151図　樋口内城館址遺跡13号住居址、小竪穴2、土壙9実測図 …… 190
第152図　樋口内城館址遺跡22号住居址、小竪穴22、土壙72実測図および22・23号住居址土層断面図 …… 191
第153図　樋口内城館址遺跡21・22号住居址出土土器 …… 192
第154図　樋口内城館址遺跡22号住居址出土土器 …… 193
第155図　樋口内城館址遺跡1・5・6・7・8・13・21・22・23号住居址出土石器 …… 194
第156図　樋口内城館址遺跡26・31・32・35・33・46・39・42・49・50・71・51・55・59・61号住居址出土石器…… 195
第157図　樋口内城館址遺跡77・101・106・110・108・109・111・112・113・124号住居址およびその他出土土器
石器 …… 196
第158図　樋口内城館址遺跡1・7・13・23・24・59号住居址出土石器 …… 197
第159図　樋口内城館址遺跡23・24・29・38号住居址実測図 …… 199
第160図　樋口内城館址遺跡23号住居址出土土器 …… 200
第161図　樋口内城館址遺跡14・20・26・28号住居址実測図および14号住居址カマド実測図 …… 201
第162図　樋口内城館址遺跡23・24・26号住居址出土土器 …… 202
第163図　樋口内城館址遺跡31・43号住居址、小竪穴12・14・15、土壙7実測図 …… 204
第164図　樋口内城館址遺跡29・31号住居址出土土器 …… 205
第165図　樋口内城館址遺跡32・35号住居址実測図 …… 206
第166図　樋口内城館址遺跡32号住居址出土土器 …… 207
第167図　樋口内城館址遺跡33・44・45・46号住居址、小竪穴18実測図 …… 208
第168図　樋口内城館址遺跡33・44・46号住居址出土土器 …… 210
第169図　樋口内城館址遺跡35・39・42号住居址出土土器 …… 211
第170図　樋口内城館址遺跡43・49・50号住居址出土土器 …… 212

第171図　樋口内城館址遺跡43・49・50号住居址出土土器 …… 214
第172図　樋口内城館址遺跡51・50・57・71号住居址実測図 …… 215
第173図　樋口内城館址遺跡57・71号住居址出土土器 …… 216
第174図　樋口内城館址遺跡71・51号住居址出土土器 …… 218
第175図　樋口内城館址遺跡52・53号住居址実測図 …… 219
第176図　樋口内城館址遺跡52・53号住居址出土土器 …… 220
第177図　樋口内城館址遺跡55・56号住居址出土土器 …… 221
第178図　樋口内城館址遺跡58・65・79・80・66号住居址、土壙24・25実測図 …… 222
第179図　樋口内城館址遺跡59号住居址実測図 …… 223
第180図　樋口内城館址遺跡65・59号住居址出土土器 …… 224
第181図　樋口内城館址遺跡34・60・61・68・87号住居址、土壙14実測図 …… 226
第182図　樋口内城館址遺跡60・61号住居址出土土器 …… 227
第183図　樋口内城館址遺跡62・63・91号住居址、小竪穴23、土壙13・18・19・20実測図 …… 228
第184図　樋口内城館址遺跡63号住居址出土土器 …… 229
第185図　樋口内城館址遺跡67・86・69・93号住居址実測図 …… 231
第186図　樋口内城館址遺跡85・91・69・93号住居址出土土器 …… 232
第187図　樋口内城館址遺跡76・82・72・75号住居址実測図 …… 233
第188図　樋口内城館址遺跡72・75・77・89号住居址出土土器 …… 234
第189図　樋口内城館址遺跡83・89号住居址、特殊円形竪穴5実測図 …… 236
第190図　樋口内城館址遺跡83号住居址出土土器 …… 237
第191図　樋口内城館址遺跡101・112・113号住居址、土壙75実測図 …… 238
第192図　樋口内城館址遺跡103・110号住居址実測図 …… 239
第193図　樋口内城館址遺跡101・103・110号住居址出土土器 …… 240
第194図　樋口内城館址遺跡106号住居址出土土器 …… 242
第195図　樋口内城館址遺跡108・118号住居址、土壙78・102実測図 …… 243
第196図　樋口内城館址遺跡109・111号住居址、土壙103実測図 …… 244
第197図　樋口内城館址遺跡108・118・109・111・112号住居址出土土器 …… 245
第198図　樋口内城館址遺跡117・116・114号住居址、小竪穴32および114号住居址カマド実測図 …… 247
第199図　樋口内城館址遺跡113・116号住居址出土土器 …… 248
第200図　樋口内城館址遺跡141・126・129号住居址実測図 …… 249
第201図　樋口内城館址遺跡124・126号住居址出土土器 …… 250
第202図　樋口内城館址遺跡129・130号住居址出土土器 …… 251
第203図　樋口内城館址遺跡132・137号住居址出土土器 …… 253
第204図　樋口内城館址遺跡139号住居址出土土器 …… 254
第205図　樋口内城館址遺跡その他出土の弥生式土器（その1） …… 255
第206図　樋口内城館址遺跡その他出土の弥生式土器（その2） …… 256
第207図　樋口内城館址遺跡その他出土の弥生式土器（その3） …… 257
第208図　樋口内城館址遺跡その他出土の弥生式土器（その4） …… 258
第209図　樋口内城館址遺跡古墳時代～中世遺構全体図 …… 259
第210図　樋口内城館址遺跡34・54号住居址出土土器 …… 260
第211図　樋口内城館址遺跡54号住居址カマド実測図 …… 261
第212図　樋口内城館址遺跡14・20号住居址出土土器、土製品・鉄製品 …… 263
第213図　樋口内城館址遺跡15号住居址出土土器 …… 264
第214図　樋口内城館址遺跡104・105号住居址、小竪穴28・29・36・40、特殊円形竪穴7実測図 …… 265
第215図　樋口内城館址遺跡36・104・105・114号住居址出土土器 …… 266
第216図　樋口内城館址遺跡その他出土土器 …… 268
第217図　樋口内城館址遺跡丘陵北側土層断面図 …… 269
第218図　樋口内城館址遺跡37号住居址、小竪穴22実測図 …… 270
第219図　樋口内城館址遺跡40・41号住居址、小竪穴13実測図 …… 272
第220図　樋口内城館址遺跡37号住居址、小竪穴2・5・7・9・10・11・12・15・17・22出土土器他 …… 273

第221図　樋口内城館址遺跡小竪穴14・28出土土器 …… 272
第222図　樋口内城館址遺跡小竪穴1・4・5・6・24、土壙2・3実測図 …… 274
第223図　樋口内城館址遺跡特殊円形竪穴1・7、溝状遺構3出土遺物 …… 276
第224図　樋口内城館址遺跡1号住居址附近柱列1実測図 …… 277
第225図　樋口内城館址遺跡溝状遺構3および柱列2・3実測図 …… 278
第226図　樋口内城館址遺跡その他出土遺物（その1） …… 279
第227図　樋口内城館址遺跡その他出土遺物（その2） …… 280
第228図　樋口内城館址遺跡その他出土遺物（その3） …… 281
第229図　樋口内城館址遺跡出土古銭 …… 282
第230図　大久保尻遺跡地形図および赤羽焼カマド実測図 …… 286
第231図　大久保尻遺跡赤羽焼カマド跡出土遺物（その1） …… 287
第232図　大久保尻遺跡赤羽焼カマド跡出土遺物（その2） …… 288
第233図　神送遺跡遺構全体図および1・2号住居址実測図 …… 290
第234図　神送遺跡1・2号住居址出土土器 …… 291
第235図　神送遺跡3号住居址および同カマド実測図 …… 292
第236図　神送遺跡3号住居址出土土器 …… 293
第237図　神送遺跡3号住居址およびその他出土土器 …… 294
第238図　公家塚遺跡出土縄文式土器 …… 296
第239図　牧垣外遺跡出土土器・石器 …… 299
第240図　牧垣外遺跡1号住居址実測図、同出土土器・鉄製品およびその他出土石器 …… 300
第241図　大鋸遺跡出土縄文式土器 …… 301
第242図　堂ケ入遺跡遺構全体図および1号住居址実測図 …… 302
第243図　堂ケ入遺跡土層断面図 …… 303
第244図　堂ケ入遺跡1号住居址出土土器（その1） …… 307
第245図　堂ケ入遺跡1号住居址出土土器（その2） …… 308
第246図　堂ケ入遺跡1・2号住居址、土壙4・6出土石器 …… 309
第247図　堂ケ入遺跡2号住居址および土壙1～8実測図 …… 310
第248図　堂ケ入遺跡2号住居址出土土器 …… 311
第249図　堂ケ入遺跡2号住居址、土壙2・3・4出土土器 …… 312
第250図　堂ケ入遺跡土壙4・6・8出土土器 …… 313
第251図　堂ケ入遺跡土壙8およびその他出土土器 …… 314
第252図　堂ケ入遺跡その他出土縄文式土器 …… 315
第253図　堂ケ入遺跡その他出土石器（その1） …… 316
第254図　堂ケ入遺跡その他出土石器（その2） …… 317
第255図　堂ケ入遺跡墓址全体図 …… 320
第256図　堂ケ入遺跡墓址1・2・3・4・5・7実測図 …… 321
第257図　堂ケ入遺跡墓址6・8・9・10・11・12・20実測図 …… 322
第258図　堂ケ入遺跡墓址13・14・15・16・17・18・19・26実測図 …… 323
第259図　堂ケ入遺跡墓址21・22・23・24・25・27・28・31実測図 …… 324
第260図　堂ケ入遺跡配石1、集石1・2・3、土壙9、溝状遺構実測図 …… 325
第261図　堂ケ入遺跡墓址6出土五輪塔実測図 …… 326
第262図　堂ケ入遺跡出土土器、鉄製品、石製品、土製品、ガラス玉、瓔珞 …… 327
第263図　堂ケ入遺跡出土鉄釘 …… 328
第264図　藤の森遺跡出土土器 …… 331
第265図　藤の森遺跡1号住居址およびカマド実測図 …… 331
第266図　藤の森遺跡1号住居址およびその他出土土器・石器 …… 332
第267図　沢頭遺跡1号住居址実測図、同出土土器およびその他出土縄文式土器 …… 334
第268図　沢入口遺跡出土縄文式土器 …… 336
第269図　沢入口遺跡遺構全体図および1号住居址、同カマド実測図 …… 338
第270図　沢入口遺跡1号住居址出土土器 …… 339

第271図　沢入口遺跡1・2号住居址出土土器・土錘 …… 340
第272図　沢入口遺跡2・3号住居址・同カマド実測図 …… 341
第273図　沢入口遺跡2・3号住居址出土土器・鉄器 …… 342
第274図　沢入口遺跡3号住居址出土土器 …… 343
第275図　沢入口遺跡4・5号住居址・同カマド実測図 …… 344
第276図　沢入口遺跡4・5号住居址出土土器・鎌 …… 345
第277図　沢入口遺跡その他出土土器・鉄製品 …… 346
第278図　沢入口遺跡、沢頭遺跡出土石器 …… 347
第279図　上の原遺跡出土縄文式土器 …… 349

図　版　目　次

図版第1図　手長神社旧跡遺跡 …… 363
図版第2図　若宮遺跡 …… 364
図版第3図　若宮遺跡 …… 365
図版第4図　荒神社矢沢遺跡 …… 366
図版第5図　荒神社矢沢遺跡（2号住居址） …… 367
図版第6図　荒神社矢沢遺跡（3号住居址） …… 368
図版第7図　荒神社矢沢遺跡（4号住居址） …… 369
図版第8図　樋口内城館址遺跡全景 …… 370
図版第9図　樋口内城館址遺跡遺構全景 …… 371
図版第10図　樋口内城館址遺跡2・3・4・5・6・10・11号住居址、小竪穴3・16 …… 372
図版第11図　樋口内城館址遺跡8・12・13・15号住居址 …… 373
図版第12図　樋口内城館址遺跡14・20・22・25号住居址 …… 374
図版第13図　樋口内城館址遺跡23・24・30・31・32・38号住居址、小竪穴11 …… 375
図版第14図　樋口内城館址遺跡29・33・34・36・39・42・45・47・60・61・68・74・77号住居址、溝状遺構1　376
図版第15図　樋口内城館址遺跡40・50・51・52・53・57・71号住居址、小竪穴14 …… 377
図版第16図　樋口内城館址遺跡54・59・65・66・79・80・62号住居址 …… 378
図版第17図　樋口内城館址遺跡63・67・70・72・73・75・78・86・91号住居址 …… 379
図版第18図　樋口内城館址遺跡81・83・84・89・90・94号住居址、特殊円形竪穴4・5 …… 380
図版第19図　樋口内城館址遺跡88・92・93・101号住居址 …… 381
図版第20図　樋口内城館址遺跡103・110号住居址 …… 382
図版第21図　樋口内城館址遺跡102・104・105・106・107・109・110・111号住居址 …… 383
図版第22図　樋口内城館址遺跡108・114・115・116・117・118・119・121・126号住居址 …… 384
図版第23図　樋口内城館址遺跡122・123・124・128・129号住居址、小竪穴33・35 …… 385
図版第24図　樋口内城館址遺跡127・132・133号住居址 …… 386
図版第25図　樋口内城館址遺跡134・135・136・138・139号住居址、土壙90～97 …… 387
図版第26図　樋口内城館址遺跡土壙内土器出土状態 …… 388
図版第27図　樋口内城館址遺跡火葬墓・茶臼・漆器出土状態 …… 389
図版第28図　樋口内城館址遺跡小竪穴1・4・5・6・11・22・23、溝状遺構3 …… 390
図版第29図　樋口内城館址遺跡出土縄文式土器（その1） …… 391
図版第30図　樋口内城館址遺跡出土縄文式土器（その2） …… 392
図版第31図　樋口内城館址遺跡出土縄文式土器（その3） …… 393
図版第32図　樋口内城館址遺跡出土縄文式土器（その4） …… 394
図版第33図　樋口内城館址遺跡出土縄文式土器（その5） …… 395
図版第34図　樋口内城館址遺跡出土縄文式土器（その6） …… 396
図版第35図　樋口内城館址遺跡出土縄文式土器（その7） …… 397
図版第36図　樋口内城館址遺跡出土縄文式土器（その8） …… 398
図版第37図　樋口内城館址遺跡出土縄文式土器（その9） …… 399
図版第38図　樋口内城館址遺跡出土縄文式土器（その10） …… 400

図版第39図　樋口内城館址遺跡出土石器（磨製石斧の擦痕）…… 401
図版第40図　樋口内城館址遺跡出土石器（敲打器の擦痕）…… 402
図版第41図　樋口内城館址遺跡出土石器（磨製石斧の擦痕）…… 403
図版第42図　樋口内城館址遺跡出土石器（敲打器の打痕）…… 404
図版第43図　樋口内城館址遺跡出土石器（凹石の状態）…… 405
図版第44図　樋口内城館址遺跡出土土偶…… 406
図版第45図　樋口内城館址遺跡出土弥生式土器（その1）…… 407
図版第46図　樋口内城館址遺跡出土弥生式土器（その2）…… 408
図版第47図　樋口内城館址遺跡出土弥生式土器（その3）…… 409
図版第48図　樋口内城館址遺跡出土弥生式土器（その4）…… 410
図版第49図　樋口内城館址遺跡出土弥生式土器（その5）…… 411
図版第50図　樋口内城館址遺跡出土弥生式土器（その6）…… 412
図版第51図　樋口内城館址遺跡出土弥生式土器（その7）…… 413
図版第52図　樋口内城館址遺跡出土弥生式土器（その8）…… 414
図版第53図　樋口内城館址遺跡出土弥生式土器（その9）…… 415
図版第54図　樋口内城館址遺跡出土弥生式土器（その10）…… 416
図版第55図　樋口内城館址遺跡出土弥生式土器（その11）…… 417
図版第56図　樋口内城館址遺跡出土土師器…… 418
図版第57図　樋口内城館址遺跡出土土師器・紡錘車…… 419
図版第58図　樋口内城館址遺跡出土遺物…… 420
図版第59図　大久保尻遺跡…… 421
図版第60図　神送遺跡1・2号住居址…… 422
図版第61図　神送遺跡3号住居址と出土土器…… 423
図版第62図　公家塚遺跡・大窪遺跡全景…… 424
図版第63図　牧垣外遺跡…… 425
図版第64図　堂ケ入遺跡全景…… 426
図版第65図　堂ケ入遺跡遺構全景…… 427
図版第66図　堂ケ入遺跡1号住居址…… 428
図版第67図　堂ケ入遺跡2号住居址…… 429
図版第68図　堂ケ入遺跡土壙2・3・4・9…… 430
図版第69図　堂ケ入遺跡1・2号住居址出土遺物…… 431
図版第70図　堂ケ入遺跡遺構外出土遺物…… 432
図版第71図　堂ケ入遺跡墓址1・2・5・4…… 433
図版第72図　堂ケ入遺跡墓址3・6…… 434
図版第73図　堂ケ入遺跡墓址8・9・10・13・25…… 435
図版第74図　堂ケ入遺跡墓址23…… 436
図版第75図　堂ケ入遺跡墓址22・28・31、その他…… 437
図版第76図　藤の森遺跡…… 438
図版第77図　藤の森、沢頭、沢入口遺跡全景…… 449
図版第78図　沢頭遺跡1号住居址…… 440
図版第79図　沢入口遺跡全景と1号住居址…… 441
図版第80図　沢入口遺跡2号住居址…… 442
図版第81図　沢入口遺跡3・4号住居址…… 443
図版第82図　沢入口遺跡5号住居址…… 444
図版第83図　沢入口遺跡出土土器・土錘…… 445
図版第84図　沢入口遺跡出土石器・鉄器…… 446
図版第85図　スナップ…… 447

Ⅰ 調 査 状 況

1．調査にいたるまで

1）中央道関係の経過

ア　整備計画とその経過

昭和32年４月、高度経済成長政策の一つとして「国土開発縦貫自動車道建設法」が公布され、その中の一つに中央自動車道予定路線も発表された。その後、諏訪回り案に改正され、本線は西宮線、岡谷から分岐し長野へ通ずるものを長野線と呼んでいる。昭和41年７月に五縦貫道整備計画が決定し、その後、道路整備施行命令が日本道路公団に出されている。中央自動車道西宮線は、小牧・東京間やく360km、そのうち長野県内は、岐阜県中津川市から恵那山トンネルで伊那盆地に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ケ岳山麓を通って山梨県に至る間、やく122kmとなっている。

昭和41年に、日本道路公団名古屋支社は飯田市に飯田工事事務所を設置し、その後の進展に伴い恵那山トンネル東工事事務所、伊那市・諏訪市にも工事事務所が設けられた。長野県でもこれに呼応して、県庁内に長野県中央道建設対策本部が組織され、企画部に中央道課が、その出先機関として中央道事務所が、飯田・伊那・諏訪３市に置かれた。このような現地体制の整備につれて、ルート発表・立入測量・設計協議・市杭設置そして用地買収へと業務は段階的に進むのではあるが、現実は遅々として進まず、年月を費やしていたが、昭和45年頃から用地買収も進展し、それに伴って全線がいくつもの工区に分けられて本線工事が発注されている。昭和42年３月恵那山トンネル補助トンネル工事が始まり、昭和44年11月には恵那山トンネル本線トンネル工事に着手し、昭和45年には阿智工区から本線工事に入っている。昭和47年後半になると埋蔵文化財発掘調査の終るのを追い駆けるように、飯田・高森・松川・飯島・駒ケ根工区には大形機械が導入されて整地作業がなされ、長期間人手をかけて掘りあげた遺跡が、短時日のうちに姿を消している。ここで問題になることは、日本道路公団から施工業者への工事仕様書の中に、調査予定の埋蔵文化財包蔵地が記載されていないことがあって、工事によって発掘調査前の遺跡が破壊されそうになった例のあったことなど今後の保存事業について、きめのこまかい対策の必要性を痛感している。

イ　埋蔵文化財の対策とその経過

縦貫道計画が発表された昭和41年頃、開発が全国的に広まりだして、各地で文化財保護についての問題が取りあげられていた。文化財保護委員会（現文化庁）では、開発機関との間でその保護についての調整を計っていた頃であったので、日本道路公団との間で、昭和42年９月に「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」を取交した。それより先、昭和41年には、中央自動

車道関係県文化財主管課協議会を開催し、文化財の取扱いについて打合せている。県教育委員会では、昭和42年に入って関係市町村連絡協議会を、飯田・伊那・諏訪３地区で開きその対策を打合せる。さらに、昭和42年国庫補助事業として、中央自動車道用地内とその周辺の遺跡分布調査を実施し、下伊那地区147遺跡、上伊那地区 112遺跡、諏訪地区90遺跡計 349遺跡を確認する。その後ルート発表に伴い補足調査を実施し、中央道用地内には、下伊那地区で63遺跡（含斜坑広場）、上伊那地区83遺跡、諏訪地区44遺跡の計 190遺跡の存在を知る。分布調査では埋蔵文化財を除く文化財についても調査しているが、その取扱いについては「覚書」に触れられていないこともあって、関係市町村教育委員会にその交渉が任せられている。「覚書」にもとづいて、埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」という。）の取扱いについては、その下交渉及び発掘調査は各県教育委員会が当ることになっており、文化庁の指導もあって、長野県が中心となり愛知・岐阜・山梨の４県で「中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会」を持ち、この会には日本道路公団関係者も加って、昭和42、43、44年に開催されたが、管轄公団支社の業務進展がまちまちであり、各県の取り組み方も一様でないため、充分な連絡調整もできないうちに、愛知・山梨・岐阜県の順で、路線内の遺跡発掘調査が開始されていった。

遺跡の取扱いについては、「覚書」の中で、Ａ・路線計画からはずすもの、Ｂ・路線計画の中に入れるが保護するもの、Ｃ・路線計画の中に入れ、事前に発掘調査をし記録して保存するものの３区分されている。それに基づいて、中央自動車道地内遺跡についても、Ａ・Ｂ・Ｃの３区分されていたが、路線決定の後では、その変更が容易でなく、結局 190遺跡すべてＣとなった。この最終決定は、県教育委員会の意見聴取に基づいて文化庁でなされる。これらの遺跡の発掘調査は、日本道路公団が費用負担して、県教育委員会と契約して実施するように「覚書」できめられている。しかし、県教育委員会では、直営の発掘調査体制を組織することが困難であるとの立場から、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、その中に遺跡調査団をおいて業務を遂行することにし、そこへ指導主事を調査主任として出向させることにした。

この調査体制が確立する前の昭和45年３月に、飯田市上飯田地区の２遺跡（さつみ・古屋垣外）の発掘調査が行なわれた。この調査は、年度末も迫っているため県教育委員会が受託することは困難なためと、試み的な意味もあって、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、同調査会が受託して実施した。暫定的な措置であったが、長野県下最初の中央道用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査である。

同年４月から、本格的な発掘調査体制確立のために、県教育委員会社会教育課（後に文化課に独立）では、担当指導主事を２名増員し、４名とする。一方では、各地区の関係市町村教育委員会との打合せ会を持ち、日本道路公団名古屋支社との協議も具体化し、６月と７月の現地協議によって昭和45年度の調査地区も決定した。そこで、７月には「長野県中央道遺跡調査会」を整備充実した。

昭和45年度は、８月に下伊那郡阿智村地内７遺跡（調査費 179万円）、９月に飯田地内その１地区10遺跡（調査費1590万円）の発掘調査委託契約を相次いで結び、９月２日には、下伊那郡阿智村川畑遺跡において、長野県下中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査の鍬入式を挙行している。翌９月３日から２班編成の調査団によって発掘調査を開始している。10月に上伊那郡宮田村地内その１地区６遺跡（調査費 500万円）の発掘調査委託契約を結び、昭和46年３月45年度の業務を完了した。

昭和46年度は、４月に、上伊那郡飯島町内その１地区（調査費1224万円）、８月に下伊那郡高森町内その１地区（調査費3120万円）、９月に下伊那郡阿智村園原斜坑広場その１杉の木平遺跡（調査費 730万円）

の発掘調査委託契約が結ばれ、上伊那郡中田切川橋梁工事先工に伴う上伊那郡飯島町内その２、久根平遺跡（調査費 123万円）の発掘調査委託契約も、９月に結ばれ、昭和47年３月この年度の業務を完了している。

昭和47年度になると、用地買収業務も進展し、上下伊那郡ともに各工区ごと工事発注が続出する年とあって、県教育委員会においては、担当指導主事３名を増員し、４班の調査団を組織した。飯田・下伊那地区に２班、伊那・上伊那地区に２班づつ常駐させて発掘調査に当ることにした。４月に、飯田市内その２地区17遺跡（調査費2367.5万円）、上伊那郡飯島町内その３地区８遺跡（調査費 677.1万円）、伊那市西春近地区18遺跡（調査費3361.6万円）が、７月には、下伊那郡高森町内その２地区５遺跡（調査費2002万円）、下伊那郡松川町内12遺跡（調査費1864.3万円）、駒ケ根市内８遺跡（調査費 563.5万円）が、８月には、上伊那郡南箕輪村内その１地区５遺跡（調査費1051.5万円）のほか、飯田市山本地籍石子原遺跡において、多量に発見された石器群は、中期ローム層包含の旧石器としてその重要性が認められ、第２次調査の協議が成立し、飯田市その３（調査費410万円）として発掘調査委託契約が結ばれている。さらに10月に入って、上伊那郡南箕輪村内その２地区４遺跡（調査費514.4万円）と辰野町内その１地区３遺跡（調査費497.2万円）等10地区81遺跡、調査面積 132,180㎡の広範囲にわたって発掘調査委託契約が結ばれている。

昭和48年度は、調査地区の主体が上伊那郡から諏訪郡に移動するため、長野県中央道遺跡調査団本部を辰野町に移設し、伊那市に作業場をおいてこの業務に当ることにした。調査地域も３郡にわたって広範囲にわたるため、県教育委員会においては、担当指導主事をさらに１名増員し調査に万全を期している。４月に、伊那市内その２地区４遺跡（調査費2121.6万円）、箕輪町地内３遺跡（調査費1214.4万円）、辰野町内その２地区14遺跡（調査費3480万円）、富士見町内その１地区５遺跡（調査費1588.8万円）の発掘調査委託契約が結ばれ、伊那市から富士見町にわたる広域内の調査が開始されている。７月においては、下伊那郡阿智村斜坑広場その２杉の木平遺跡（調査費 989万円）、諏訪市内その１地区７遺跡（調査費1588.8万円）、10月には、諏訪市内その２地区２遺跡（調査費 888万円）の発掘調査委託契約が結ばれている。

ウ　中央道関係の経過一覧

この経過一覧は、前項のものと重複するものも多いが、10数年にわたる道路建設の過程と発掘調査の経過は、将来活用されることがあろうと思われるので記載した。中央自動車道建設法案とそれに基づく機関県の対策機関設置、ルート発表の経過、文化財保護のための諸協議・諸会合、発掘調査に関する経過については全部載録した。用地買収契約および工事着工については、最初のものだけ記載した。

32・４・16　国土開発縦貫自動車道建設法の公布（施行同年７月31日）
〃・７・25　中央自動車道予定路線を定める法律制定
39・６・16　国土開発縦貫自動車道建設法の一部改正により、中央自動車道予定路線は諏訪回りに改正
41・７・25　五縦貫道整備計画決定、道路整備施行命令が日本道路公団に出る
〃・８・12　長野県中央自動車道対策協議会開催
〃・８・12　恵那山トンネル立入測量開始
〃・９・22　中央自動車道長野県建設協力会開催
〃・９・30　下伊那郡阿智村の一部、飯田市、鼎町（14km）ルート発表

41・11・16　長野県中央道建設対策本部設置、県企画部に中央道課および飯田中央道事務所設置
〃・12・15　中央自動車道関係県文化財主管課協議会開催（東京）
42・2・14　中央道建設用地内文化財の取扱いについて関係市町村連絡協議会開催（下伊那地区）
〃・2・21　〃　〃　（上伊那地区）
〃・2・22　〃　〃　（諏訪地区）
〃・3・23　恵那山トンネル（4.7km）ルート発表
〃・3・28　下伊那郡上郷町・飯田市座光寺・高森町・松川町（14.5km）ルート発表
〃・3・31　恵那山トンネル補助トンネル工事着工
〃・4・15　文化庁で中央自動車道用地内の埋蔵文化財保護対策打合せ会開催
〃・5・4　伊那中央道事務所設置
〃・5・30　中央道建設地域内埋蔵文化財分布調査費国庫補助申請
〃・6・13　中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第1回　長野県庁）
〃・8・1～12　下伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査　調査遺跡数　147（団長　大沢和夫）
〃・11・1　上伊那郡飯島町・駒ヶ根市・宮田村・伊那市・南箕輪村（36.6km）ルート発表
〃・11・10～26　上伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査　調査遺跡数　112（団長　林　茂樹）
〃・11・27～12・15　諏訪地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査　調査遺跡数　90（団長　藤森栄一）
〃・12・16　下伊那郡阿智村殿島・智里地区（5.65km）ルート発表
43・2・27　公団名古屋支社と中央道埋蔵文化財の保護措置について協議（43年の発掘調査について）
〃・3・5・公団本社と保護措置について協議（43年の発掘調査について）
〃・7・23　下伊那郡阿智村智里殿島地区、県内のトップをきって用地買収契約成立
〃・10・12　中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第2回　松本市）
44・3・18　〃　〃　（第3回　岐阜市）
〃・7・15　公団名古屋支社と協議　（飯田市上飯田地区の発掘調査について）
〃・8・12　上伊那郡辰野町（8km）ルート発表
〃・10・3　飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社から意見聴取（県教委回答　12・11）
〃・10・8　中央道関係市町村教委連絡協議会開催（飯田市）
〃・10・20　飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社との現地協議
〃・10・31　中央道関係市町村教委連絡協議会開催（伊那市）
〃・11・11　恵那山トンネル本線トンネル工事起工式
〃・12・11　公団名古屋支社と協議　（45年の発掘調査について）
45・1・29　諏訪郡富士見町（11.2km）ルート発表
〃・2・2　公団名古屋支社と協議　（上飯田の3遺跡と45年度の発掘調査について）
45・2・23　岡谷市と諏訪市の一部（14.7km）ルート発表

45・2・24　下伊那郡阿智村殿島地区において、県下最初の平地地区本線工事開始

〃・2・27　長野県中央道遺跡調査会結成（飯田市上飯田地区の調査に限る）

〃・3・2　公団名古屋支社と長野県中央道遺跡調査会との間で、上飯田地区２遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額　80万円）

〃・3・5　飯田市上飯田地区さつみ・古屋垣外遺跡の発掘調査開始（～３・21）（団長　大沢和夫）

〃・3・31　飯田市上飯田さつみ・古屋垣外遺跡発掘調査報告書刊行

〃・4・22　公団名古屋支社と協議　（45年度の発掘調査について）

〃・4・23　上・下伊那地区中央道用地内遺跡視察（県教育委員会担当者）

〃・5・8　下伊那郡阿智村～松川町間（57遺跡）埋蔵文代財包蔵地についての意見聴取（県教育委員会回答　5・26）

〃・5・14　中央自動車道西の宮線起工式（於多治見市）

〃・6・1　公団名古屋支社と協議　（発掘調査上の問題について）

〃・6・9　下伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（飯田市）

〃・6・11～12　下伊那郡阿智村７遺跡・飯田市（上飯田・座光寺）７遺跡・鼎町２遺跡・上郷町１遺跡について、公団名古屋支社と現地協議

〃・6　昭和45年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査予算案を６月県会に提出

〃・6・29　上伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（伊那市）

〃・6・30　諏訪地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（諏訪市）

〃・7・8　上伊那郡宮田村地内７遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（～10日）

〃・7・22　長野県中央道遺跡調査会結成準備会・第１回理事会開催（飯田市）

・8・17　下伊那郡阿智村地内７遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額　179万円）

・9・1　飯田地区その１地内10遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額　1590万円）

〃・9・2　中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査鍬入式挙行（下伊那郡阿智村小野川川畑遺跡）

〃・9・3　下伊那郡阿智村地内７遺跡（川畑・北垣外・橋場・矢平Ⅱ・杉ヶ洞・宮の脇・坊塚）発掘調査開始（終了９・22）

〃・9・3　岡谷市内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～５日）

〃・9・5　伊沢県教育長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察

〃・9・7　諏訪郡富士見町内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～10日）

〃・9・8　田中県教育次長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察

〃・9・22　飯田地区その１地内10遺跡（山岸・天伯B・権現堂前・さつみ・赤坂・宮崎A・宮崎B・大門原B・大門原D・大久保）の発掘調査開始（終了46・１・18）

〃・10・19　上伊那郡宮田村地内６遺跡（高河原・釈迦堂・宮の沢・元宮神社東・天伯古墳・円通寺）の発掘調査開始（終了45・12・18）

〃・10・28　公団名古屋支社総務部長・田中県教育次長、権現堂前・大門原B遺跡視察

〃・10・29　公団名古屋支社副支社長、大門原B・大門原D遺跡視察

〃・11・16　長野県中央道遺跡調査会第２回理事会開催（飯田市座光寺大門原B・宮崎A、上伊那郡宮田

村天伯古墳視察、理事会宮田村福祉センター）

45・11・17　公団名古屋支社との協議　（昭和46年度発掘調査地区の選定について）

〃　11・28　下伊那郡阿智村地内発掘調査報告会開催（下伊那郡阿智村智里東小学校）

〃・12・5　上伊那郡宮田村地内発掘調査報告会開催（上伊那郡宮田村福祉センター）

〃・12・25　茅野市・原村・諏訪市の一部（12.4km）ルート発表、これをもって県内やく122kmのルート発表完了

46・1・12　伊沢県教育長、下伊那郡飯田町山岸遺跡視察

〃・2・1　公団名古屋支社と協議　（昭和46年度の発掘調査地区について、飯田市山本・伊賀良地区用地内遺跡視察）

〃・2・2　下伊那郡高森町・松川町・上伊那郡飯島町地内遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（昭和46年度発掘調査地区決定）

〃・2・28　上伊那郡宮田村地内中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・11　飯田地区その1発掘調査報告会開催(公団・各事務所・市町村教委に対して)

〃・3・15　飯田地区その1発掘調査報告会開催（一般公開）

〃・3・20　飯田地区その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・4・1　飯島町地内その1地区(七久保)7遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額　1224万円）

〃・4・12　飯島町地内その1地区（七久保）発掘調査団結団式挙行（飯島町役場）

〃・4・13　飯島町地内その1、7遺跡(鋳物師原・鳴尾天白・鳴尾・尾越・道満・北原東・小段遺跡）の発掘調査開始（終了46・7・3）

〃・4・26　長野県中央道遺跡調査会第3回理事会開催（伊那市上伊那郷土館）

〃・5・24　恵那山トンネル斜坑口および土捨場問題協議会、長野県庁企画部長室で開催（公団名古屋支社、恵那山トンネル東工事事務所、阿智村教育委員会、同建設課、長野県中央道課、飯田中央道事務所、下伊那地方事務所商工建築課、飯田教育事務所、長野県教育委員会）

〃・6・7　下伊那郡阿智村園原杉の木平・児の宮遺跡緊急分布調査（～8）

〃・6・16　公団本社・同名古屋支社と協議（下伊那郡阿智村園原恵那山トンネル斜坑口と土捨場予定地の保護措置について）

〃・7・1　公団名古屋支社から恵那山トンネル飯田方斜坑広場（杉の木平遺跡）埋蔵文化財について意見聴取

〃・7・15　飯島町地内その1発掘調査報告会開催（飯島町役場七久保支所）

〃・7・20　公団名古屋支社総務部長と県教育長の協議（恵那山トンネル斜坑土捨場問題について）

〃・8・1　下伊那郡高森町地内その1（10遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額　3120万円）

〃・8・6　下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査団結式と打合せ会（高森町役場）

〃・8・10　下伊那郡高森町地内その1地区、10遺跡（弓矢・無縁堂・神堂垣外・鐘鋳原A・瑠璃寺前・大島山東部・赤羽根・出原西部・出早神社附近・正木原Ⅰ）発掘調査開始（9・14中断、10・23再開、終了47・1・14）

〃・8・18　恵那山トンネル飯田方斜坑広場埋蔵文化財保護措置について県教委回答

46・8・30　公団名古屋支社と恵那山トンネル斜坑広場（杉の木平遺跡）の現地協議

〃・8・31　公団名古屋支社と上伊那郡飯島町地内その２（久根平遺跡）の現地協議

〃・9・4　伊沢長野県教育長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡・高森町鐘鋳原遺跡視察

〃・9・10　下伊那郡阿智村園原斜坑広場その１（杉の木平遺跡）発掘調査打合せ会（阿智村駒場公民館）

〃・9・13　下伊那郡阿智村園原斜坑広場その１（杉の木平遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額730万円

〃・9・14　赤尾長野県教育次長、下伊那郡高森町鐘鋳原遺跡視察

〃・9・16　下伊那郡阿智村園原斜坑広場その１（杉の木平遺跡）発掘調査開始（終了11・１）

〃・9・17　上伊那郡飯島町地内その２（久根平遺跡）委託契約成立　（委託金額　123万円）

〃・9・20　上伊那郡飯島町地内その２（久根平遺跡）発掘調査開始（終了10・13）

〃・11・18　長野県議会社会文教委員会一行下伊那郡高森町瑠璃寺前遺跡視察

〃・11・19　長野県中央道遺跡調査会第４回理事会開催（高森町畜産センター）

47・1・25　飯田市山本・伊賀良12遺跡、下伊那郡鼎町１遺跡について公団名古屋支社と現地協議

〃・1・26　下伊那郡高森町地内４遺跡、松川町地内10遺跡、上伊那郡飯島町地内８遺跡、宮田村地内１遺跡、駒ヶ根市地内８遺跡について公団名古屋支社と現地協議

〃・1・27　伊那市西春近地内18遺跡について公団名古屋支社と現地協議

〃・2・29　上伊那郡飯島町地内その１中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・2・29　上伊那郡飯島町地内その２（久根平遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　下伊那郡高森町地内その１中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　下伊那郡阿智村斜坑広場その１中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・25　下伊那郡阿智村園原斜坑広場（杉の木平遺跡）発掘調査報告会開催（智里西診療所）

〃・3・26　下伊那郡高森町地内その１地区発掘調査報告会開催（高森中学校）

〃・3・27　園原斜坑広場（杉の木平遺跡）、高森町地内その１地区発掘調査報告会開催（一般公開）

〃・4・1　飯田市内その２地区（17遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額　2367.5万円）

〃・4・1　飯島町内その３地区（８遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額　677.1万円）

〃・4・1　伊那市西春近地区（18遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額　3361.6万円）

〃・4・3　飯田市内その２地区発掘調査打合せ会（飯田合同庁舎）

〃・4・10　飯田市内その２地区ほか下伊那地区発掘調査団結団式挙行（飯田合同庁舎）

〃・4・10　飯田市内その２地区、17遺跡（かぶき畑・柳田・山田・石子原・石子原古墳・ようじ原・上の平東部・寺山・六反田・滝沢井尻・小垣外・三壺淵・上の金谷・辻垣外・大東・酒屋前・大門原Ｂ）の発掘調査開始（終了48・２・７）

〃・4・24　上伊那地区発掘調査団結団式と発掘調査打合せ会（上伊那地方事務所会議室）

47・4・25　飯島町内その３地区、８遺跡（うどん坂南・うどん坂Ⅱ・うどん坂Ⅰ・山溝・八幡林・石上神社前・庚申平・太田沢春日平）の発掘調査開始（終了47・6・28）

〃・4・25　伊那市西春近地区・18遺跡（和手・富士山下・富士塚・富蒲沢・南丘Ａ・南丘Ｂ・名廻南・名廻東古墳・名廻・白沢原・山寺垣外・細ヶ谷Ｂ・百駄刈・北丘Ｂ・大境・山の根・城平・

城平上）の発掘調査開始。（終了47・12・14）

47・4・26　長野県中央道遺跡調査会第５回理事会開催。（伊那市上伊那図書館）

〃・6・20　公団名古屋支社と、上伊那地区橋梁工事に伴う調査遺跡追加と、飯田市山本石子原遺跡第２次調査について協議（県庁教育次長室）

〃・6・22　公団名古屋支社と飯田市山本石子原遺跡第２次調査について現地協議。

〃・7・3　下伊那郡高森町内その２地区（５遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額2,002 万円）

〃・7・6　下伊那郡松川町内（12遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額 1,864.3万円）

〃・7・6　駒ケ根市内（８遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額 563.5万円）

〃・7・7　駒ケ根市内８遺跡（大徳原南Ｂ・大徳原南Ａ・大徳原北・横前南・中山原・新田原・女体北・切石墓地）の発掘調査開始。（終了47・９・１）

〃・7・12　飯田市内その３（石子原遺跡第２次調査）の発掘調査委託契約成立。（委託金額 410万円）

〃・7・14　下伊那郡松川町内12遺跡の発掘調査打合せ会。（松川町福祉センター）

〃・7・24　下伊那郡高森町内その２地区５遺跡（神田裏・新田西裏・増野新切・増野川子石・鑪鋳原Ａ）の発掘調査開始。（終了47・11・９）

〃・7・24　下伊那郡松川町内12遺跡（里見Ⅱ・里見Ⅴ・境の沢・中原Ⅰ・庚申原Ⅰ・庚申原Ⅱ・平林・やし原・片桐神社東・水上・丈源田Ⅲ・丈源田Ⅳ）の発掘調査開始。（終了47・11・11）

〃・8・15　公団名古屋支社と上伊那郡南箕輪村内９遺跡と辰野町内その１地区３遺跡について現地協議。

〃・8・17　飯田市内その３（石子原遺跡）発掘調査団結団式。（飯田教育事務所）

〃・8・17　飯田市内その３（石子原遺跡）の発掘調査開始。（終了47・９・30）

〃・8・21　上伊那郡南箕輪村内その１地区（５遺跡）の発掘調査委託契約成立。(委託金額1.051.5万円)

〃・9・1　上伊那郡南箕輪村内の発掘調査打合せ会開催。（南箕輪村公民館）

〃・9・4　上伊那郡南箕輪村内その１・その２地区９遺跡（南原・三本木原・曽利目・在家・大芝原・大芝東・南高根・北高根Ａ・北高根Ｂ）の発掘調査開始。（終了47・12・９）

〃・10・9　上伊那郡南箕輪村内その２地区（４遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額514.4万円）

〃・10・9　上伊那郡辰野町内その１地区（３遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額 497.2万金）

〃・10・11　上伊那郡辰野町内その１地区の発掘調査団結団式と発掘調査打合せ会。（辰野町公民館）

〃・10・12　上伊那郡辰野町内その１地区３遺跡（五反田・越道・平出山の神）の発掘調査開始。（終了47・11・30）

〃・11・15　長野県中央道遺跡調査会第６回理事会開催。（伊那市上伊那図書館）

〃・12・4　公団名古屋支社と昭和48年度調査体制・調査地域について協議。（公団伊那工事事務所）

〃・12・5　公団名古屋支社と伊那市内その２地区（４遺跡）・箕輪町内（３遺跡）・辰野町内その２地区)(14遺跡・諏訪郡富士見町内（７遺跡）について現地協議。

〃・12・15～・16　上伊那地区中央道埋蔵文化財包蔵地出土の遺物展示会開催。（上伊那地方事務所大会議室・一般公開）

〃・12・16　上伊那郡辰野町内その１地区（３遺跡）の発掘調査報告会開催。（辰野町公民館）

48・2・28　上伊那郡辰野町内その1地区（3遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・16　上伊那郡飯島町内その3地区発掘調査報告会開催　（飯島町公民館）

〃・3・18　飯田市内その2・その3、高森町内その2、松川町内発掘調査報告会開催　（下伊那教育参考館）

〃・3・19　上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区発掘調査報告会開催　（南箕輪村公民館）

〃・3・20　飯田市内その2地区（17遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　飯田市内その3（石子原遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　下伊那郡高森町その2地区（5遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　下伊那郡松川町内（12遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　上伊那郡飯島町内その3地区（8遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　駒ケ根市内（8遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　伊那市西春近地区（18遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区（9遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・24　駒ケ根市内発掘調査報告会開催　（駒ケ根市役所）

〃・3・26　伊那市西春近地区発掘調査報告書開催　（伊那市福祉センター）

〃・4・9　昭和48年度長野県中央道遺跡調査団結団式挙行　（上伊那地方事務所会議室）

〃・4・12　伊那市内その2地区（4遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額2121.6万円）

〃・4・12　上伊那郡箕輪町内（3遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額1214.4万円）

〃・4・12　上伊那郡辰野町内その2地区（14遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額3480万円）

〃・4・12　諏訪郡富士見町内その1地区（5遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額1065.6万円）

〃・4・16　伊那市内その2地区、5遺跡（赤坂・ますみが丘・城楽・月見松・山本田代）発掘調査開始（終了48・7・31）

〃・4・17　上伊那郡箕輪町内・諏訪郡富士見町内その1地区発掘調査打合せ会　（各教育委員会）

〃・4・18　上伊那郡箕輪町内、3遺跡（南大原・堂地・中道）発掘調査開始　（終了48・8・31）

〃・4・18　諏訪郡富士見町内その1地区、5遺跡（手洗沢・長尾根・足場・母沢・甲六）発掘調査開始（終了48・7・11）

〃・4・18　上伊那郡辰野町内その2地区発掘調査打合せ会　（辰野町教育委員会）

〃・4・19　上伊那郡辰野町内その2地区、14遺跡（手長神社旧跡・若宮・荒神社矢沢・樋口内城館址・大久保尻・神送・公家塚・牧垣外・大窪・堂ケ入・藤の森・沢頭・沢入口・上の原）発掘調査開始　（終了48・10・23）

〃・4・23　長野県中央道遺跡調査会第7回理事会開催　（伊那市上伊那図書館）

〃・5・22　長野県議会社会文教委員一行、上伊那郡箕輪町中道遺跡視察

〃・6・4～6　公団名古屋建設局と、下伊那郡阿智村斜坑広場と、諏訪市内・富士見町内の発掘調査予定地域について現地協議　（県庁教育次長室、各公団工事事務所）

〃・6・20　長野県教育委員一行、上伊那郡箕輪町中道遺跡視察

48・6・27　長野県中央道遺跡調査会一志顧問、上伊那郡箕輪町中道遺跡・諏訪市大熊城址現地指導
〃・7・2　下伊那郡阿智村斜坑広場その2（杉の木平）の発掘調査委託契約の成立（委託金額989万円）
〃・7・2　諏訪市内その1地区（7遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額1588.8万円）
〃・7・20　諏訪市内用地問題について公団・諏訪市・被買収者組合委員と協議　（諏訪市役所）
〃・7・21　下伊那郡阿智村斜坑広場その2地区の発掘調査団結成　（飯田教育事務所）
〃・7・23　下伊那郡阿智村斜坑広場その2地区の発掘調査打合せ会　（阿智村教育委員会）
〃・7・25　下伊那郡阿智村斜坑広場その2（杉の木平遺跡）発掘調査開始　（終了48・10・20）
〃・7・26　諏訪市内その1・その2地区発掘調査打合せ会　（諏訪市役所）
〃・7・30　諏訪市内その1地区、7遺跡（清水・小丸山古墳・金山北・城山・大熊城址・荒神山・大熊道上）、同その2地区2遺跡（平林・本城）発掘調査開始　（終了48・12・14）
〃・8・8　長野県小泉教育次長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡視察
〃・10・10　諏訪市内その2地区（2遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額 888万円）
〃・10・10・11　長野県酒井出納次長、辰野町樋口内城館址・諏訪市大熊城址・阿智村杉の木平遺跡視察
〃・10・14　日本道路公団本社理事・名古屋建設局長等、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡視察
〃・10・16　恵那山トンネル斜坑貫通式に伴い、公団名古屋建設局長等下伊那郡阿智村杉の木遺跡視察
〃・11・18　長野県中央道遺跡調査会一志顧問、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡現地指導
〃・11・1　長野県中央道遺跡調査会第8回理事会開催。辰野町樋口内城館址遺跡視察　（辰野町）
〃・11・13　昭和49年度諏訪地域用地買収状況について打合せ会　（公団諏訪工事事務所・県高速道課・県諏訪中央道事務所・伊那教育事務所・同諏訪支所・県文化課、於諏訪合同庁舎）
〃・11・21　公団名古屋建設局と昭和49年度調査体制と発掘調査地区について協議　（諏訪工事事務所）

2）　発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施行前に、公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で協議することになっている。その結果、記録保存と決定され、発掘調査が必要となった場合、公団は、県教育委員会に委託して実施されることになっている。そのため、県教育委員会は、公団と現地協議などの事務接衝のうえ、調査遺跡の発掘面積、調査費、調査期間、調査方法等が決められる。その後、公団から調査依頼、県教育委員会から調査受託の文書の往来があって、つぎのような発掘調査委託契約が締結されている。

ア　発掘調査委託契約書

1　委託事務の名称　　中央道埋蔵文化財発掘調査（上伊那郡辰野町内その２）
2　委　託　期　間　　昭和48年４月12日～昭和49年３月20日
3　委　託　金　額　　￥34,800,000円也　　34,800,000円也
4　委託金支払場所　　日本道路公団名古屋支社

日本道路公団（以下「甲」という。）は、長野県教育委員会（以下「乙」という。）に頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第１条　甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、頭書の委託金額の範囲内で頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第２条　甲又は乙の都合により委託期間を延長し若しくは発掘調査計画を変更し、又は発掘調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。

第３条　乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し甲に提出しなければならない。

第４条　乙は、第３条の資金使用計画書に基づき頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

２　甲は、前項の請求のあったときは頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して請求書を受理した日から15日以内に所要の額を支払うものとする。

第５条　甲は、必要と認めるときは頭書の発掘調査の処理状況について調査し又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

２　乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

３　乙は、発掘調査の実施にあたり作業個所に作業表示旗をかかげ発掘調査関係者には、腕章等を着用させなければならない。

４　乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B５版20部）を作成し委託期間内に甲に提出しなければならない。

５　乙は、費用精算調書を作成し、委託期間満了後１箇月以内に甲に提出しなければならない。

第６条　この契約に基づく報告書、費用精算調書其の他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第７条　乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。

第８条　発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については、乙が代行するものとする。

第９条　乙の責に帰する事由により頭書の期間内に第５条第４項に規定する報告書を提出しないときは甲は遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数に応じ頭書の委託金額に対して年8.25%の割合で計算した金額を徴収することができる。

2　甲の責に帰する事由により第４条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は、甲に対して遅滞日数に応じて年8.25%の割合で遅延利息の支払いを請求することができる。

第10条　乙の責に帰すべき事由により甲が契約を解除したときは、乙は頭書の委託金額の10分の１を違約金として甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条　この契約を変更する必要が生じたときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書２通を作成し、当事者記名の上、各自１通を保有す　。

昭和48年４月12日

委　託　者　　名古屋市中区栄４丁目１番１号（中日ビル11～12階）
日本道路公団名古屋支社
支社長　　平　野　和　男

受　託　者　　長野県教育委員会
教育長　　小　松　孝　志

イ　長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当ることになっている。

昭和45年７月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年２回の理事会が開かれている。年度頭初の理事会において、発掘調査の受託を決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。同調査会規約・昭和48年度役員・斜坑広場その２地区調査団組織はつぎのとおりである。

(7)　長野県中央道遺跡調査会規約

第１条　この調査会は、長野県教育委員会の委託を受けて、中央道建設及び関連工事用地内遺跡の発掘調査を実施し、その記録の作成、発掘された文化財の保存活用方法を研究することを目的とする。

（名称）

第２条　この調査会は長野県中央道遺跡調査会（以下「調査会」という。）と称する。

（組織）

第３条　調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。

(1)　会長　１名　　(2)　理事　若干名　　(3)　監事　２名

事務所）

第４条　調査会の事務所は、会長が別に定める事務所内に置く。

（会長及び理事）

第５条　会長は、長野県教育委員会教育長をもってあてる。

2　理事は次に掲げるもののうちから会長の委嘱した者をもってあてる。

(1)　学識経験者　　(2)　関係学会の役員

(3)　関係市町村教育委員会連絡協議会の代表者　　(4)　関係市町村教育委員会の教育長

(5)　関係行政機関の職員

（会長及び理事の職務）

第６条　会長は調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

2　理事は、理事会を構成し、次の事項を審議する。

(1)　調査会の運営に関すること。　　(2)　発掘調査の受託に関すること。

(3)　規約の改正に関すること。　　(4)　その他必要な事項

3　会長に事故があるときは、理事のうちから会長が指名した者が、その職務を代行する。

（理事会の招集）

第７条　理事会は必要に応じて会長が招集する。

2　理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。

3　前項の場合、当該議事について書面をもってあらかじめ意志表示し、または他の理事を代理人として表決を委任した役員は出席したものとみなす。

4　理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

（顧問）

第８条　調査会に顧問若干名を置くことができる。

2　顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する。

3　顧問は会長の諮問に応ずるとともに、理事会に出席し調査会の業務について助言する。

（監事）

第９条　監事は、理事会の推薦により会長が委嘱する。

2　監事は、調査会の会計を監査する。

（役員の任期）

第10条　役員の任期は一年とする。ただしその職にあるゆえをもって委嘱されたものの任期は、当該職の在職期間とする。

（幹事）

第11条　調査会に幹事を置く。

2　幹事は、県教育委員会事務局職員のうちから会長が委嘱する。

3　幹事は、会長の命を受け調査会の事務を処理する。

（調査団）

第12条　調査会に調査団を置く。

2　調査団の組織及び運営について別に定める。

（事務の管理執行の規定）

第13条　調査会の事務の管理及び執行にあたっては、この規約ならびに理事会の決定する規定に従って行なう。

（経費）

第14条　調査会の事業に要する経費は、長野県教育委員会の委託料をもってあてる。

（会計の区分）

第15条　調査会の会計年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月31日に終わる。

２　調査会の会計は、長野県教育委員会と締結した委託契約に区分して行なう。

（出納及び現金の保管）

第16条　調査会の出納は、会長が行なう。

２　調査会に属する現金は、会長が理事会の議を経て定める銀行または、その他の金融機関にこれを預けなければならない。

（決算）

第17条　会長は、会計年度終了後１ヶ月以内に収支決算書を作成し、監事の監査を経て理事会の認定を経なければならない。

（財務に関する事項）

第18条　この規約に特別の定めがあるものを除くほか、調査会の財務に関しては、長野県の「財務規則」の例による。

（委任）

第19条　調査会の業務の運営に必要な事項は、この規約に定めるもの及び理事会で議決するものを除くほか会長がこれを定める。

（付則）

この規約は、昭和45年７月22日から施行する。

イ）昭和48年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿（昭和48年11月現在）

顧問	一志　茂樹	（県文化財専門委員）		
会長	小松　孝志	（県　教　育　長）		
理事	金井喜久一郎	（県文化財専門委員）	米山　一政	（県文化財専門委員）
	藤沢　宗平	（県文化財専門委員）	藤森　栄一	（長野県考古学会会長）
	原　　嘉藤	（信濃史学会理事）	小泉兵次郎	（県教育次長）
	飯島　丁巳	（県 文 化 課 長）	馬場　昌人	（飯田教育事務所長）
	瀬尾　忠幸	（伊那教育事務所長）	羽生　保吉	（下伊那地区教委協議会長）
	坂井　喜夫	（上伊那地区教委協議会長）	小松　　穣	（諏訪地区教査協議会長）
	小林　　彰	（阿智村教育長）	松沢　一英	（伊那市教育長）
	河手　貞則	（箕輪町教育長）	熊谷　大一	（辰野町教育長）
	小林　繁治	（富士見町教育長）	中村　文武	（諏訪市教育長）
	倉田　利久	（下伊那教育会長）	木下　　衛	（上伊那教育会長）
	藤森　純一	（諏訪教育会長）	林　　茂樹	（長藤小学校長）

監事　岡沢　幸朝　（県文化課長補佐）
幹事　金井　汲次　（県文化課文化財係長）
　　西沢　　清　（県文化課主査）
　　矢島　太郎　（県文化課主任）
　　佐藤　文武　（飯田教育事務所総務課長）
　　下平　久雄　（飯田教育事務所主事）
　　松沢　成海　（伊那教育事務所社会教育課長）
　　麻生　弘明　（伊那教育事務所主任）
　　今村　善興　（県文化課指導主事）
　　山田　瑞穂　（　〃　）
　　宮沢　恒之　（　〃　）
　　岡田　正彦　（　〃　）
　　浦野　孝之　（伊那市社会教育課長）
　　泉　勇一郎　（県文化課文化係長）
　　浅川　欽一　（県文化課主査）
　　堀内規矩雄　（県文化課主事）
　　佐藤　　陸　（飯田教育事務所主任）
　　矢野　公一　（伊那教育事務所総務課長）
　　久保田秀明　（伊那教育事務所主任）
　　鈴木　長治　（伊那教育事務所主事）
　　桐原　　健　（県文化課指導主事）
　　伴　　信夫　（　〃　）
　　丸山敏一郎　（　〃　）

ウ）長野県中央道遺跡調査会調査団

調査団長　大沢和夫
調査主任　山田瑞穂　今村善興　桐原　健
調 査 員　小松原義人　福沢幸一　山岡栄子　市沢英利　八木光則　一条隆好
　　根津清志　辰野伝衛　深沢健一
調査補助員　堀　知哉

エ）発掘調査遺跡の状況と面積

遺跡名	現況	遺跡の状況	全体面積	用地内面積	調査面積
手長神社旧跡	畑	天竜川西の中位段丘上に立地する古墳時代後期の遺物包含地である。	15,000m²	4,000m²	800m²
若宮	水田	天竜川西の下位段丘上に立地する古墳時代後期の遺物包含地である。	6,500	2,100	400
荒神社矢沢	水田	荒神山の南麓一帯の天竜川東中位段丘上に立地する縄文時代中期の遺物包含地である。	21,000	10,500	2,100
樋口内城館址	水田	荒神社入口の東の丘陵に位置し、縄文時代から古墳時代に及ぶ遺物の出土があって集落址であると思われる。また樋口次郎館址といわれるところである。	30,000	9,400	1,800
大久保尻	畑	荒神山東麓の南に突き出た丘陵で赤羽焼のカマド址の存在が予想される	4,800	700	100
神送	水田	荒神山丘陵の北東台地上にあり、弥生時代後期から古墳時代に及ぶ集落址であろう。	20,000	10,000	2,000
公家塚	畑	天竜川に傾斜した細長い台地上の縄文時代中期の遺物包含地である。	24,000	4,000	800

遺跡名	現況	遺跡の状況	全体面積	用地内面積	調査面積
牧垣外	畑	辰野東小学校の東の山麓に位置し、縄文時代中期の遺物包含地である。	5,100m²	1,000m²	200m²
大窪	畑	法性神社東の傾斜面の中腹にある縄文時代中期の遺物包含地である。	13,000	2,400	400
常ケ入	畑	天竜川に向って傾斜する丘陵地に位置する古墳時代の遺物包含地である	17,000	9,000	1,800
藤の森	畑	一の平遺跡の東に当たる通称藤の森と呼んでいる湧水に恵まれた地で縄文時代中期の遺物包含地である。	12,600	3,600	700
沢頭	畑・水田	藤の森の北、前沢川に沿った谷間の遺跡で古墳時代の遺物包含地である	18,000	8,800	1,700
沢入口	畑・水田	沢頭の北、前沢川の西に位置する古墳時代の遺物包含地である。	12,000	6,400	1,200
上の原	畑	天竜川左岸の山腹に位置する縄文時代中期の遺物包含地である。	27,000	2,800	500

3）発掘調査開始までの準備

昭和48年から調査団本部を辰野町平出、辰野東小学校内に設置するため、その移動並びに調査員の宿舎借用、整備にと、また発掘資材の調達にと多忙な連日であった。一方辰野町教委の手をわずらわし作業員募集をしていただいた。

4月5日　文化課で調査打合わせと主任会

4月6日　資材調達・資材配分（伊那、箕輪、辰野、富士見の各地区へ分ける）

4月7日　47年度使用器材を飯田から運搬する。

4月9日　調査団結団式を上伊那地方事務所で行なう。式次第は次のとおりである。

開会あいさつ　金井幹事、　調査員委嘱　会長代理　岡沢監事

調査員紹介　今村幹事、　調査会長あいさつ　会長代理　岡沢監事

来賓祝詞　日本道路公団伊那工事事務所、　団長あいさつ　大沢団長

閉会あいさつ　金井幹事

参会者　日本道路公団伊那工事事務所、　伊那市教育委員会社会教育課長補佐、　文化課課長補佐、同文化財係長、　同文化財担当指導主事、　伊那教育事務所長、　同総務課長、　同総務主任、　同文化財担当主事、　同社会教育課長、同教職員課長、　中央道調査会伊那事務所事務員、　調査団全員

4月10日　調査員全体会、各班毎の調査打ち合わせ会

4月11日　調査主任会　調査打ち合わせ

4月12日　調査区内遺跡巡検、伊那一箕輪一辰野（伊那工事事務所庶務課長同道）

4月13日　発掘資材整理　辰野本部整備　宿舎整備

4月14日　駒ケ根から資材運搬

4月16日　駒ケ根から本部へ資材運搬

4月17日　雨のため現場への資材運搬、テント設置をやめ、本部の整備を行なう。

4月18日　調査打ち合わせ会を辰野町公民館で行なう。

4月19日　羽場駅前へ調査団全員集合。発掘開始の挨拶が熊谷教育長、桐原指導主事からあり、次いで調査員の紹介が行なわれる。今村主任より調査について作業員の方々に説明や連絡、お願いをし作業開始となる。参会者、熊谷教育長、松田教育委員長、赤羽係長。

資材運搬、テント設営、グリット設定と3グループに分かれ、終日かかって完了する。

2．調査の実施と経過

1）調査期間と経過

辰野町内その2地区、14遺跡の発掘調査は、4月19日若宮遺跡から始まり、手長神社旧跡、上の原、沢入口、沢頭、藤の森、堂ケ入、大窪、牧垣外、公家塚、荒神社矢沢、大久保尻、樋口内城館址遺跡と進み神送遺跡を最後に10月23日終了した。枯草を焼き放って上物を除去した4月は、植物がようやく地上にその生命をよみがえらせた頃であり、10月はその植物が再び枯れていく時であった。この6か月の長期間各方面の協力を得、作業員の方々の絶大な支援を得て無事終わったのである。特に堂ケ入遺跡は1か月、樋口内城館址遺跡は2か月半という長期に亘り、遺構、遺物の検出が多かった。実働日数 148日、延べ作業人数6千名以上に及び、膨大な量の検出遺構、遺物は、11月以降の整理作業を多忙なものにさせた。

各遺跡の調査期間と主なる検出遺構は次表のとおりである。

遺跡名＼月	4	5	6	7	8	9	10	11～3	発掘日数	主なる遺構
手長神社旧跡	27～9								7日	時期不詳ロームマウンド4 土壙 1
若宮	19～26								7	平安住居址3 同期土壙 4
荒神社矢沢				10～25					14	縄文中期住居址 4
樋口内城館址				23～	～	～	～12		63	縄文中期住居址 弥生後期住居址 上師期住居址
大久保尻				27～31					4	赤羽焼ロストル式カマ跡 1
神送							13～23		9	平安住居址 3 土壙 2
公家塚				6～9					3	ナシ
牧垣外			30～5						5	平安住居址 1

遺跡名＼月	4	5	6	7	8	9	10	11～3	発掘日数	主なる遺構
火　湿			26～29						4日	ナ　シ
堂ケ入			6～7						27	縄文前期末住居址　2 土壙9、墓址31
藤の森		23～25							3	平安住居址　1
沢　頭		18～22							4	平安住居址　1
沢入口		11～5							15	平安住居址　5
上の原		10							1	ナ　シ

2）発掘調査協力者

辰野町での発掘調査は昨年に続いての2年目であることから引き続いて参加された方もいる。今年度4月から10月までの発掘作業、10月から3月の整理作業に協力いただいた作業員は、辰野町在住の方々であり、その数は延べ6千人以上にのぼり、調査進行の原動力であった。協力者は次のとおりである。

辰野町

赤羽　克子　赤羽しげえ　赤羽ちかえ　赤羽はま子　赤羽　文子　赤羽みやの　有賀みづる
井内　厚　板倉たせ子　板倉とし子　板倉　信夫　一の瀬文子　牛山寿美子　牛山和歌子
大杉　久幸　大槻　浅男　大森なみ江　尾坂　知子　小沢　通子　小沢みつる　小沢　実
小沢　明治　小沢百合子　垣内　庫人　春日かよ子　春日　米子　金子まつ代　唐沢　孝子
桐原喜代子　桐原しなの　熊谷たみ子　桑沢　初子　小松　文子　佐久間きくえ　佐々木静代
佐々木正弘　佐々木八隅　篠平　耕二　篠平ふじ子　篠平　光子　篠平　安雄　城倉けさみ
高井　永子　高井　正子　高木　ふみ　武井スミエ　竹入しげ子　竹入わかよ　竹渕うけ子
竹渕甲子男　竹渕　太郎　竹渕ちか子　田畑　香　茅野かつえ　中谷あき子　中谷きよえ
中谷　義一　中谷美代子　新村かず子　仁科　うめ　根橋　倉子　根橋たつえ　根橋　豊子
根橋　政雄　野沢とみ子　花岡　文雄　林　幸子　林　ます子　樋口　則子　松田　康富
丸山　幸子　丸山　雅子　溝口　仁夫　三村　素清　宮沢さだえ　宮沢　常雄　宮原　雪春
毛利みつ子　山内志賀子　山内とめ子　山口千代子　山崎志津子　山崎とくゑ　山崎みつ子
山崎もも子　山辺　栄一　山辺　量平　若尾さと子（この他に婦人会の方々が交代で参加された）

岡谷市　宮沢　隆良

事務局　伴野晴美　丸山優子　鈴木御恵子　白石明子　田中淳子　北原志げ子　鈴木房子　向山恭子

3）現地指導・現地視察者

日本道路公団　伊那工事事務所松浦庶務課長

県教委事務局	一志中央道遺跡調査会顧問　小泉教育次長　飯島文化課課長　岡沢同課長補佐　金井同文化財係長　丸山同指導主事　瀬尾伊那教育事務所長　矢野同総務課長　久保田同主任　藤森中央道遺跡調査会理事　藤沢同理事　酒井県出納局次長
辰野町当局	熊谷教育長　百瀬教育次長　赤羽係長　小島社会教育主事　松尾辰野町議員
研　究　者	東京国立博物館亀井正道氏　岡山県教育庁神原英朗氏他３名　奈良国立文化財研究所小笠原好彦氏　同高島忠平氏　諏訪市宮坂光昭氏　岡谷蚕糸博物館会田　進氏、塩尻市教育委員会小林康男氏　本郷村倉科明正氏　長野市矢口忠良氏　同原田勝美氏　信大学生百瀬新治氏　友野良一氏　明治大学学生角井　勉氏
学校関係	信大農学部氏原暉男氏　同鈴木茂忠氏　松本筑摩高校樋口昇一氏　穂高商業高校中島豊晴氏　上松中学校神村　透氏　伊那中学校本田秀明氏　辰野東小学校松崎教頭他職員および児童　辰野西小学校星野教頭他職員
報道関係	辰野新聞　辰野朝日　読売　朝日　信毎の各記者

３．発掘調査の方法

中央道用地内の遺跡発掘調査は、工事により破壊されるため、工事着工前に記録保存を目的とした緊急発掘である。このため、この調査は、用地内にどのような時期の遺跡が、どんな遺構と遺物を残しているかをさぐり、それを報告書としてまとめることが目的となる。

そのため、発掘調査は中央道用地内に限定される。すでに分布調査によって、その遺跡の広がり、時期は一応確認されている。その遺跡の中において、中央道がどのような部分をとおるかによって４区分した。Ｏ―全面かかるもの。Ａ―遺跡の頂部がかかるもの。Ｂ―遺跡の中央部を横切るもの。Ｃ―遺跡の先端部にかかるものの４区分がそれである。用地内の遺跡は全面にグリットを設定することを原則とした。グリット設定は、２ｍ間隔の基準方眼を設定し、中央道の長軸方向に01～99の２桁の数字を用い、それに直交する方向にＡ～Ｙの25字のアルファベットを用いた。その数え方は、名古屋方面から東京方面に向って立った時、左から右へ01～99とし、ただし道路のセンターライン（20ｍおきにセンター杭を打つ）を50とする。だからセンターを基準に左右98ｍの巾がとれる。アルファベットは、巾中心杭のうちの遺跡内で最も名古屋よりを基準にして東京方面へＡＢＣ……とする。Ａ～Ｙの25字で50ｍをおさえ、その範囲を地区としておさえ、それをＡ・Ｂ・Ｃ・……と表示する。これによって、25地区1250ｍがとれる。従ってそれぞれのグリット地点は「ＨＺＣ　ＢＦ56」というように表示される。これは樋口内城館址遺跡のＢ地区Ｆ56地点ということになる。このようにグリットを設定してから、適宜にグリットを掘り、遺構が確認されたら、そのまわりを拡張していくという方法をとった。

調査中の記録としては、「調査日誌」「調査記録」「住居址調査カード」を使用した。なお、こまかな調査方法については「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査指針」という小冊子にまとめ、それをもとにして調査を進めた。また、調査中、調査員の献身的な努力によって「調査通報」を発刊し、作業員の方々に発掘調査、調査結果について理解してもらった。

Ⅱ 辰野町の概況

1．辰野町の環境

辰野町は、長野県の南部、上伊那郡の最北端に位置し、木曽郡・塩尻市・岡谷市・諏訪市に接している。町の中央部を南流する天竜川をはさんで、伊那盆地の最北に属する辰野地区、横川川上流から小野川流域に開けた小野盆地、小横川川沿いの川島渓谷、天竜川と横川川にはさまれた大城山塊、東部の伊那山脈に続く準平原的山地帯からなり、面積170.4km²、東西やく12km、南北やく9kmの地域で、昭和48年現在人口やく22,600人を数える。

明治3年廃藩置県により筑摩県に属し、明治11年7月郡区町村制々定により、各村とも幾多の変遷を経て、伊那富村・朝日村・川島村・小野村となった。昭和22年伊那富村は町制を施行して辰野町と称した。その後、昭和30年4月朝日村と合併し、同31年川島村を、同36年3月小野村を編入合併して現在の辰野町が形成されている。古くは、伊那谷を北上していた「東山道」の通過地であり、「深沢の駅」は追分地形を示す同町宮木地籍あたりではの説もあり、奈良時代後半には信濃16枚の1つ平井手牧がここにあり、宮所の牧もおかれた。9C～10Cには、立野の牧・小野の牧の名も見られ、また、諏訪神社大御立産神事において神使巡行の道筋でもあって、今と変らず交通上の要衝でもあったことがうかがわれる。

伊那盆地は、天竜川の上流に位置し、西側の木曽山脈（中央アルプス）、東側の赤石山脈(南アルプス)の間にあって、大きく細長い盆地である。北は辰野町から南は飯田市南部の天竜峡まで長さ80kmに及んでいる。辰野町付近ではその幅やく2.5kmに過ぎないが、最も幅の広い所は南箕輪村から伊那市北部にかけての一帯で、やく13kmの長さを測る。この盆地の北部地域を見ると、辰野地籍を頂点とし鋭角的な三角形状に広がっている。この伊那盆地は、第4紀を通じて絶えず沈降してきており、それに反して盆地周辺の山地は上昇してきている。山地が急激に上昇するときは、その山地ははげしく浸食され、そして生じた礫砂は山地の前面に押し出して堆積が進む。急激に上昇する山地の山麓部には必ず扇状地が発達すると言われている。上伊那地方においては、扇状地が最も顕著に発達している所は、辰野町から伊那市間の天竜川の右岸地域である。すなわち、木曽山脈の北部山地、経ケ岳以北の山麓に見られる。またこの盆地地域には天竜川をはさんで、両岸に見事な河岸段丘が発達している所でもある。これも、前述の基盤の上下運動に支配されたもので、はじめ平坦地であった所が序々に周辺部が上昇し、中央部が下降するため平坦部はしだいに湾曲する。この湾曲は逆断層を伴い易く、表層を覆う礫層は差別浸食を受けて段丘が形成される。この運動のくり返しによって、現在のような何段もの河岸段丘と、船底形の盆地地形が形成されたものといわれている。辰野地籍は、この盆地の最北端頂部に位置しているため幅が狭いだけでなく、形成される段丘や扇状地の規模は小さい。しかし、荒神山をはじめ、各位の段丘面を備え、それぞれ重要な生活の場

となっている。

竜西地域西部には木曽山脈北部に属する山地帯がある。この山地は経ケ岳山塊と呼ばれ、北北東に走向をもつ地質構造で、古生代のチャート・砂岩・粘板岩・石灰石・輝緑凝灰岩からなっている。主峰は、辰野町と南箕輪村・木曽郡楢川村の境をなす経ケ岳（2296）で、伊那市北部を西北走する権兵衛峠断層より北の黒沢山（2126）、桑沢山（1538）、檜沢山（1248）や、西方の坊主山（1961）等をさすもので、中央部の主山稜に比べると非常に低く、中山性の山地帯である。その西側には、この山地に平行する長畑山（1641）、大見山、穴倉山(1365）の山列や、木曽郡境の山地帯がある。これらの山地を源とする、小横川横川川（上流）が北流して、それぞれ、小横川・横川の峡谷が形成される。横川川は、上島地籍で小野川と合流して東に向を変え、さらに宮所地籍で小横川川と合流し、その左右岸に小段丘を形成しつつ、宮木地籍で、天竜川に合流し、南流している。これら三川の流域の大部分は辰野町で、小野・横川・上島地区を形成している。経ケ岳山塊を源として東流する川は、北から北の沢川・桑沢川・深沢川が並ぶが、その流路は短かい。この山地の東山麓には、権兵衛峠断層と直交する断層線が走り、ケルンバットの並列が見られ、その下に崖錐面または扇状地が形成されている。

横川川と天竜川にはさまれて、北に大城山が高く聳えている。この山地は、大城山塊とよばれ、大城山（1035）から北へのびて塩尻峠にいたるもので、東は天竜川の谷に、西は横川川の谷にきり落されている。南西部は古生層、北東部は火山噴出物でひろくおおわれている。この山地の東側は、下辰野から上平出に続く峡谷で、北は岡谷市に続いている。さらにここから東側は、赤石山脈の前山にあたる伊那山脈に続く準平原的な山地帯が続いている。この峡谷と東西の山地を辰野南部から眺めると、西側の大城山山地帯は東側の山地より極端に高い。これは経ケ岳山麓の断層帯の北方延長と考えられ、東側一帯を覆う塩嶺累層の堆積後に垂直的な差動を伴って西側の山地が上昇した結果である。

東側の山地帯は、後山・守屋山の北東側はフォッサマグナ西縁の糸魚川一静岡線によってできた断層線によって諏訪盆地にのぞみ、その東南は中央構造線に沿う藤沢川に境されている。各所に不整合の被覆がみられ、小断層線が北走、西走している。山地帯を広く眺めると、山梨県境の鋸山（2606）から、釜無山（2116）、入笠山（1955）と続き、だんだん低くなって金沢峠（1315）、守屋山（1650）、真志野峠（1245）、有賀峠（1071）等のある所は、赤石山脈の北部にあたり、特に釜無山以北は釜無山脈ともよばれ、地形の上では、準平原のなごりで、各所に平坦部のある所である。この一連の山頂または鞍部は、諏訪郡岡谷市・上伊那郡の自然的境界になっているが、守屋山付近からは境界線は北西又は南東の方向をたどり分水界と境界線が一致しない。とくに有賀峠・真志野峠ではその様相が著しく、その頂上は入会山係争の結果、諏訪市の地籍となっている。この両峠は、辰野一岡谷の天竜川沿いの諏訪街道の補助路線となり、とくに有賀峠越えは急曲路ではあるが、走行距離が短かいことから、近年とみに交通量が激増している。これらの峠は、伊那盆地と諏訪盆地の地形差異から伊那側にゆるやかに、諏訪盆地に急な片側峠の形態をとっている。

辰野町の辰野地籍を概観すると、伊那盆地に属する低地を中にして、三方を山地で囲み、その中間を天竜川が南流している。とくに辰野市街地は、天竜川・横川川・沢底川の合流地域にあたり、古くから追分として栄え、現在は、道路・鉄道の分岐点として要衝の地となっている。中央自動車道は、南から伊那盆地最大の大泉扇状地を横切り、箕輪町を通り、辰野町羽場地籍で天竜川を渡河して荒神山東側の段丘を横

切り、平出地籍からは、東部山地帯の山麓をかすめ、天竜川峡谷沿いに北走し岡谷市に続いている。そのコースに従って周辺の景観を説明するとつぎのとおりである。

箕輪町の大出の扇状地の先端を通過する中央自動道は、大出でやゝ東に向を変え、国道 153号線と交差し、中位段丘を横断して、羽場駅東の下位段丘へ達している。ここには、手長神社旧跡・若宮遺跡が存在している。ここから天竜川を架橋で渡河して、下田・五反田の低・中位段丘へ登り、左に荒神山を見、右の東方山地帯から続く樋口内城の段丘を横切り、平出地籍の低位段丘の先端へ抜けている。ここには、樋口五反田（昭和47年調査）・荒神社矢沢・樋口内城・大久保尻・神送り遺跡が用地内に並び、その周辺には荒神山・荒神社をはじめ多くの遺跡が集中し、縄文・弥生・古墳・平安期の集落址となっている。周辺を広く見ると、東に小式部城山（1120）、東山（972)等から続く山稜が天竜川に面し、西方には、桑沢山六倉山・楡沢山麓の扇状地が続き、北には大城山があり、これらの山々は、中央の低地に向って傾斜地を形成し、この低地帯を天竜川が蛇行しながら南流している。この流れを大きく湾曲させているのが、荒神山とそれに続く段丘である。この丘陵は、標高 764m、天竜川の河床から60m の高さにある。南北に走る３つの小山稜が平行に並び、全体として東西に細長い丘を作っている。西の丘陵は辰野町スポーツ公園に、東の丘陵は中央自動道によって削りとられている。東側の峡間には、茅の茂った沼地があり、天竜川の河跡沼という説もある。この荒神山は、火山灰（ローム）と凝灰質角礫層によって形成され、上伊那地方の６段の河岸段丘最上位に位置する荒神山面の模式地となっている。樋口内城と共に段丘上の重要な遺跡の１つとなっている。峡間の湿地帯は、樋口内城の台地の南一帯にも存在し、今回の発掘調査によって確認された荒神社矢沢の泥土はその一例であろう。なお東側丘陵の一画に構築されていた赤羽焼窯は、辰野町の手によって荒神山へ移築保存されている。樋口地区については、中世末期天文13年武田信玄と藤沢頼親との攻防地点である荒神山城、その東側の台地は樋口内城館の地名があり、木曽義仲四天王の一人樋口次郎兼光にかかわる伝承が多く、今もこの地に生きている。

平出地籍の南で、県道下諏訪辰野線を横切り、東側山地帯の西麓傾斜面を横切っている。この山麓は、前面は天竜川の氾濫原に接し、Ｖ字形にけずられた浅い谷を背にした小扇状地や崖錐性のテラスが並列し小規模ながらそれぞれが特長ある遺跡で、公家塚、牧垣外、大窪、越道、山の神（昭和47年調査）、堂ケ入遺跡がそれである。とくに越道、山の神の周辺には遺跡が密集している。辰野町竜東地域の２基の古墳（御陵塚・御射宮司古墳）が構築され、平出の名の如く豊富な湧水地帯であること、古代から諏訪地方への道はここから入る有賀峠通過と推定されていること等が主な要因と考えられよう。ここからさらに北は上平出地籍で、ここにも又小規模ながら遺跡の密集する地帯である。前沢川流域の藤の森、沢入口、沢頭、岡谷境の上の原遺跡のほか、10数個所の遺跡が数えられる。古くから「井出の清水」と呼ばれる湧水があり、湧出量も多く、現在でも養魚や上水道に利用されている。岡谷市の南部も同様の地形が続き、そんな台地のほとんどが、有数な遺跡となっておる。峡谷状の恵められない地形であっても、天竜川は豊かな生活の糧を与え、豊富な湧水と、見晴しのよい高台は絶好の生活の場でもあったのであろう。　　（今村）

２．辰野町の遺跡

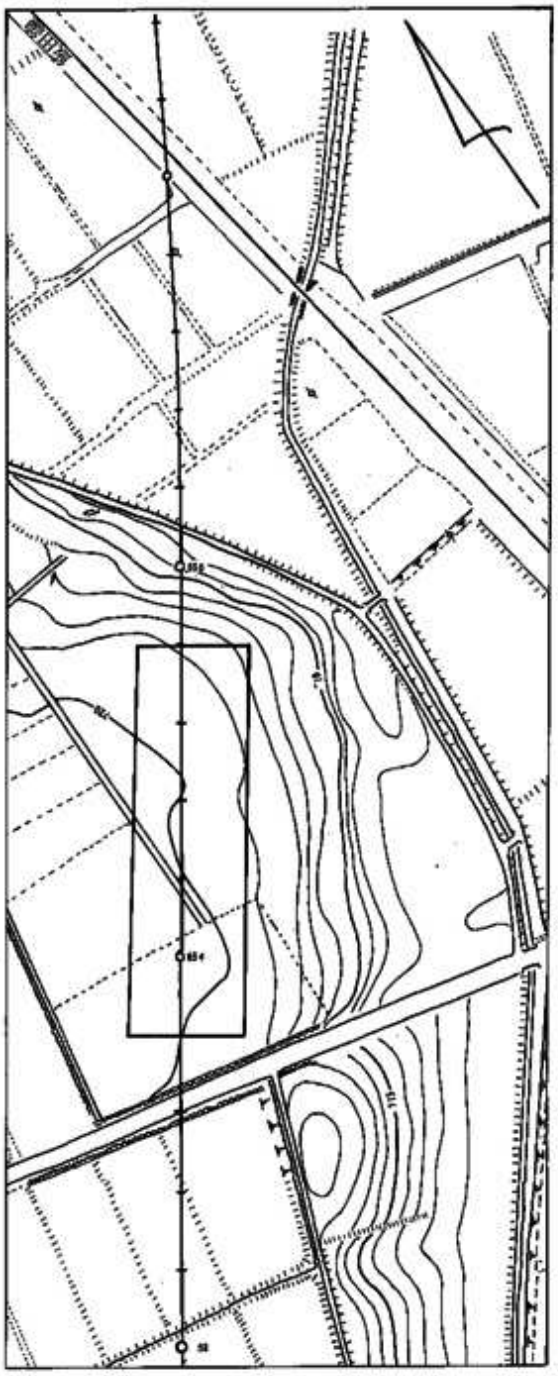
辰野町には次のような各期の遺跡が存在する。

第１図　辰野町遺跡分布図（１：7500）

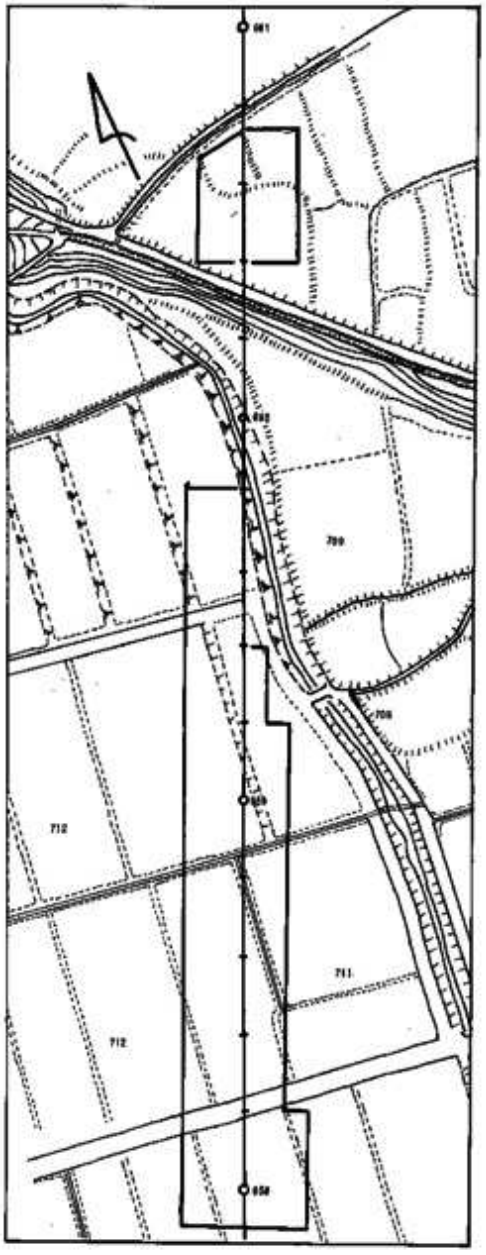
登録				番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代					弥生時代				土師	須恵	灰釉	中世	備考
県台	伝考	分布	郡誌					草	早	前	中	後	晩	前	中	後					
○				1	手長神社旧跡	飯野町羽場					○										
○				2	若宮	〃 〃											○	○	○		
○	○		○	3	樋口五反田	〃 樋口					○		○			○	○	○			
○	○		○	4	荒神社矢沢	〃 〃					○						○	○	○		
○			○	5	樋口内城館跡	〃 〃					○					○	○	○		○	
○			○	6	大久保尻	〃 赤羽					○									○	明治～幕末 鍋カマド址
○			○	7	神送り	〃 〃					○					○	○	○	○		
○			○	8	公家塚	〃 平出大棚					○										
○				9	牧垣外	〃 〃					○	○					○				
○				10	火隠	〃 〃					○										
○	○		○	11	経塚	〃 〃			○												
○	○		○	12	平出山の神	〃 〃				○	○										
○	○		○	13	堂ケ入	〃 上平出				○							○	○		○	
○	○		○	14	藤の森	〃 〃					○						○	○	○		
○			○	15	沢入口	〃 〃					○						○	○	○		
○				16	沢頭	〃 〃			○		○						○	○	○		
○			○	17	上の原	〃 〃					○										
○	○			18	丸山	〃 上反野丸山			○	○	○						○	○	○		
○				19	丸山下	〃 〃					○										
	○			20	甘露井	〃 〃					○						○				
	○			21	要谷	〃 〃					○										
	○			22	北畑	〃 下反野					○										
	○			23	石臼原	〃 〃					○										
○	○			24	タフ所	〃 宮所小横川出口					○										
○	○			25	(町裏)久保田	〃 〃					○						○	○			
○	○			26	月丘の森	〃 宮本															
○	○			27	上の山	〃 〃					○										
○	○			28	天狗坂	〃 〃					○										
○	○			29	小学校庭	〃 〃					○										
	○			30	上の原	〃 〃						○									
○	○			31	向畑	〃 新町西天竜					○					○					
○	○			32	椿沢山畑	〃 〃				○	○						○		○		
○	○			33	神戸	〃 〃					○										
				34	三谷	〃 北大出三谷				○	○										
○	○	○		35	ヒナタ	〃 〃 開拓地					○							○	○		
○	○	○		36	大原	〃 〃 三谷					○										
○	○	○		37	ヒカゲ	〃 〃 日影					○										
	○			38	宮下	〃 〃					○										
	○			39	内城	〃 〃					○										
○	○	○		40	多屋小路	〃 〃					○									○	
	○			41	山田	〃 〃					○										
		○		42	北大出神社	〃 〃					○										
		○		43	しゅぎい原	〃 〃					○								○		
		○		44	堂寺	〃 〃 三谷													○		
○	○			45	羽場城址南	〃 羽場					○										
○	○			46	ハギハラ	〃 〃 北大出					○										
	○			47	駅前	〃 〃					○					○	○	○			

登録				番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代				弥生時代				土師	須恵	灰釉	中世	備考
県台	信考	分布	其の他					草	早	前	中	後	晩	前	中	後				
○				48	神谷所	飯野町北大出神戸														
○				49	草堀	〃 沢尻														
○				50	沢尻(東の原)	〃 〃														
	○			51	下田	〃 下田										○				
○			○	52	荒神山おんまわし	〃 樋口久保畑														
			○	53	五反田樋前之城	〃 〃														
			○	54	荒神社	〃 〃														
○	○		○	55	荒神山	〃 〃				○										
			○	56	荒神山西	〃 〃														
			○	57	赤羽窯址	〃 赤羽													○	近世
			○	58	ネズミ田	〃 樋口														
	○		○	59	狐ケ城址	〃 〃				○										
			○	60	樋口上の原	〃 〃														
	○		○	61	宮ノ窪	〃 〃				○										
			○	62	姫御前口	〃 〃				○										
			○	63	富士浅間	〃 〃														
○	○		○	64	矢沢原	〃 〃										○				
			○	65	板橋ブドウ園	〃 赤羽														
	○		○	66	鉄塚	〃 〃				○						○				
			○	67	南久保(赤羽窯址)	〃 〃														近世
			○	68	真金寺入口	〃 〃														
	○		○	69	上の原	〃 〃			○											
○				70	源平治(地)	〃 〃				○					○	○				
○				71	池の久保	〃 〃														
	○		○	72	平平蔵	〃 平出				○						○	○			
			○	73	大細	〃 〃														公家塚と一緒
			○	74	宮ノ上田	〃 〃														
○	○		○	75	見宗寺裏	〃 〃				○										
			○	76	横山城址	〃 〃										○				
			○	77	越道屋地	〃 〃										○				
			○	78	越道塚	〃 〃										○				
○				79	御陵ケ塚古墳	〃 〃														
○	○		○	80	中村裏B	〃 〃			○	○										
			○	81	中村裏A	〃 〃														
			○	82	中村裏C	〃 〃														
○				83	御射宮寺古墳	〃 〃														
○	○			84	御射宮寺	〃 〃														
	○		○	85	丸山	〃 〃				○						○				
○			○	86	日向	〃 〃														
○			○	87	原田	〃 〃														
			○	88	山の神上	〃 〃														
○				89	山の神古墳	〃 〃														
○				90	宮の上	〃 〃														
○	○		○	91	天竜塚	〃 上平出				○						○				
	○			92	仏石	〃 〃				○										
○			○	93	井出の清水	〃 〃														
○			○	94	大河原	〃 〃														

登録				番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代						弥生時代		代	土師	須恵	灰釉	中世	備考
県台	信考	分布	其の他					草	早	前	中	後	晩	前	中	後					
○	○		○	95	小城（小条）	辰野町上平出															
○	○		○	96	桜垣外	〃 〃農協支所前					○					○					
○			○	97	松尾峡	〃 〃															
○			○	98	北垣外	〃 〃															
○			○	99	一の平	〃 〃															
			○	100	山の神	〃 〃															
○			○	101	丸節	〃 〃															
○			○	102	由良久保塚	〃 〃															
○			○	103	平沢(雄久保)	〃 〃															
			○	104	江の沢	〃 〃															
			○	105	駅沢開拓地	〃 〃															
			○	106	河子沢入口	〃 沢底															
	○		○	107	山寺	〃 〃					○										
			○	108	神主谷	〃 〃															
			○	109	和合	〃 〃															
			○	110	日向	〃 〃															
○	○		○	111	若宮（平）	〃 〃					○										
○	○			112	出の沢口	〃 〃					○	○									
○	○			113	梅の木	〃 〃					○	○				○					
	○			114	堀之内	〃 〃					○						○	○	○		
	○			115	宮ノ前	〃 〃					○	○				○		○			
				116	笠横	〃 上野					○										
				117	小田原	〃 〃															
				118	宮廻り	〃 〃															
○	○			119	上垣外	〃 横川門前					○										
○	○			120	蔵倉垣外	〃 〃 〃					○										
○	○			121	外畦	〃 〃一ノ瀬					○										
	○			122	源上中谷	〃 〃 〃					○										
	○			123	原	〃 〃 波戸					○										
	○			124	荒神畑	〃 小野宮前					○										
○	○			125	山の神	〃 〃藤沢					○										
○	○			126	中入口	〃 〃中村					○										
○	○			127	天狗原	〃 〃ニレ沢			○		○										
○				128	にれ沢	〃 〃 〃															
○	○			129	長者平	〃 〃山口					○										
○	○			130	大栗沢	〃 〃 〃					○										
○	○			131	左宮畑	〃 〃下村											○				
○	○			132	深沢入口	〃 〃 〃					○										
○	○			133	御射山	〃 〃休戸				○	○										
○	○			134	南沢	〃 〃下雨沢			○	○	○	○									
	○			135	上の原	〃 〃上の原					○										
	○			136	深沢	〃 〃飯沼					○										
	○			137	山畑	〃 〃 〃															
	○			138	寺ノ前	〃 〃															
	○			139	鍛冶屋畑	〃 〃															

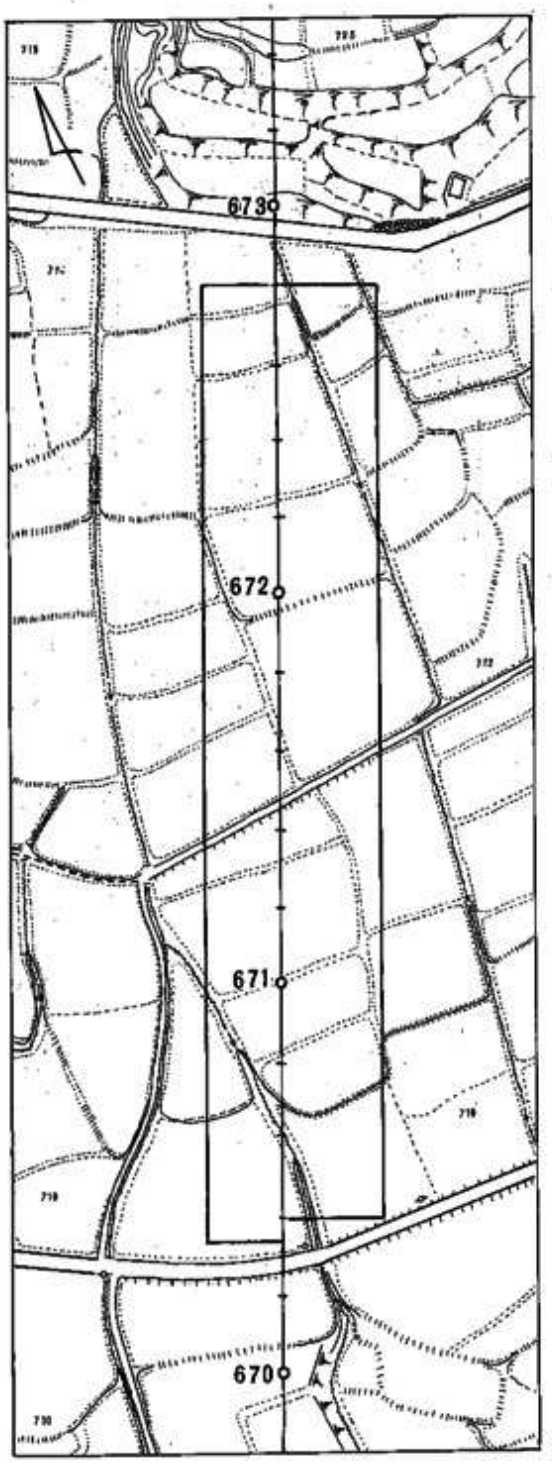


1．手長神社旧跡遺跡

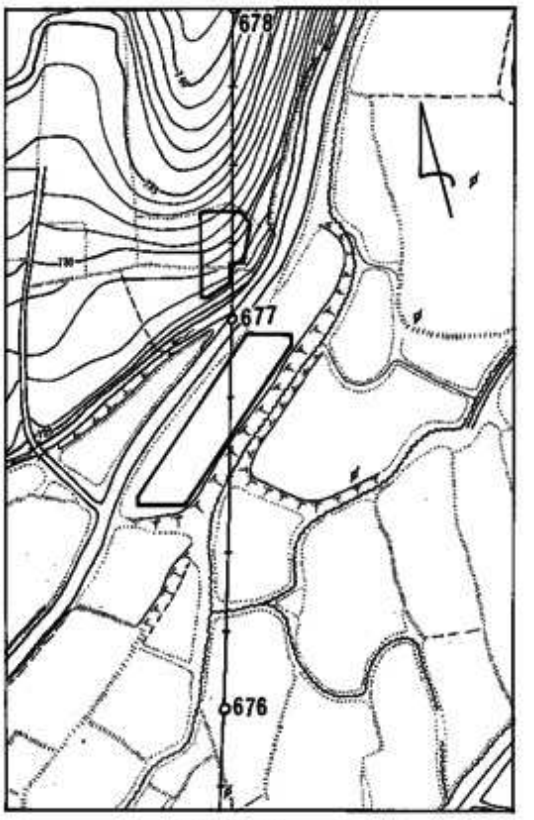


2．若宮遺跡

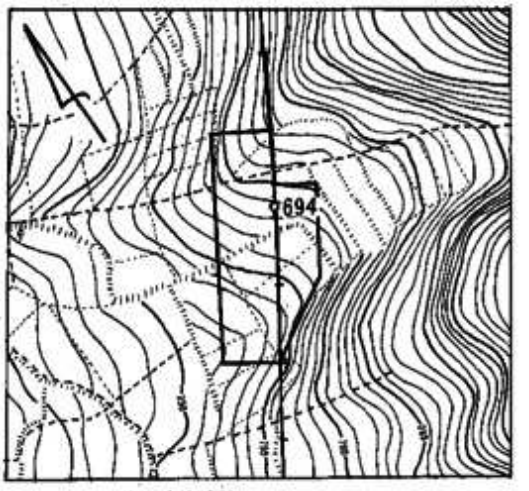
第2図　遺跡地形図（1：2000）（若宮，手長神社旧跡）



3．荒神社矢沢遺跡

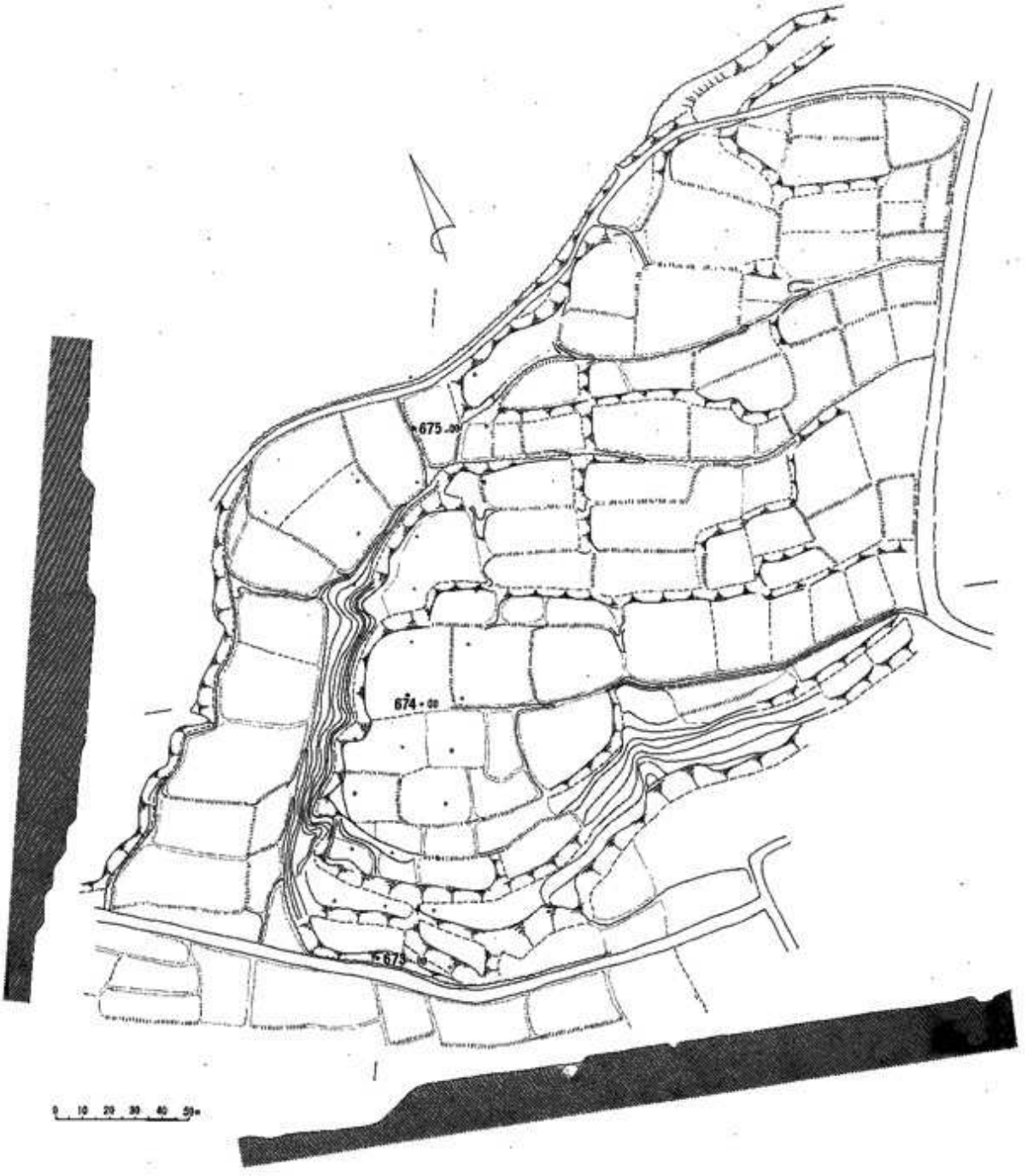


5．大久保尻遺跡

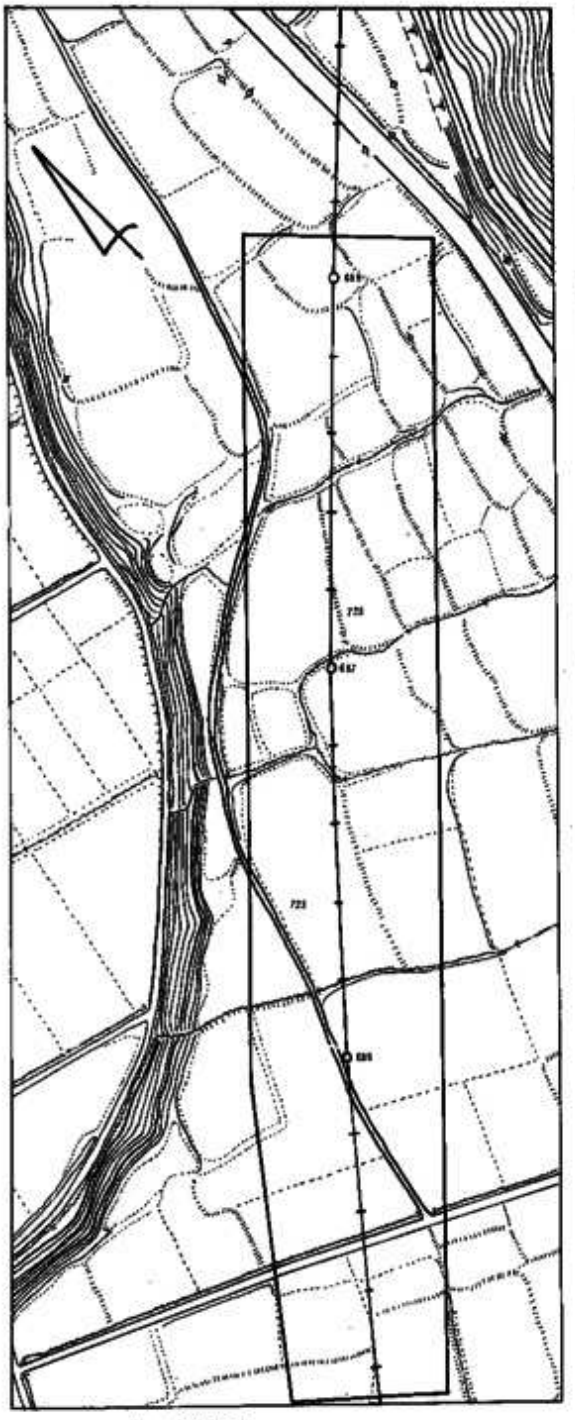


9．大窪遺跡

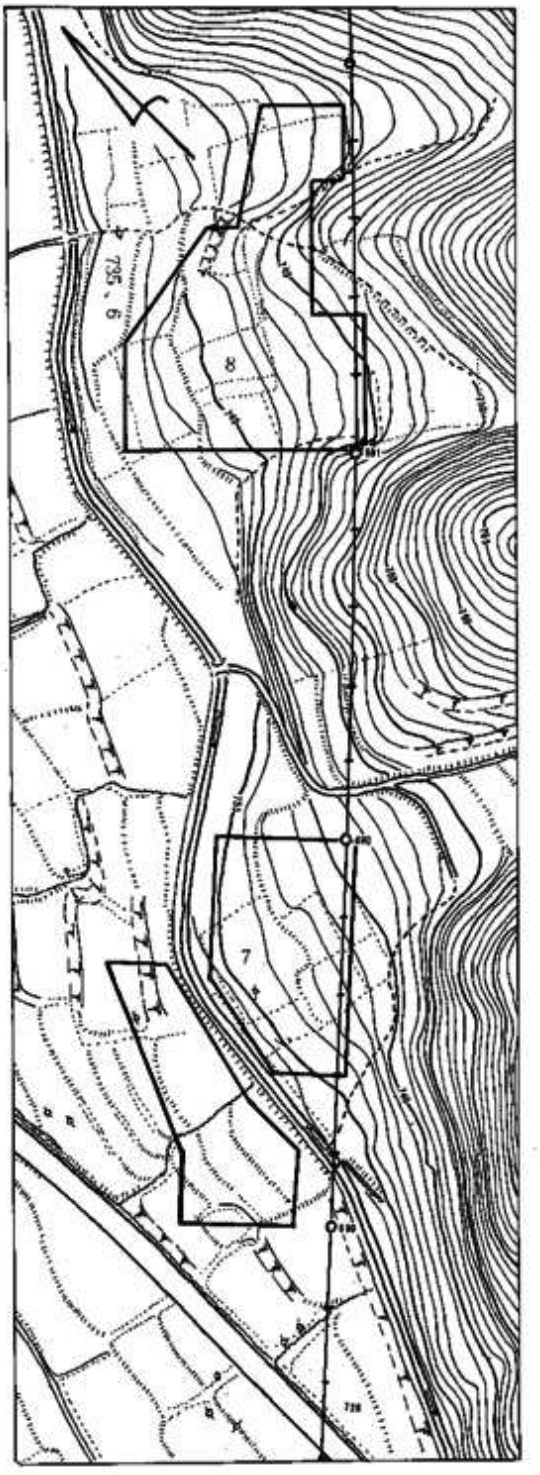
第3図　遺跡地形図（荒神社矢沢，大久保尻，大窪遺跡）（1：2000）



第４図　遺跡地形図（樋口内城館址遺跡）（１：2500）

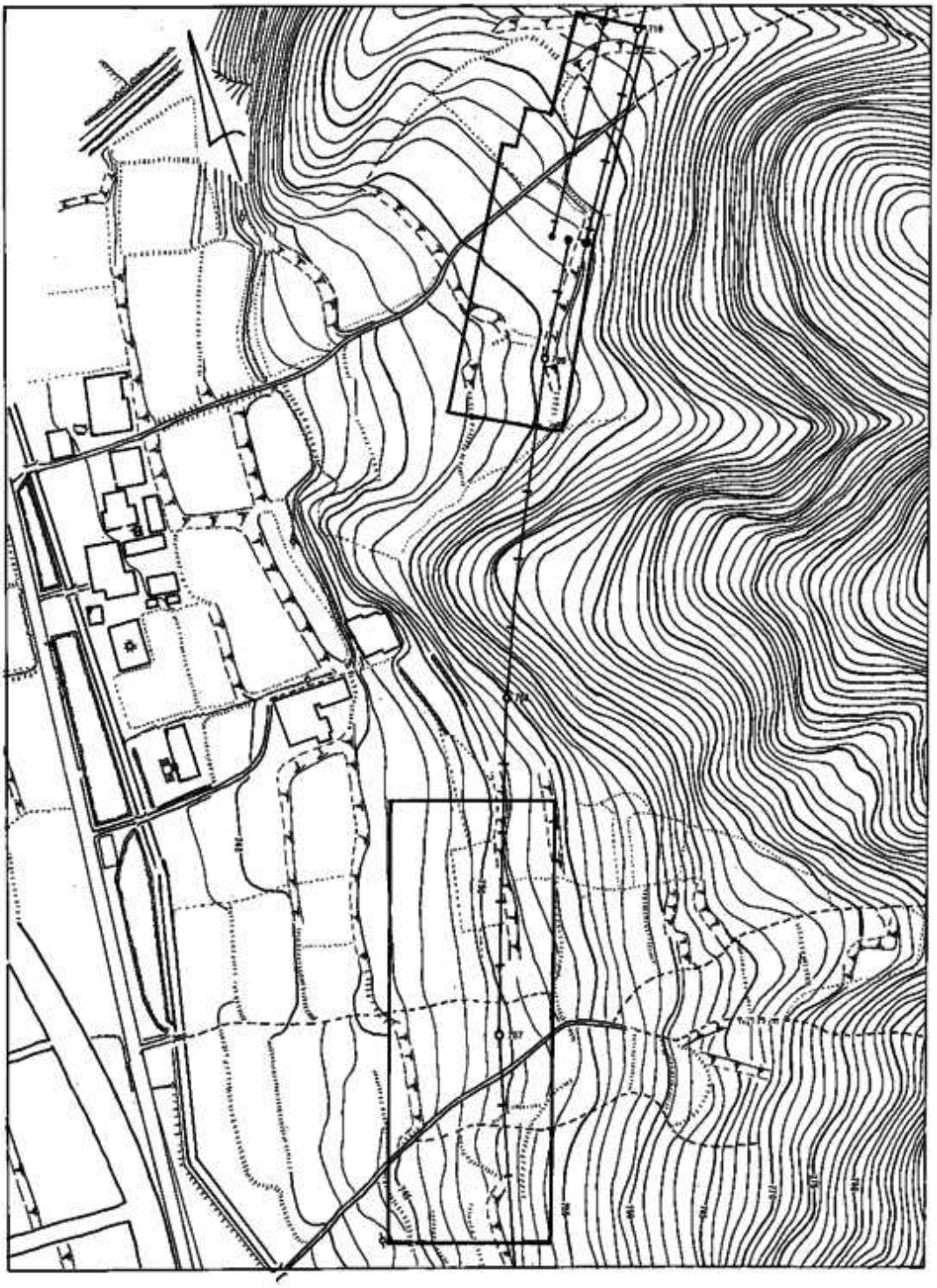


6．神送遺跡



7．公家塚遺跡
8．牧垣外遺跡

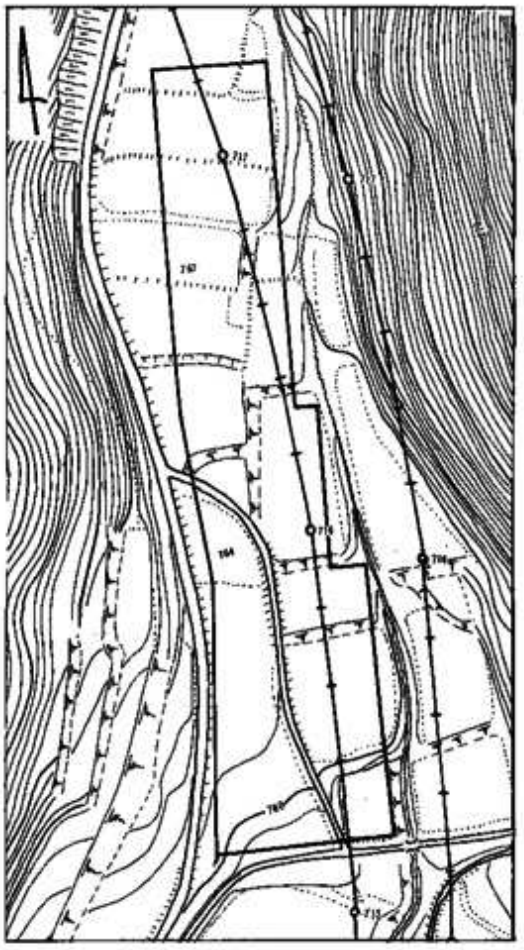
第5図　遺跡地形図（1：2000）（神送・公家塚・牧垣外遺跡）



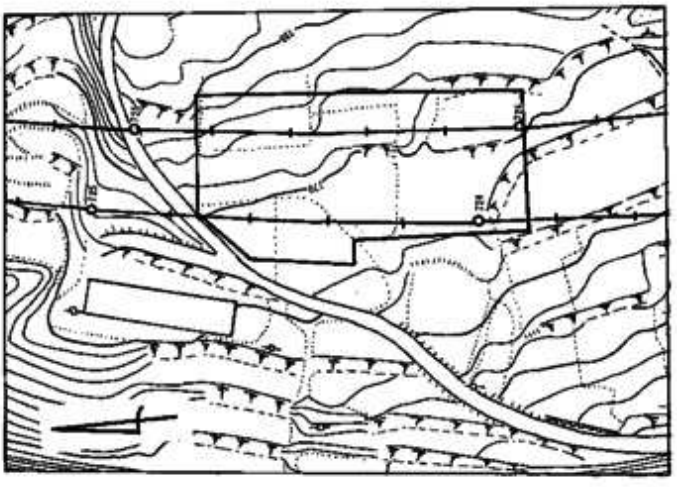
10. 堂ケ入遺跡

第6図　遺跡地形図（1：2000）（堂ケ入遺跡）

11. 藤の森遺跡　12. 沢頭遺跡



13. 沢入口遺跡



14. 上の原遺跡

第７図　遺跡地形図（１：2000）（藤の森・沢頭・沢入口・上の原遺跡）

Ⅲ 調 査 遺 跡

1．手長神社旧跡遺跡（ＴＺＢ）

1）位　置（図２の１　図版１）

本遺跡は、上伊那郡辰野町伊那富羽場5311番地一帯に所在する。辰野町の南端にあたり、天竜川の右岸で、現河床面より３段上の段丘に位置する。この段丘面は中央アルプスの山麓から緩傾をもって続いており、その最東端が遺跡地である。段丘下を国鉄飯田線が走っている。中央道はこの段丘面を南西から北東方向に斜めに切って通過し、遺跡の東端をかすめている。標高 720m で、かつてこの地に瓊々杵尊を祭神にもつ手長神社が存在した。今も、樹令200年を数える桜の大木が旧跡を物語るかのように立っている。

この地の開発はおくれ、昭和６年まで林野であったと聞くが現在は畑地として利用されている。過去の分布調査では、土師器、灰釉陶器、中世陶器片が少量発見されている。附近の遺跡としては、一段下の段丘面で、飯田線を越した東側の水田地帯に若宮遺跡が、また、南方段丘沿いに縄文中期土器片の包含が試掘によって認められ、桑沢川左岸と呼称すべきものがある。

この一帯は火山灰が厚く堆積しており、表層は腐植による有機物を含んで黒色化している。ローム層までの深さは50～80cmである。今回の調査は、653＋80をＡＡとしてＢＹ、41～57までグリット設定した。

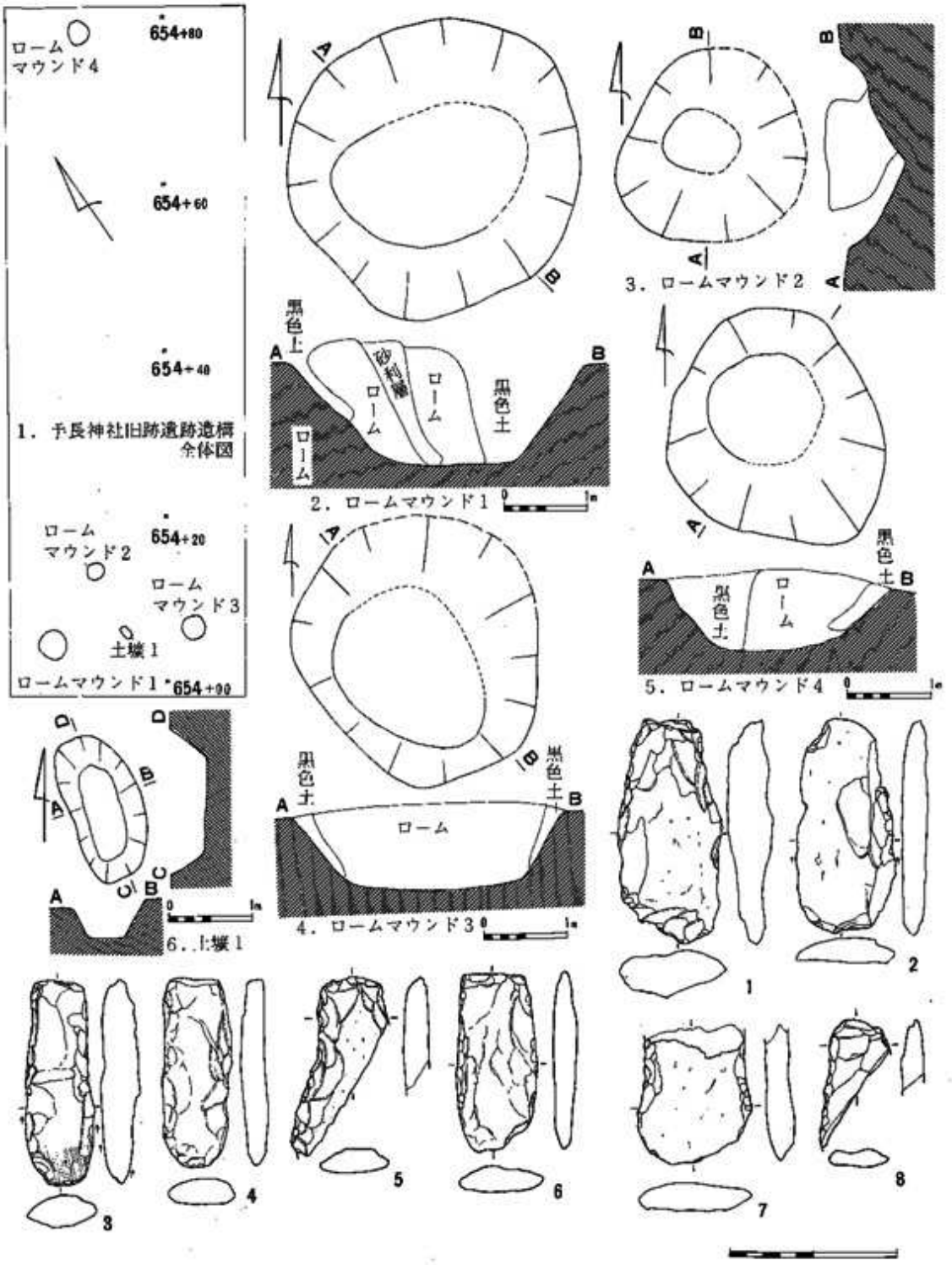
2）遺構と遺物

本遺跡では、時期不詳のロームマウンドと土坑が確認されただけで遺物は打石斧の出土をみたにすぎなかった。

ア．ロームマウンド（図８の２～５、図版１の２）

検出されたロームマウンドは下表の４基で、いわゆる大門原タイプの土壙と類似するものであるが、出土遺物がなく時期不明である。

番　号	挿図番号	形　状	規　模（m）	深さ　(cm)	出土遺物
1	8 の 2	円	3.6×3.5	120	ナ　シ
2	8 の 3	円	2.3×2.3	90	〃
3	8 の 4	円	3.2×3.0	100	〃
4	8 の 5	円	3.0×2.5	95	〃



第８図　手長神社旧跡遺跡遺構実測図および石器 1（1： 800），2～6（1：80）
7（1：4）

イ．土　壙（図8の6、図版1の3）

発掘調査地南端に発見されたもので1.7×0.9mの楕円形を呈し、深さ40cmを計る。壁は傾斜しており、出土遺物はなく時期、性格とも不詳である。

ウ．出土遺物（図8、図版1の4）

グリット掘りの際、打製石斧が8本出土した。凝灰岩・粘板岩製のもので、5、7、8は欠損している。

3）ま　と　め

地形的に集落址を予想したが、意に反して、本遺跡からは、ロームマウンドと土壙の検出のみに終わった。耕作者の話では桜の老樹の北西畑から多く出土したというから遺跡の中心は、その方にあるものと推察される。発見されたロームマウンドであるが、過去の中央道遺跡調査でも数多く検出されており、大門原タイプの土壙と呼ばれ、各地の発掘調査でも同様なものが確認されている。このロームマウンドの断面に見られる黒色土のバンド、明瞭に分離されているロームのかたまりから、人工的なものとか自然現象で起り得るものとか議論されているが不詳といった段階である。本遺跡で新資料を加え、今後の資料集成を待ちたい。また、手長神社旧跡関係の遺構・遺物も予想に反し何ら検出されなかった。　（市沢）

2．若宮遺跡（WKC）

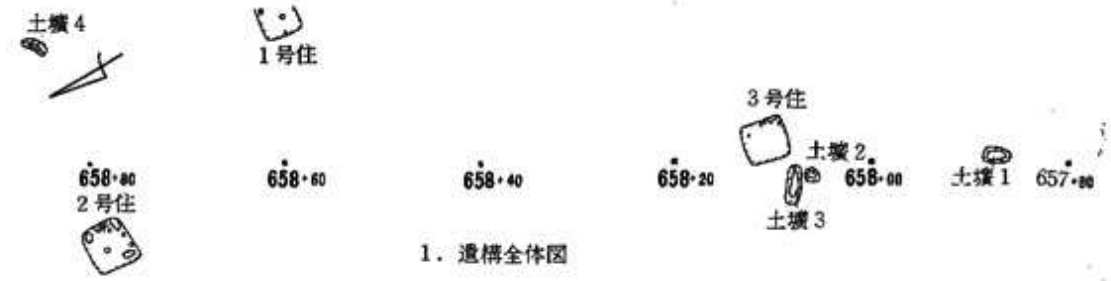
1）位　置（図2の2、図版2）

本遺跡は上伊那郡辰野町伊那富6554番地一帯に所在する。荒神山塊で大きく蛇行する天竜川の西岸低位段丘上にあって、荒神山を近くに、遥か遠くに王城山を望む広大な水田地帯に位置している。国鉄飯田線羽場駅東方で、段丘東端に沿い羽場堰が南流している。附近の遺跡としては、南方飯田線を越した段丘上に手長神社旧跡遺跡が、また北方天竜川を越した対岸に樋口五反田遺跡、荒神社矢沢遺跡が知られている。

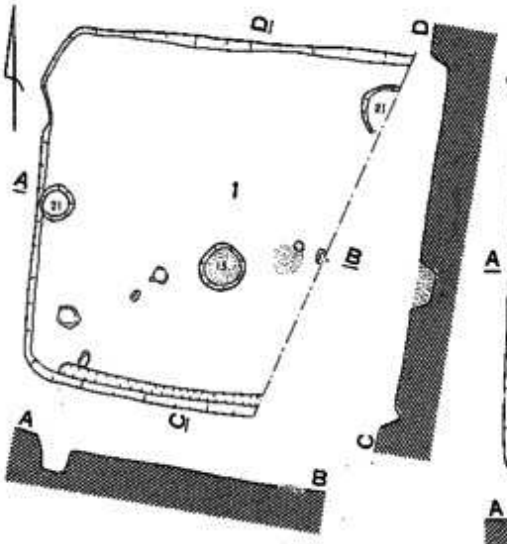
中央道は遺跡の東端を通過し、天竜川を渡って樋口五反田遺跡を通る。遺跡全域は水田で、手長神社旧跡遺跡直下まで続く。標高は711～712mで羽場堰下の段丘は709mとなっている。

今回の発掘調査は最初658＋60をＡＡとしたが、遺構の検出により拡張して、657＋40をWFとし、WFからＣＫまで、東西は41～57にグリットを設定して行なった。層序は水田耕作土、黒褐色土、ローム層の順である。　（山岡）

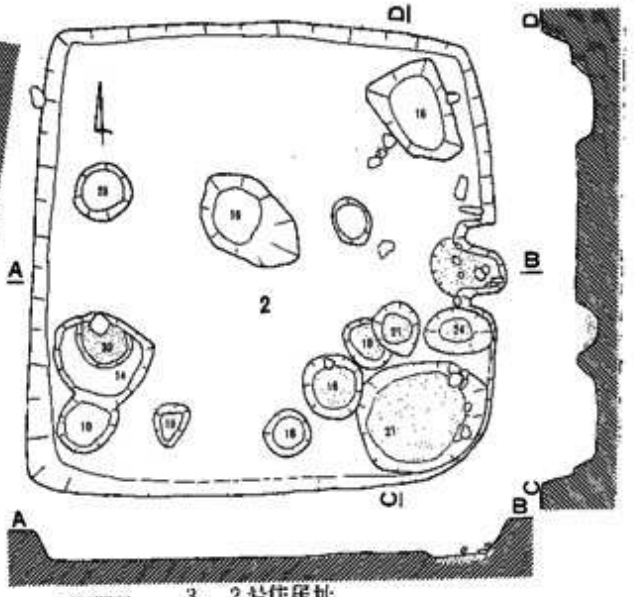
2）遺構と遺物



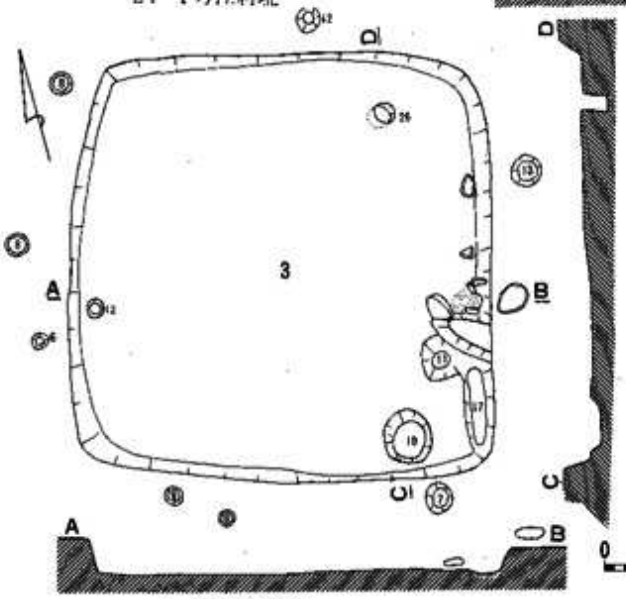
1．遺構全体図



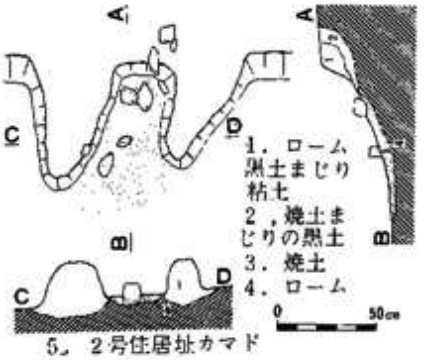
2．1号住居址



3．2号住居址

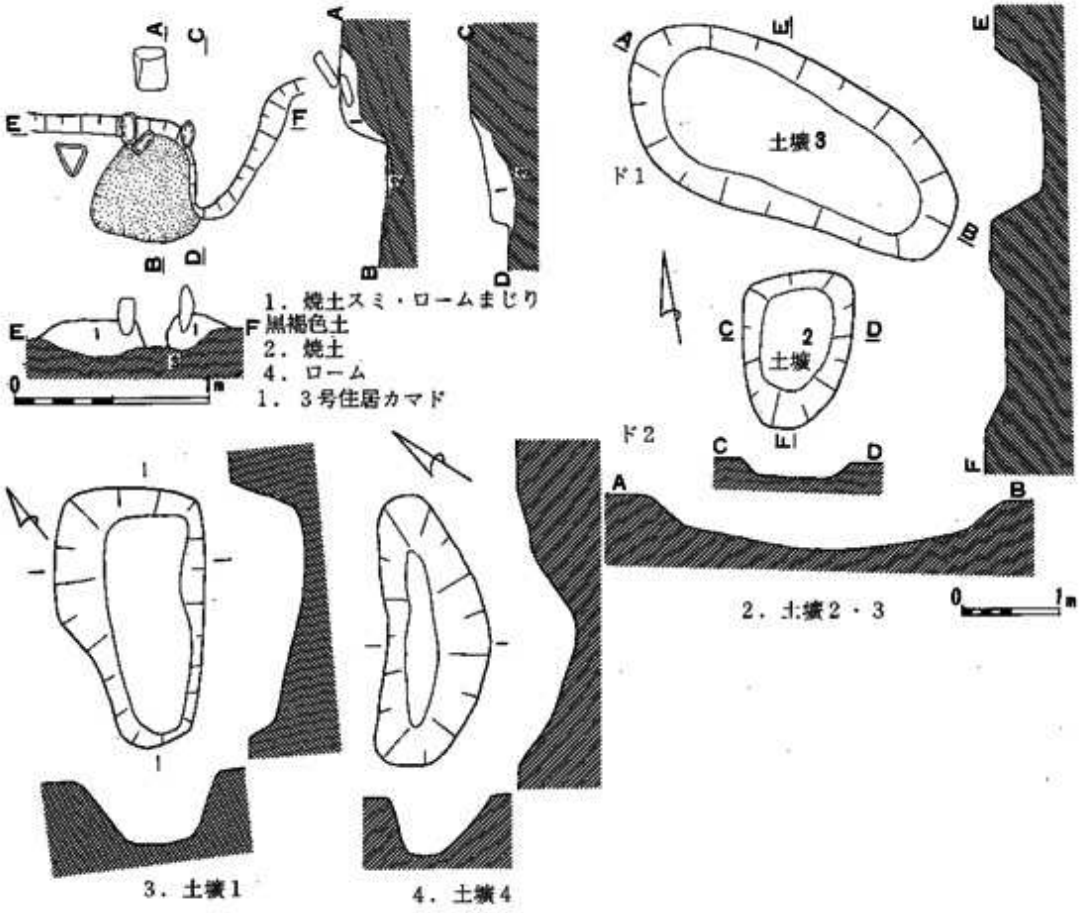


4．3号住居址



5．2号住居址カマド

第9図　若宮遺跡遺構実測図（1 1：800，2～4　1：80，5～　1：40）



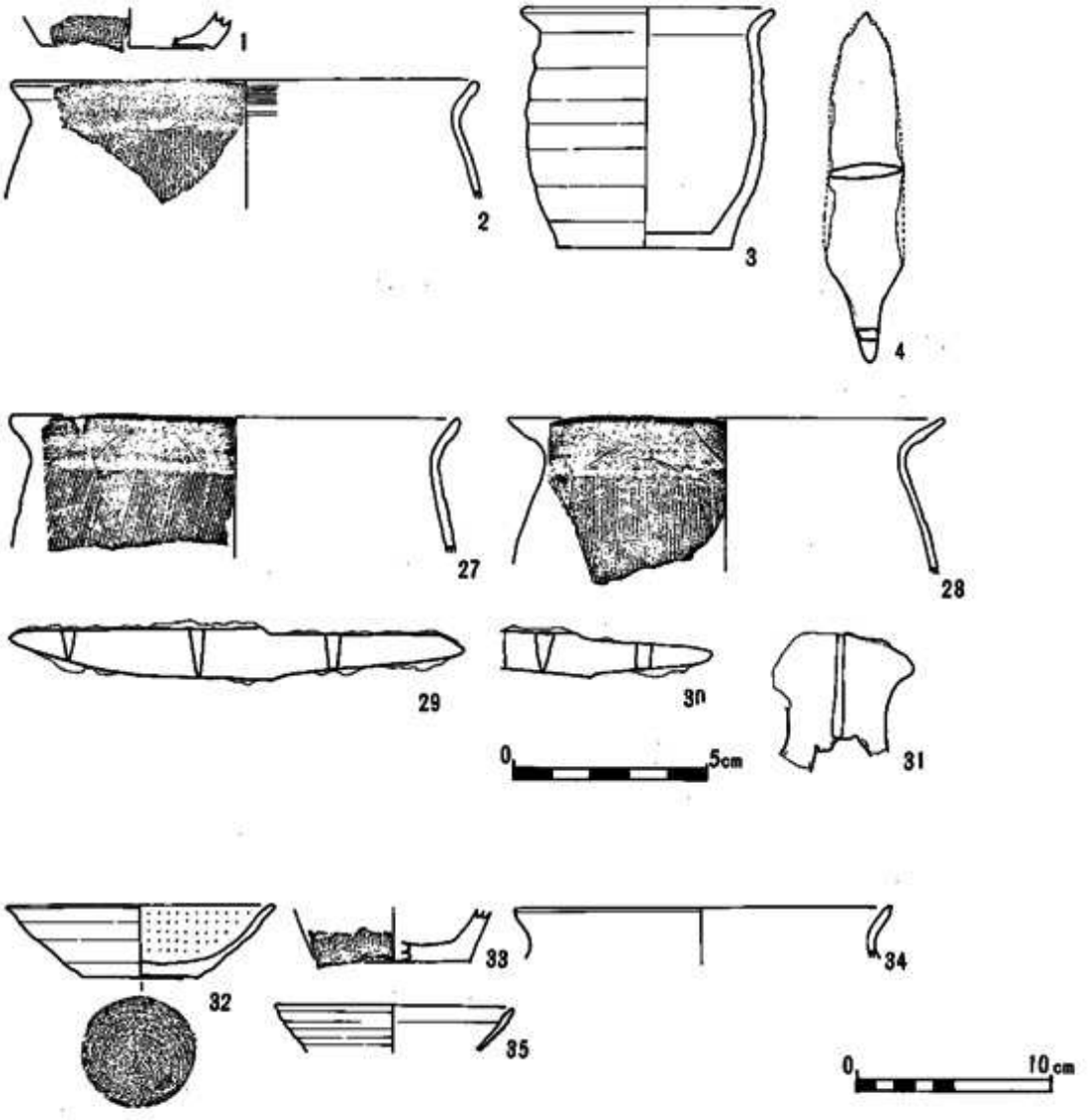
第10図　若宮遺跡3号住居址カマド実測図および土壙1～4実測図
（11：40，2～4　1：80）

ア．平安時代の遺構と遺物

ア）1号住居址（図9・11の1～4　図版2）

遺構　東側は用地外にかかるため調査できなかったが、本址はローム層を掘り込んで構築された方形プランと思われ、南北に3.82mを測る規模のものである。カマドは、おそらく東壁にあったろうと推定される。住居址の中央ピット内には厚さ10cm程に焼土が堆積し、土師器片が数片混入していた。またその東にも焼土の堆積が約5cm認められ、カマドの焼土灰散在個所と考えられる。床面は一面に砂利があったが極めて堅固、良好である。壁は西壁はなだらかな傾斜をもって続き、北壁は20cm、南壁は10cmを計る。南壁に沿って周溝が認められた。

遺物　土師器と鉄製品が出土しているが出土量は少ない。土師器は長胴の刷毛目痕をもつ甕形土器、（1～2）とやや小形化した3が出土した。鉄製品は鉄鏃ともヤスリとも思える4が出土した。断面はレンズ状を呈し、身に細かい刻目が横走している。（山岡）



第11図　若宮遺跡１～３号住居址出土土器および鉄器（１～３・27・28・32～35＝１：４
４・29～31＝１：２（１～４　１号住，27～31　２号住，32～35　３号住）

イ）２号住居址（図９・11の27～31・12　図版２の７、３の９）

遺構　　本址は１号住居址の北方25mの所に検出された。ローム土を掘り込んで構築された本址は、方形プランで4.3mの規模を持ち、主軸方向をN－105°－Eに計る。壁高35cmで囲く、傾斜を持って床面に続く。床面はカマド周辺が堅緻であるが、他はやゝ軟弱である。住居址内のピットは、いずれが主柱穴か判断に苦しむが、南東隅にある大きなピットは焼土がつまっており、灰捨てのものと思える。カマドは、

粘土を主に構築してあるが、側壁には一部石を使用している。焼土は厚く、赤色を呈している。

遺物　土師器、須恵器が主体を占め、わずかに灰釉陶器を伴っている。12図5は灰釉陶器を模倣したと思える土師器で、「人」の墨書がある。6～9は土師器坏、10～15と図11の27、28は土師器の長胴甕形土器口縁部片で刷毛目痕を縦方向にもつものが多い。坏・甕いずれもカマド内およびその周辺から集中して出土した。16～21は須恵器坏で糸切痕が明瞭に残る。22、23は須恵器で、23は肩部に隆帯をめぐらせた四耳壺である。突起には縦に穴があけられている。焼成よく緑色の自然釉がかかっている。24～26は灰釉陶器椀の破片である。鉄製品としては刀子が2点（29、30）と用途不明の鉄製品31が出土した。（市沢）

ウ）3号住居址（図9・10・11の32～35　図版3の8）

遺構　本址は検出された3住居址の中では一番南に位置し、カマドを東壁にもつ4.3mの方形プランを呈するもので主軸方向をN－105°－Eに計る。残存壁高は30cmを数え、壁外に径18～30cm、深さ7～13cmのピットが8個所壁に沿って確認された。主柱穴のない本址では、上屋を支える補助的柱穴に関係あるものと思える。ローム土を掘り込んだ床面は、小石を含むがほぼ平坦で堅緻である。カマドは東壁中央やや南寄りに構築され、原形を保ってはいないが、石組粘土のものである。よく焼けて赤色を呈している。

本址の西に土壙3、4が検出された。

遺物　遺物量は少なく、内黒土師器坏（11図の32）、須恵器坏35、土師器甕形土器口縁部片34と底部33が検出されたに過ぎない。（山田）

エ）土　壙（図10）

土壙は、1号住居址の北に土壙4が、3号住居址の西に土壙2、3、同じく南に土壙1の計4基が検出された。4基ともに出土遺物がなく時期は不明である。

土壙1は、東西1.52×南北2.66mの南北に長い楕円形を呈し、深さは最深で70cmを計るが、底面は南へゆるくせり上がってきている。床面のローム面は非常に堅くなっていた。

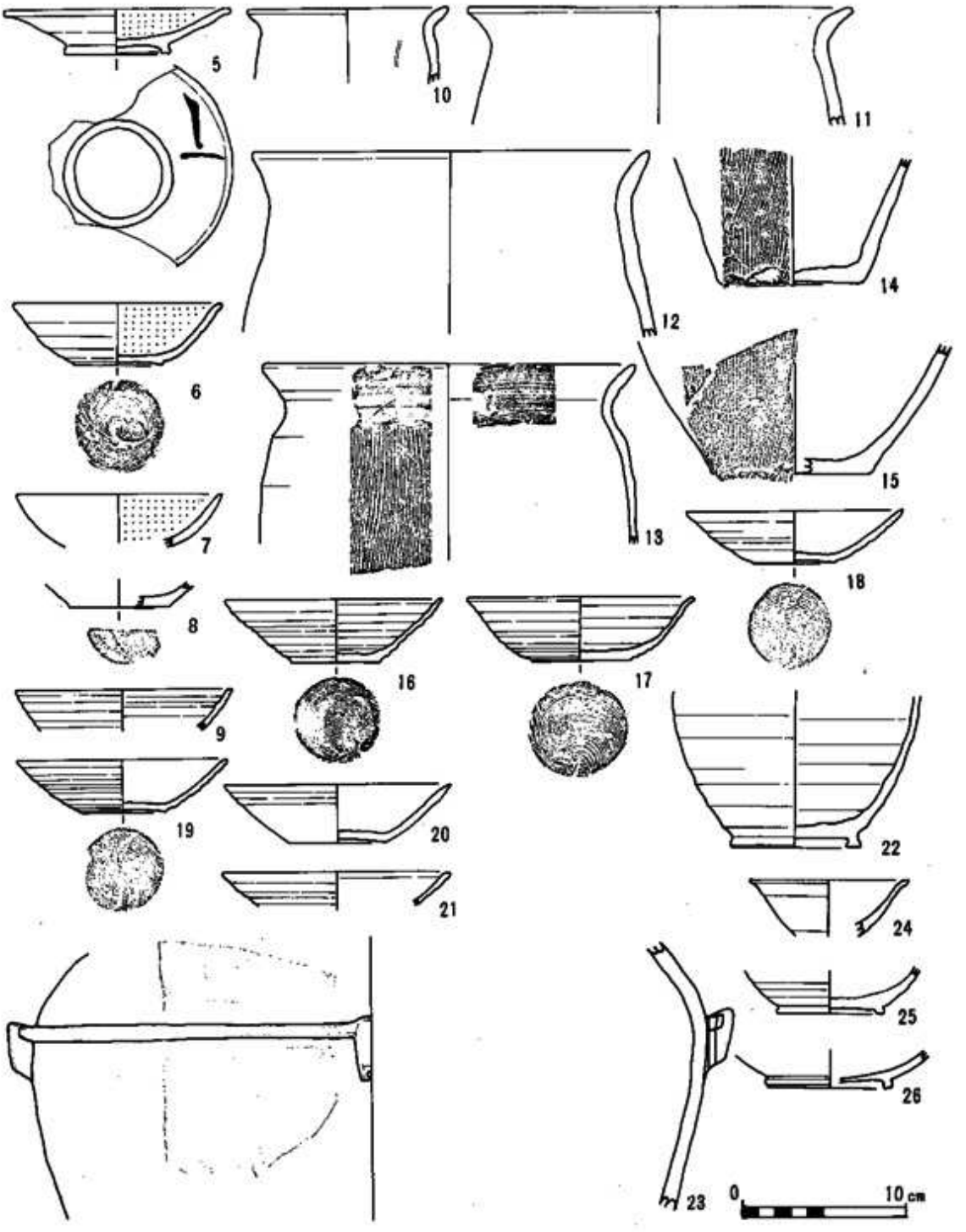
土壙2は、東西1.13×南北1.6mの楕円形で深さ15cmと浅い。

土壙3は、東西3.72×南北1.7mの東西に長い楕円形を呈し、深さは50cmで、床面は東および西へゆるく上がっている。覆土は炭、砂礫混りの黒褐色であった。

土壙4は、東西1.1×南北2.8mの長楕円形を呈し、深さは60cmで摺り鉢状に落ち込んでいる。（山岡）

3）ま　と　め

国鉄飯田線羽場駅東方、天竜川が大きく蛇行する西岸低位段丘上に位置する本遺跡から、土師器、須恵器を主体に、灰釉陶器を伴出する住居址3軒と時期不詳の土壙4基が確認された。2号住居址は出土遺物が多く「人」の墨書をもつ土師器内黒坏は糸切り後、回転篦削りをし高台を付けたものであり、口縁は灰釉陶器の模倣と思える。須恵器坏も規格品化しており、すべて右回転の糸切り底をもつものである。また四耳壺は縦に孔が穿たれたもので、伊那福島遺跡等に類例がみられる。遺物からして平安時代後期に位置されよう。1号住居址床面出土のヤスリ状鉄製品が注意される。確実に本址に伴なったものではあるが時



第12図　若宮遺跡２号住居址出土土器（１：４）

期的に見合うものであるか否かは他の類例を待ちたい。

調査により散在する3住居址の確認を得たが、当時の集落は中央道用地より西方に広がっており、さほど密集していなかったものと思える。灰釉陶器を伴出する遺跡を加えたことになり、刻時期集落研究の上で資料提起となるものである。 (山岡)

3．荒神社矢沢遺跡(ＹＷＢ)

1）位　置（図3，図版4の12）

本遺跡は、天竜川左岸中位段丘上、辰野町樋口755～759番地一帯に所在する。荒神山丘陵の南に位置する本段丘面の先端は、昨年度発掘調査された樋口五反田遺跡があり、本遺跡は新町部落と樋口部落を結ぶ道路の北側であるが、五反田遺跡とは地続きである。遺跡の北は樋口内城館址遺跡の存する高位段丘に続き、本遺跡を含めた周囲一帯は遺跡の密集するところである。標高710m、天竜川との比高は約15mで、この段丘面の中央部は、かつて湿地帯であったと聞く。事実発掘時の所見として造田以前の地層から、粘土、泥炭を知ることができた。現在遺跡の西方を流れている板橋川は、かつては、この湿地帯に流れていたものと考えられる。1～3号住居址の検出された遺跡南部は、水田床土下に黒土混黄褐色粘質ローム、黄褐色粘質ロームと移行するが、4号住居址を含む遺跡北部は、地点により複雑な層序を示す。つまり、灰褐色粘質土が厚く堆積していたり、腐植物を含有する粘質土があったりして湿地帯の特徴を南部より強く示している。

調査は 670+40をＡＡとし、672+80まで、巾46mの範囲を行なった。 (八木)

2）遺構と遺物

ア．縄文式時代の遺構と遺物

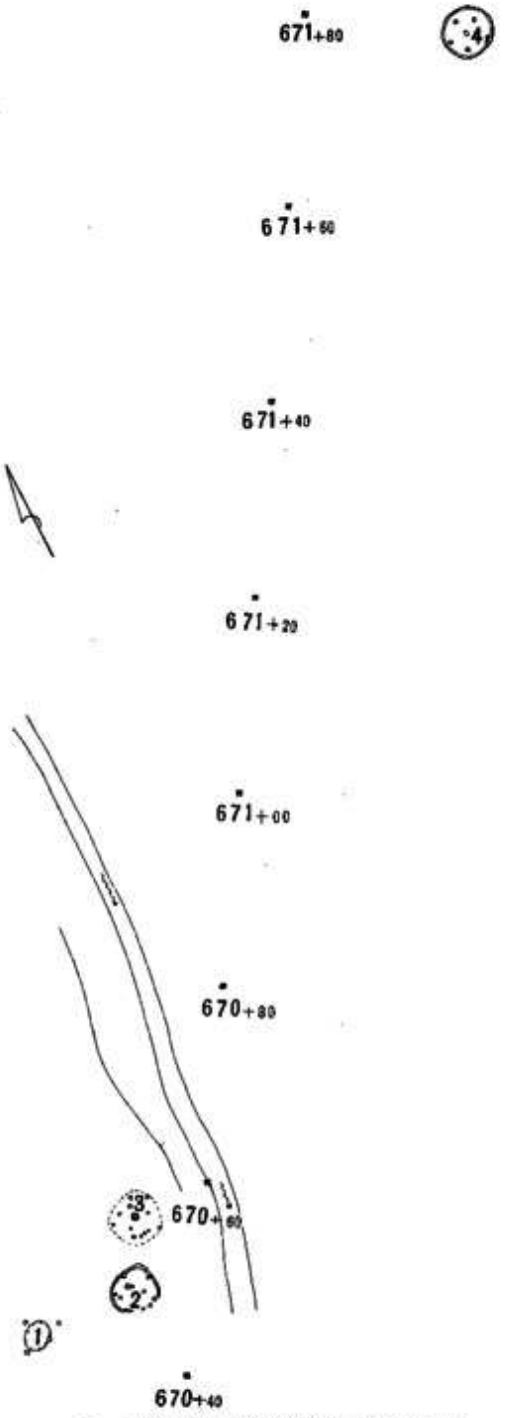
ア）1号址（図13・14　図版4）

遺構　調査区南端に検出された本址は、円形に落ち込んだもので中央に径35cm深さ40cmのピットがあるだけで住居址とは認定しがたい。壁もなく、床も弯曲していて小礫混りのロームである。壁外には径30～35cm、深さ31～35のピット6個所があり、南壁外に土器片の出土がみられたことから、本址以外に住居址があったと考えられる。

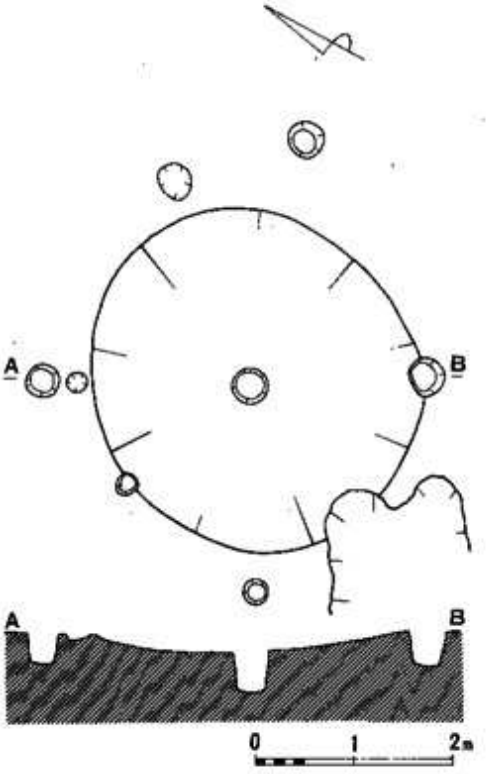
遺物　出土量少なく、14図1～7の縄文中期土器片だけである。 (福沢)

イ）2号住居址（図15～18・24・25　図版5）

遺構　本址は残存周壁が認められず、周溝によってプランを確認した。西側に張り出す不整円形を呈

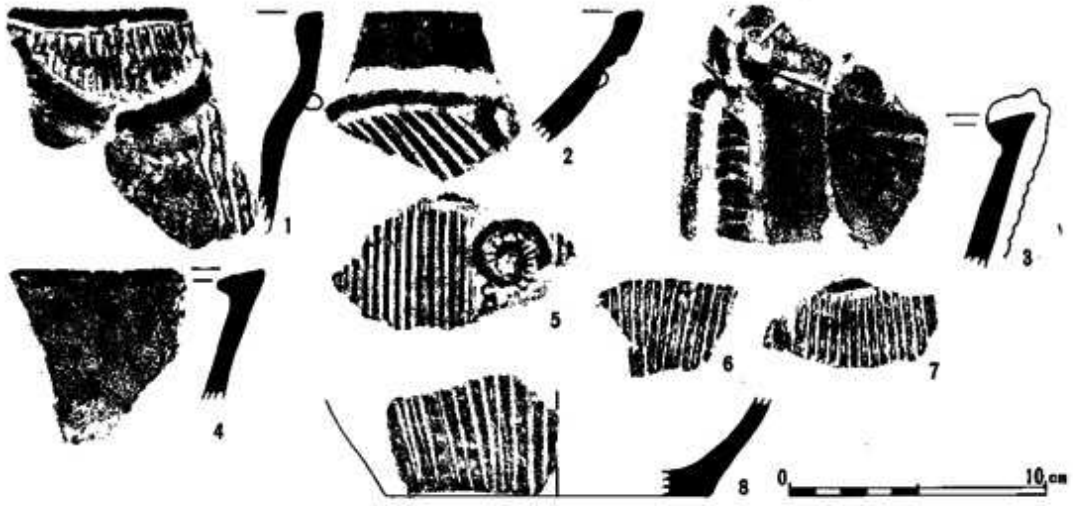


1．荒神社矢沢遺跡遺構全体図（1 :: 800）



2．1号住居址（1：80）

第13図　荒神社矢沢遺跡遺構全体図（1： 800）および1号住居址実測図（1：80）



第14図　荒神社矢沢遺跡１号住居址出土土器(１：３)

し、5.25×4.76m を計る規模である。床面は軟弱で中央部は径2.7m が円形状になだらかに凹む。炉は円形石囲炉であったらしく、炉縁石１個を残すのみで、他は原位置から離れた床面より浮いて移動していた。擂り鉢状に凹む炉の掘り込み中からは、焼土の検出はなかったが、炭が確認され、底部には小礫が若干量敷かれてあった。主柱穴は５個で、全ての主柱穴の底に小礫が敷かれ、固められた状態で検出された。柱穴の深さは41～53cmである。床面には、主柱穴より浅いピットが３個所確認されている。馬締形に掘られた周溝とピットから入口部は南に想定されよう。

住居址に至る層序は、耕作土、水田床土、黒褐色土、古い時期の水田床土、黒褐色土、黄褐色粘質ロームで、遺物の包含は下の黒褐色土であり、床面はローム上面である。

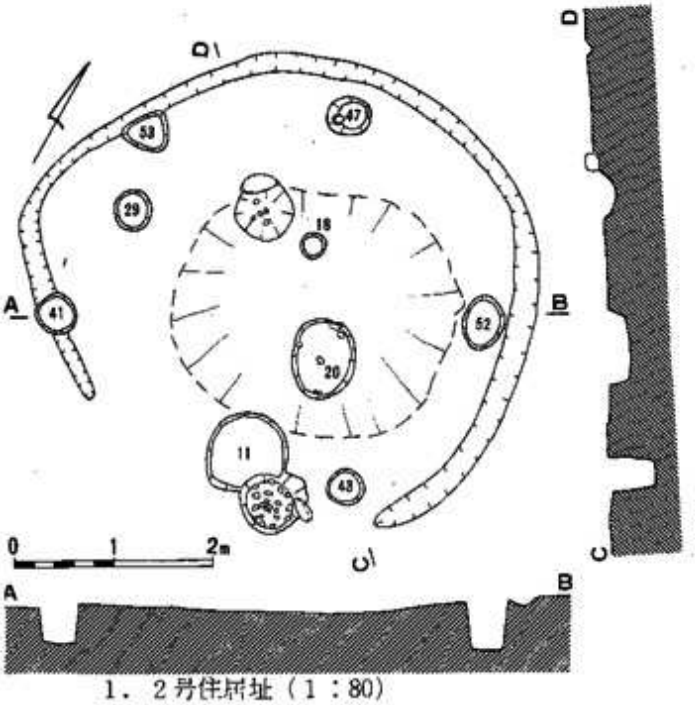
遺物、出土は床面上から10～15cmの範囲で、相当量の土器片が集中出土した。包含層が浅いため層位的な遺物の確認はできなかったが、その出土状態は注意される。更に土器１個体分が南東側主柱穴内より横転した状態で検出された。（16図の14）

出土土器は縄文中期末葉の初めの時期に比定されるもので、深鉢形がすべてである。口縁は平縁の他に波状口縁もある。９は４個の山形突起をもち、押引き手法の沈線と隆帯をその特長とし、やや古い要素をもっている。10～13は、平縁口縁に無文帯をもち、胴部に平行条線を縦方向に施し、それを区画する隆帯に刻目を有するもので、本址の主体となる土器である。拓本にもこの一群が多い。14は浅いキャリパー形深鉢であり、大形の装飾把手のつく16～19も当刻時期に属するものであろう。また70のように胴下半部に櫛形文も残る。

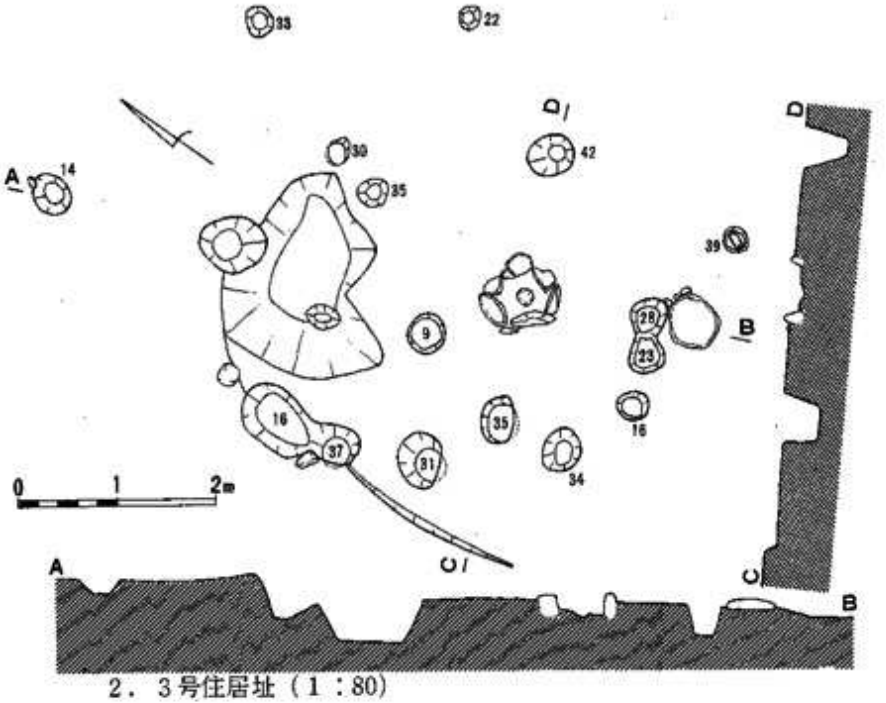
石器は打製石斧２点、敲製石斧１点、横刃形石器２点、石鏃１点の出土をみた。　　（八　木）

ウ）３号住居址（図15・19・20　図版６）

遺構　　２号住居址の北に検出された本址は、北側に不明な落ち込みがあり、西壁一部を残すのみで、



1．2号住居址（1：80）



2．3号住居址（1：80）

第15図　荒神社矢沢遺跡2・3号住居址実測図（1：80）

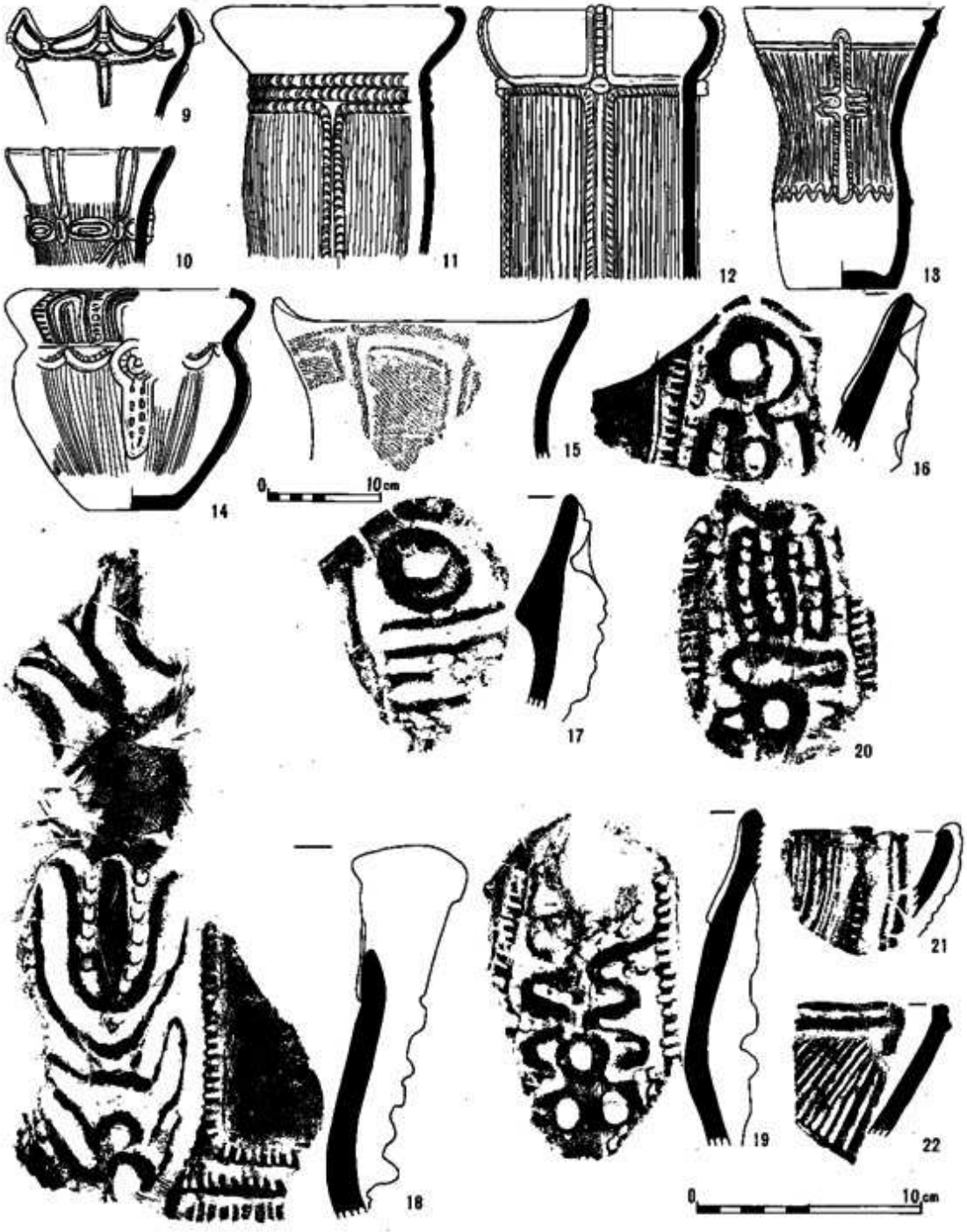
プランは不明である。

床面は軟弱であり、住居址外のと判別が容易でなかった。炉は円形石囲炉で、内に焼土は検出できなかったが、炭が若干量確認された。主柱穴は5個と思える。主柱穴の他に類似する浅いピットが不規則にある。

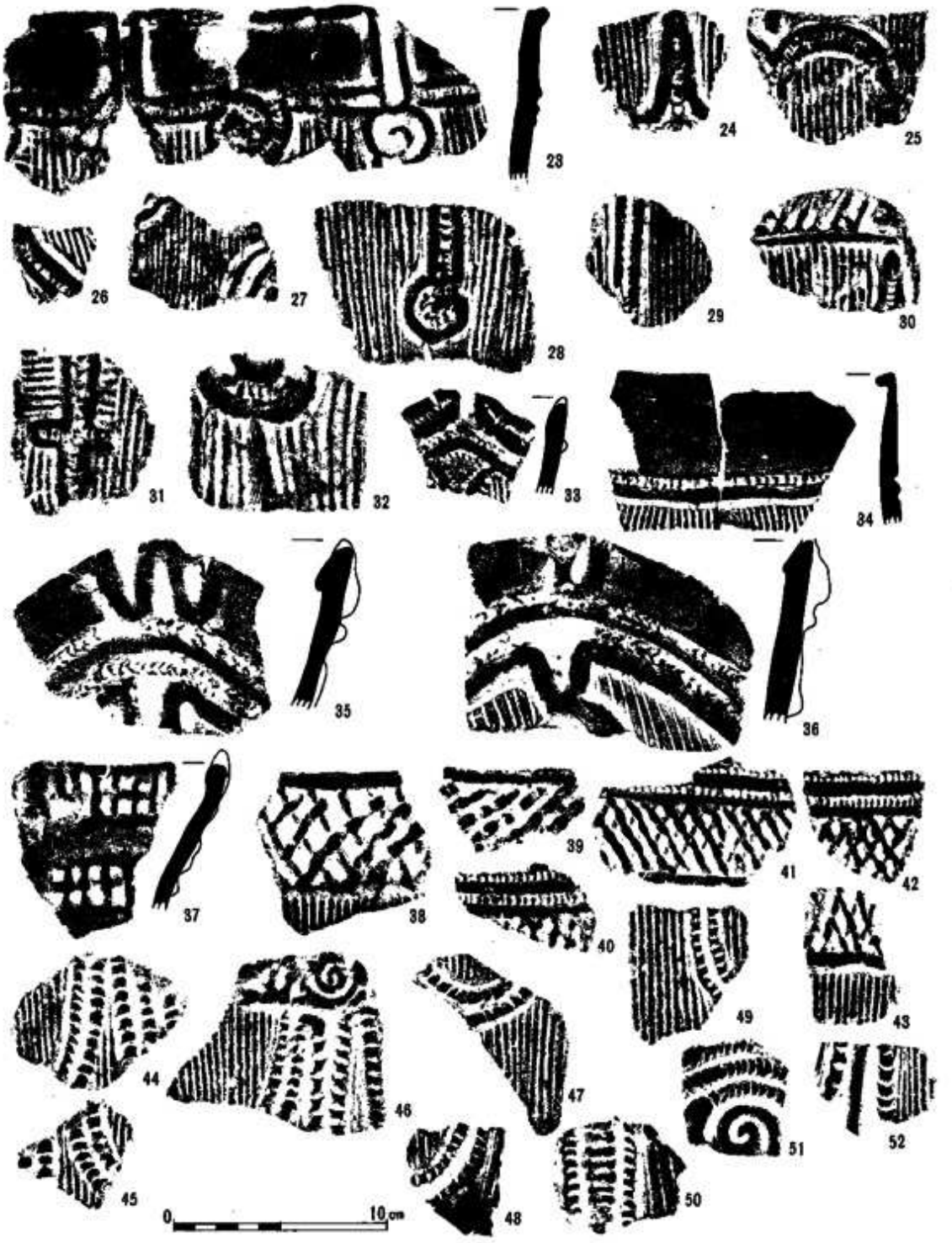
遺物、出土状態は2号住居址と同様、床面より10cm辺から床面までの間に集中して多く出土した。特に炉の周辺に多かったのは2号址とはやや異なる。

出土土器は縄文中期中葉から末葉初めに比定されるものである。

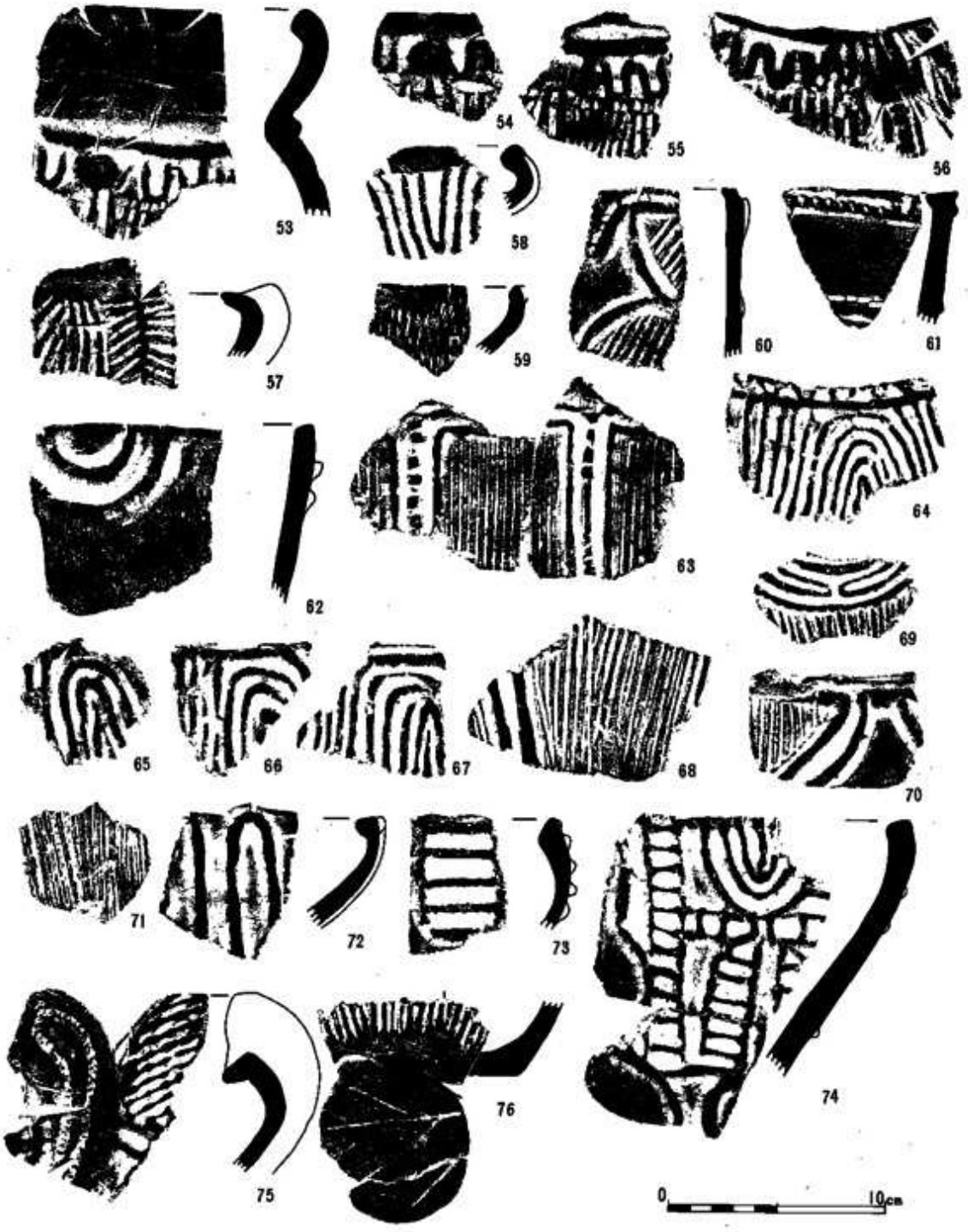
80～93は、キ



第16図　荒神社矢沢遺跡２号住居址出土土器
（９～15　１：６，16～22　１：３）

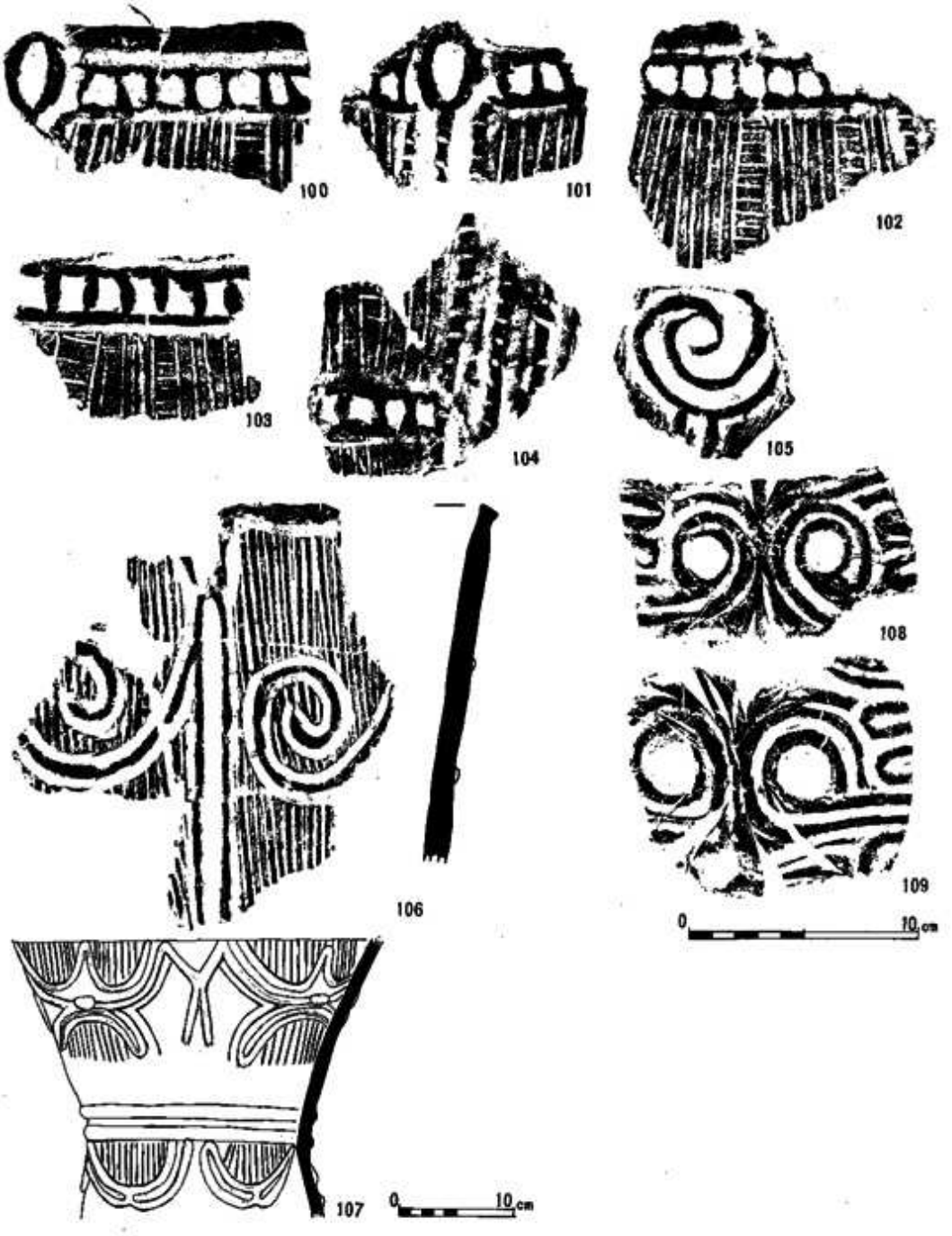


第17図　荒神社矢沢遺跡２号住居址出土土器（１：３）



第18図　荒神社矢沢遺跡２号住居址出土土器（１：３）

第19図　荒神社矢沢３号住居址出土土器（77～78　１：６，他　１：３）



第20図　荒神社矢沢遺跡３号住居址出土土器（ 107　１：６，他　１：３）

ャリパー形の口縁部に粘土紐を梯子状に貼付し、胴部に櫛形文を配する一群であり、100～104は、胴部に縦方向の平行沈線を施し、間隔をおいて横走の沈線を加えた一群であり、これが本址の特長的なものである。77は胴部上半から口縁部にかけて刺突文を持ち、下半に櫛形文をもつもの、78は胴部に平行条線を施し、刻目をもつ隆帯でアクセントをつけたものである。107は3段に櫛形文を配したもの、25図の36は小形の手づくね土器で円弧状の沈線が施されている。

石器は、打製石斧、横刃形石器が床面に近い位置で出土している他、磨製石斧、石鏃の出土もあった。

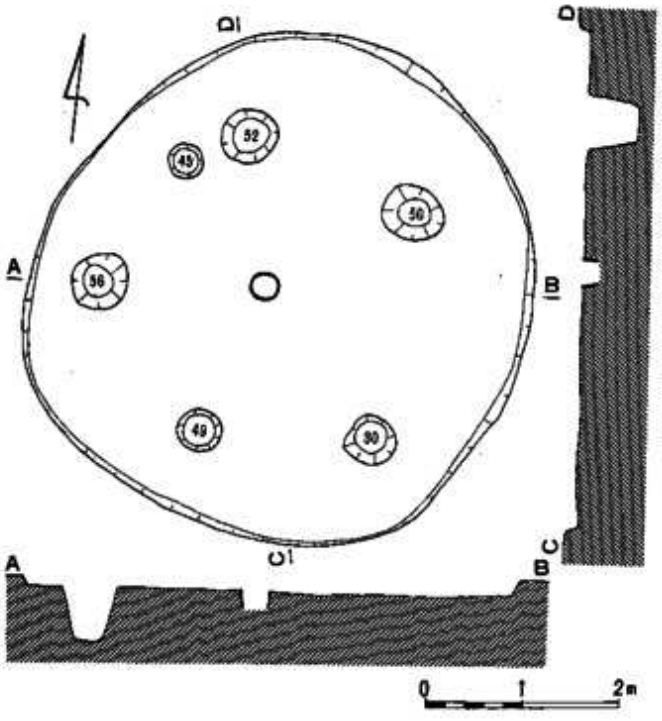
（小松原）

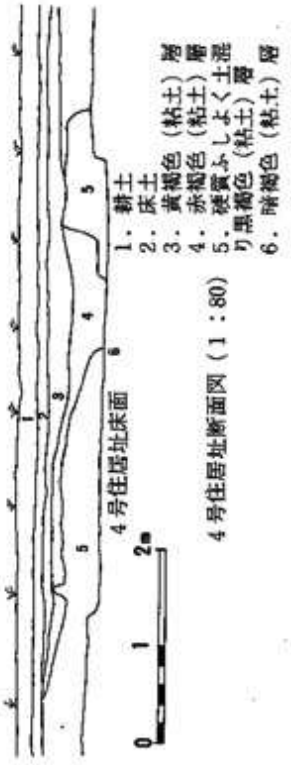
エ）4号住居址（図21・22・23・24・25　図版7）

遺構　3住居址よりは離れて北方に検出された本址は、正円形に近い5.21×5.28の規模をもち、壁高は11～14cmと低い。床面は鉄分を含む粘土で堅緻である。炉はほぼ中央に位置し、径36cm、深さ50cmの深鉢を正位にした埋甕炉である。主柱穴は5個で他に床面上の施設は確認できなかった。

遺物　出土土器は縄文中期中葉に比定されるものである。110は埋甕炉として使用された深鉢で、横位区画文を基調にした構成で、二種類の半截竹管による連続刺突文が施されている。上部は方形区画文、胴部から底部に抽象文、底部に三角形区画文を配した構成となっている。

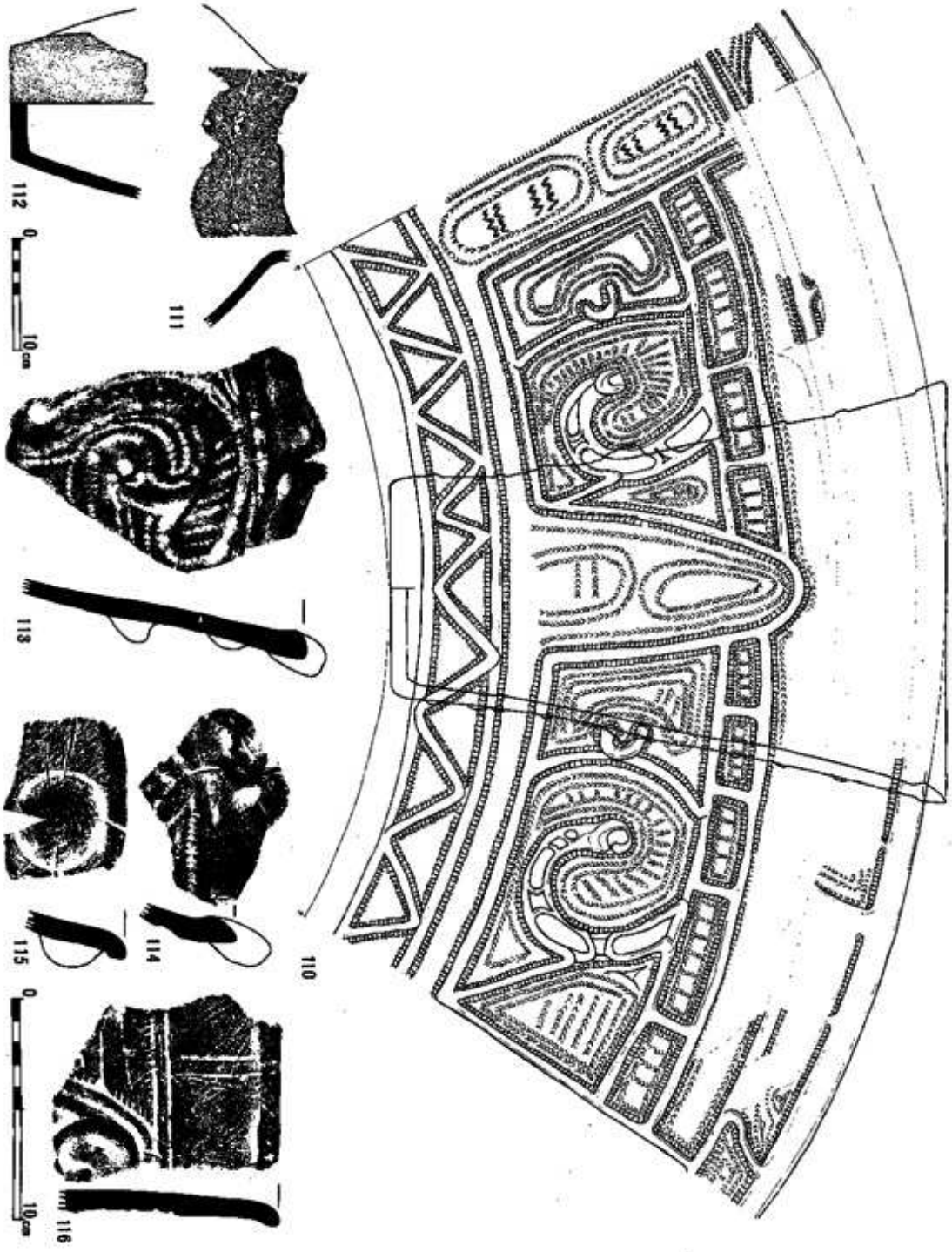
石器は、打製石斧3点、局部磨製石斧1点、凹石1点、石鏃3点、石錐1点の出土をみた。（図24の10～14）



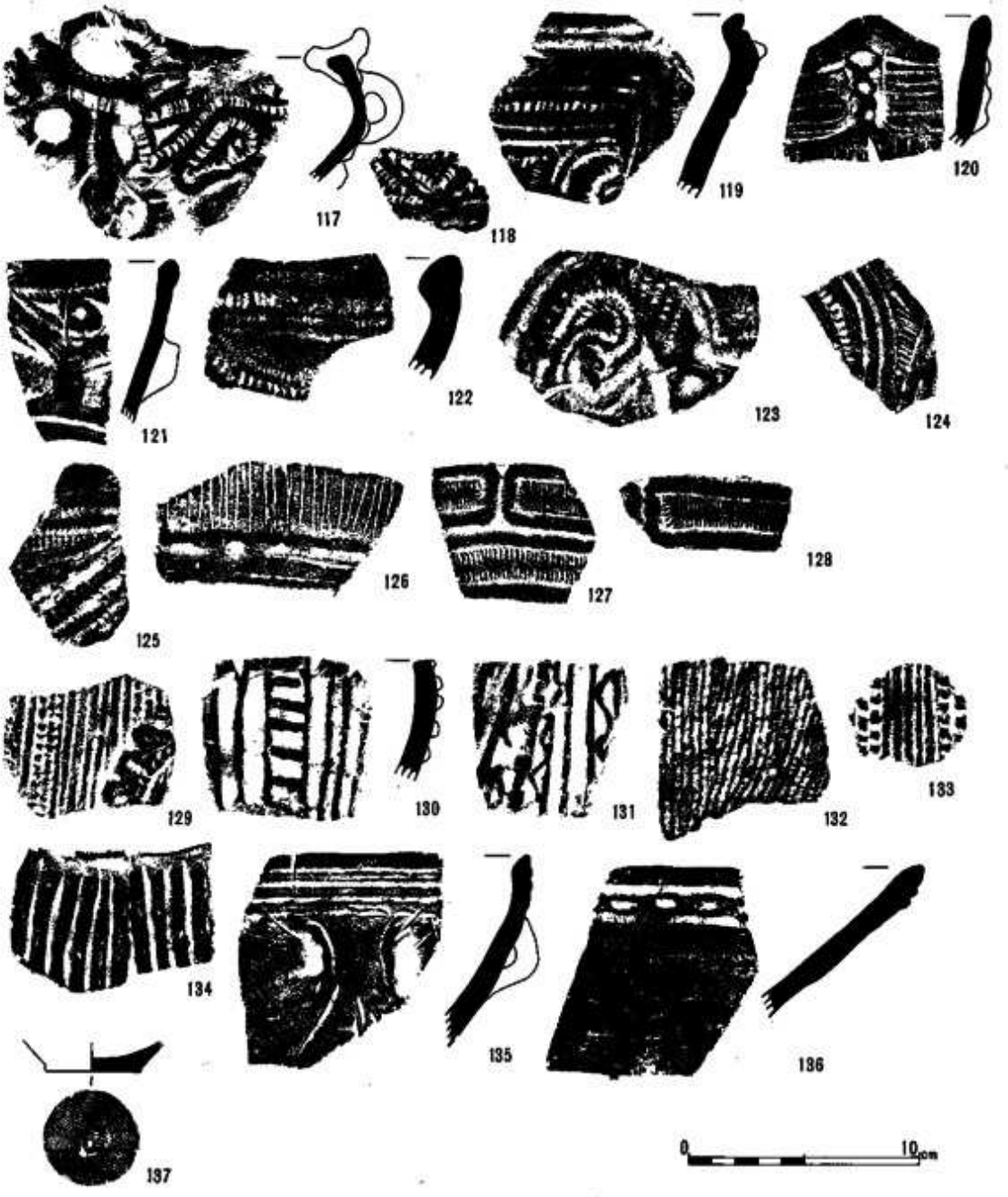


4号住居址断面図（1：80）

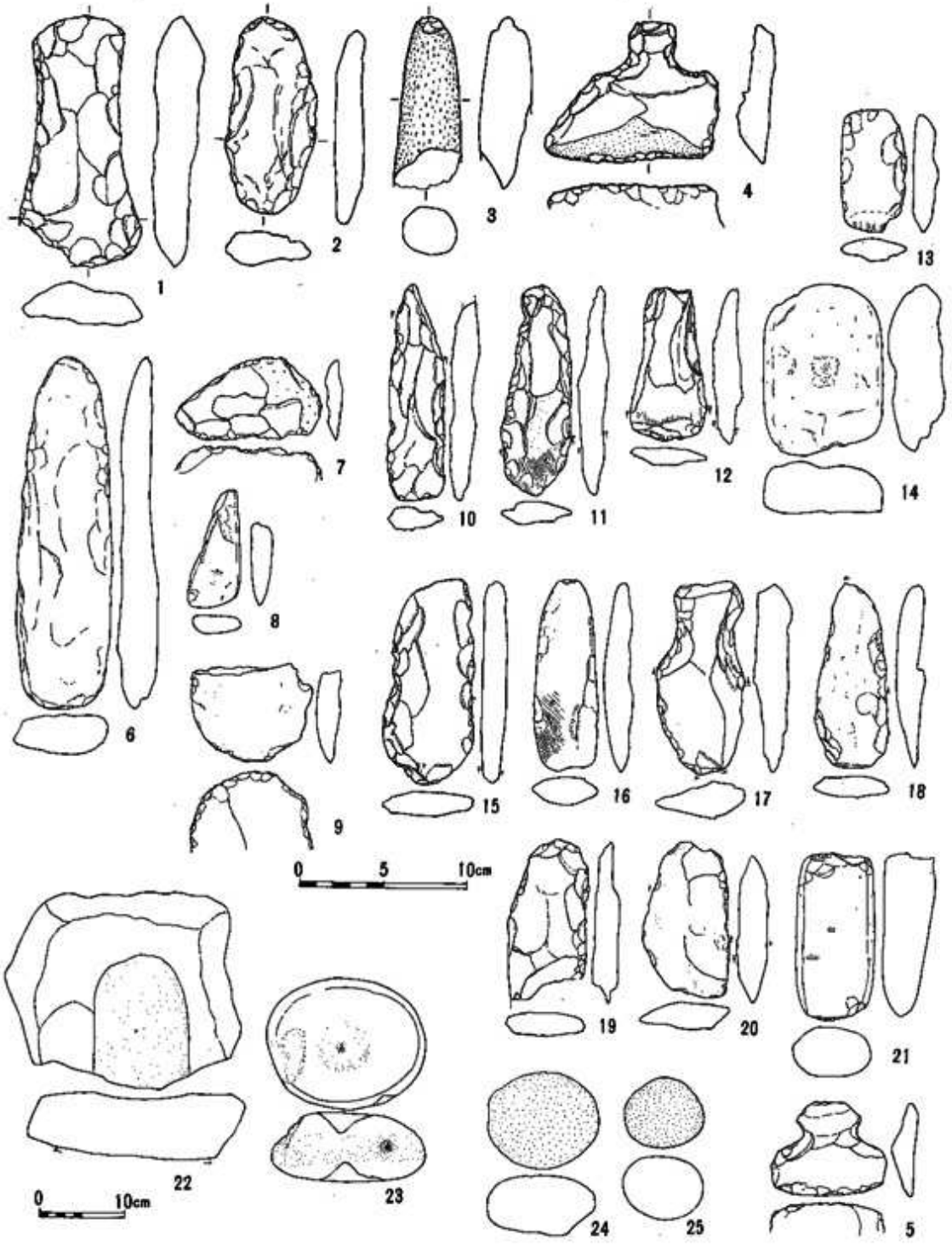
第21図　荒神社矢沢遺跡4号住居址実測図（1：80）



第22図　荒神社矢沢遺跡4号住居址出土土器（110～112　1：6，113～116　1：3）



第23図　荒神社矢沢遺跡４号住居址およびその他出土土器
（ 117～ 128）その他（ 129～ 137)(1 ： 3)



第24図　荒神社矢沢遺跡出土石器（1～21・23～25　1：4，22　1：8）
1～5　2号住居址出土，　6～7　3号住居址床，8～9　3号住居址覆土，10～14　4号住居址出土，15～25　その他）

打製石斧、局部磨製石斧は刃部から側部に使用擦痕が観察される。凹石は礫器としても使用されている。

（小松原）

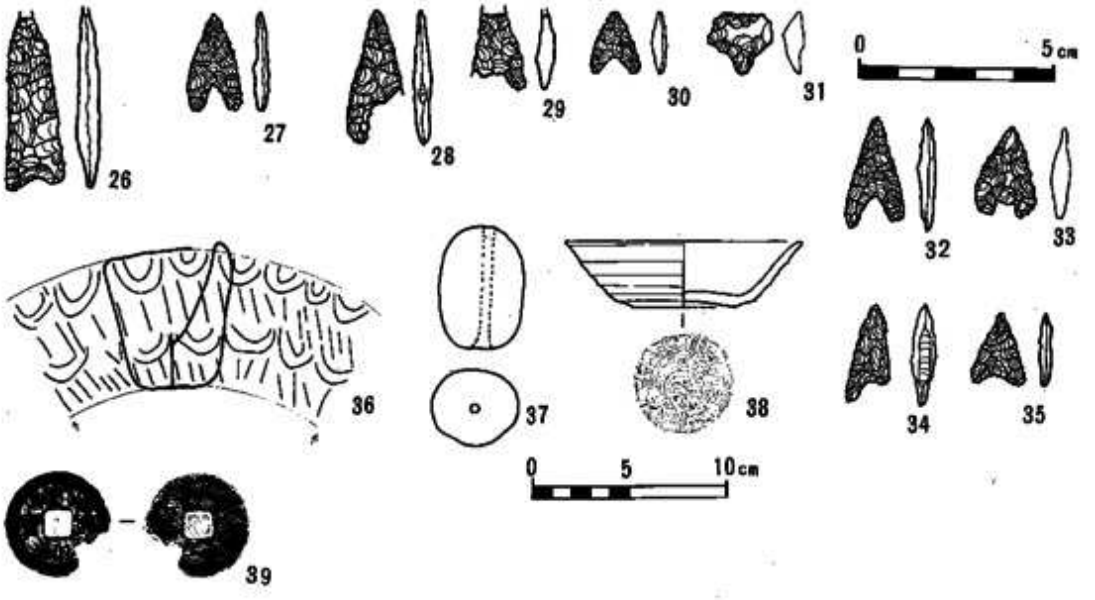
イ．その他の出土遺物（図23・24・25）

遺構以外から出土した遺物に縄文中期中葉から末葉に比定される土器片(129～136)、打製石斧、磨製石斧、石皿、凹石、磨石、石鏃がある。また、25図38の須恵器は耕作土中から出土した。この他、37の土錘137の灰釉陶器底部、寛永通宝の出土もみた。

（八木）

3）ま と め

樋口内城館址遺跡と樋口五反田遺にはさまれた本遺跡は地続きであり、地形的に同一生活圏と考えられる。昨年度発掘調査された樋口五反田遺跡からは、縄文中期、弥生後期の集落が確認され、その限界を知る上で、今回の調査に期待するものが多かった。また北隣りの樋口内城館址遺跡からは（今年度調査）後述するような、縄文中期、弥生後期の集落に合わせて、土師期から中世に至る生活址が確認されて、本遺跡との関連性が問題となる。本遺跡検出の4住居址は、同一時期に営なまれたものでなく4号住居址との間に1～3号住居址は時間的差がみられる。1～3号住居址は五反田遺跡の北限と解してよさそうだが、



第25図　荒神社矢沢遺跡出土石鏃小形土器他（26～35　1：2，36～38　1：4）
（26　2号住居址，27・36　3号住居址，29～31　4号住居址，32～35・37・38　その他）

4号住居址は単数あるいはそれに近い形で存在したと推察できる。この事実は、南北両遺跡が集落址としてまとまった住居址単位を示すのに対し、集落立地と集落の動きという点で注意されなければならない。また南北両遺跡に密度の高い弥生期の集落があるのに、本遺跡では刻時期の遺構、遺物の認められない点も注目すべき事実である。湿地帯という居住に適さない地であったり、または生産の場としての水田地帯であったという何らかの地形的要因があったと思える。弥生期の集落は町の圃場整備事業に伴なう緊急発掘調査の所見から、天竜川沿いに段丘縁を西方に広がっていることが判明している。　　（八木）

4．樋口内城館址遺（ＨＺＣ）

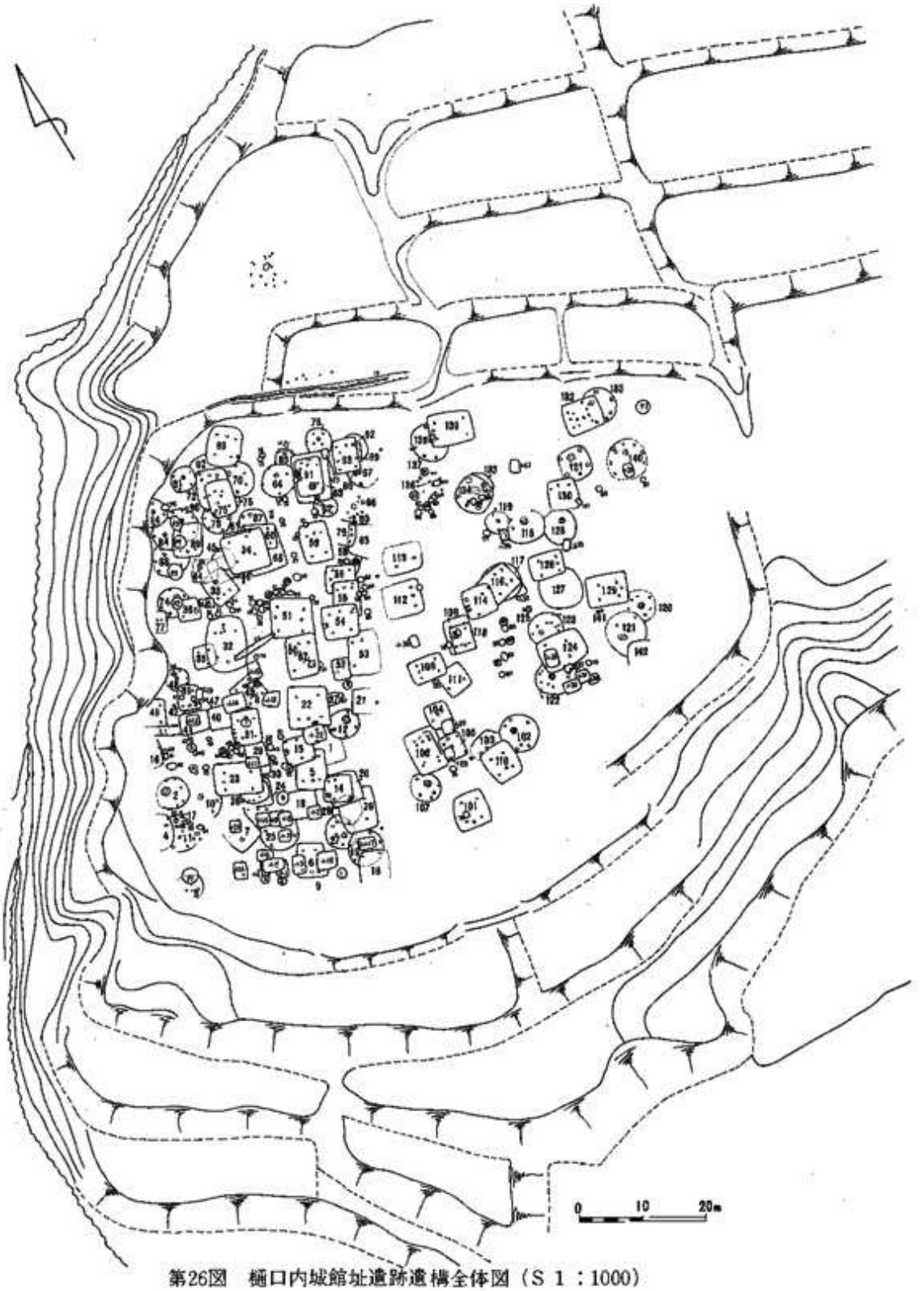
1）位　置（図4，図版8）

本遺跡は辰野町樋口矢沢原680番地一帯に所在する。荒神山を西に隔てた伊那山地から舌状に突出した台地で、標高720mに位置している。遺跡はこの丘陵西半一帯に広がっており、中央道は丘陵西端を横切って通過する。伊那谷を特色付ける河岸段丘は、この地から始まり、南方に天竜川の流れとその両岸に広がる河岸段丘を遥か遠くまで展望できるところである。一帯は水田として利用され、開田は安政2年と古いが風当たりが強く稲の倒伏もはげしかったと聞く。夏の発掘時には目も開けていられなかったことが、それを裏付ける。

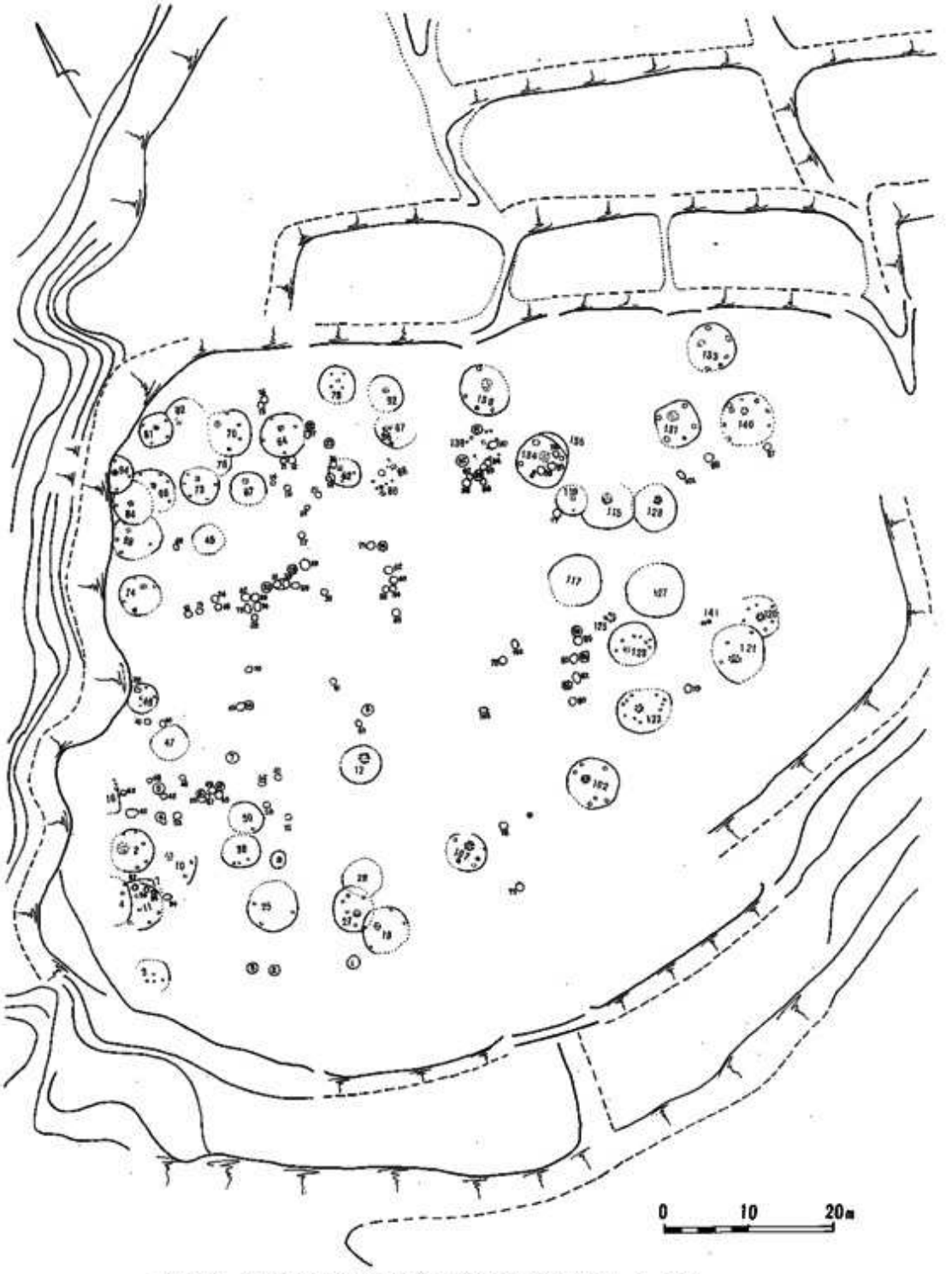
本遺跡は歴史的伝承の地でもある。既ち、木曽義仲の四天王の一人である樋口次郎兼光の居館址といわれており、調査前からこれにかかわる遺構、遺物の発見が期待されていた。事実、南、西、北は、急崖となって、南、北には帯曲輪が存在し、東には二重の空濠があって居館の姿を残している。誰の居館かは定かにでき得ないが、朝日村史によれば、江戸末期に当地を訪れた高遠藩老の葛上源五兵衛はこの地を「木の下蔭」に次のように記している。「上伊那樋口村は往昔木曽義仲の臣、樋口次郎兼光の在所にて世々子孫此里に住みけるとぞ、（中略）本村道の西を七間屋敷という是古しへ家中家敷なるよし、六七十年已前まで石礎等もありたる由言伝ふ。今に於て稀には矢の根或は焼物類を掘り出すとぞ。夫より左右に坂あり、右を矢の坂といい左を血の坂といふ。この坂を登りて屋敷跡あり、広さ三・四丁ありて四方堀なり、又少し東の方西寄りて堀あり、是も広さ三・四丁、西方ばかり塹なり、今この地を内城といふ。今碑三つあり、二つは五輪塔にして高さ二尺四方に梵字一字づつあり、一本は四方塔にて高さ三尺ばかり前の方樋口筑前守末裔とあり下に、三字ばかりありといえども苔むして見えず、裏にも二行彫刻あれども一向にわからず。」

現在遺跡の東方旧県道辰野―伊那停線沿いに樋口次郎兼光の墓があり、五輪塔は盗難にあって2基現存しない。また、遺跡西方の荒神山山腹には荒神社があり、この神社は兼光が武運鎮護の神としてから、樋口氏は代々奉祀して文安3年（1446）に樋口筑前守光安が社殿を再建したという。そして、この地には香蓮寺が並立していたが、明治の廃仏毀釈によって廃寺となったと言われている。

周辺遺跡としては、昨年度調査を行なった樋口五反田遺跡が、本遺跡南方一段下の段丘上にあり、ここ



第26図　樋口内城館址遺跡遺構全体図（S 1：1000）



第27図　樋口内城館址遺跡縄文期遺構全体図（1：800）

から地続きに荒神社矢沢遺跡が、段丘下まで続く。五反田遺跡からは縄文中期の住居址、晩期の配石址、弥生後期の住居址、方形周溝墓などが検出され、また、荒神社矢沢遺跡からは、今年度調査で縄文中期住居址が確認され、更に東方の矢沢原遺跡からは古墳時代の遺物の出土を多くみて、この地一帯は古くから連綿と続く歴史を有する地である。

土層は、耕作土、水田床土、黒褐色土、褐色土、ローム土の順が一般的である。丘陵縁辺は山城構築時に相当な地形変貌していることが発掘時の観察でみられた。今次調査は673+40をＡＡとしＣＫまで42～59までグリットを設定し行なった。時同じく農業構造改善事業が実施されるため、町教委による発掘調査が用地外で行なわれたため丘陵全面に調査の手が入ったことになる。町当局、担当者のご厚意で資料を借用し、用地内外共に報告できることが出来、資料価値を高めることができた。ここに深謝の意を表するものである。（市沢）

2）遺構と遺物

ア．縄文式時代の遺構と遺物

ア）２号住居址（図28・29・35の１～５、44の53　図版10の35、29の134）

遺構　丘陵西縁に位置し、東に10号、23号、南に４号、11号の住居址が隣接して検出された。西半は、すでに破壊されて急崖に続くため、炉を含む東半分が確認できたに過ぎない。側壁は耕作で破壊されているため、周溝で推定すると径5.07mの円形プランで、中央やや北西寄りに竪穴炉をもつ住居址である。残存床面はローム土がよくしまって堅緻である。主柱穴は東半分に３個所確認され、周溝上に補助柱穴と推察されるものが２個所検出された。炉は断面が有段摺り鉢状を呈する方形竪穴炉であり、底部はよく焼けて赤色を呈している。周溝内30cmに平石を蓋にした埋甕（図29の１）が正位で検出された。内には黒褐色土が充満しており遺物の検出はみられなかった。

遺物、１～19の加曽利Ｅ式土器が一括出土している。１は埋甕として使われたもので口縁部を欠く。石器は、打製石斧、磨製石斧、敲打器、凹石、石鏃の出土をみた。（福沢）

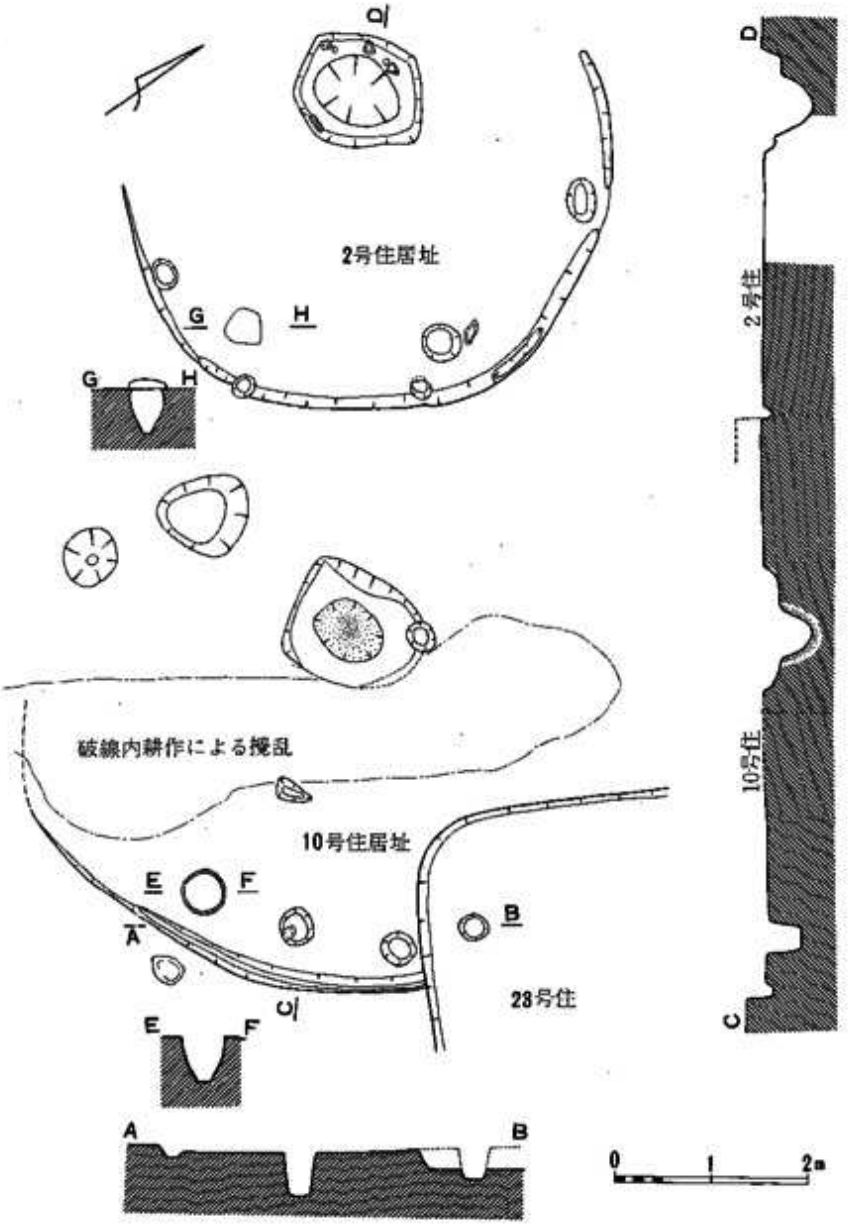
イ）３号住居址（図30の１・31の20～29、35の６～８、44の54　図版10の36）

遺構　丘陵最西南端に営なまれた本址は、築城ないし開田の際に削り取られて南は急崖となり、北には特殊円形竪穴が切り込んでいてプランは不明である。残存東壁はローム土を10cm掘り込んでおり、床面は平坦でない。主柱穴は東壁寄りの１個所が確認されたのみである。中央やや南寄りかと思える位置に、焼土を含有した径35cm深さ60cmのピットがあり、内より土器片の出土をみた。埋甕炉とみるべきであろう。

遺物、20～29の土器片で、平出３Ａを含む勝坂式土器に比定されるものである。石器は打製石斧、横刃形石器、凹石、有孔垂飾玉の出土をみた。（辰野）

ウ）４号・11号・17号住居址（図30の２）

ａ）４号住居址、　遺構　円形プランと思える東部の一端が確認されたのみである。西側は急崖にな



第28図　樋口内城館址遺跡２・10号住居址実測図（１：80）

っていて、築城ないし開田の際破壊されたものと思う。残存壁高は18cmで、床面は軟弱であり、東壁下に周溝が確認された。本址東南部周溝に接して、正位の状態で埋められた埋甕が検出された。

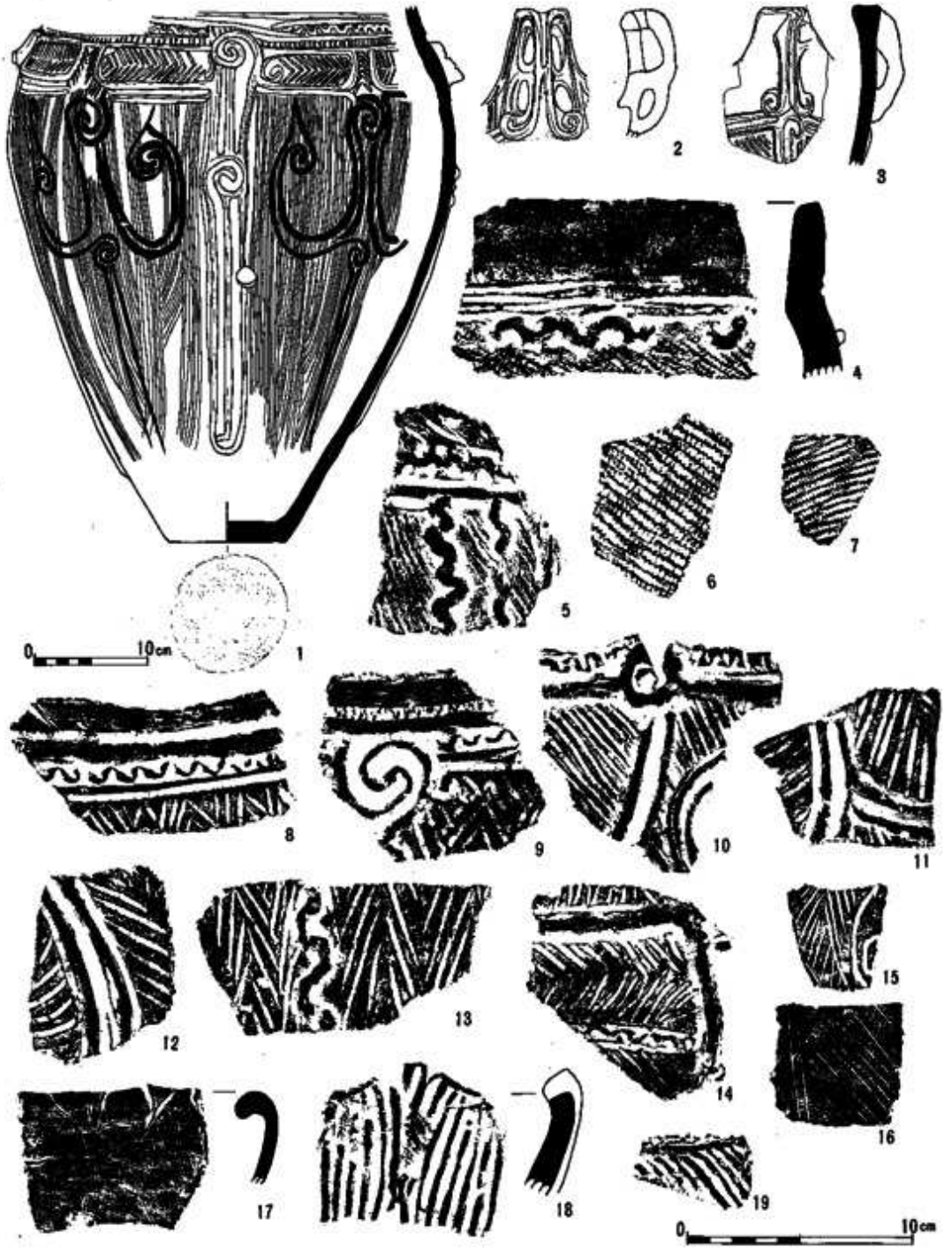
遺物（31図30～47、35図９）遺物量は少なく土器で器形の判るものは、30の埋甕のみである。口縁部を少し欠く完形品で、加曽利E式土器に比定されるものである。石器は９の打製石斧が覆土中から出土した。　（市沢）

b）11号住居址

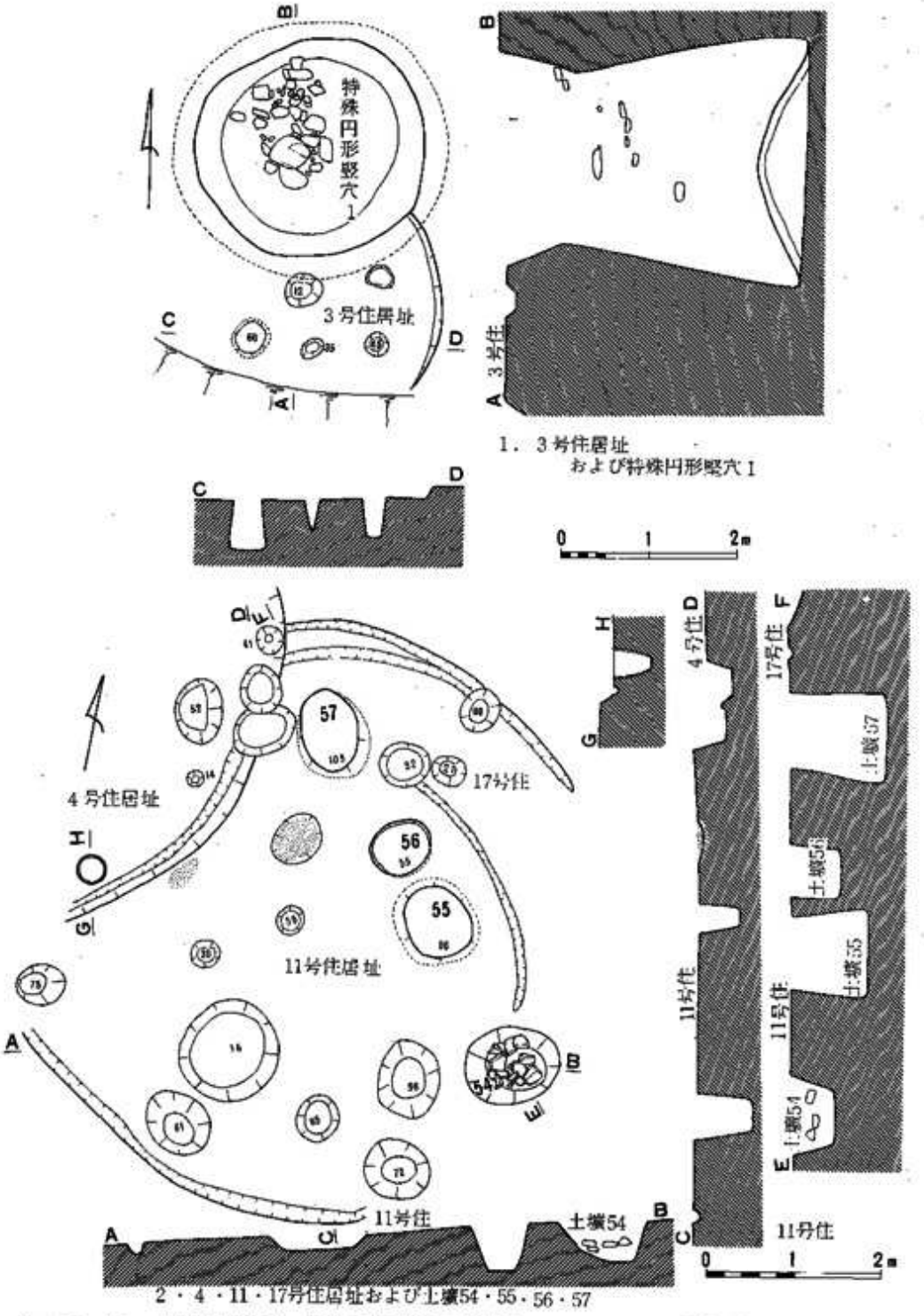
遺構、丘陵西縁に営なまれた本址は、４号17号が重複し合う中で更に耕作による破壊があるため、わずかに残る周溝でそのプランを知り得たにとどまった。推定4.5mの円形で、床面は軟弱であり、土壙54～57が掘り込まれて、更に複雑にしている。炉の焼土と思われる個所が存したがその形状は不明である。

遺物　32図48～63の土器片が出土したが時期差がみられる。石器は打石斧、敲打器、石鏃、凹石の出土をみた。　（市沢）

c）17号住居址

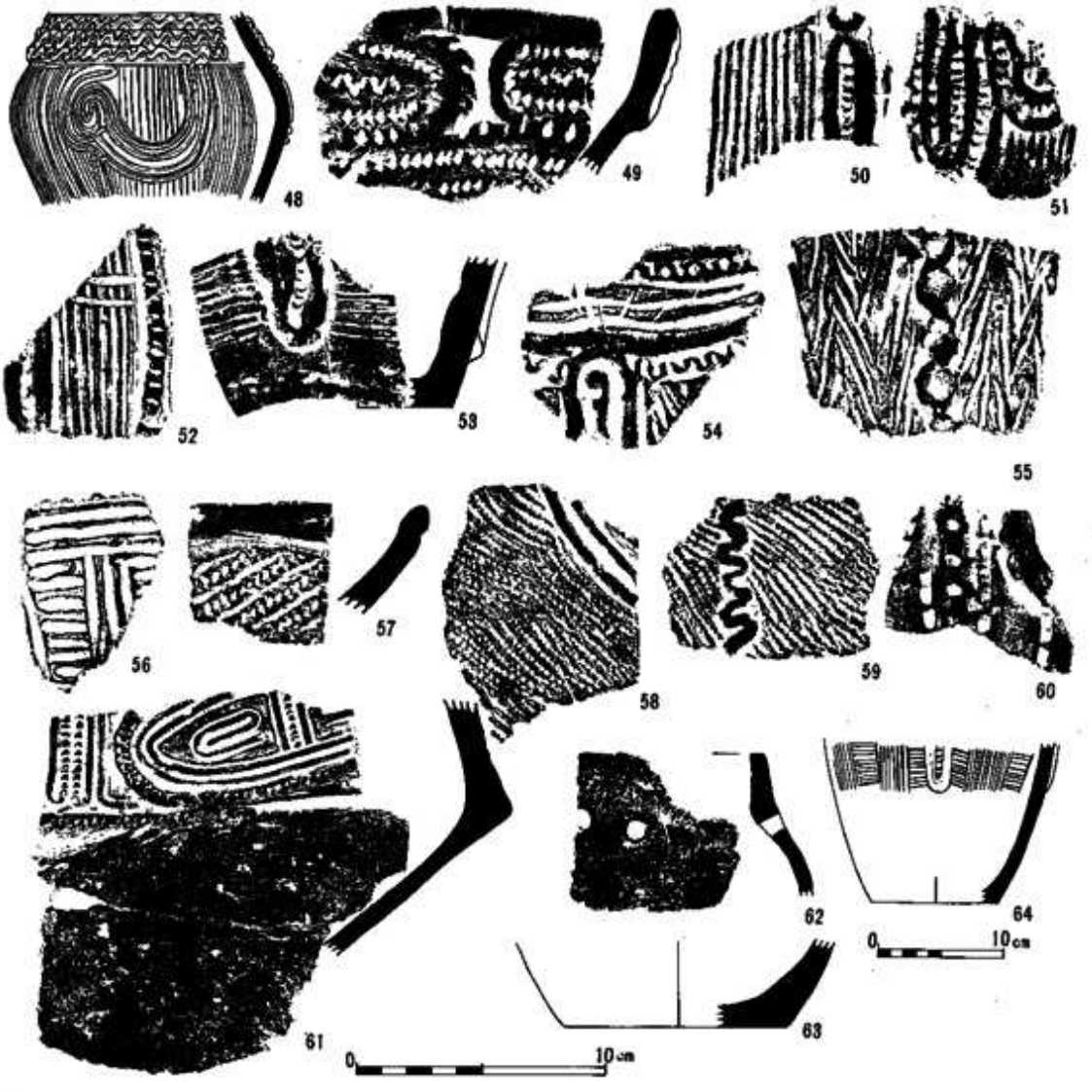


第29図　樋口内城館址遺跡２号住居址出土土器（１～３　１：６，４～19　１：３）



第30図　樋口内城館址遺跡3号住居址特殊円形竪穴1・4・11・17号住居址
土壙54～57実測図（1：80）

第31図　樋口内城館址遺跡３・４号住居址出土土器（30　１：６，他　１：３）
（20～29　３号住，30～47　４号住）



第32図　樋口内城館址遺跡11・17号住居址出土土器（48・64　1：6，他　1：3）
（48～63　11号住，64　17号住）

遺構　11号住居址の北に周溝が確認されただけの本址は、耕作による破損がはげしく、11号との切り合い関係もはっきりせず、さりとて11号の拡張とも決しかねる発掘時の所見であった。

遺物　32図64の底部片と覆土中から石鏃（44図の58、59）、60の土製品が出土したのみである。（市沢）

エ）10号住居址（図28・33・35の13～18、44の61～65，図版10の35・29の136・138）

遺構　丘陵の西部に営なまれた本址は、2号住居址に西部を接し、北東部は弥生期の23号住居址に切られ

第33図　樋口内城館址遺跡10号住居址出土土器(65～66　1：6，他　1：3)

ており、更に耕作による破損があって、炉址と東壁の一部を検出できたに過ぎない。炉址は、断面が有段摺り鉢状を呈する方形竪穴炉で、内部は赤色を呈している。東壁内25cmの床面に、口縁部と底部を欠く埋甕が正位の状態で検出されている。黒褐色土の充満した埋甕内からは遺物の検出はなかった。

遺物　33図の65～80の加曽利E式土器が一括出土している。65は埋甕として使われたものである。石器は、35図の打製石斧（13～16）、凹石（17、18）の他、石鏃（61、62）石匙状の剥片調整石器の出土をみた。

（福沢）

オ）9号住居址（図34・35の19～22、44の66、図版10の39、29の137）

遺構、丘陵南端6号住居址の南に、炉址と柱穴と思える凹みが検出され、住居址としたものであるが、南は急崖、北は6号住居址に切られて、プランは不明である。炉址は6号住居址の南壁際にあって、深鉢形土器の上半を使用した埋甕炉である。口縁部を上に埋められている。

遺物　土器と石器がある。土器は平出3Aを含む勝坂期に比定されるものが一括出土し、81は埋甕炉として使用された深鉢上半である。竹管工具による連続押引文、爪形文、平行沈線文が多い。110は焼成よく色調は黒味を帯びるもので外面に丹塗りがみられる。石器は打製石斧19～22と石鏃の出土がある。

（山岡）

カ）12号住居址（図36・37・43の23～25、44の67～71、図版11の41、30の140・141）

遺構　縄文期の住居址が丘陵縁辺に沿って円形に配列する中で、本址はややその立地が丘陵中程に入って位置し特異な在り方を示すものである。円形プランを呈する4.51×5.30mの規模をもち、中央やや東寄りに、方形石囲炉を有する。北側周溝からはゆるく傾斜して北壁に続く床面があり、拡張、改築また切り合いが問題となる。更に本址からは埋甕が2個並んで検出され、その間に時期差がみられるので2住居址と考えた方が妥当と思える。発掘時、22号が西側を切り、本址上に弥生期の1号住居址が営なまれることもあって、貼り床ないし切り合いの状態を明確に把握し得なかった。

床面はローム土を掘り込んで、周溝内は極めて堅緻である。主柱穴は3個所確認できた。7個の石を元位置に有する炉址はよく使用され、底面は赤色焼土が堆積している。

遺物、土器は116～136が本址出土で、116、117は埋甕として使用され、いずれも口縁部を欠くが、正位の状態で検出された。ともに石の蓋をもつ。石器は、打製石斧2、磨製石斧1、石鏃3、石錐1が出土した。また覆土中から土偶胴部片（71）の出土をみた。

（小松原）

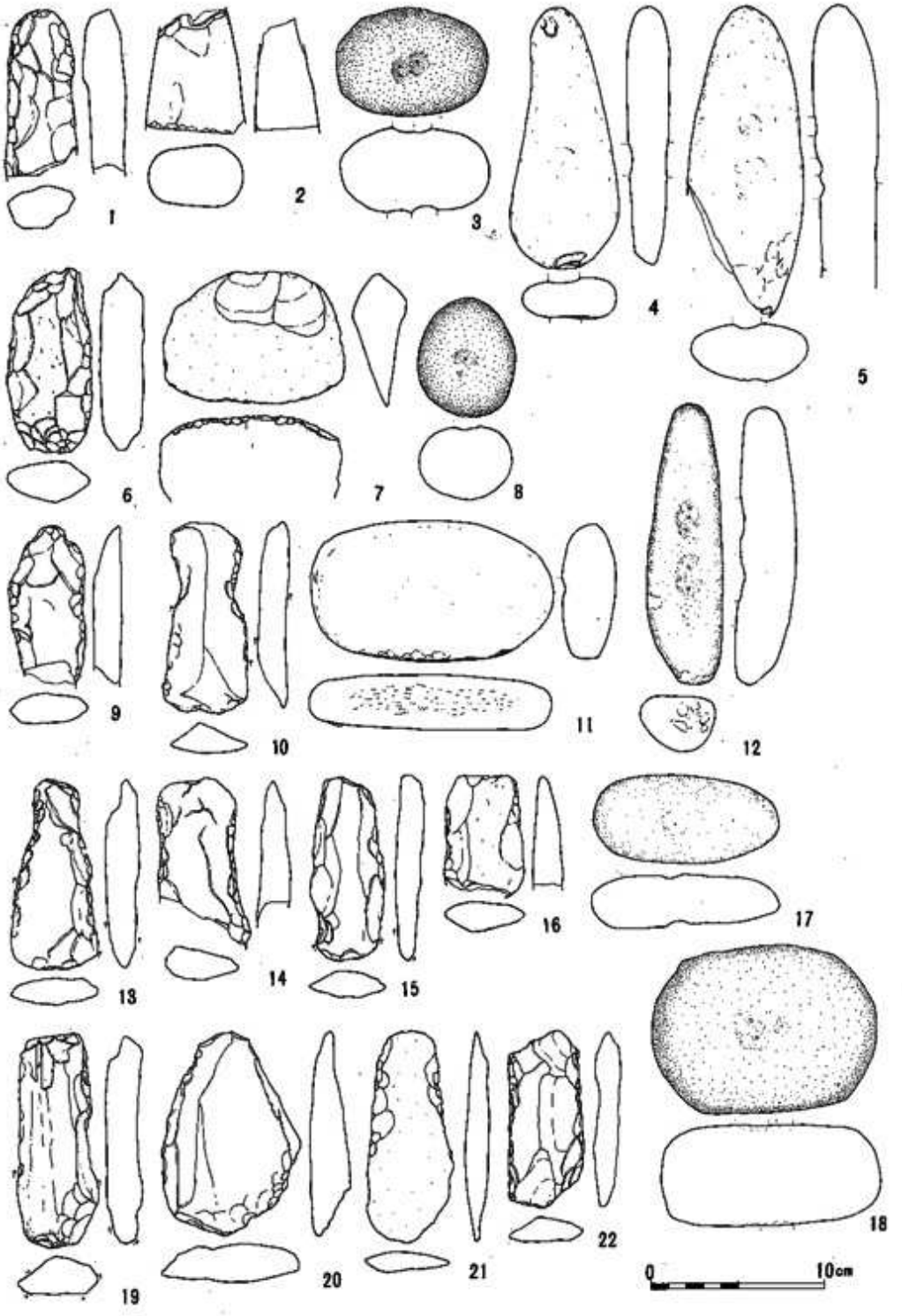
キ）19号・27号・28号住居址（図38～44）

a）19号住居址（図38・39の137～152、43の26～35、図版30の145）

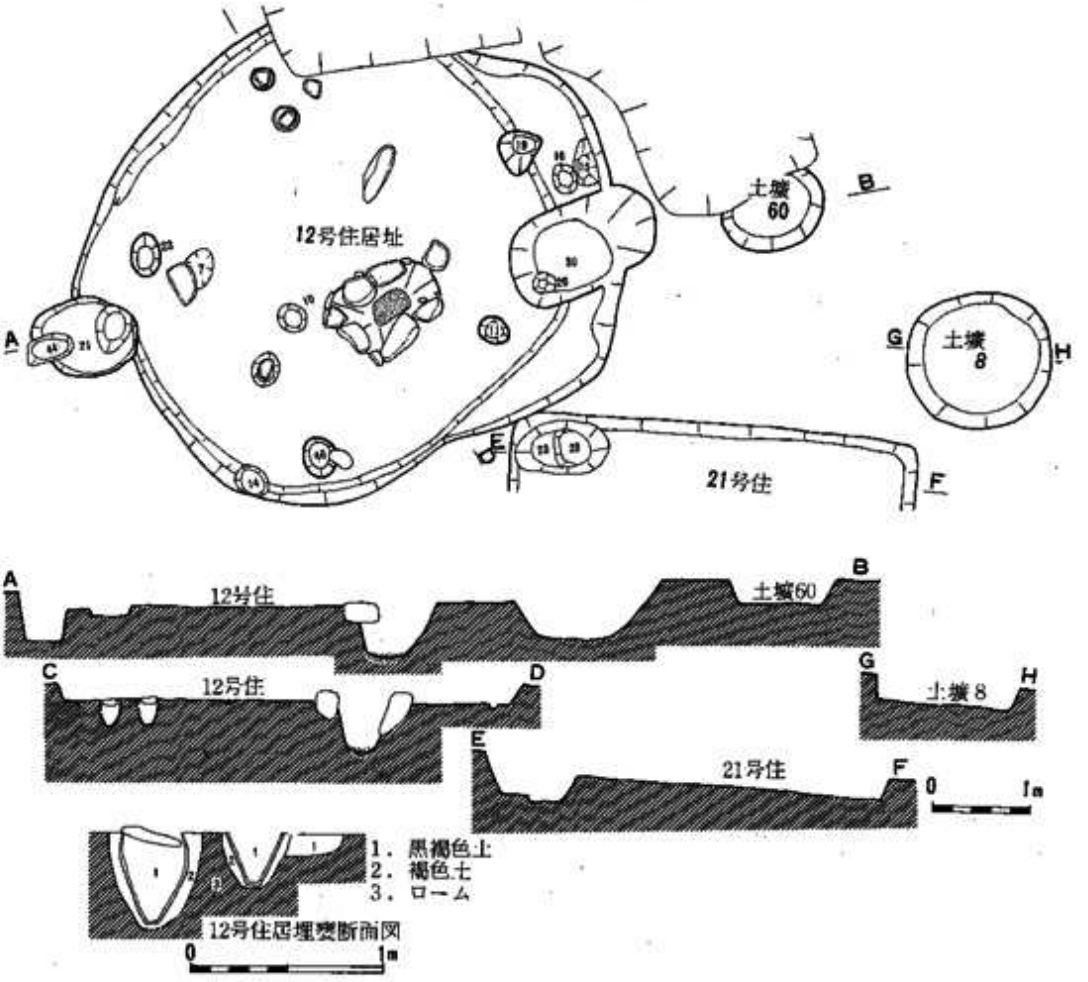
遺構　丘陵南端部に検出された本址は27、28号住の他に弥生期の18、26号住居址が重複しあう密集地に位置している。27号住居址の南壁を切って構築された本址は、南部を弥生期の18号住居址に切られるも径5.98mの円形プラの規模で、中央北寄りに竪穴炉を有する。炉址周辺に中世小竪穴17が掘り込まれたため炉縁石は1個を残すのみである。炉址断面は摺り鉢状を呈し底部は赤色焼土の堆積がみられた。壁は急傾斜で周溝に続き、10cm巾の周溝がまわっている。主柱穴5が確認され、床面は固くしまっている。

遺物　土器は、137～152が出土した。137は口縁部を欠く深鉢で、胴部には粘土紐を波状に貼布してア

第34図　樋口内城館址遺跡９号住居址出土土器(81　１：６，他　１：３)



第35図　樋口内城館址遺跡２・３・4・11・10・９号住居址出土石器（１：4）
（１～５　２号住居址覆土，６～８３号住居址床面，９　４号住居址覆土，10～12　11号住居址覆土，
13・14　10号住居址炉，15～18　同覆土，19～22　９号住居址覆土）



第36図　樋口内城館址遺跡12・21号住居址土壙８・60実測図（１：80）

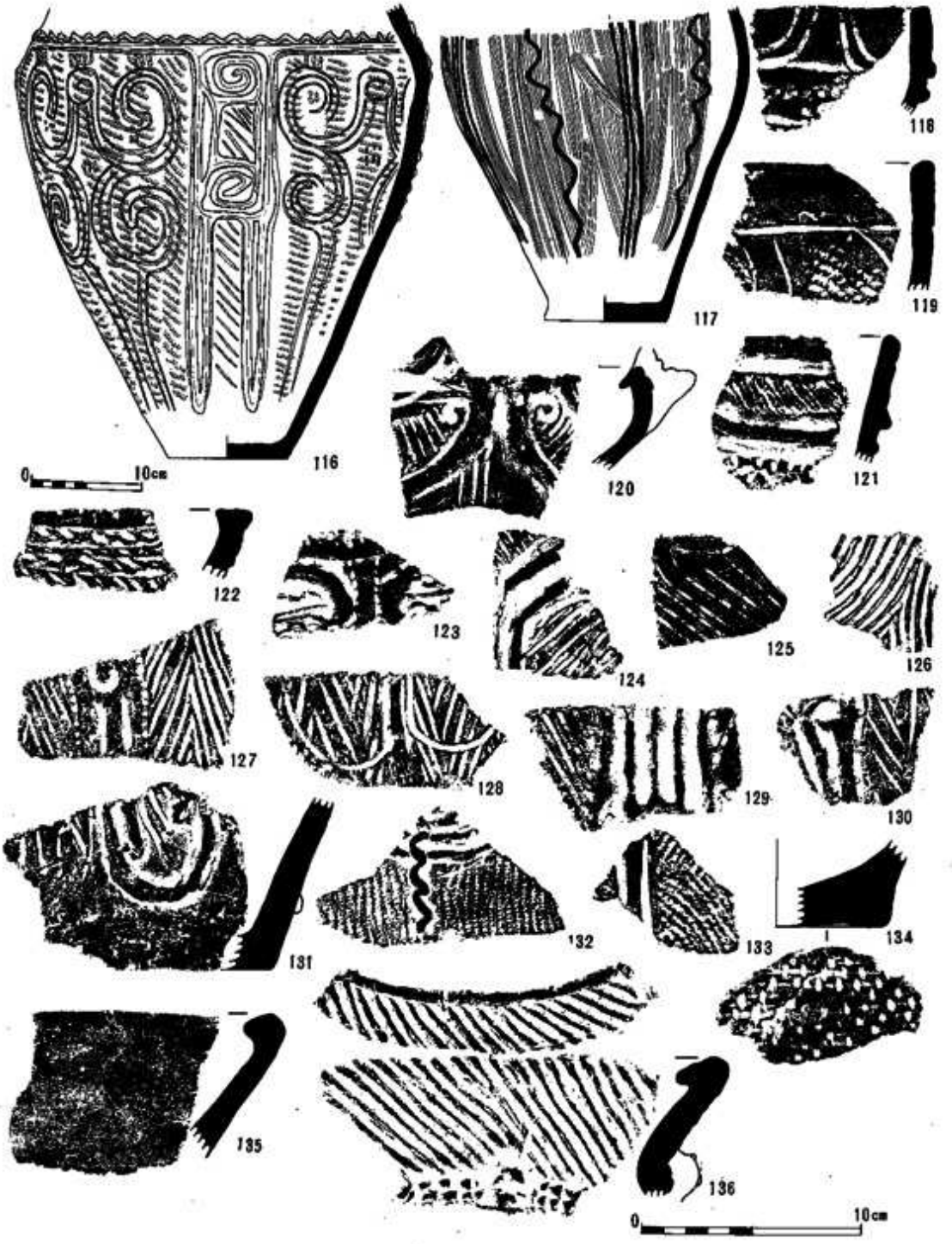
クセントをつけ、その下に半月形の隆帯で区画し平行沈線を施した櫛形文の一種と見える施文を有するものである。石器は打製石斧４、磨製石斧３、凹石１、敲打器１、磨石１、横刃形石器１、の出土をみた。

（根津）

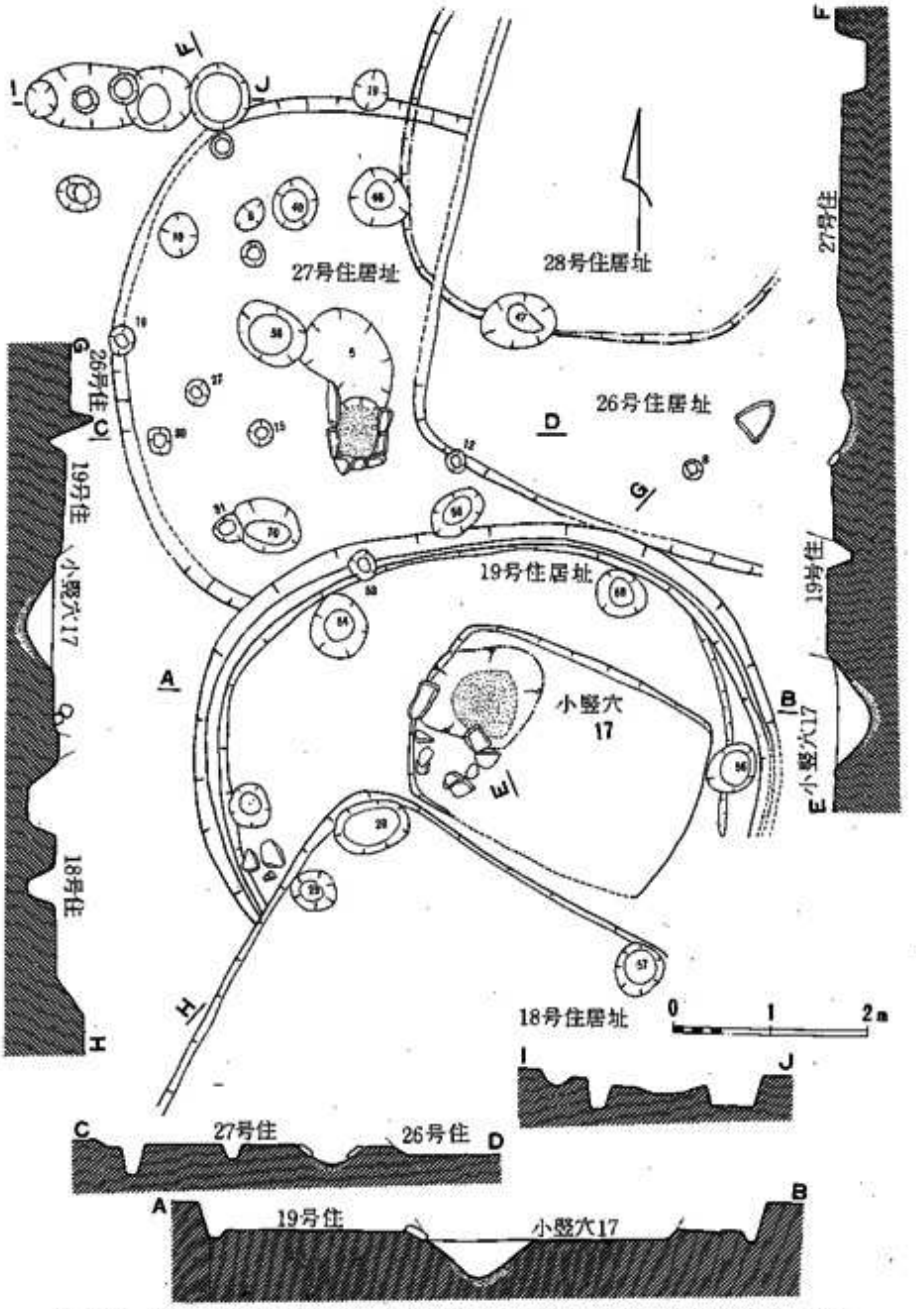
ｂ）27号住居址（図38・39の153～155、40・43の36～40、44の72～74、図版30の142～144）

遺構　本址は19号住居址に南壁を切られ、東半分は26号住居址および28号住居址が重複し合うため、その西半を確認したのみである。推定径5.5m を数える円形プランで主柱穴を５個所にもつ。床面は一部に固くしまった面をもつが、ピット多く凹凸が多い。炉は中央やや南寄りと思える個所に方形に石囲いされて存し、擂鉢状に凹む炉址内には焼土の他、少量の灰と木炭片が検出された。

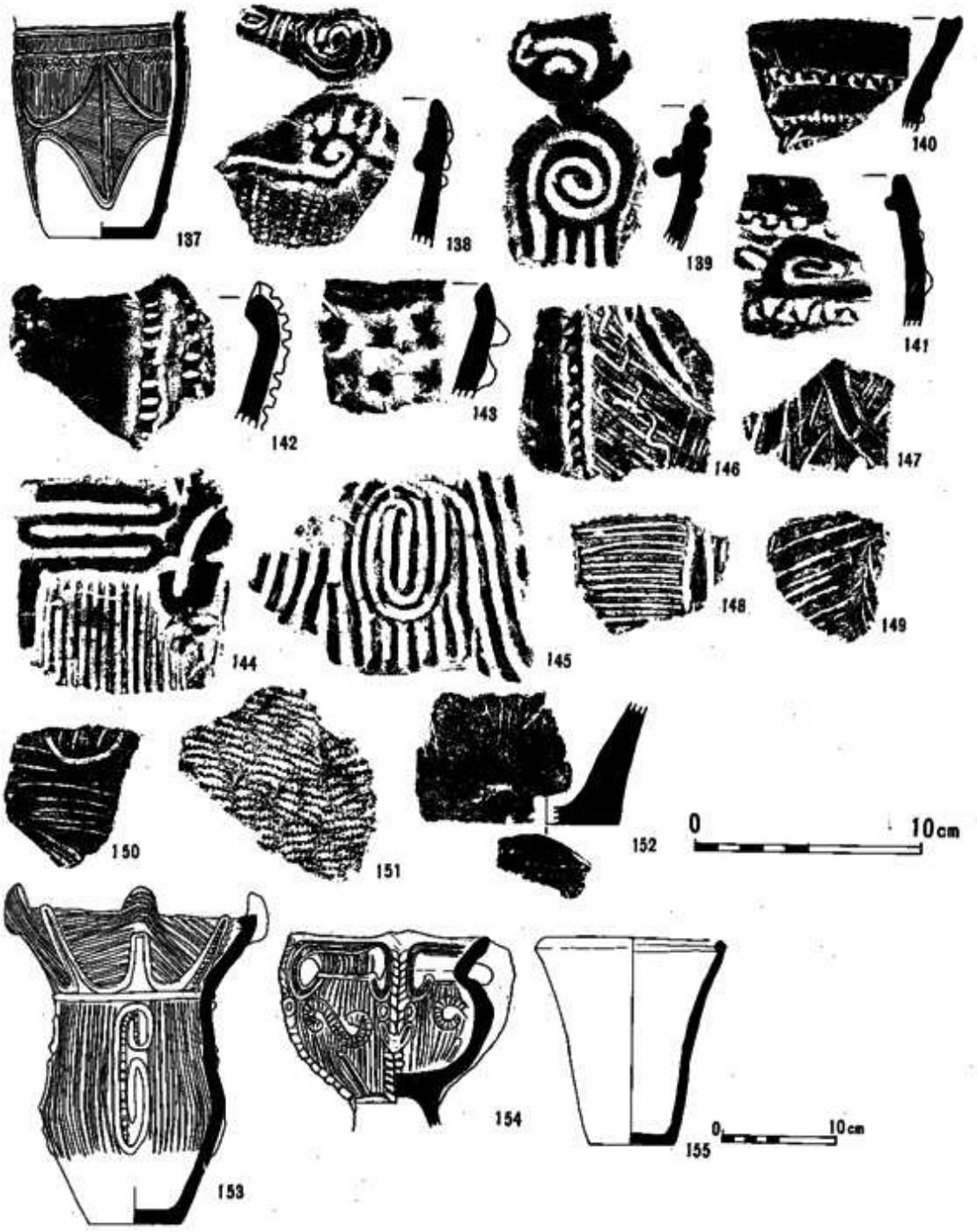
遺物　153は口縁に４個所の瘤状突起を有する深鉢、154は、４個所に把手を有する胴部に特長的な逆Ｓ



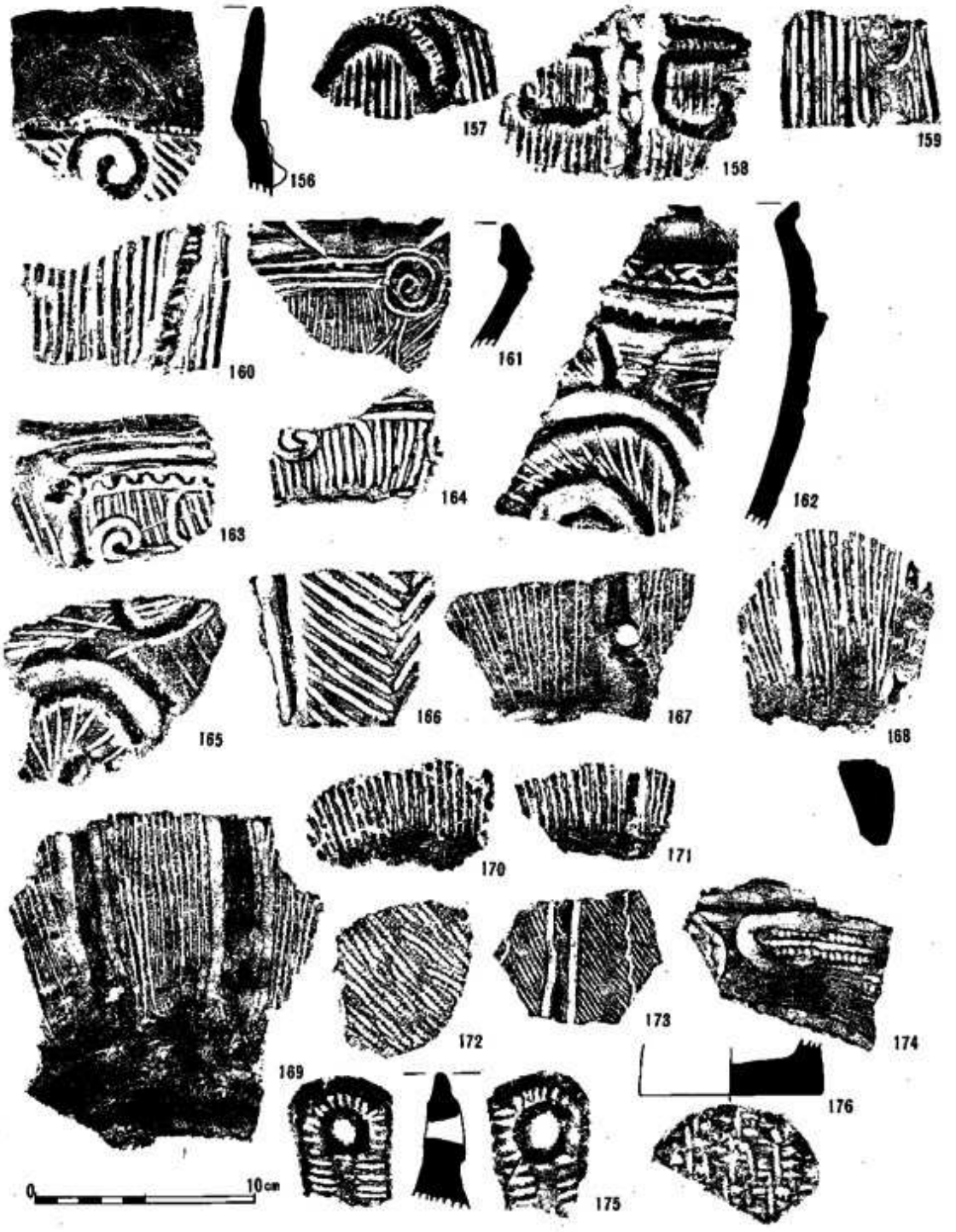
第37図　樋口内城館址遺跡12号住居址出土土器（ 116～ 117　1：6，他　1：3）



第38図　楢口内城館址遺跡18・19・27号住居址小竪穴17実測図（1：80）

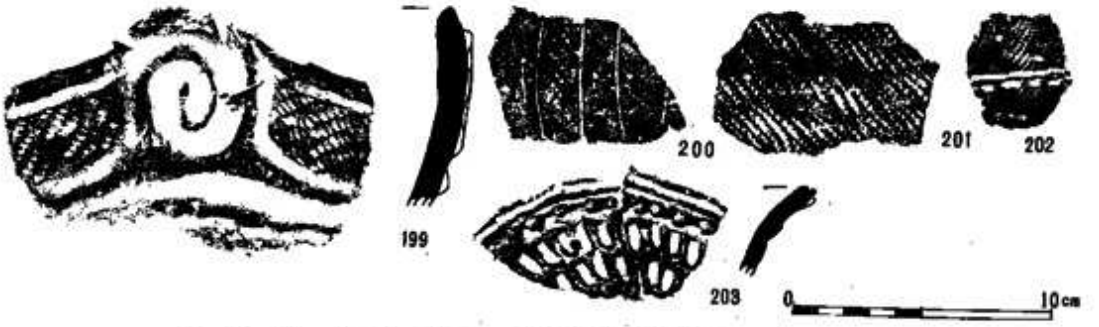


第39図　樋口内城館址遺跡19・27号住居址出土土器（137～153～155　1：6
他　1：3）（137～152　19住，153～155　27住）



第40図　樋口内城館址遺跡27号住居址出土土器(１：３)

第41図　樋口内城館址遺跡28号住居址出土土器（177　1：6，他　1：3）



第42図　樋口内城館址遺跡28号住居址出土土器（１：３）

字状隆帯文をもつ高台付浅鉢、155は無文だがよく研磨されている深鉢が完形土器として出土した。土器片と一括し加曽利Ｅ期に比定できるものである。石器は打製石斧（36、37）磨製石斧１、磨石、凹石各１の出土の他石鏃（72、73）の出土をみた。　（根津）

ｃ）28号住居址（図161・41・42・43の41～44、44の75～91　図版31の146・147）

遺構、本址は、27号住居址の北東部を切って構築され、北は20号住居址に切られ、本址上には更に26号住居址が営なまれるとあって、発掘時、時間と労力を費した地点である。26号住居址は本址上に土盛り貼床をしている。本址は推定プラン円形の4.28m の径をもつ竪穴住居址で、主柱穴３個所が確認できた。床面は平坦で堅緻である。炉は中央やや東寄りに構築された方形竪穴炉で、断面、擂り鉢状を呈し、内部は赤色焼土と少量の炭化物の残存をみた。西壁に沿って周溝が一部検出され、その周溝内30cmに正位の状態で埋甕が存した。内部は黒褐色土が充満していたが、遺物は認められなかった。

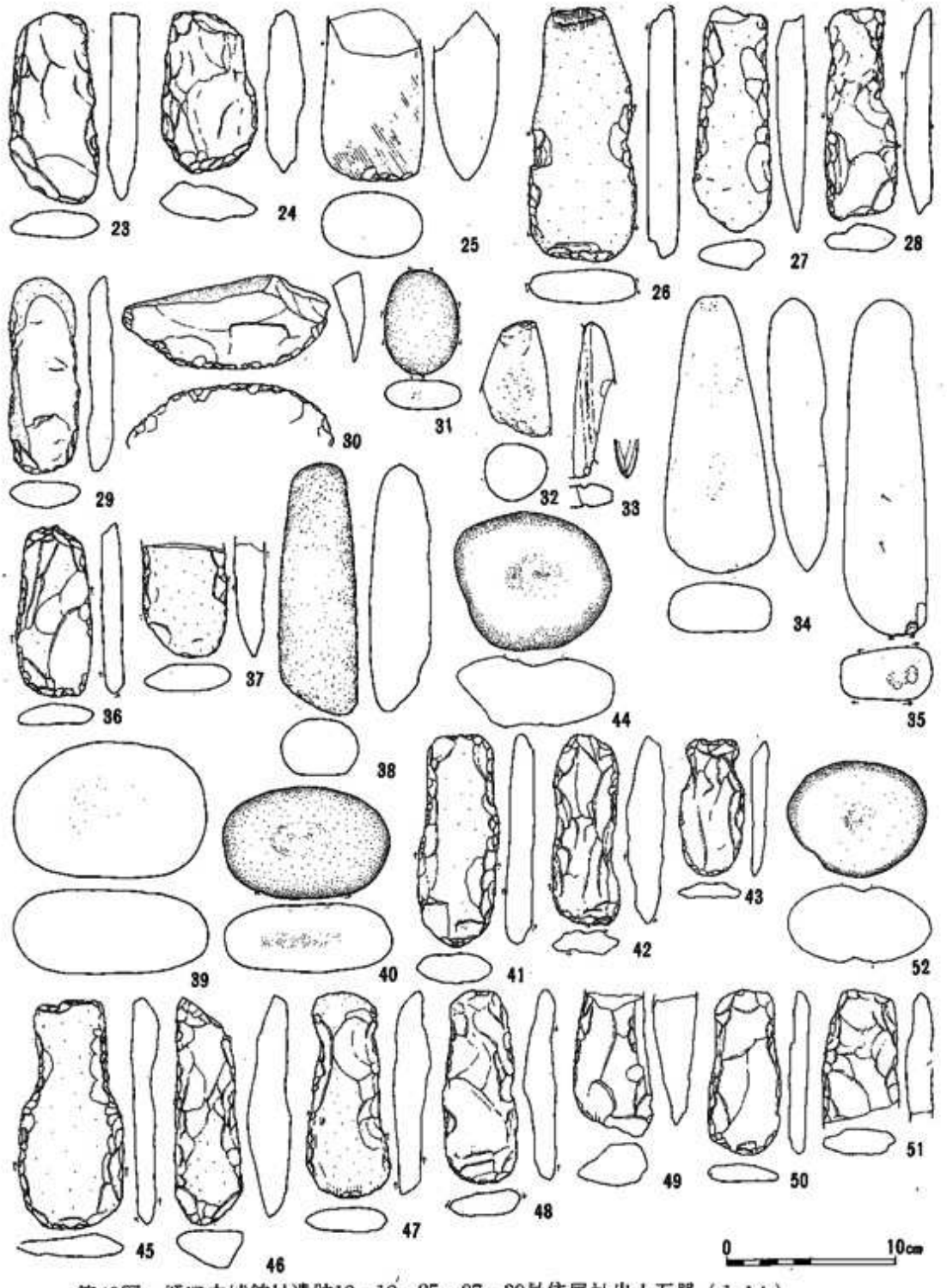
遺物　土器は177～203の加曽利Ｅ式土器で、177は埋甕として使われたもので口縁部を欠くが完形である。石器は打製石斧３、凹石１、石鏃12、円形を呈する両面剥離をもつ石器２、横刃形石器２、つり針状を呈する異形石器１の出土がある。　（根津）

ク）25号住居址（図45～48、43の45～52、44の92～108、図版12の46）

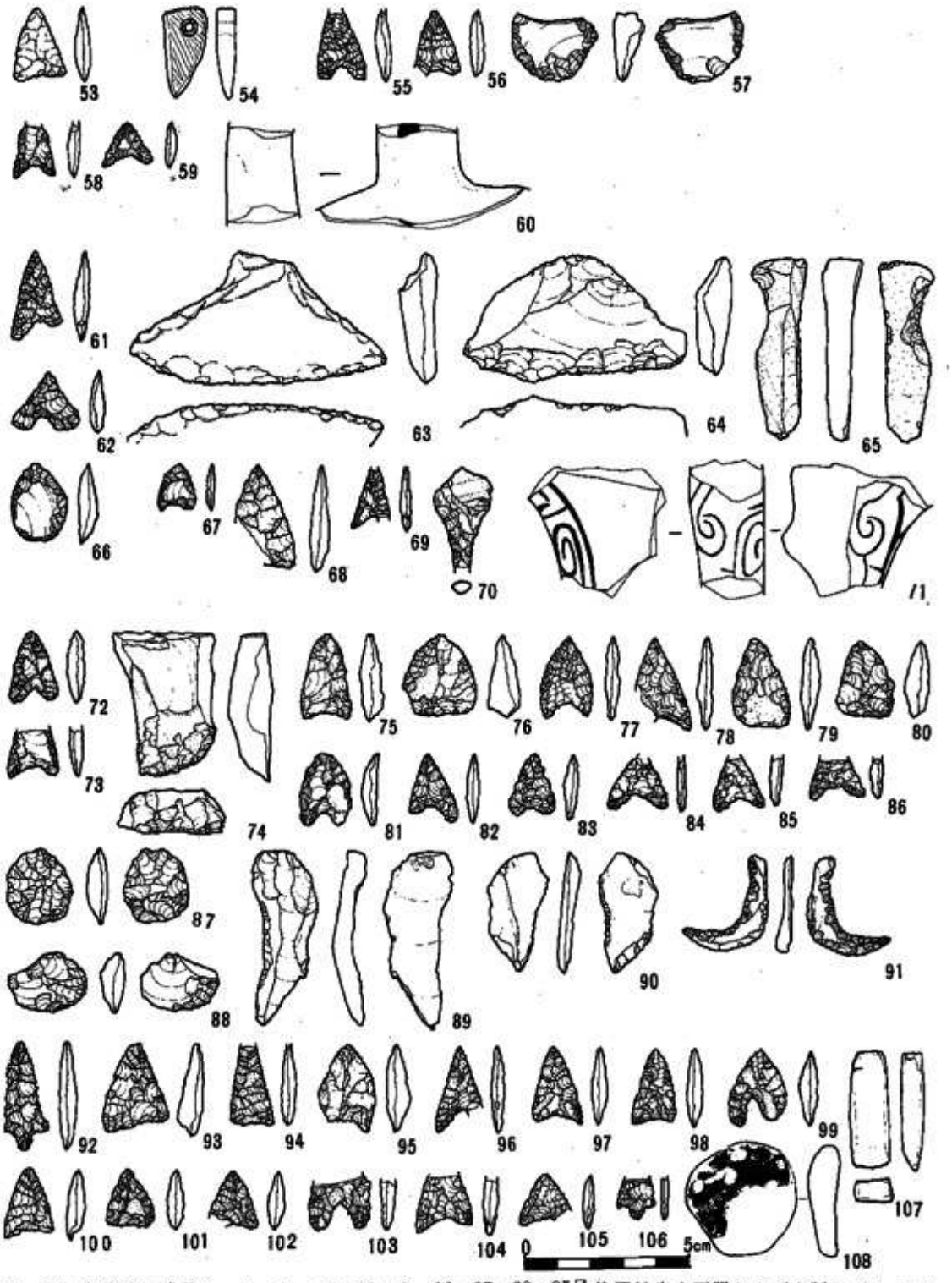
遺構　丘陵南端に営なまれた本址は、北を13号住居址、小竪穴７、８、９、10および西を７号住居址に切られるため全貌はつかめない。残存壁高は10～17cmであり、床面も固くしまっている。周溝がめぐっており、東南部分は切れている。柱穴は４本確認できたが、炉址は小竪穴に破壊され不明である。また中央辺から南に長い凹みが検出され、この覆土中に焼土が混在してあり、凹みの底面は堅緻な小竪穴のそれと類似していた。中の焼土も新しい（中世）ものと考えられる。

遺物　土器（46～48図）は覆土中より多量に出土したが、器形の判明するものは 225のみで他は深鉢形土器片である。綾杉文を主体とするものと縄文を地文とするものに大別でき、加曽利Ｅ期に比定されるものである。石器は床面出土のものはなく、すべて覆土中からで、打製石斧７、磨製石斧１、石鏃15、凹石１がある。107の磨製石斧は本址に伴なうものか疑問が残る。また、土製円板（108）の出土もあった。

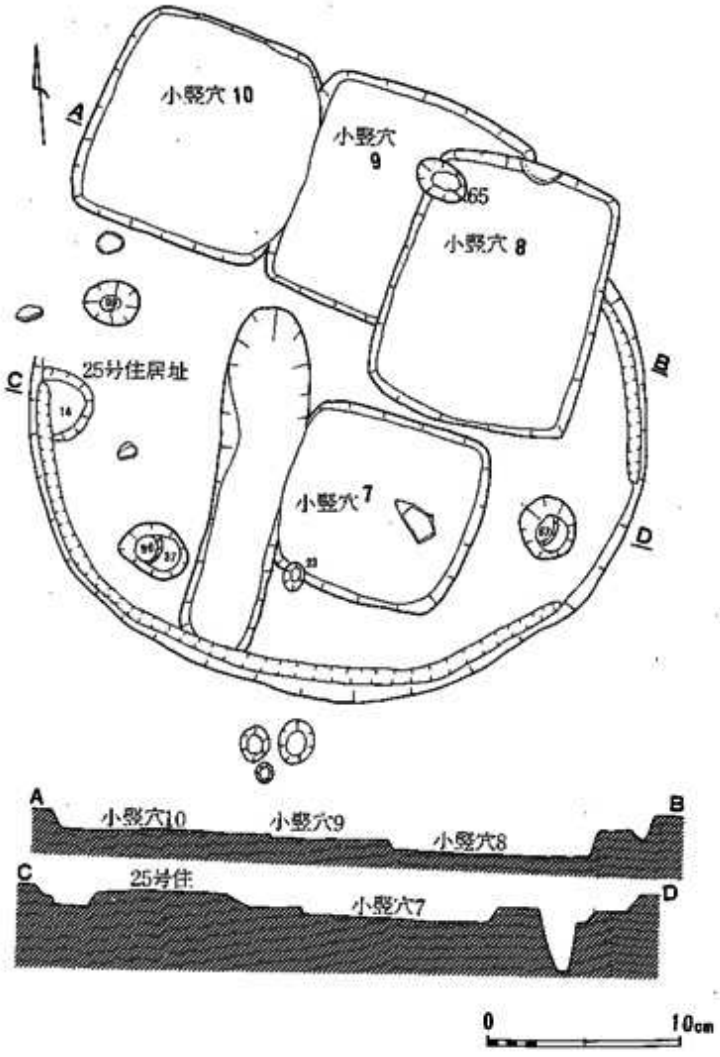
（山岡）



第43図　樋口内城館址遺跡12・19・25・27・29号住居址出土石器（1：4）
（23～25　12号住居址，26　19号住居址炉，27～35　同覆土，36～40　27号住居址覆土
，41～44　28号住居址覆土，45～52 25号住居址覆土



第44図　樋口内城館址遺跡2・3・11・17・10・9・12・27・28・25号住居址出土石器および土製品（1：2）
53　2号住居址床，54　3号住居址覆土，55～57　11号住居址覆土，58～60　17号住居址　覆土，61～65　10号住居址覆土，
66　9号住居址覆土，67　12号住居址床68～71　同覆土72～74　27号住居址覆土，75～77　28号住居址床，78～91　同覆土
92～108　25号住居址覆土



第45図　樋口内城館址遺跡25号住居址小竪穴７・８・９・10実測図（１：80）

ケ）30号住居址（図122・49・54の109～112、図版31の148）

遺構　本址は29号住居址床面下にあり、西側は23号住居址と小竪穴11によって切りとられているためその東半分が確認された。円形プランを呈し、径4.10mの規模と推測できる。残存壁高は南17、東24cmで、ほぼ垂直に掘られており、壁に沿って深さ５～10cmのＵ字状の周溝がめぐらされている。床面は平坦で堅緻であり、主柱穴は４個所と推定されるが、南、東、北にほぼ等間隔に３個所残されている。東周溝内に接して盞石がおかれ、その下に底部穿孔の埋甕が正位の状態で検出された。

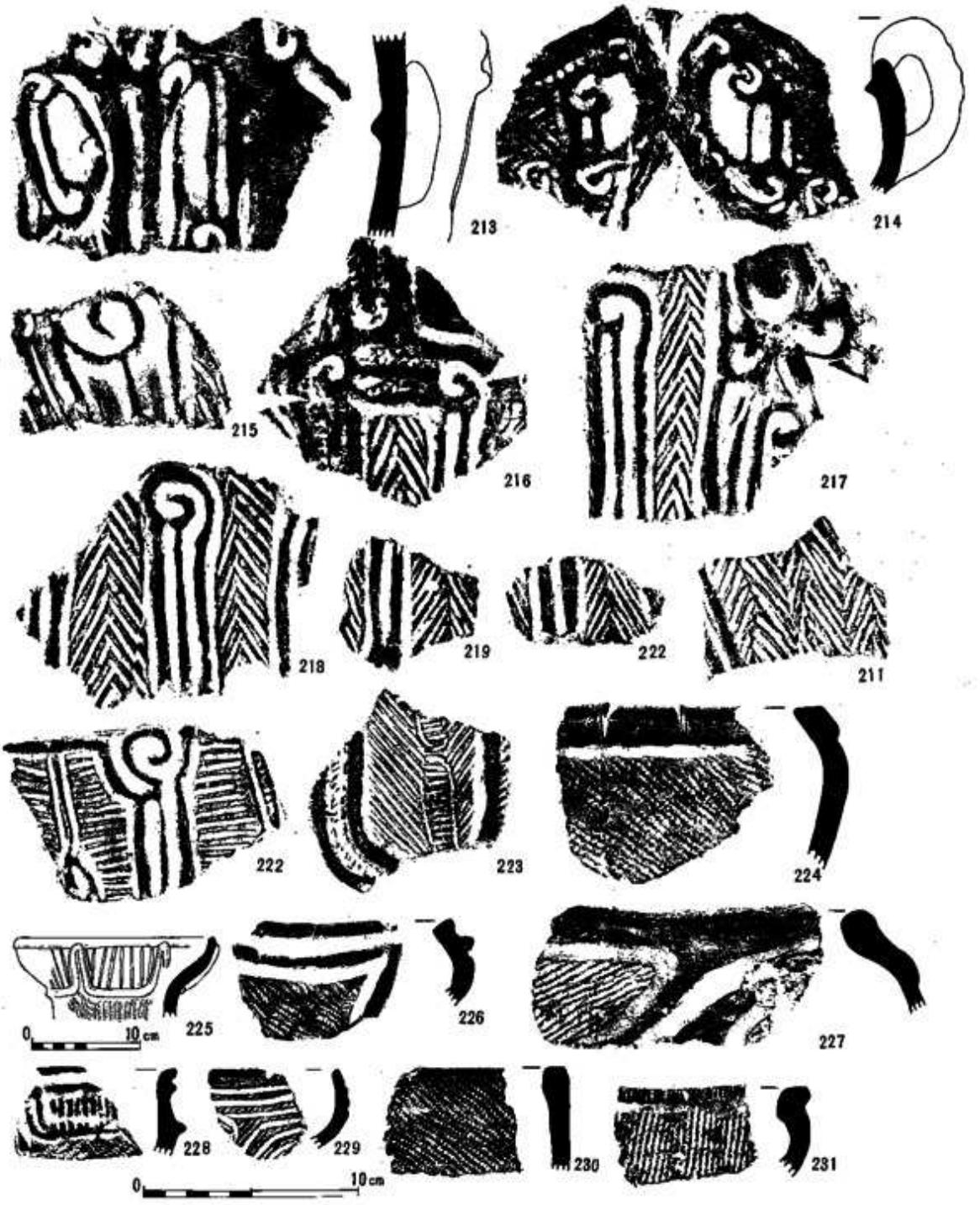
遺物、土器で器形の判るのは埋甕として使われた247だけである。縄文を地文とするもので底部は円形に穿孔されている。他も、縄文を地文とするもの、綾杉文を主体とするものが多く、加曽利Ｅ期に比定される。石器は、打製石斧３凹石１があり、いずれも覆土中から出土した。　（深沢）

コ）38号住居址（図159・50・54、の113、55の140）

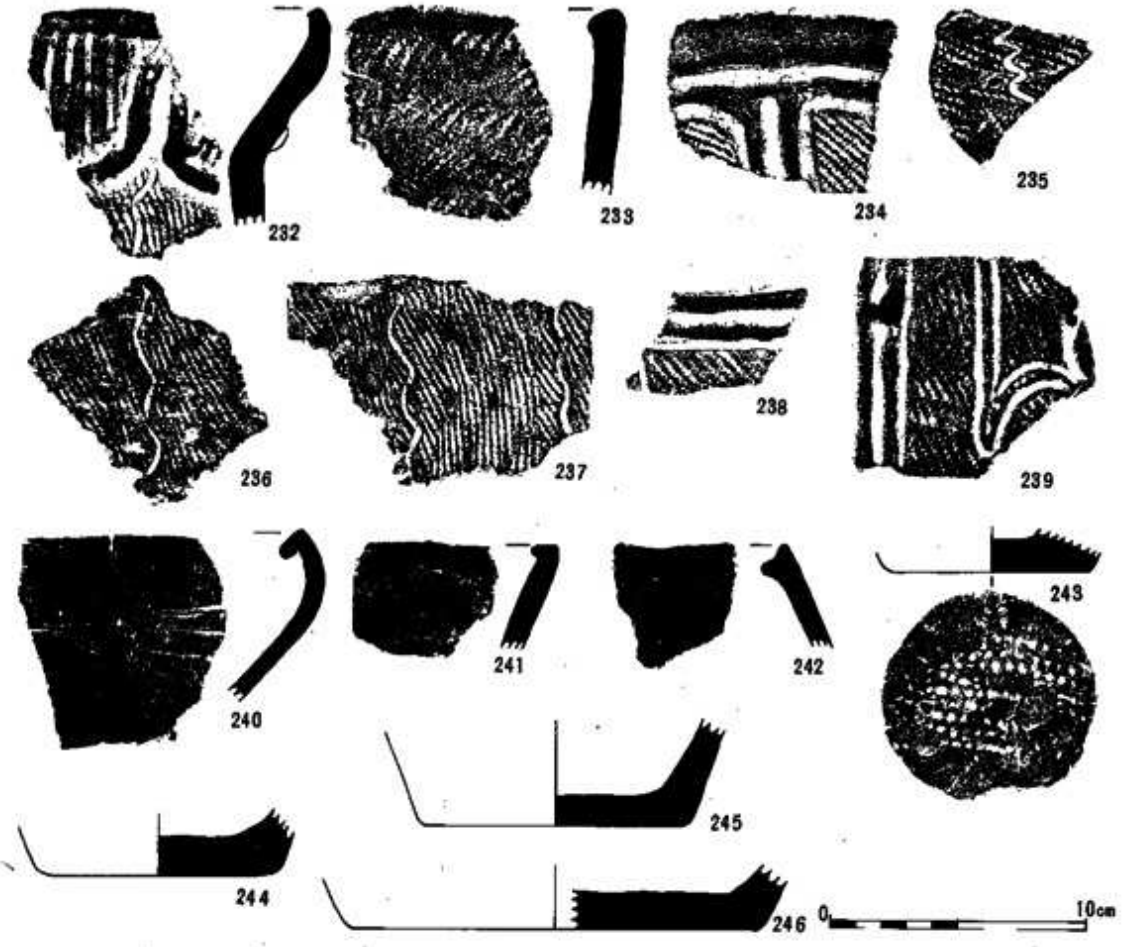
遺構、本址は24号住居址の床を検出中に確認したもので、大部分は24号住居址に破壊され、更に西北を23号住居址に切り取られるため、不明確な把握しかできなかった。推定で径4.68mの円形プランをとり、床面は東に一部分残存するがピット多く凹凸で軟弱である。24号住居址とのレベル差はほとんどなく、主柱穴もピットもどちらに付属するか判然としない。

遺物、土器は275～290の縄文と綾杉文を主にする加曽利Ｅ式土器片で、器形の判明するものはない。石器は、打製石斧１、石匙片１が覆土中から出土したのみである。　（福沢）

第46図　樋口内城館址遺跡25号住居址出土土器（その１）（１：３）



第47図　樋口内城館址遺跡25号住居址出土土器その２（ 225　１：６，他　１：３）



第48図　樋口内城館址遺跡25号住居址出土土器その３（１：３）

サ）47号住居址（図51・52・54の114～116、55の141、図版14の55）

遺構　丘陵西端部に営なまれた本址は、41号住居址（中世）の下層から検出された、円形プランの推定径4.30mの規模の住居址である。北西部を39号住居址に切られるが、残存部には周溝がめぐっている。床面は東壁寄りが堅緻であるが、他はやや軟弱である。主柱穴は５個所確認され、炉址は断面擂り鉢状を呈する方形の竪穴炉であり、中央やや西寄りに構築されている。内は焼土が10cmの層となって堆積し、土器片および石の混入もみられた。

遺物、覆土中から綾杉文を主とする加曽利Ｅ式土器片の出土をみた(291～315)。　床面よりは打製石斧３が出土し、覆土中から石鏃の出土もあった。　（辰野）

シ）48号住居址（図51・53）

遺構　丘陵西端部に営なまれた本址は、南を39号住居址に切られ、西側は築城の折にけずられて不明で

第49図　樋口内城館址遺跡30号住居址出土土器（247～248　1：6，他　1：3）

あるが、残存部からほぼプランは推定でき得る。円形プランで、径4.20mの規模を有し、中央やや西寄りに断面擂り鉢状を呈する方形竪穴炉をもつ住居址で、主柱穴は、4個所確認できた。床面には、土壙26が切り込まれており、概して軟弱である。

遺物、土器は316～329が出土した。316は炉址南に押しつぶされていたもので底部を欠く。317は綾杉文を基調とするもの、319は縄文を地文とするもので、加曽利E期に比定できるものである。石器としては、敲打器が覆土中より出土した。（辰野）

ス）45号住居址（図167・56・54の119～125、55の142）

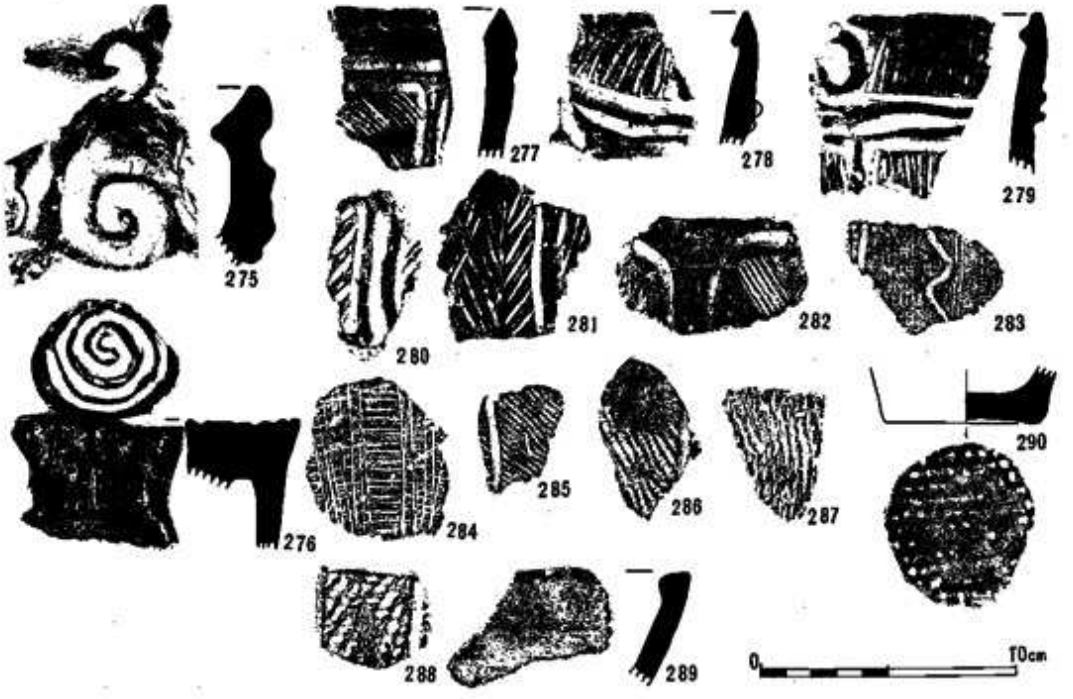
遺構　本址は東部を34号住居址に、西部を44号住居址と33号住居址に切られ、北壁と南壁の一部を確認したのみでプラン等不明である。南北径3.50mを計る。

遺物　綾杉文、縄文を基調とする加曽利E式土器片の出土と、打製石斧（119～122）、磨製石斧（123、124）、凹石（125）剝片調整の石匙状石器（142）の出土があった。凹石以外は覆土中からである。

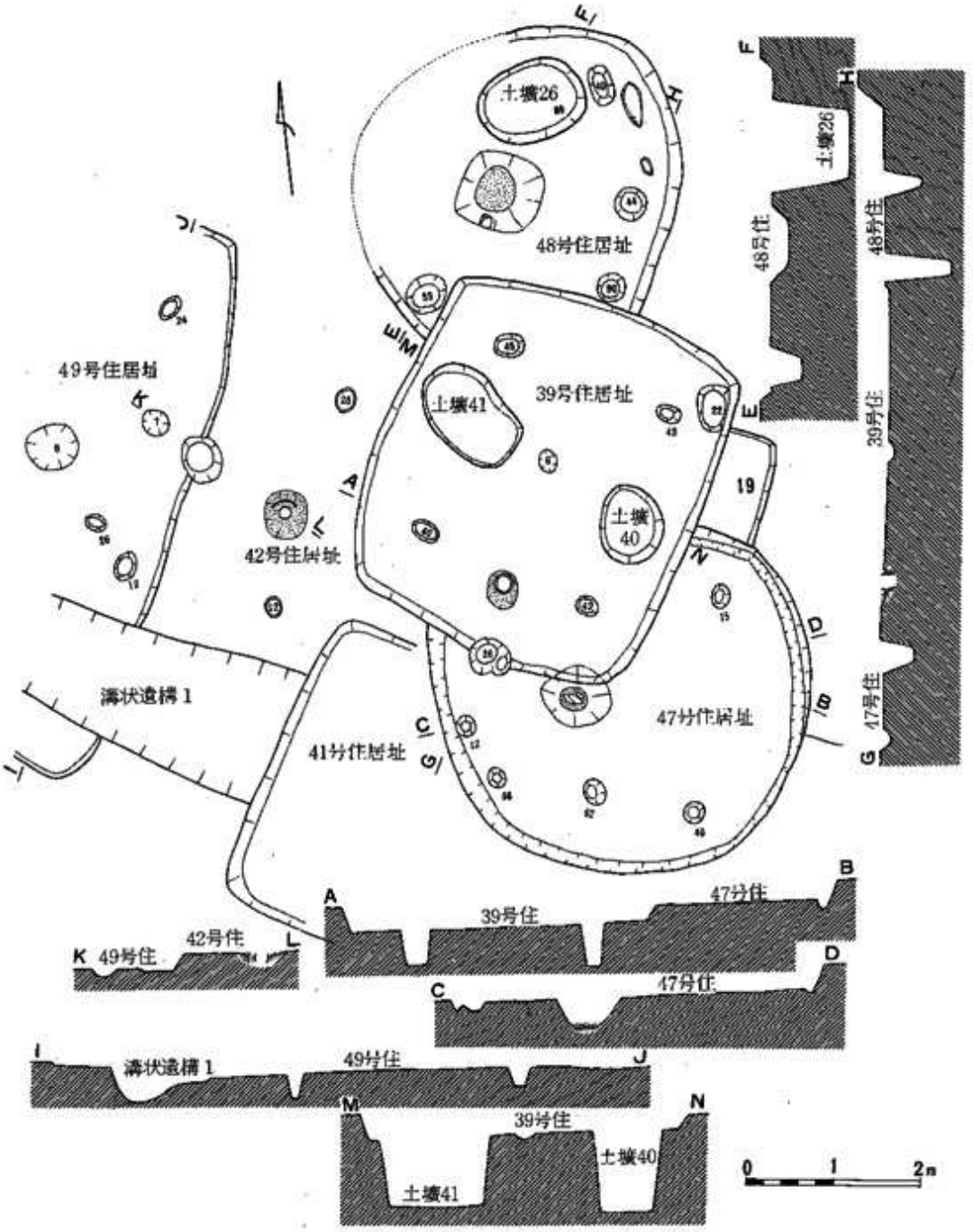
（小松原）

セ）62号住居址（図183、54の126・58、58の346～354、図版16の71）

遺構　台地北端部に位置し、弥生期63号住居址に北部を切られ、西部を土壙13、20に切られるとあって全貌は把握できなかったが、ほぼプランは推定できる。径3.87mというやや小規模の隅丸に近い円形プランで、中央やや北寄りに円形竪穴炉をもつ、炉の断面は擂り鉢状を呈し、底部に焼土が7cmの厚さで堆積していた。床面は中央部がやや低くなるが概して固く良好といえる。

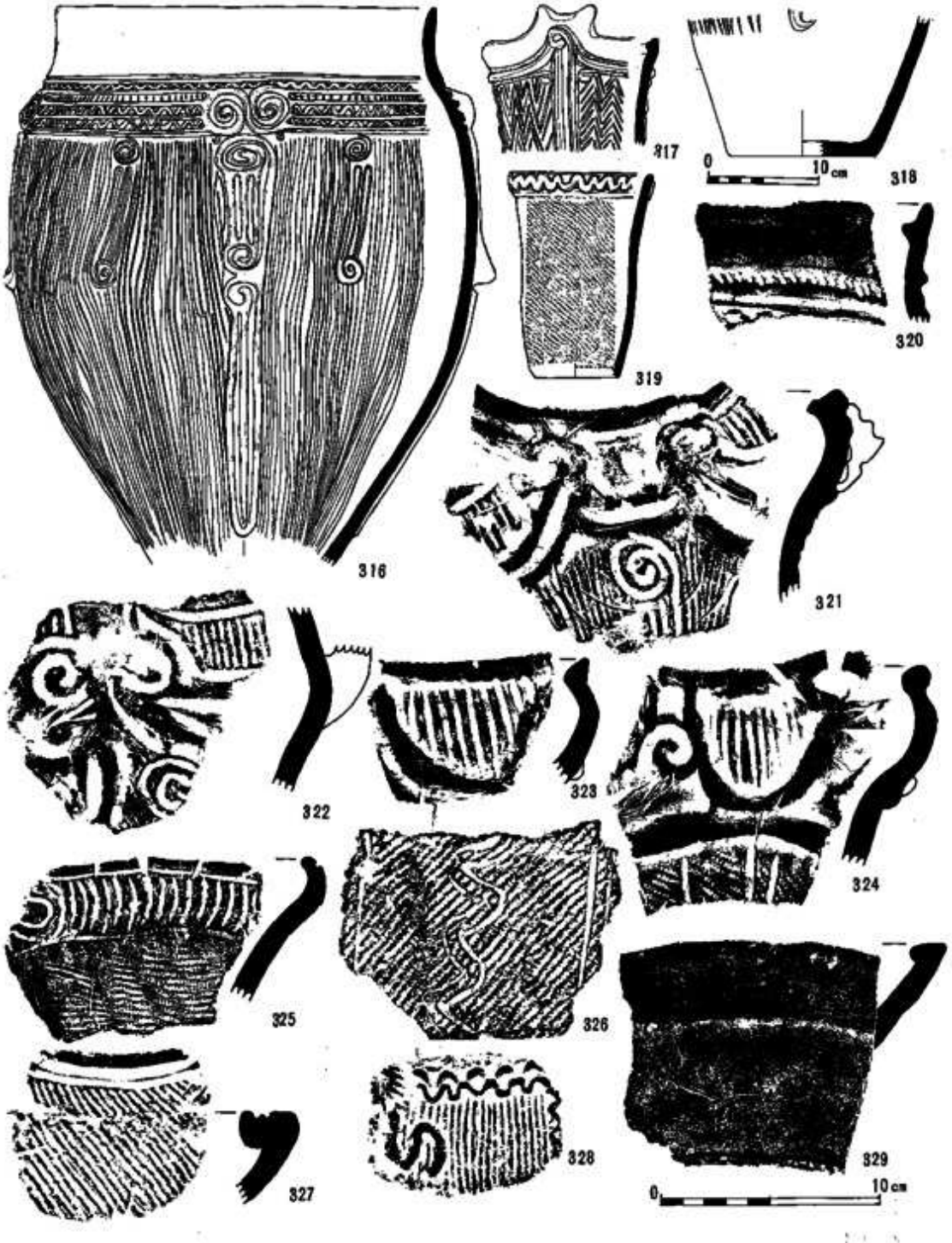


第50図　樋口内城館址遺跡38号住居址出土土器（1：3）

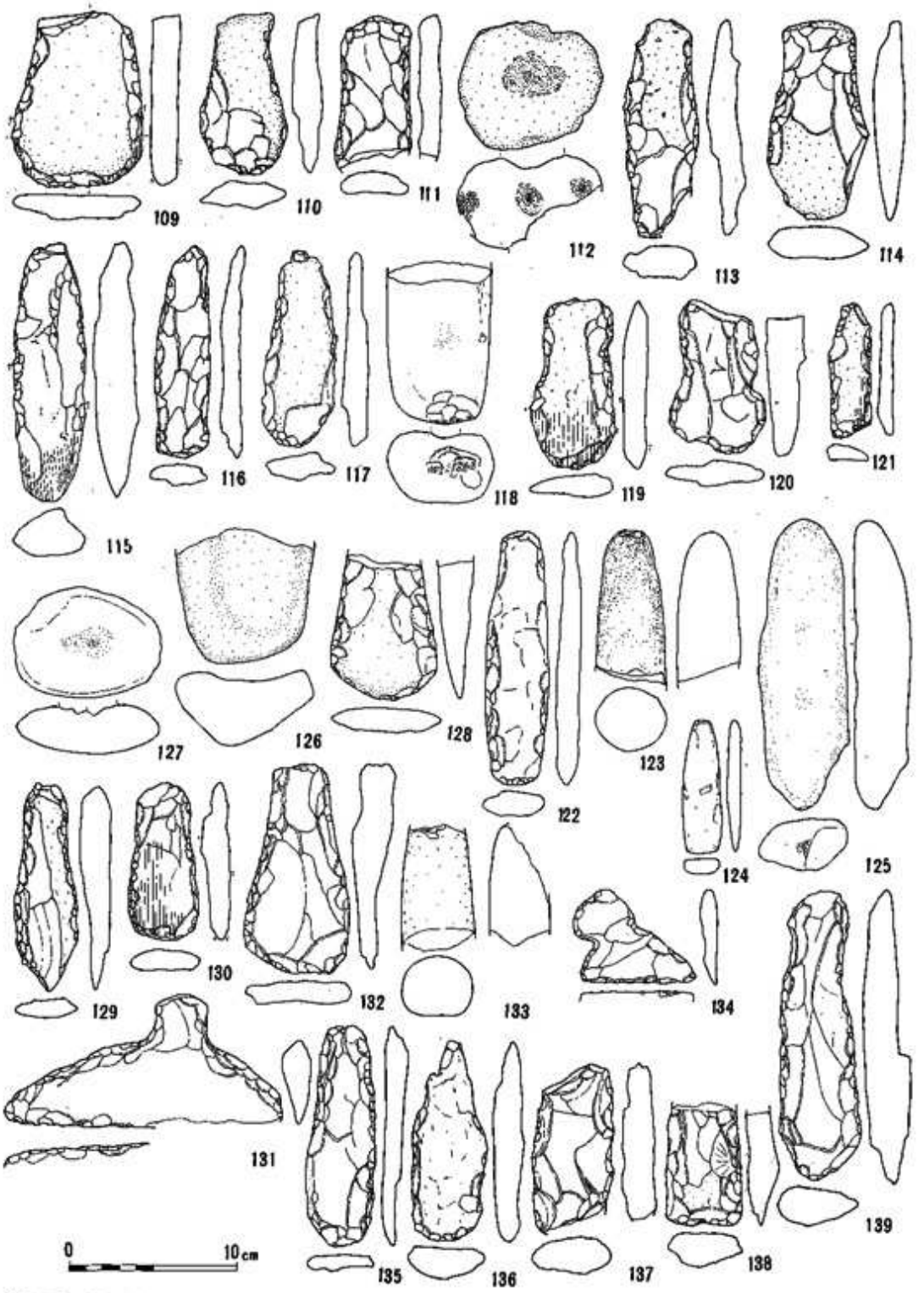


第51図　樋口内城館址遺跡47・48・39・49・42号住居址・小竪穴19・土壙26・40・41・溝状遺構1．実測図（1：80）

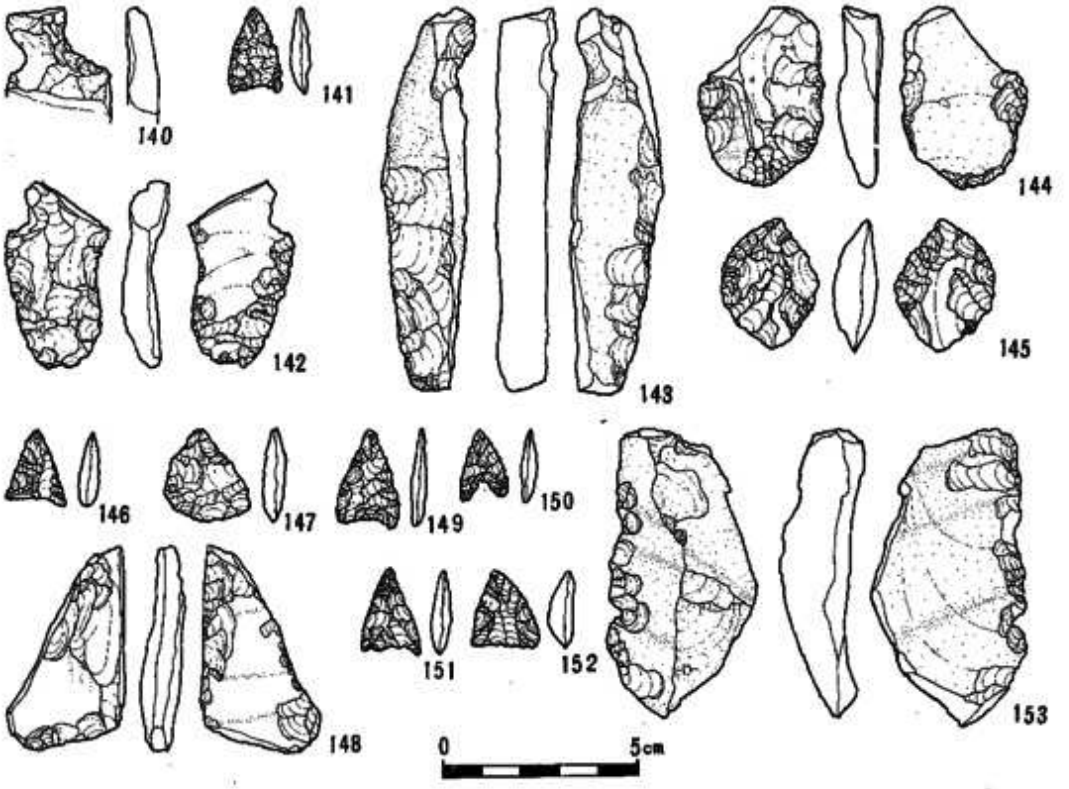
第52図　樋口内城館址遺跡47号住居址出土土器（１：３）

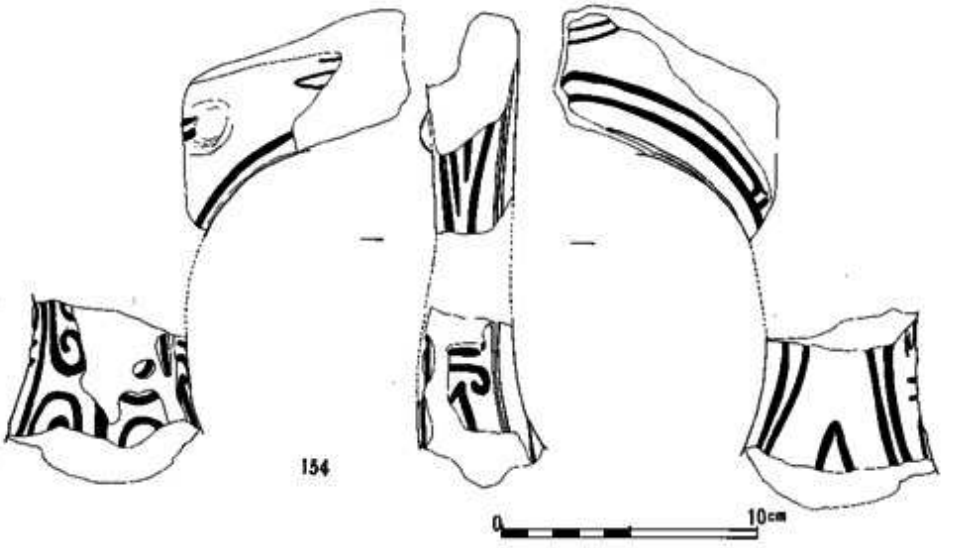


第53図　樋口内城館址遺跡48号住居址出土土器（ 316～ 319　1：6，他　1：3）



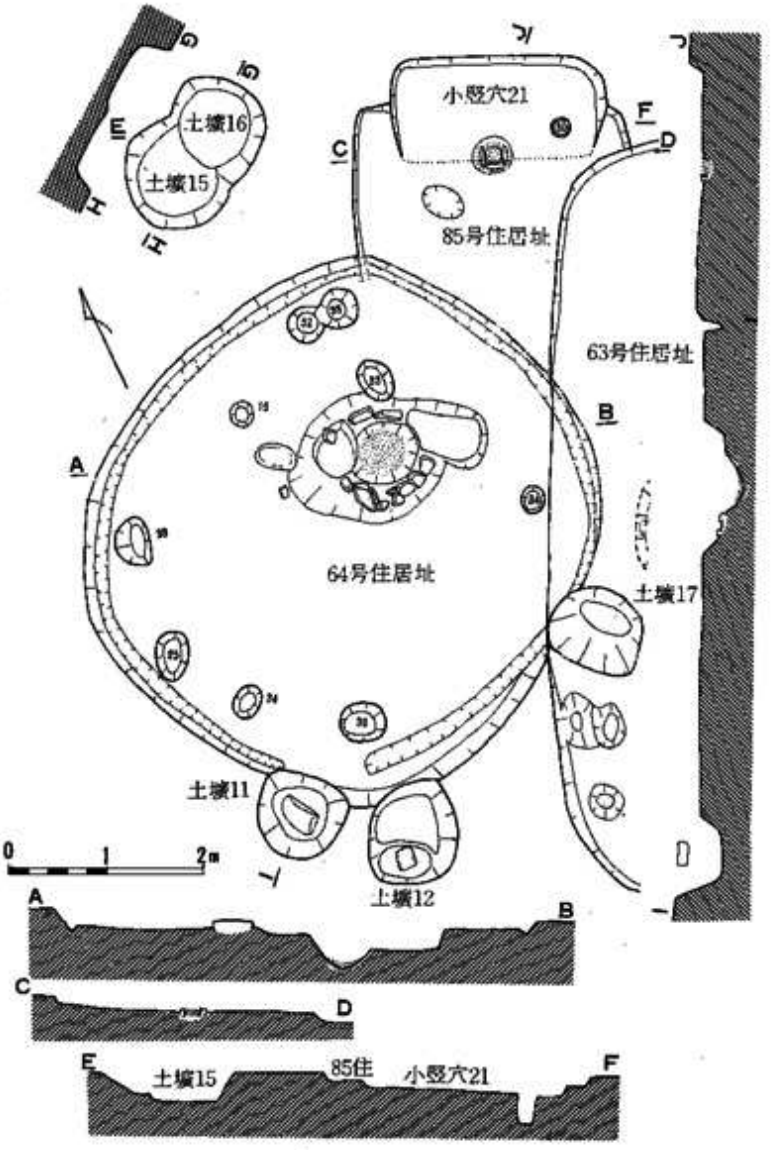
第54図　樋口内城館址遺跡30・38・47・48・45・62・64・67・86・92・73号住居址出土石器
（1：4）（109～112　30号住居址覆土，113　38号住居址覆土，114～116　47号住居址床面，117　同覆土，118　48号住居址覆土，119～124　45号住居址覆土，125　同床，126　62号住居址覆土，127　64号住居址覆土，128～130 67号住居址覆土，131　86号住居址覆土，132～134　92号住居址覆土，135～139　73号住居址覆土





第55図　柳川内城館址遺跡38・47・45・67・92・82・81・74・88号住居址出土石器および土製品
（1：2　ただし 154は 1：3）（140　38号住居址覆土，141　47号住居址覆土，142　45号住居址覆土
143～ 145 67号住居址覆土，146　92号住居址覆土，147～ 148　82号住居址覆土，149～ 150 81号住居址覆土
151～ 153　74号住居址覆土，154　88号住居址覆土）

第56図　樋口内城館址遺跡45号住居址出土土器（１：３）



第57図　樋口内城館址遺跡64·85号住居址，小竪穴21，土壙11・12，15，16，17実測図（1：80）

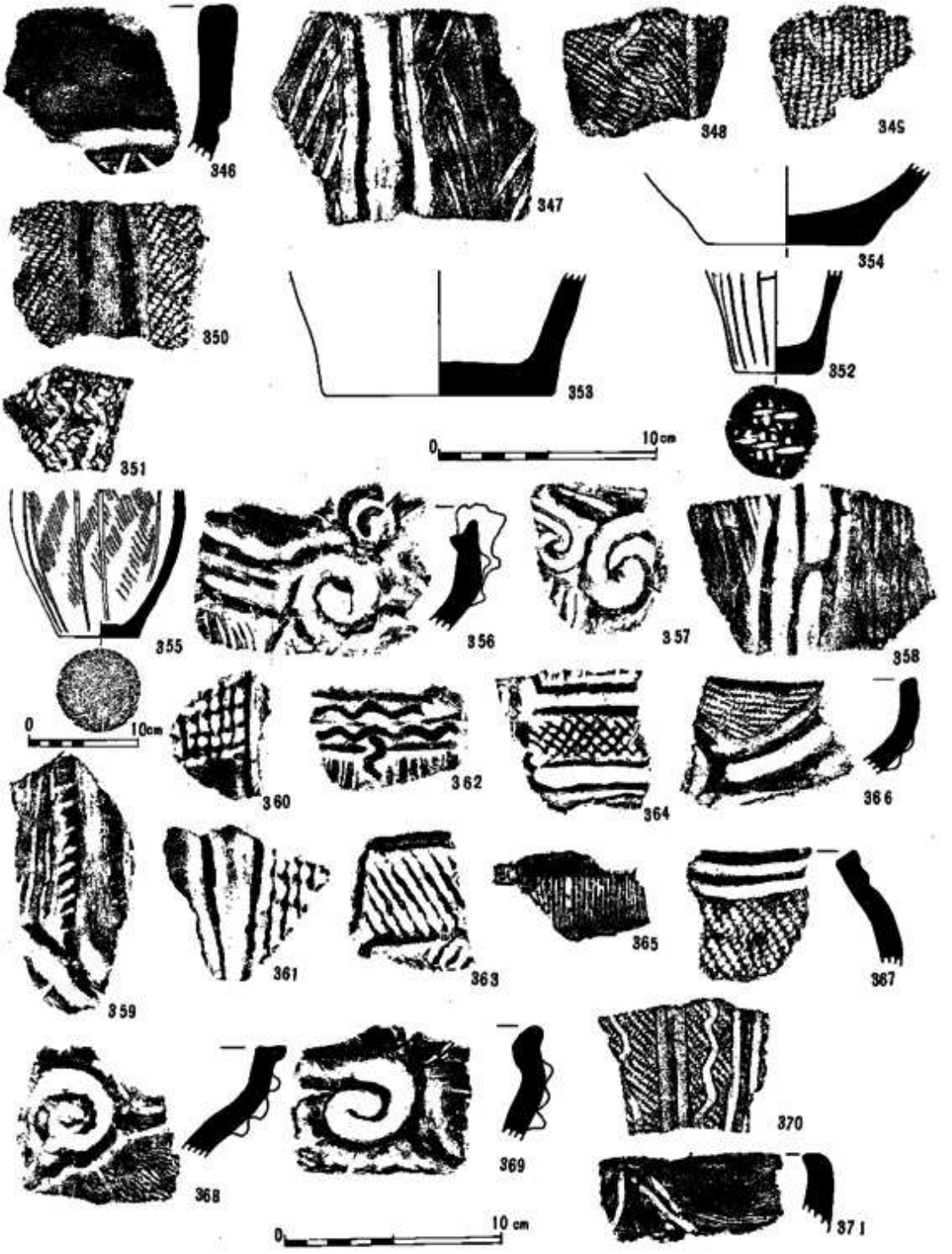
遺物　土器の出土量は少なく、綾杉文、縄文を基調とする加曽利E式土器片である。（346～352）

石器は砂岩質の石皿(126)の半欠が出土したのみである。　（八木）

ソ）64号住居址(図57，58の355～371，54の127)

遺構　丘陵北端部に位置し弥生期63号住居址、85号住居址に東壁を切られ、また土壙、11、12、17にも南壁を切られるも、ほぼ全貌を知り得た。径5.35×5.70mの規模をもつ、四隅が張る円形プランで、中央やや北東寄りに竪穴炉をもつ。断面有段擂鉢状を呈し、中段に炉縁石が不安定な状態で存した。当初からこの位置にあったか、上から落ち込んだのかは判断しがたい。底部はよく焼け、赤色焼土の堆積が7㎝あった。床面は、ローム土がしまって堅緻である。壁直下を周溝が囲んでおり、主柱穴は4個所、四隅を張る位置に検出された。西南壁寄りに出入口を推想させる2個のピットが、主柱穴間に規則性をもって存するのは注目すべきであろう。

遺物　出土遺物量は、さして多くない。土器は、355が胴部下半のみで他は深鉢形土器の破片である。355、370は垂下する沈線間に単節縄文をもつもの、356、357、368、369は口縁部に隆帯の渦巻文をもつもので、加曽利E式土器に比定されるものである。石器は、2凹部をもち、裏はきれいに整形した凹石が出土したのみである。　（八木）



第58図　樋口内城館址遺跡62・64号住居址出土土器（335　1：6，他　1：3）
（346～354 62号住，355～371　64号住）

第59図　樋口内城館址遺跡67号住居址出土土器（372　1：6，他　1：3）

タ）67号・86号・92号住居址

a ）67号住居址（図185・54の128～130、55の143～145・59　図版17の73・32の153）

遺構　丘陵北端部、中央道用地巾杭ぎりぎりに検出された本址は、縄文期86号上に営なまれている。北半分は、93号住居址に切られるため、炉址と南壁の一部を確認したにとどまった。南壁に沿って周溝が認められ、残存床面は堅緻である。炉址は、86号住居址のそれを切って構築された竪穴炉で、断面擂り鉢状を呈するもので、底部に掘り凹みが作られ、焼土が充満していた。主柱穴は２個所確認され、主柱穴間に更に補助的柱穴が存し、その間から周溝に接して正位の状態で埋甕が検出された。

遺物　土器は、渦巻文、渦巻懸垂文を主体とする加曽利Ｅ式土器が出土している。372は、四個所に山形突起を有する深鉢で埋甕に使われた底部欠損のものである。内部は黒色土が充満していたが遺物の検出はない。石器は打製石斧３の他、石匙状の横刃形石器（143）両面に剥離調整をもつ144、145の出土があった。（福沢）

b ）86号住居址（図185・54の131、図版17の73）

遺構　丘陵北端部に位置し、67号住居址に破壊された本址は、プラン等不明で炉址の確認のみに終わった。炉址も67号住居址のそれに切られているため規模不明。方形石囲炉であろう。

遺物　131の大形石匙の出土をみたのみである。時期決定する資料に恵まれない。（福沢）

c ）92号住居址（図60の３・61の397～398、54の132～134・55の146、図版19の86・88・33の161）

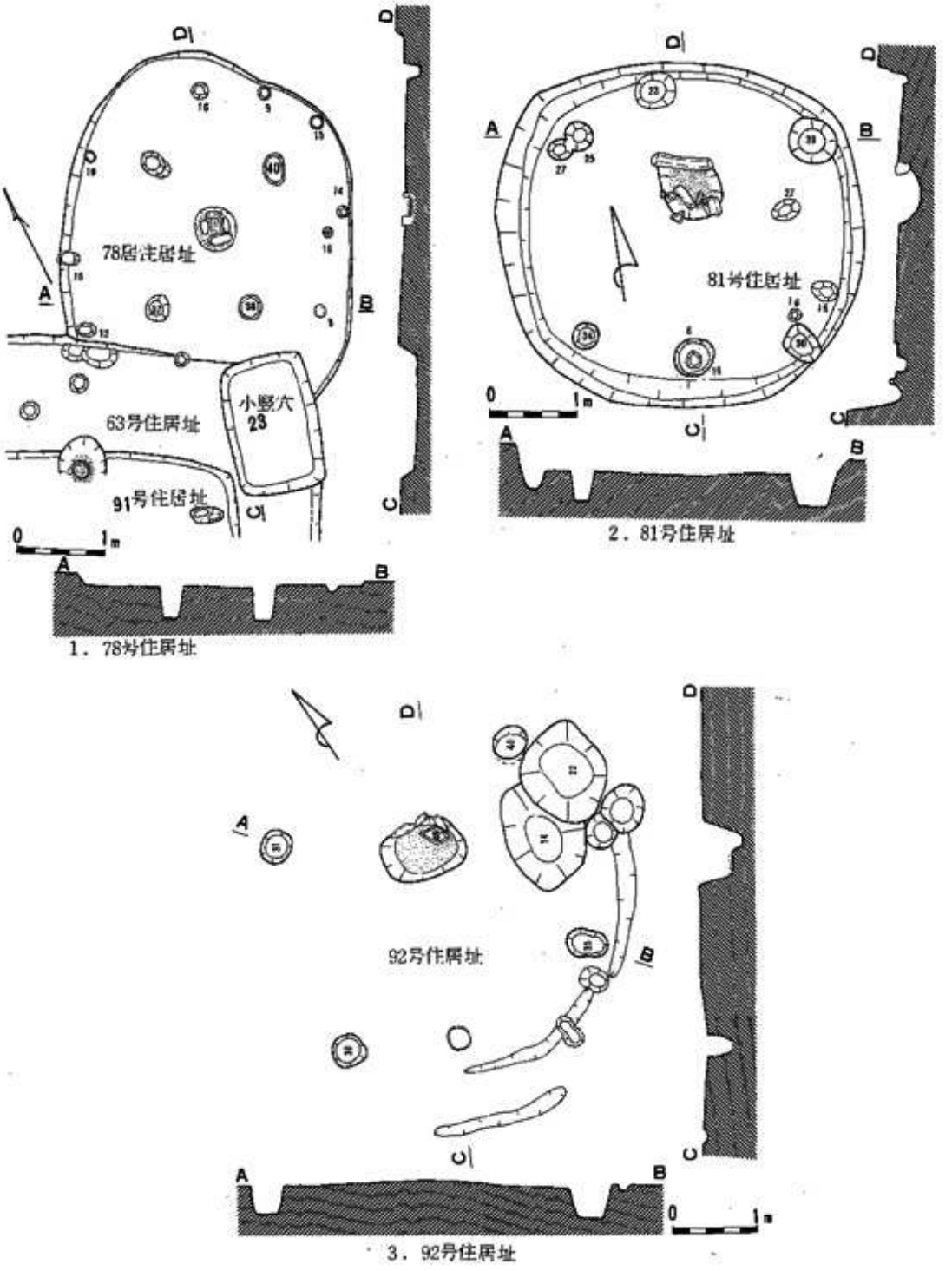
遺構　丘陵北端に位置し、69、93号住居址に切られるため、破壊がかなり進んでいる。プランは、東と南側一部に確認された周溝で円形と推定できるが規模は不明である。壁は全く破壊されて認められず、また床面も凹凸が著しく良好とはいえない。主柱穴は４個所で、中央やや北寄りと思える個所に炉址が確認できた。方形石囲炉で一部炉縁石が残存する。南側主柱穴間のほぼ中央、周溝より30cmに、床面と同レベルで、口唇部を欠いた埋甕が正位の状態で検出された。また南西の柱穴にも土器底部が落ち込んで検出された。

遺物　土器は埋甕と柱穴内出土の底部がある。渦巻文と懸垂唐草文を有し、その間を箆描き沈線を施した397の埋甕も、綾杉文を主とした底部片も加曽利Ｅ式土器に比定されるものである。石器は、打製石斧磨製石斧、石匙、石鏃が各１個出土している。（一条）

チ）66号・80号住居址（図178・61の399～403　図版16の69・70・32の152）

遺構　丘陵北寄り、中央道用地内東端に位置し、67号、86号住居址の南に検出された。南は、弥生期の65号、79号住居址に切られ、破壊が進んでいてプラン等、２住居址とも不明である。いずれも炉址の確認のみで、ピットの検出もあるが、いずれの住居址か判明しない。北の炉を66号とし、南のそれを80号とした。66号炉は掘り込みが浅く相当削られているものと思う。焼土が確認されている。80号炉は79号住居址に切られているが、石囲方形炉である。炉縁石は炉址内に転落し、底には焼土が厚く堆積している。80号炉址北に、正位の状態で埋甕が検出された。位置からして66号住居址のものと考えた。

遺物　土器は399が埋甕として使われたもので、口縁を欠くが、完形品である。口縁部に渦巻文をもつ



1．78号住居址

2．81号住居址

3．92号住居址

第60図　樋口内城館址遺跡78・81・92号住居址実測図（1：80）

もので、胴部は垂下する沈線間を縄文でうめている。土器片と共に加曽利E式土器に比定されるものである。80号住居址から遺物の検出をみなかった。（福沢）

ツ）78号住居址（図60の1・62，図版17の75）

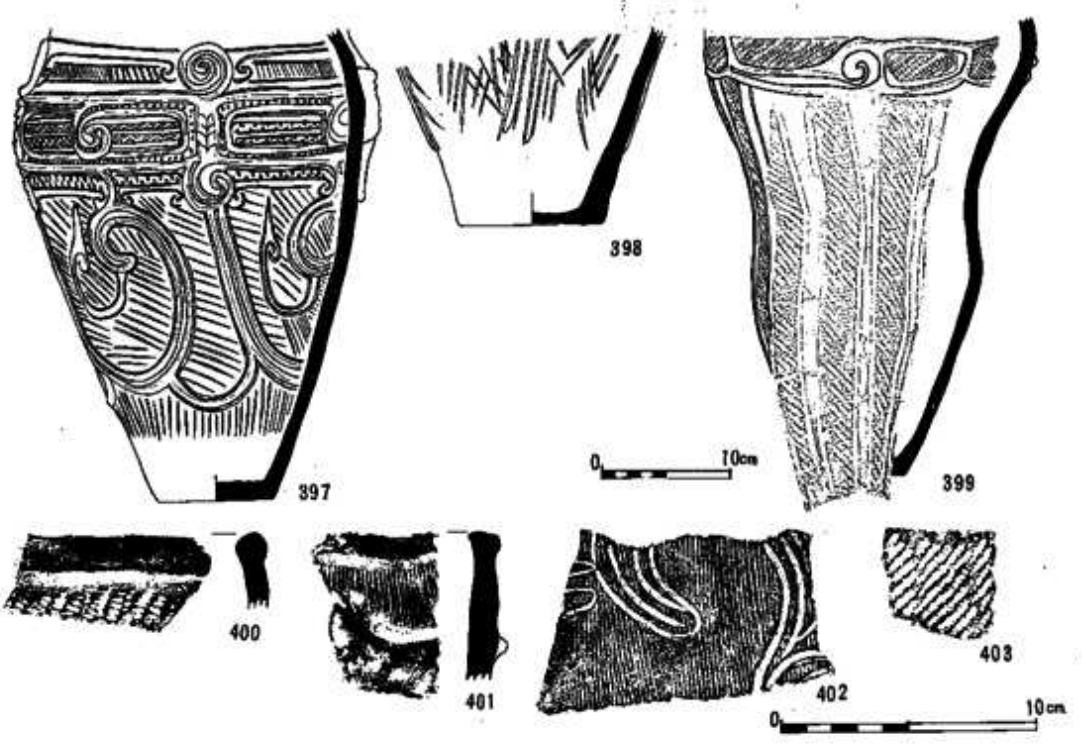
遺構　丘陵北縁近くに位置し、不整長円形を呈する本址は、南側を弥生期63号住居址と中世小竪穴23に切られている。残存壁高10～15cmと浅いが、床面は、ほぼ水平である。主柱穴は4個所あり、周壁にそって、支柱穴と思われる柱穴が9個所検出されたことは注目すべきである。炉址は、ほぼ中央辺に、凹みをつくり、中に4個の平板石と方形に配した小形石囲炉である。焼土が5～7cmの厚さで検出されている。規模も東西で3.35mの小規模住居である。

遺物　出土量は少なく土器片のみである。区画文を主体とする一群（404～409）と平行沈線文を主体とする一群に分けられる。(411～419) 本址は遺物から縄文中期勝坂期に比定できる。（八木）

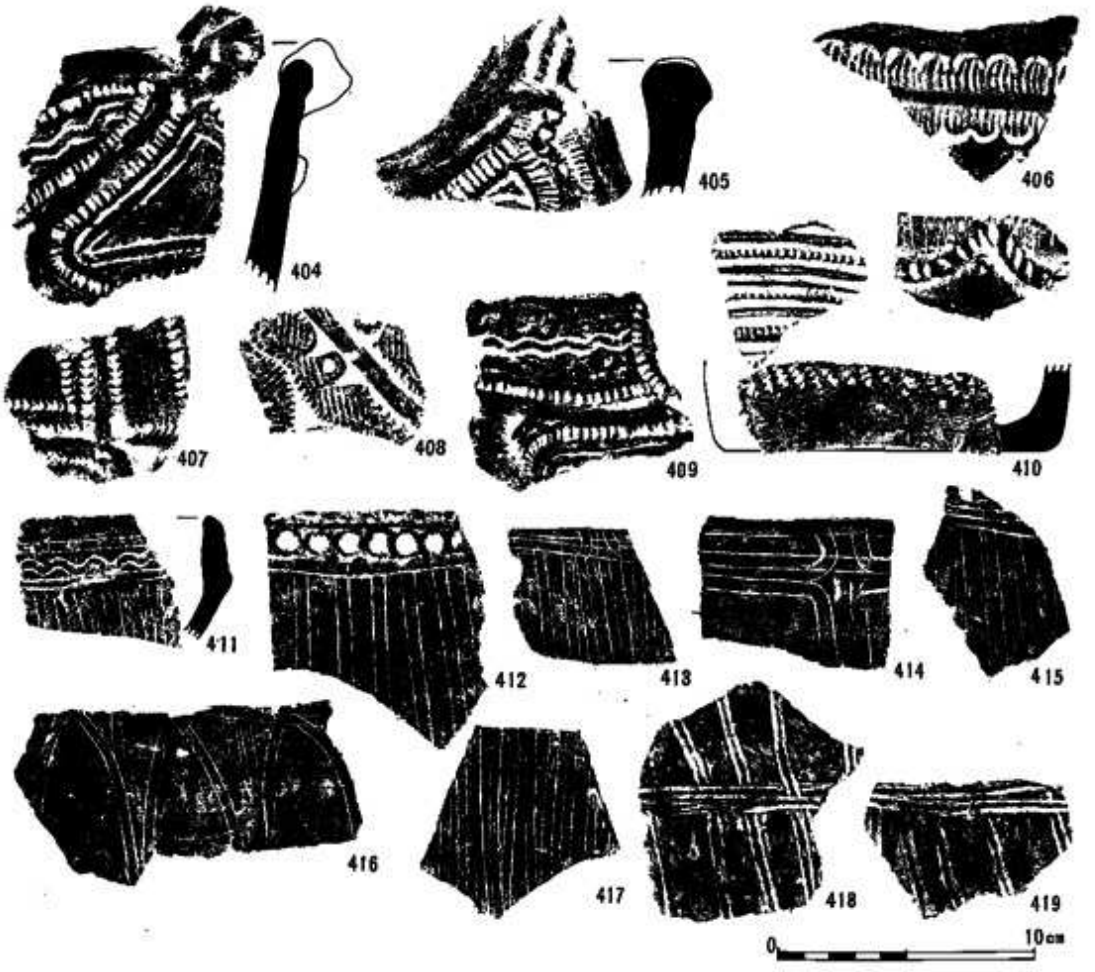
テ）70・76・73・82号住居址

a）70号住居址（図63の1・64・65・66・67の479～482、74の155～159、図版17の74、32の155・156）

遺構　丘陵北西部に位置し、西半部を弥生期の72、75号住居址に、また、北東壁を83号住居址に切られ



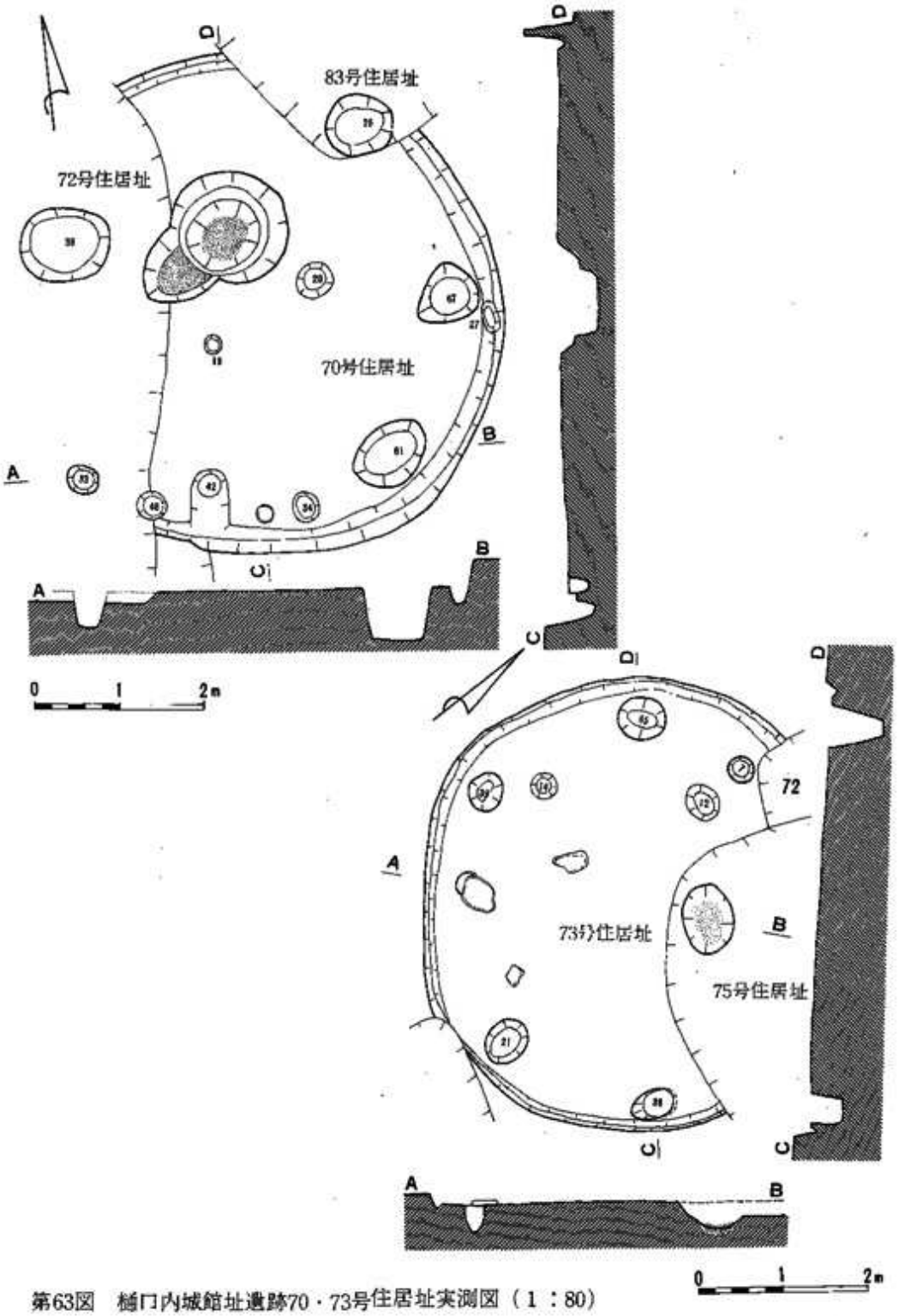
第61図　樋口内城館址遺跡92・66号住居址出土土器（397～399　1：6，他　1：3）
（397～398　92住，399～403　66住）



第62図　樋口内城館址遺跡78号住居址出土土器(１：３)

て検出された。本址はまた、南に位置した縄文期の76号住居址を切っている。径６ｍの規模をもつ円形プランで、残存壁下に周溝がめぐっている。壁、床面共に良好で、主柱穴が５個所確認された。炉址は中央やや北寄りに、断面摺り鉢状を呈する有段の竪穴炉が構築されている。炉址は、前にあった炉址を切って作られていることから、先行住居址を考える必要がある。しかし発掘時、切り合いも多く、貼床の検出もなく確認できなかった。南側主柱穴間に補助柱穴が確認され、周溝に接して、正位の状態で埋甕が確認された。

遺物　覆土中からの遺物出土量は多い。本址に先行する住居、南の76号、北に接する82号住居址が弥生期の72、75号住居址に切られた結果かもしれない。出土土器は完形品なく、器形の判明するのは３個で他は破片である。いずれも、渦巻文、懸垂文、唐草文を主体にし、その間を、平行または綾杉状に条線を施すもので、加曽利Ｅ式に比定される土器である。420は埋甕として使用されたもので口縁部と底部を欠損

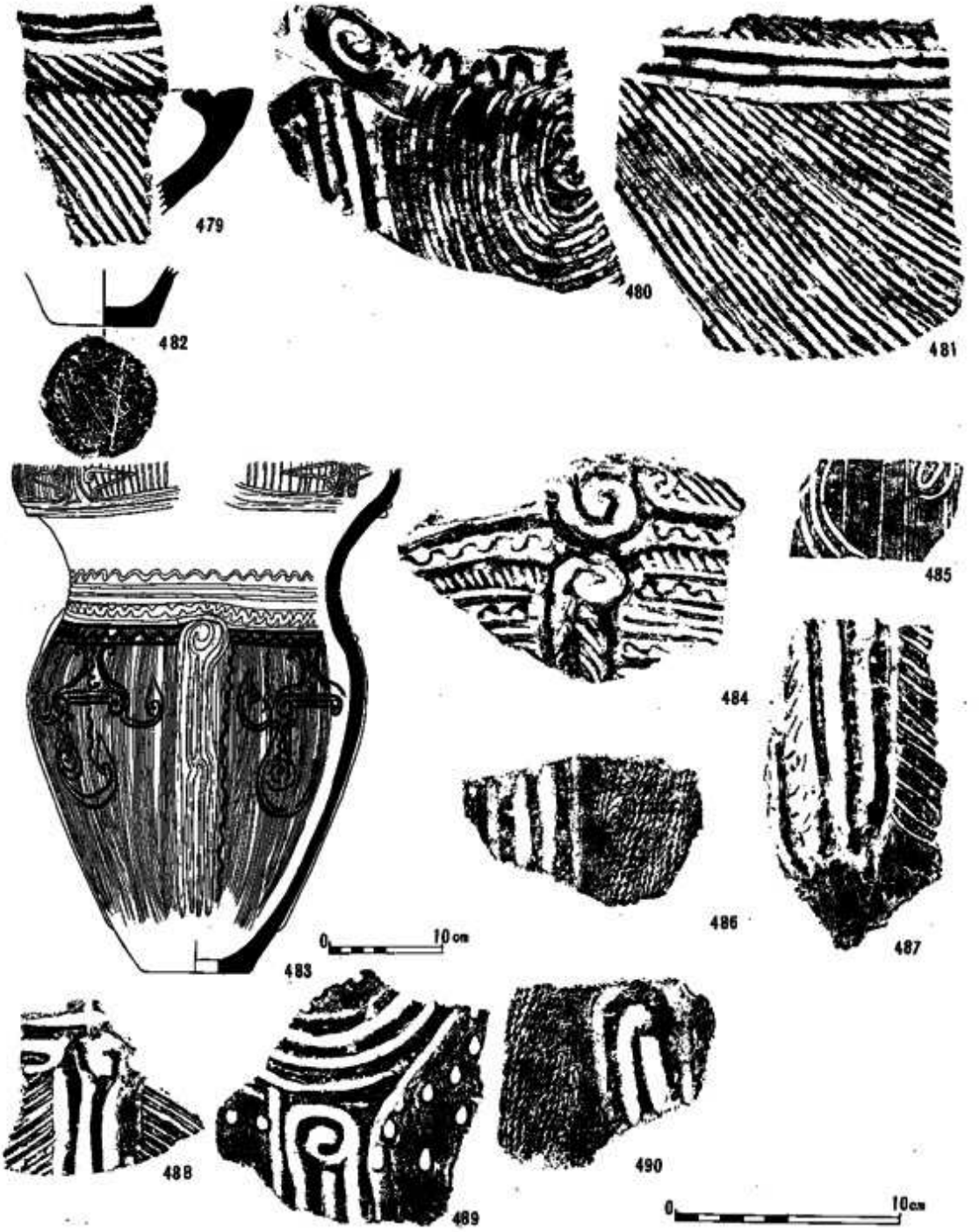


第63図　樋口内城館址遺跡70・73号住居址実測図（1：80）

第64図　樋口内城館址遺跡70号住居址出土土器その1
（420～422　1：6，他　1：3）

第65図　樋口内城館址遺跡70号住居址出土土器その２（１：３）

第66図　樋口内城館址遺跡70号住居址出土土器その3（1：3）



第67図　樋口内城館址遺跡70・73号住居址出土土器（483～484　1：6，他　1：3）
（479～482　70住，483～490　73住）

する。沈線の懸垂渦巻文を施したもので地文に条線文をもつ。また地文に縄文をもつ422、472～475もある。石器は覆土中から打製石斧２、磨製石斧２、磨石１が出土した。（小松原）

ｂ）73号住居址（図63の２、67の483～490、54の135～139、図版17の74・32の154）

遺構　丘陵北西端部に営まれた本址は、南壁を弥生期61号住居址に、北部分を同72、75号住居址に切られて検出された。？×5.27mの規模をもつ円形プランで、残存壁高７～18を測値する。壁下には巾８～15cm深さ７～10cmの周溝がめぐらされ、床面は平坦で堅緻である。主柱穴は５個所検出されたが、当初は６本柱であったろう。炉は中央やや北東寄りに検出されたが、75号住居址に削られ、原形を保っていない。断面摺り鉢状を呈することから、類例の多い竪穴炉であったと推察される。南西柱穴間から、周溝内20cmに埋甕が検出された。正位の状態で埋められ、平板石を蓋石としてある。

遺物　土器と石器がある。土器は483～490の渦巻文、懸垂文、懸垂唐草文間を平行条線ないし綾杉文あるいは縄文で充たす加曽利Ｅ式土器である。483は埋甕として使われたもので口縁部を欠損し、底部には穿孔がみられる。石器は打製石斧５が覆土中から出土している。（小松原）

ｃ）76号住居址（図187）

遺構　丘陵北西端に営なまれた本址は、縄文中期70号、弥生期72、75号住居址に、切り取られたため、南東壁の一部を認めただけで、プラン等不明である。壁高22cmを計る。

出土遺物も本址に伴なうものは検出されていない。（小松原）

ｄ）82号住居址（図187・68・69・70、55の147・148）

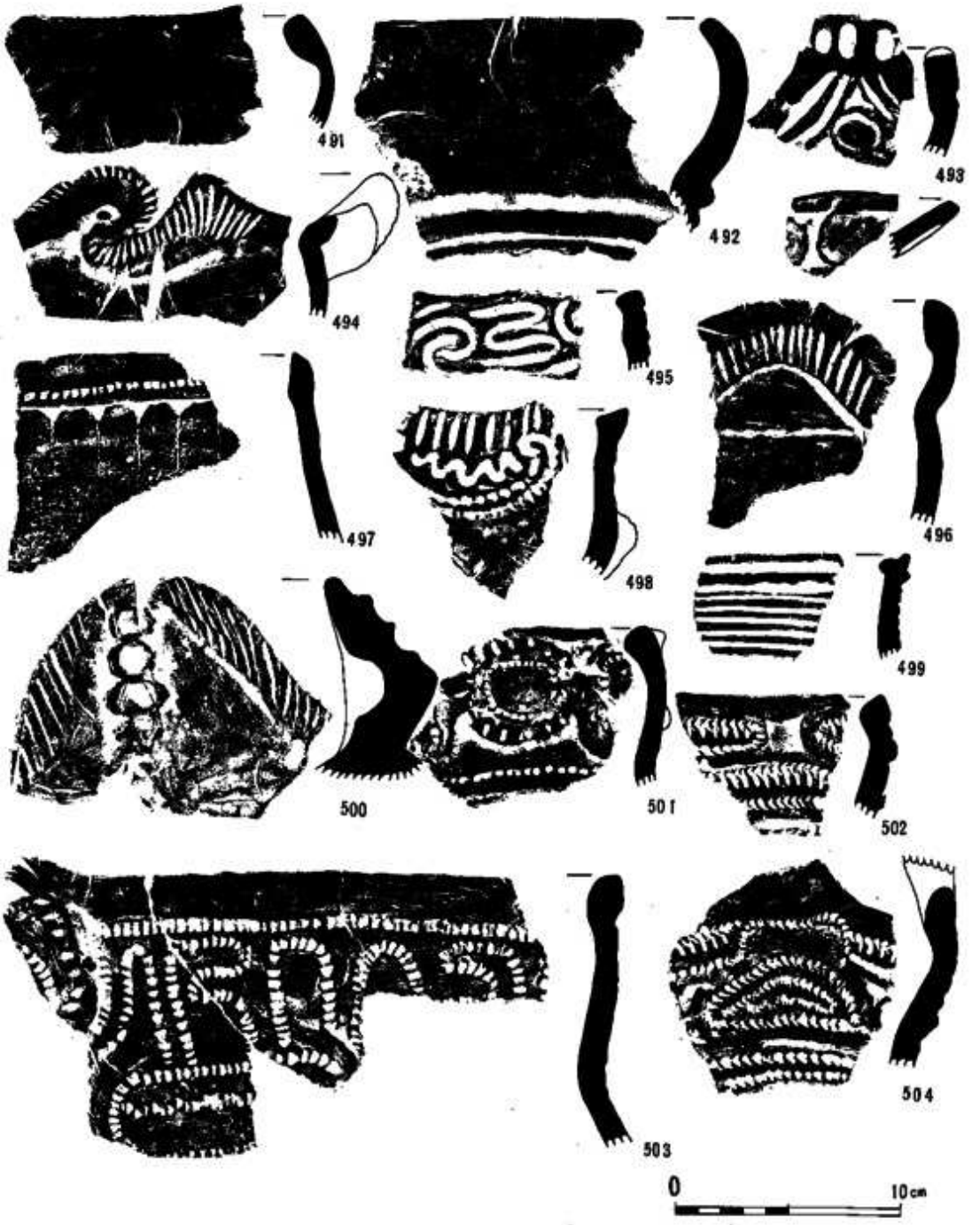
遺構　丘陵北西端に営なまれた本址は、西を縄文中期81号に、南を弥生期72号、北東を同83号住居址に切り取られて、北壁の一部を確認し得たのみである。北壁高15cmを計り、残存床面は平坦で堅い。柱穴１個所と72号住居址北西床面に焼土が検出されたが、本址炉と考えてよい。

遺物　覆土中から多量な土器片が出土した。器形の判明するものはないが、すべて深鉢形土器片である。大別して、区画文と平行沈線文とに分けられる。491～525は区画文の範疇に入るもので、隆帯の区画内に、半截竹管の押引き文、連続爪形文が施されている。515～520にみられる縄文を地文にもつものもある。531～558は半截竹管による平行沈線文で隆帯に指圧痕(544、545)をもつもの、557、558のように地文に縄文をもつものもある。

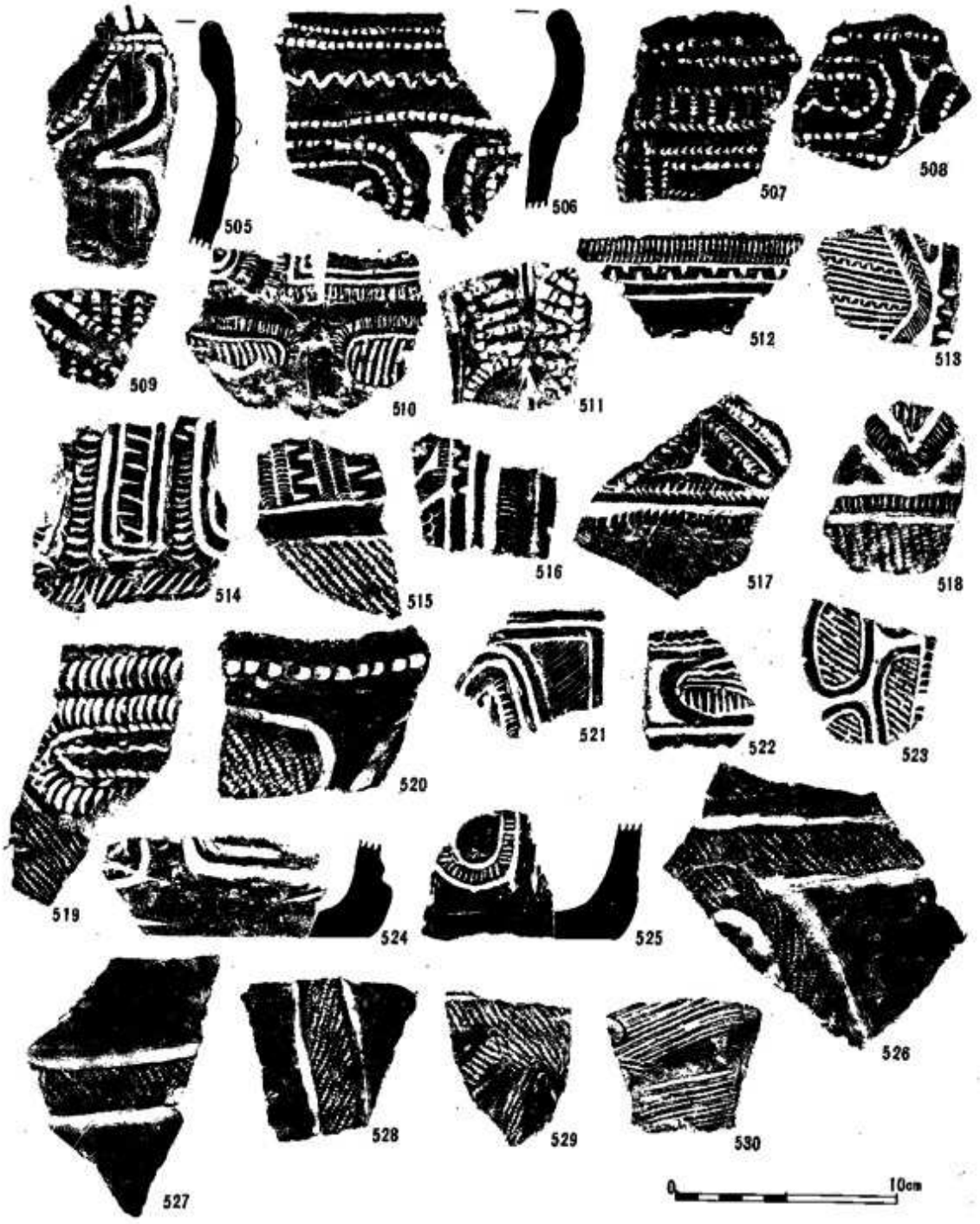
石器は、石鏃（147）と両面剥離調整をもつ横刃形石器が出土した。（小松原）

ト）81号住居址(図60の２、71・72・73の585～601、74の160～162、50の149・150、図版18の78、33の158)

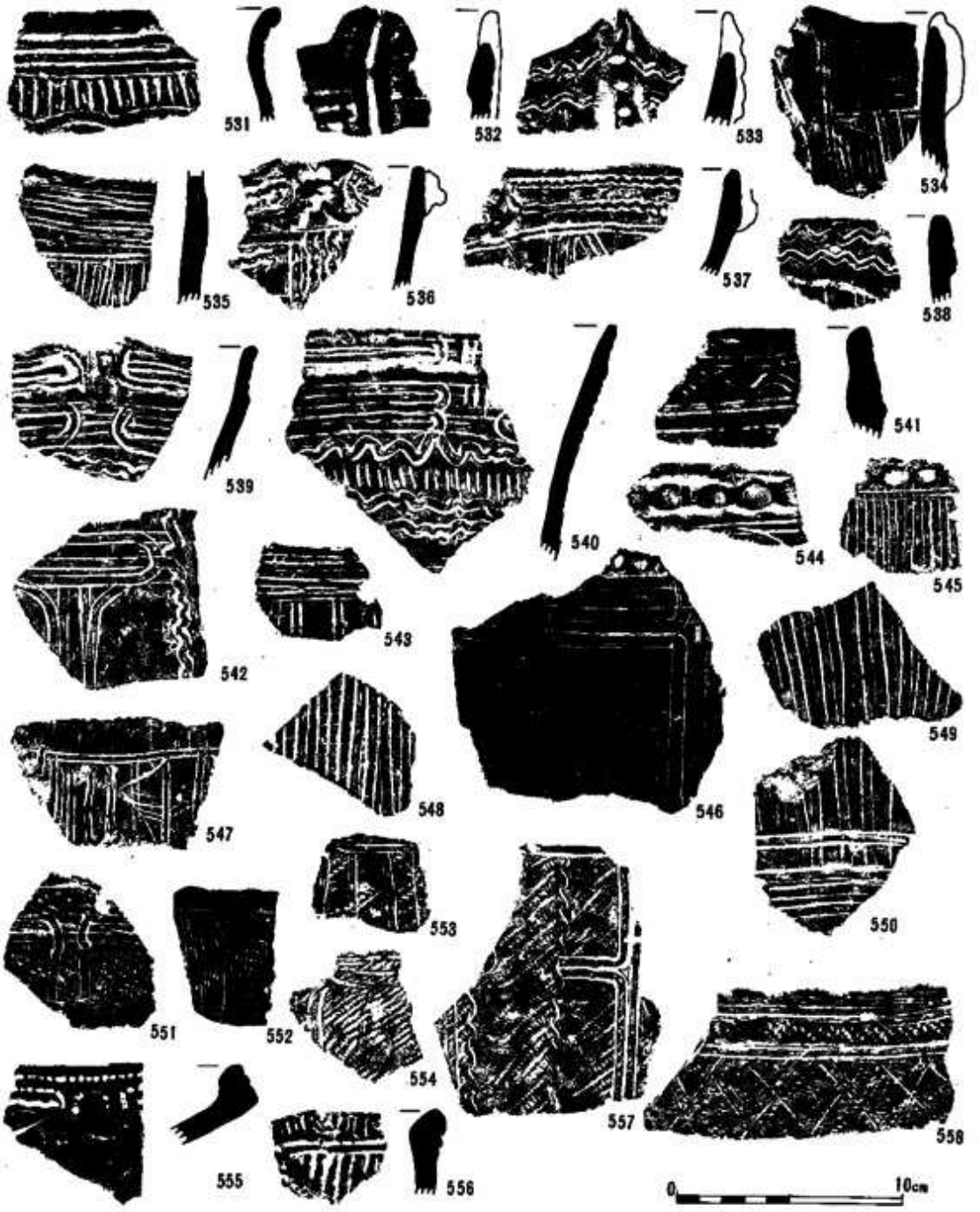
遺構　丘陵最北西端に営なまれた本址は、72号住居址に東壁を接し、82号住居址を切り取って構築されている。4.25×4.00mの規模をもつ円形プランで、中央やや北寄りに方形石囲炉をもつ。壁高30～40cmで、垂直に近く掘り込まれ、壁下に周溝をめぐらす。床面はやや凹凸があるも、ローム土をしめて堅緻である。主柱穴は、四隅に４個所と南北中心線上に２個所の６穴である。炉址は石囲炉で北側炉縁石は一石で一辺をなす70cmの長さをもつ。他は炉址内に転落したり、抜き取られて原位置にない。炉址内部は焼土が10cm



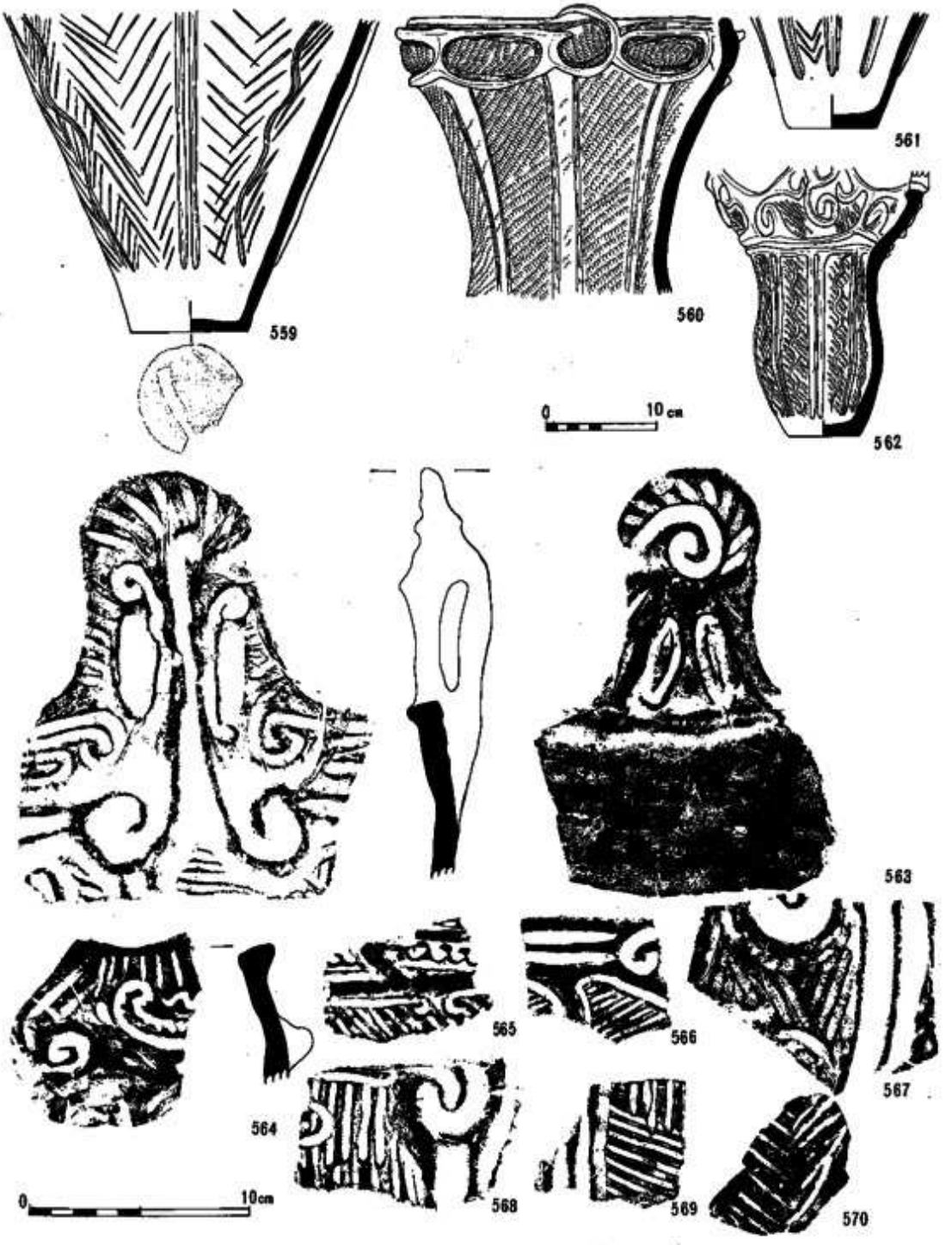
第68図　樋口内城館址遺跡82号住居址出土土器その1（1：3）



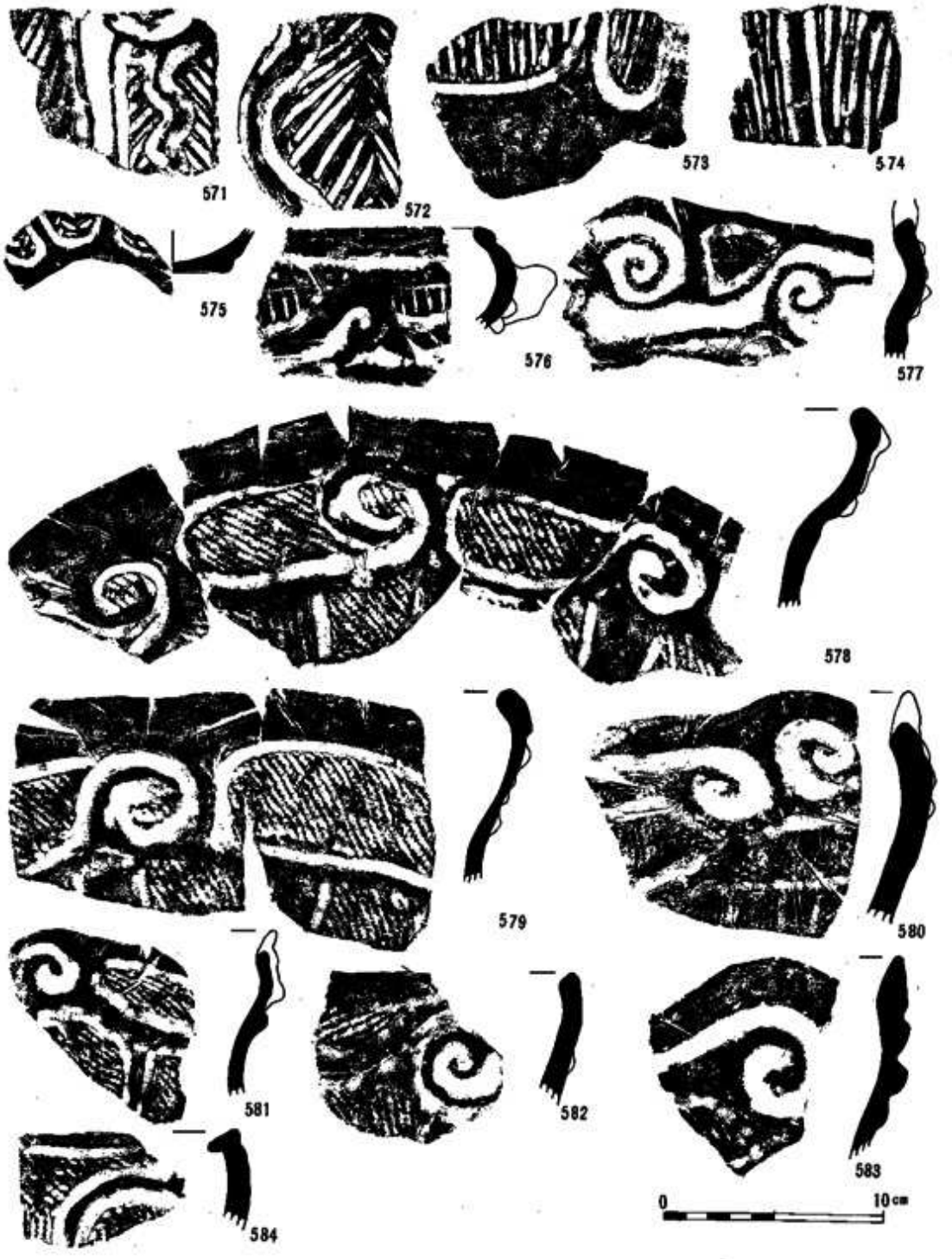
第69図　樋口内城館址遺跡82号住居址出土土器その２（１：３）



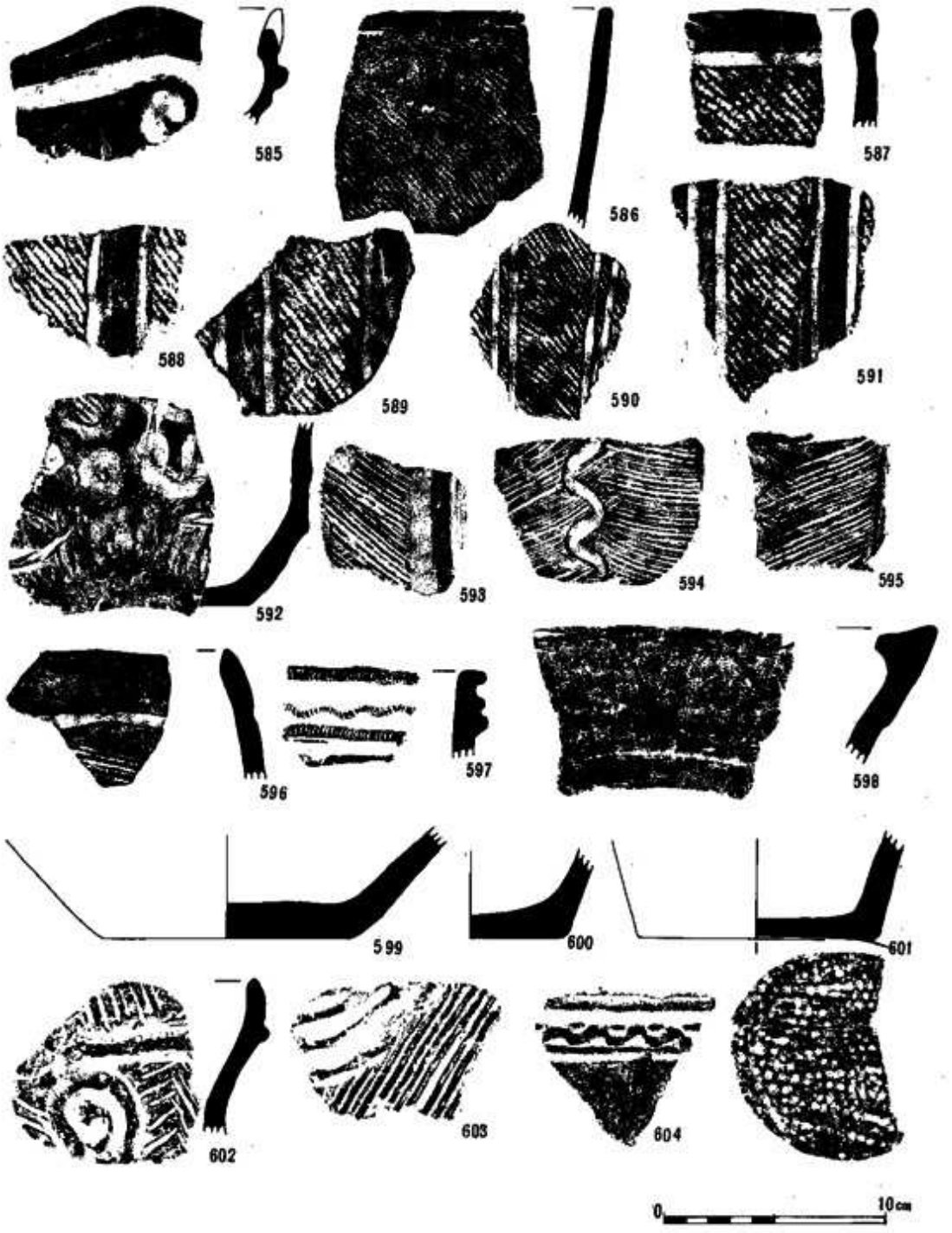
第70図　樋口内城館址遺跡82号住居址出土土器(その３)　(１：３)



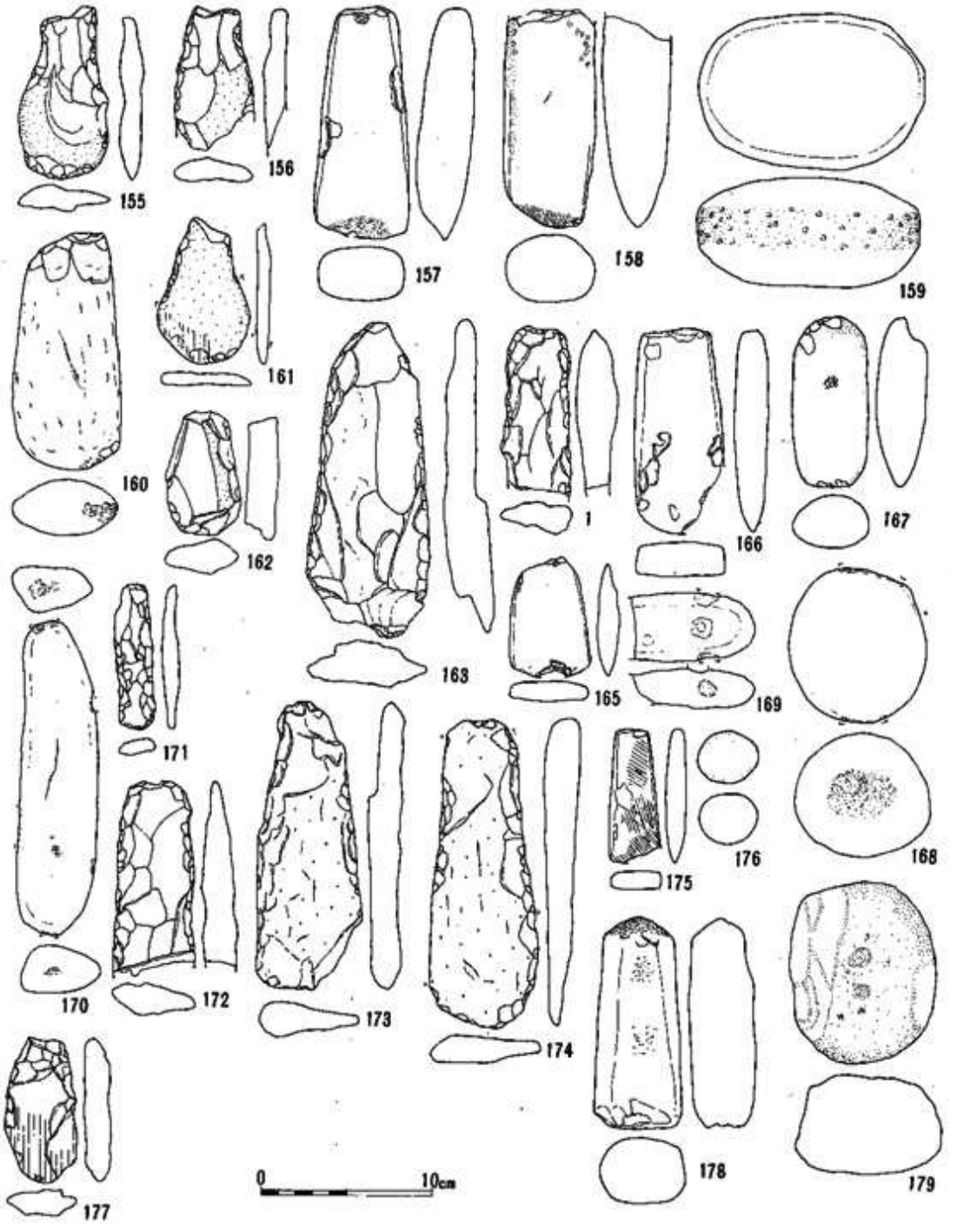
第71図　樋口内城館址遺跡81号住居址出土土器（その１）
（559～562　１：６，他　１：３）



第72図　樋口内城館址遺跡81号住居址出土土器（その２）（１：３）



第73図　樋口内城館址遺跡8187号住居址出土土器（1：3）（585～601　81住，602～604 87住）



第74図　樋口内城館址遺跡70・81・74・87・88・84・90・94号住居址出土石器（1：4）
155～159　70号住居址覆土，160　81号住居址pit，161～162　81号住居址床面，163～168　74号住居址覆土，169　87号住居址覆土，170　88号住居址覆土，171～174　84号住居址覆土，175～176　90号住居址覆土，178　94号住居址床面，177～179　94号住居址覆土

層となって堆積している。

遺物、炉址周辺から多量に土器片が出土した。渦巻文、懸垂文を配したその間を縄文、綾杉文で充した加曽利E式土器である。器形の判明するものを含め大部分が深鉢形土器であるが、599は浅鉢の底部と思われる。563のような大形把手も存する。

石器は、打製石斧2、敲打器1、石鏃2が出土している。（辰野）

ナ）87号住居址（図181、73の602～604、74の169）

遺構　丘陵北西部に営なまれた本址は、南半分を弥生期の60号住居址に切られて検出された。4.02mの規模をもつ隅丸方形に近いプランをとるもので、炉は中央やや北寄りに構築されている。側壁は削り取られてなく周溝でプランを確認し得た。主柱穴4で、床面はロームをかため堅緻である。

遺物　出土量少なく、土器は渦巻文、綾杉文をもつ加曽利E式土器である。石器は凹石が1点出土しただけである。（小松原）

ニ）74号住居址（図75・76、55の151～153、74の163～168、図版14の54、32の157）

遺構、丘陵最西端に営なまれた本址は、東を36号住居址に東西を77号住居址に切られ、更に中央に中世特殊円形竪穴が掘り込まれて検出された。5.10×5.15mの規模を有する円形プランで、壁は急傾斜に掘り込まれ、壁下に周溝がめぐっている。床面はローム土をしめて堅い。柱穴は4個所等間隔に掘られ、炉は中央やや北寄りに竪穴炉が構築されている。断面摺り鉢状を呈するもので焼土が広い範囲に散在し、かなりの量の灰、炭化物が検出された。南側主柱穴間、周溝より25cm内の床面に埋甕が正位の状態で検出された。内部は黒褐色土が充満し、下部より黒燿石片が一片検出された。

遺物、出土土器は、渦巻文、懸垂文間を綾杉文、平行条線文、縄文でうめる加曽利E式土器である。622は埋甕として使われたもので、口縁部、底部を欠損する。606は炉の近くから出土したものである。605は壺形土器と思われるもので頸部に沈線、胴部には縄文を地文とした上に弧状の沈線が施されているものである。石器は打製石斧2、磨製石斧2、敲打器2、石鏃2、横刃形石器1の出土をみた。（根津）

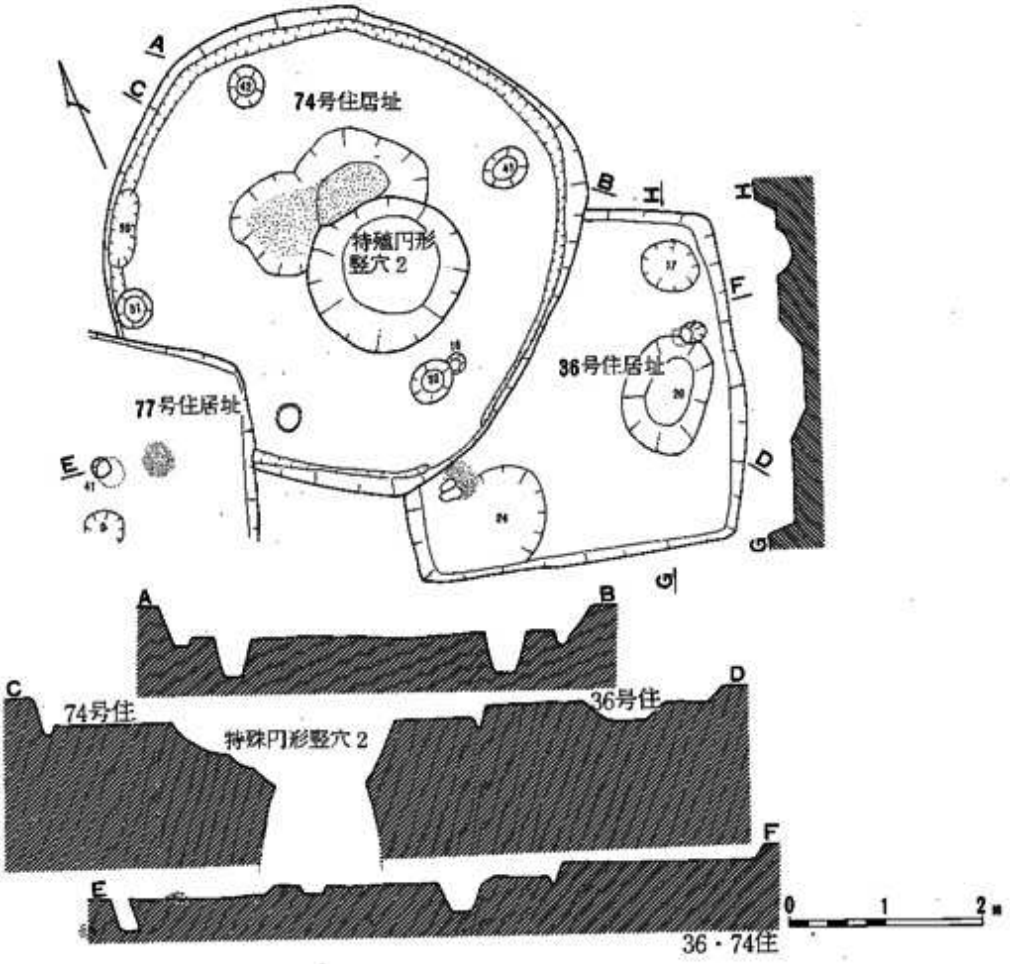
ヌ）88号住居址（図77・78・74の170、55の154、図版19の84）

遺構、丘陵最西端、縄文期の住居址が密集する地点に構築された本址は、南を中世の特殊円形竪穴3に東を弥生期の89号に、北を縄文期84号住居址にそれぞれ切られて検出された。西側は急崖となって用地外になる。推定で5.20×5.70mの規模をもつ円形プランで、主柱穴4個所が検出されている。床面は凹凸があって良好とはいえない。炉址は中央北寄りに円形石囲炉があり、北側に一部炉縁石が残る。内部には、焼土と少量の炭化物が堆積していた。

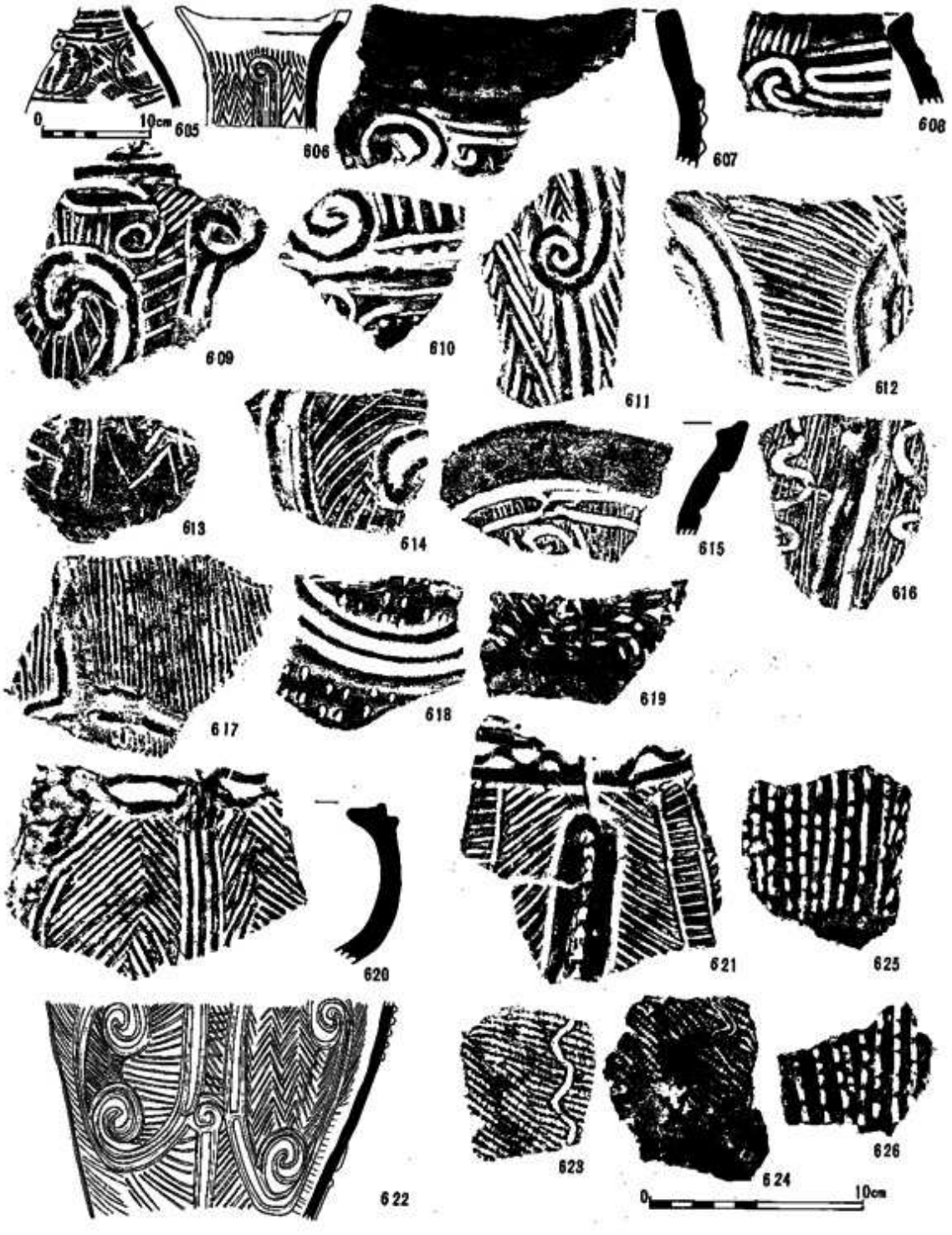
遺物、土器は渦巻文、懸垂文をもつ加曽利E式土器である。石器は敲打器1が覆土中から出土した。また、土偶の左手部と腰部が覆土中から出土している。（根津）

ネ）84号住居址（図77・79、74の171～174、105の188～189、図版18の81、33の159）

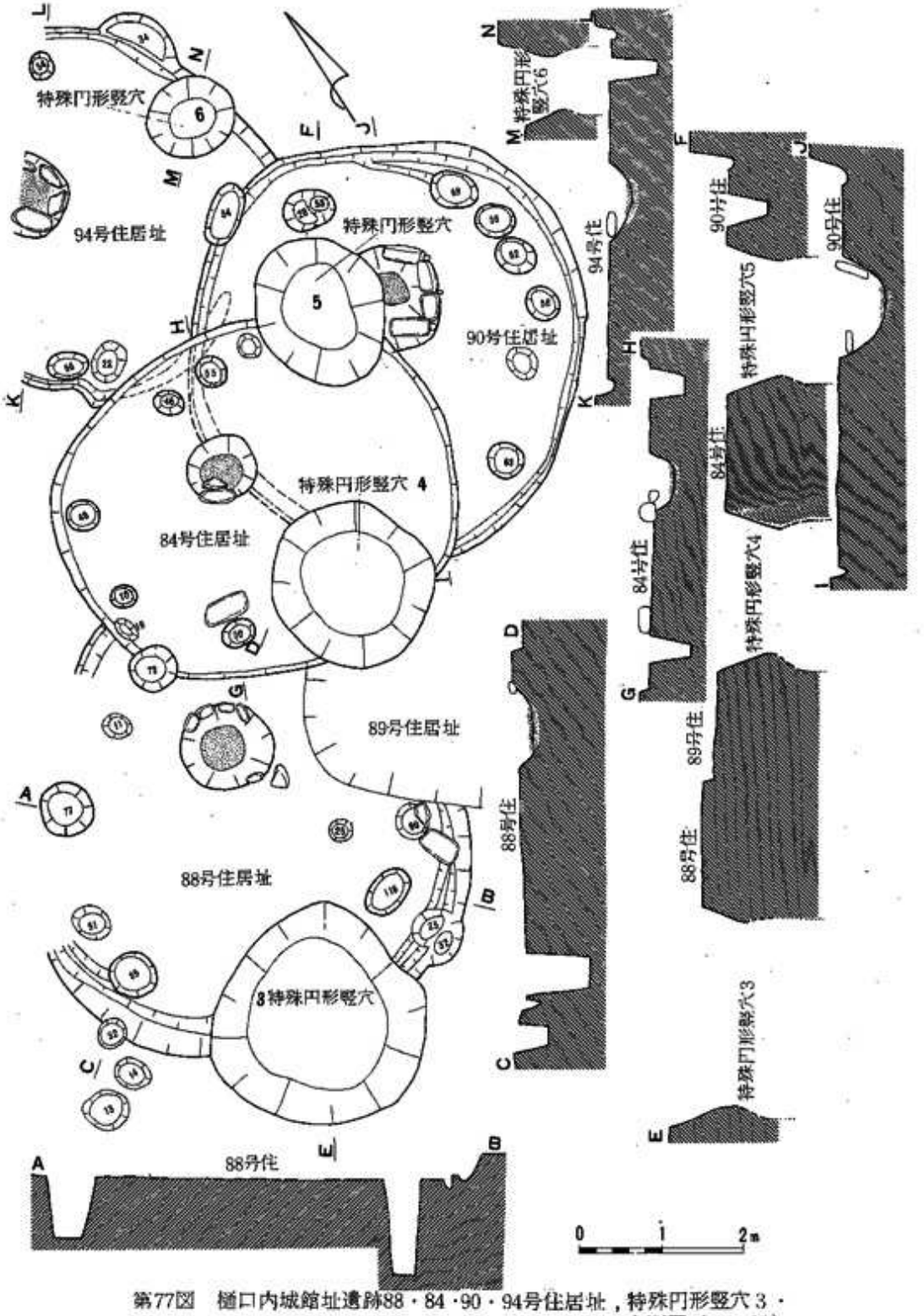
遺構、丘陵西縁に営なまれた本址は、縄文期の住居址が密集する地点で複雑に重複し合って検出された。



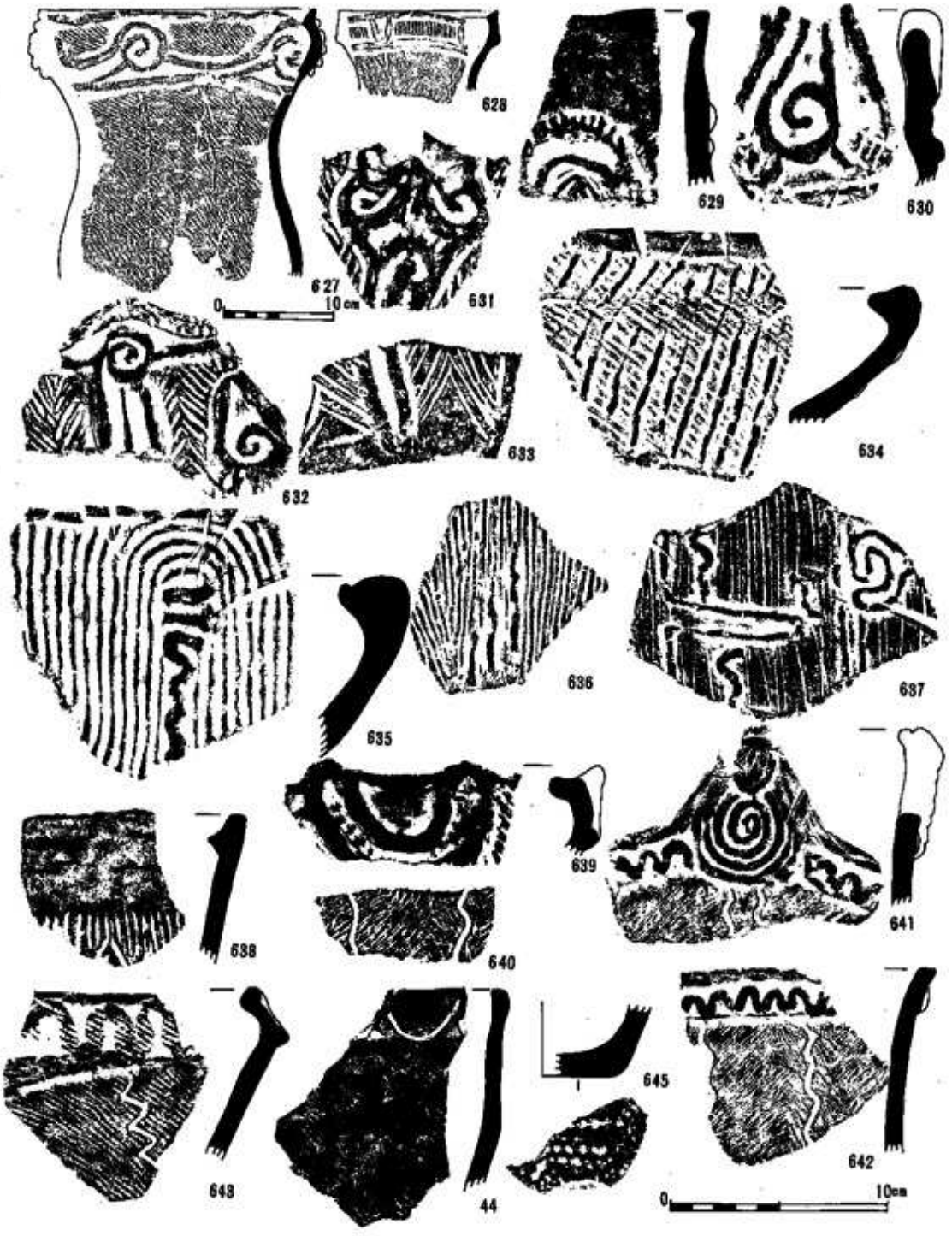
第75図　樋口内城館址遺跡74・77・36号住居址，特殊円形竪穴２実測図(１：80)



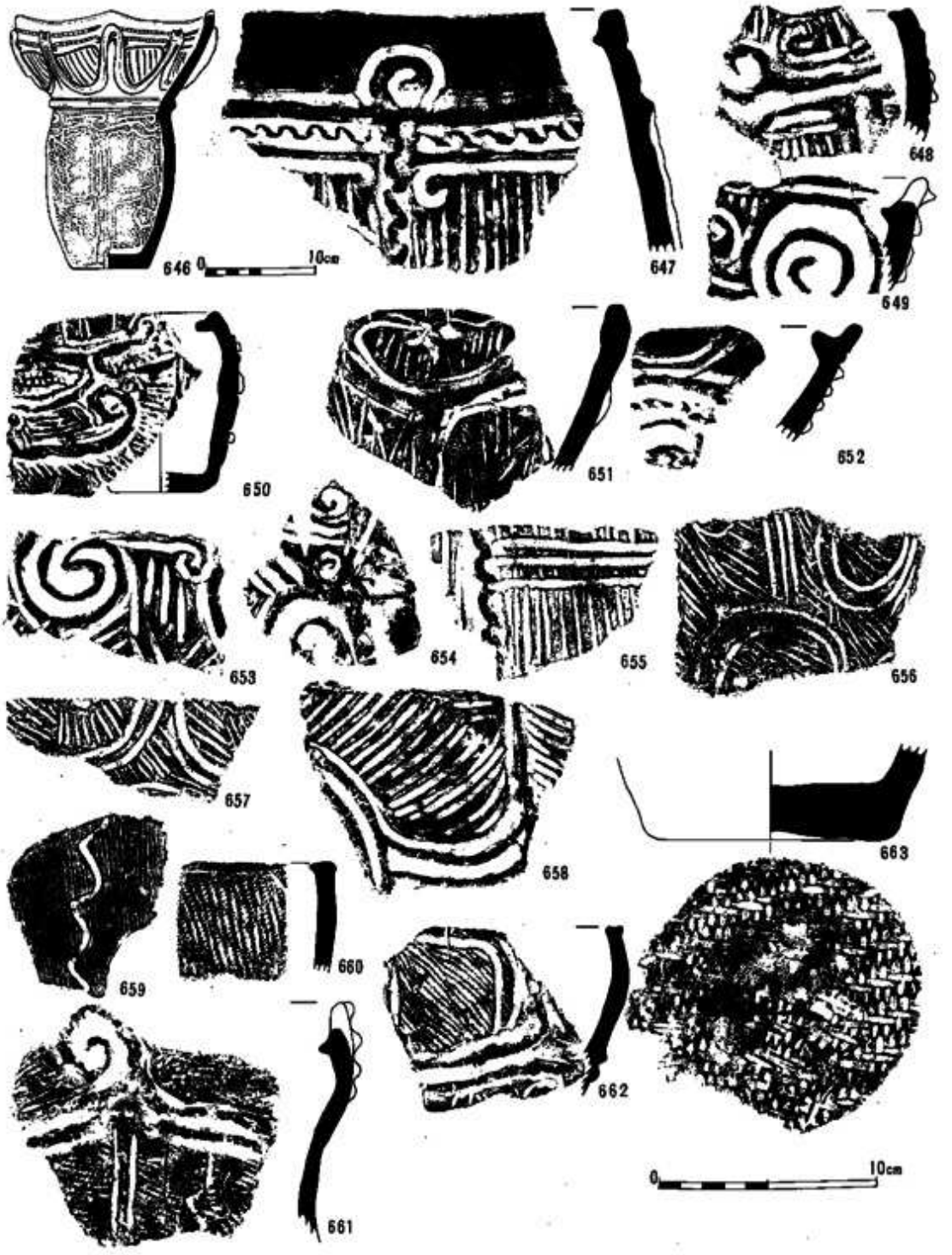
第76図　樋口内城館址遺跡74号住居址出土土器（605～606・622　1：6，他　1：3）



第77図　樋口内城館址遺跡88・84・90・94号住居址，特殊円形竪穴３・４・５・６実測図（１：80）



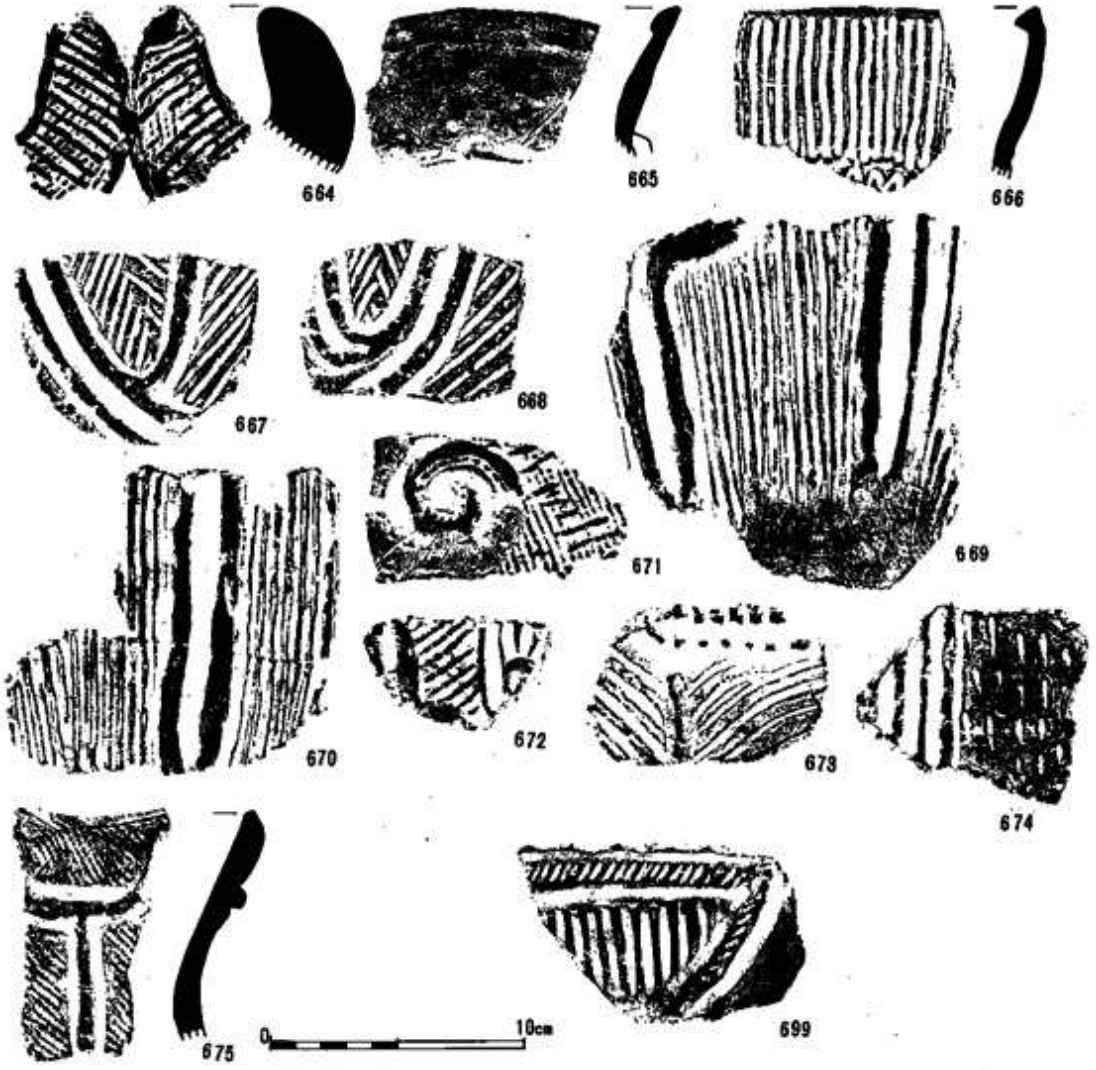
第78図　樋口内城館址遺跡88号住居址出土土器（ 627～ 628　1：6 ，他　1：3）



第79図　樋口内城館址遺跡84号住居址出土土器（646　1：6，他　1：3）

北に位置する縄文期94号住居址を切って本址は構築され、東部は、弥生期89号住居址および中世特殊円形竪穴４・５に切られ、更に南部は縄文期88号住居址を切っているという状態の他90号住居址の上に貼床をしており、発掘時に時間と労力を必要とした。4.85×4.20mの規模をもつ長円形プランで、中央北寄りに炉縁石１個だけを残す炉址が存する。炉址内には焼土と共に少量の灰、炭化物が残存している。残存壁高は15cmと浅く、床面も凹凸があって良好とはいいがたい。主柱穴は３個所確認されている。

遺物、土器は渦巻文、懸垂文を主体とした加曽利Ｅ式土器で、663の底部には網代痕がみられる。646は完形品の深鉢で、口縁に櫛形文の一種とみられるものが施され、胴部以下は縄文の地へ箆描き沈線文が区画をとっている。石器は、覆土中から打製石斧４と剥片利用の横刃形石器２が出土している。　（根津）



第80図　樋口内城館址遺跡90・16号住居址出土土器（１：３）（664～675　90住，699　16住）

ノ）90号住居址（図77、80の664～675、74の175～176、105の109～191、図版18の81）

遺構、丘陵北西端に位置する本址は、北西部にある94号住居址を切って構築されている。本址上には、縄文中期84号が貼床をして構築され、更に南部を弥生期の89号が同様にして構築されるという、複雑に住居が密集する地点である。本址は、5.09×5.13mの規模を有する円形プランで、壁は垂直に近く掘り込まれ北東部は高く壁面も堅く良好である。床面には、中世特殊円形竪穴5が大きく深く掘り込まれているが平坦で堅緻である。本址は火災に遭遇した住居で床面上に炭化物の堆積が5～7cmみられ、84号住居址の貼床下まで一面に広がっていた。主柱穴は4本と思えるが、東壁沿いに4穴並んだピットがあり、判断しかねる。壁下には周溝が作られており、床面中央やや北寄りに方形石囲炉があり、東部は炉縁石もあって原形を保っている。

遺物、出土量は少なく、完形品はない。懸垂文、渦巻文を主とする加曽利E式土器片である。石器は覆土中から磨製石斧2、磨石1が出土した。また191の土偶胸部も覆土中から出土している。　（根津）

ハ）94号住居址（図77・81・74の177～179、図18の81、33の163）

遺構、北部西端に検出された本址は、西側は急崖をなす用地外になるため、全貌を知り得なかった。南壁は、84、90号住居址に切られ、東壁には中世特殊円形竪穴が掘り込まれている。短径4.40mの規模を有する長円形プランのものと推察できる。床面はやや軟弱であり、主柱穴3が確認されている。炉は中央やや北寄りに位置すると思える。方形石囲炉で炉縁石も残り、内には焼土の堆積が厚く残っている。

遺物、土器片は勝坂式土器に比定されるもので、区画文と平行沈線文に2大別できよう。三角形区画の677、楕円区画の678、685があり、いずれも半截竹管工具による押引文、連続爪形文が顕著である。また697、698にみられる帯状隆帯上に縄文を施したものもある。680は覆土中から出土した顔面把手の破片である。つり上がった目をもち、やや雑な作りである。

石器は、打製石斧、凹石が覆土中から、敲打器が床面より各1点出土した。敲打器は両端にダメージをもつものである。　（根津）

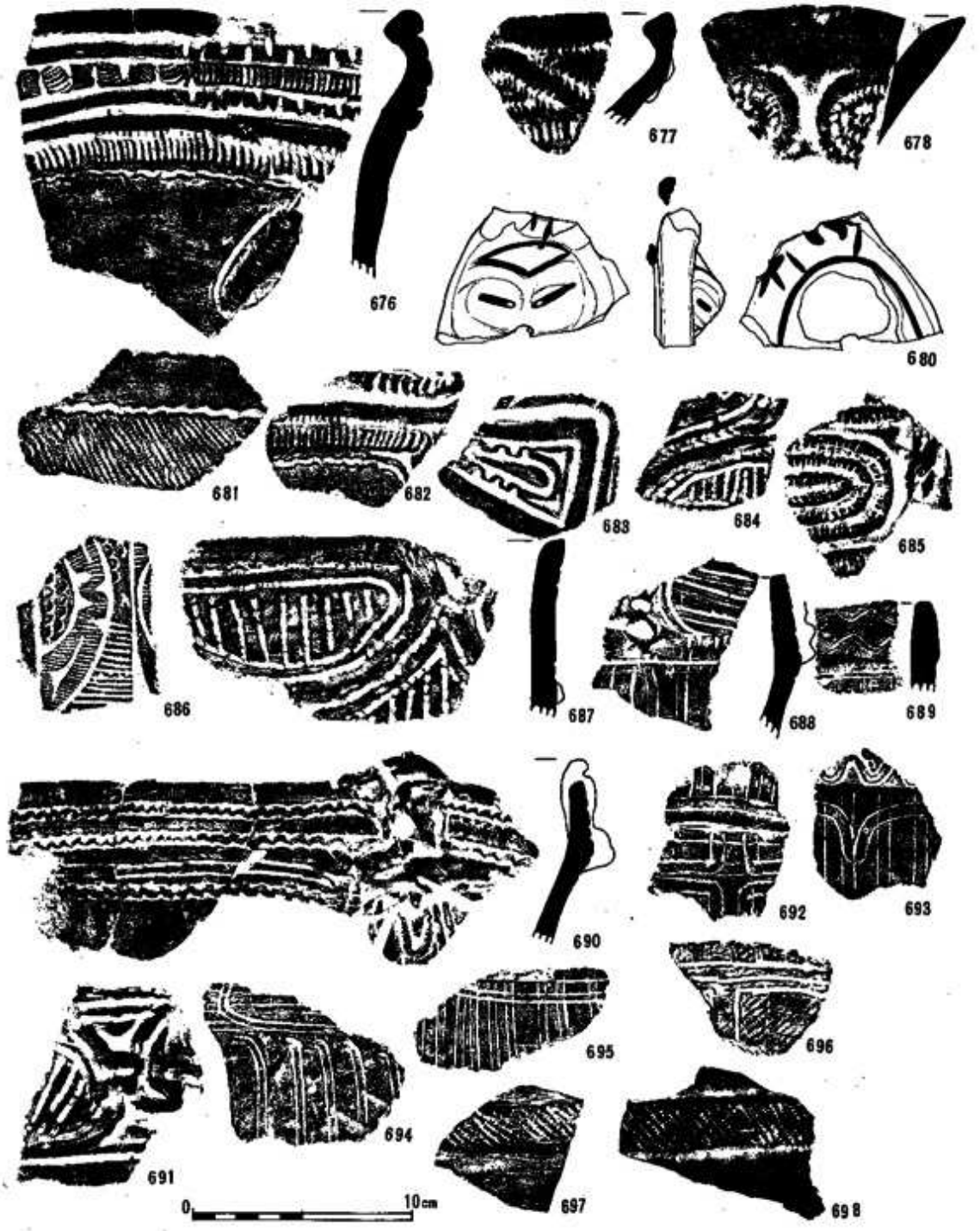
ヒ）16号住居址（図119、80の699）

遺構、丘陵西端、用地内ぎりぎりに検出された住居址で、北に溝状遺構1が隣接し、南に縄文期の2号住居址があり、東には土壙69と火葬墓1が隣接する位置にある。東壁の一部を確認したのみで、プラン等不明である。検出された東壁下の床面はローム土がしまって堅い。

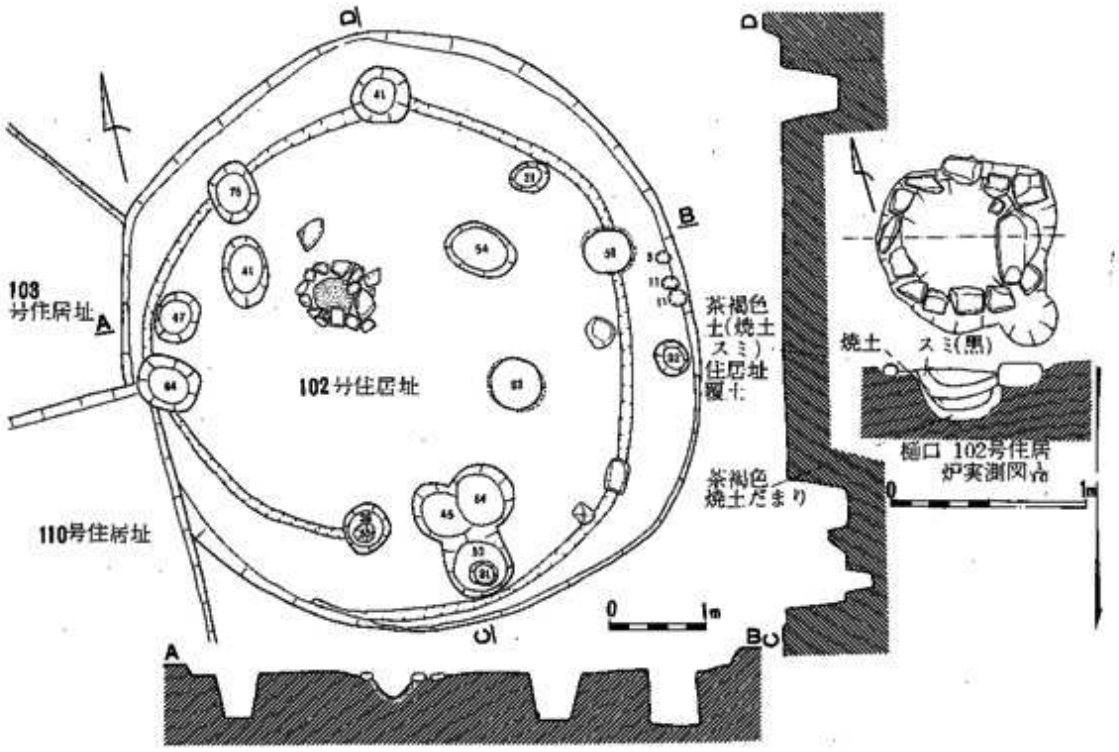
遺物、覆土中より少量の土器片をみたのみである。699は櫛形文をもつ勝坂式土器に比定されるものである。　（辰野）

フ）102号住居址（図82・83・84、92の180、105の192～193、図版21の92、33の162、34の164）

遺構、丘陵南端に位置し、西部を103、110号の弥生住居址と接するが、全貌を知り得た住居址である。5.85×6.27mの規模を有する円形プランで、中央北西寄りに石囲炉をもつ。本址はこの石囲炉を中心にして同心円状に拡張された痕跡がみられる。すなわち、周溝上と床面一部に貼床が認められ、当初の住居は周溝に沿って側壁が存したものと思える。床面は一部貼床を施し、ほぼ平坦で堅緻である。主柱穴は6個



第81図　樋口内城館址遺跡94号住居址出土土器(1：3)



第82図　樋口内城館址遺跡 102号住居址実測図（1：80）

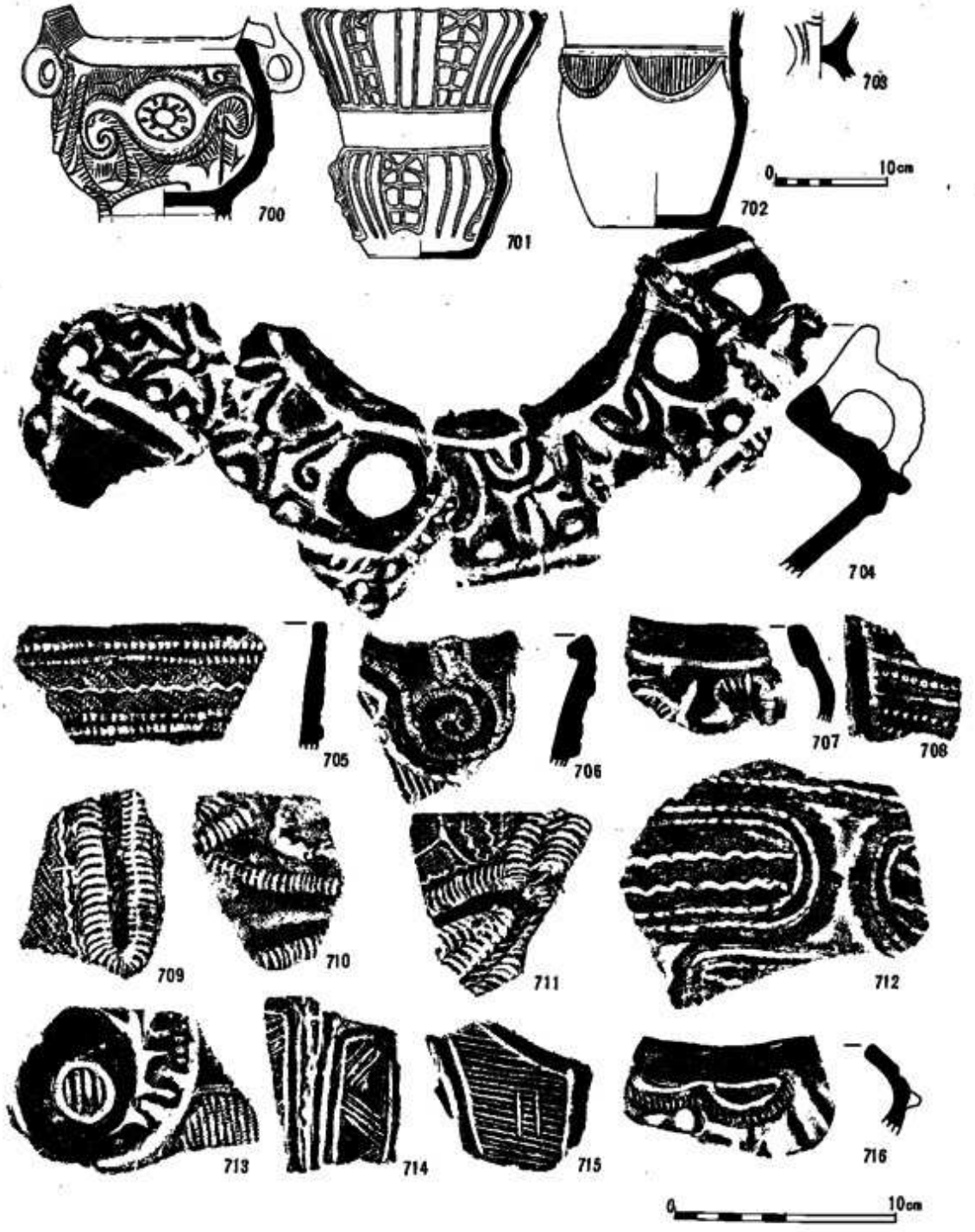
確認されたが、当初から6本であったか確認できなかった。

遺物、土器は縄文中期勝坂式土器に比定される一群で、700はピット内からの出土である。2個所に把手をもち、マジカルな文様を胴部に施した台付浅鉢である。供献用の土器として使われたものではなかろうか。701は胴部のくびれる深鉢で、器内面に黒色付着物があることから煮沸用のものであろう。縦に隆線文を有し、格子状の隆線をその間にもつもので、口縁部に6個所、胴部下に5個所施される。702、724は櫛形文を有するもの、732は刺突文を有するものであり、711、712には区画文に竹管工具の押引文、連続爪形文がみられる。

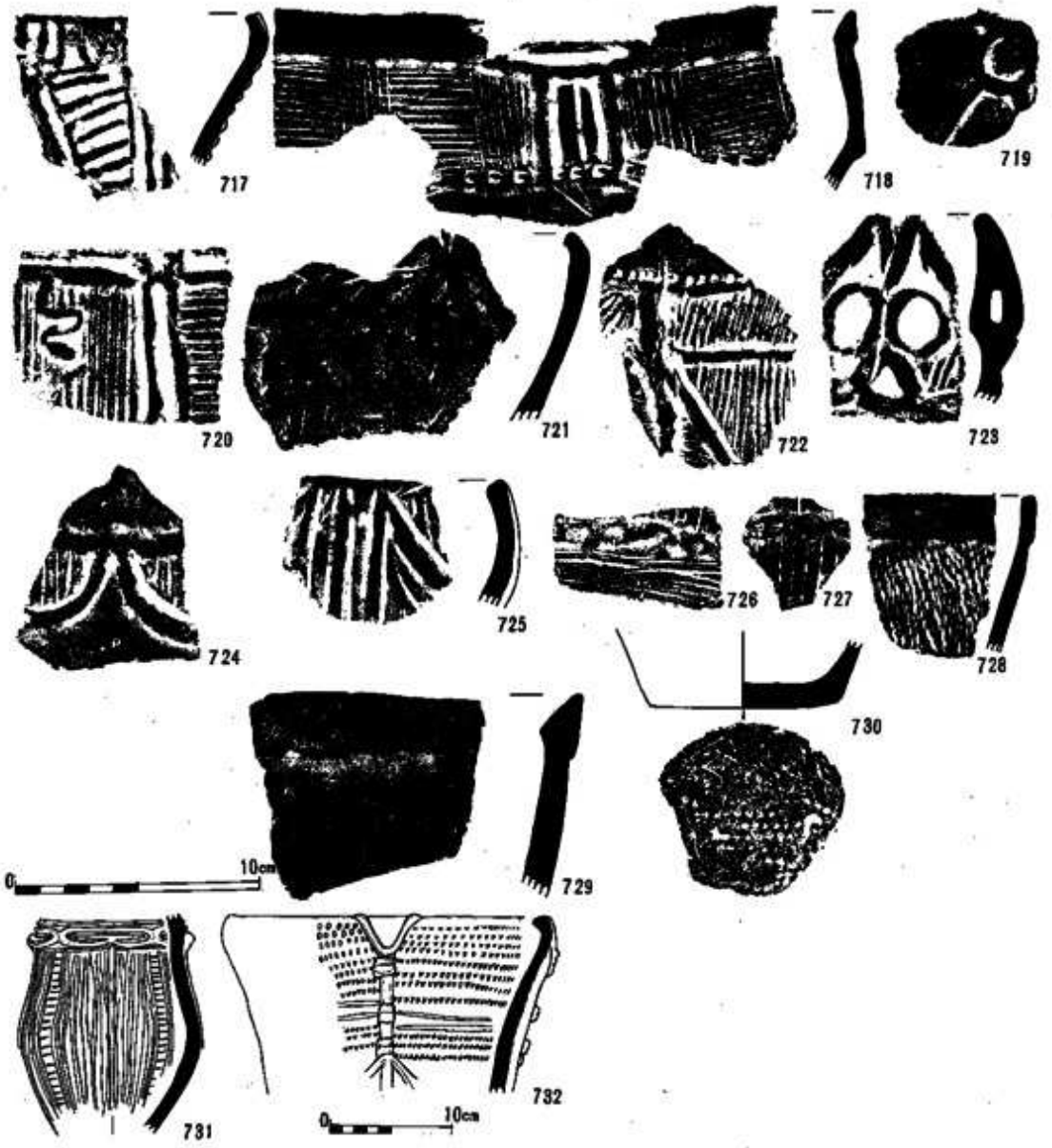
石器としては、本址東南周溝上から2つに割れた花崗岩製の石棒(180)が出土した。粗雑に打ち欠いたものである。石鏃は三角形を呈し断面が弯曲している。また193の土偶左手部が覆土中から出土している。石棒、土偶、マジカルな文様をもつ土器等から、本址は信仰的様相を強く感じさせる住居址である。(山田)

へ）107号住居址（図85・86、105の194～195、図版21の93、34の165～167）

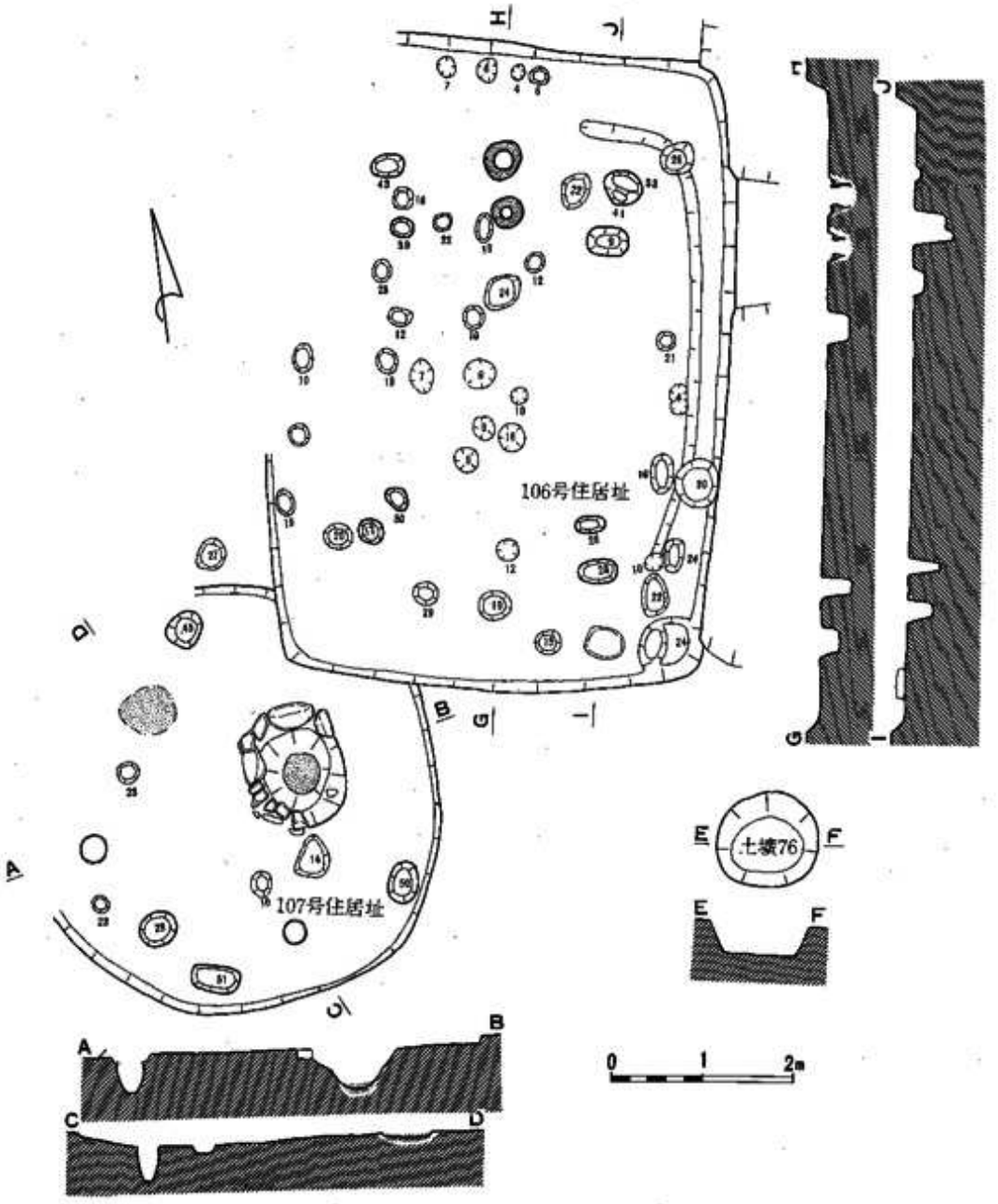
遺構、丘陵南端部に営なまれた本址は、北東部を106号住居址に切られ、西側は一部、露呈できなかったが、径4.68mの規模をもつ円形プランのものである。残存壁高は低く、10～14cmであり、床面は、北から南にやや傾斜をもつが堅緻である。炉は中央やや東寄りに石組方形竪穴炉が構築され、北側炉縁石は元位置に残存している。断面摺り鉢状を呈し、底部に赤色焼土の堆積をみた。埋甕は本址から2個検出され



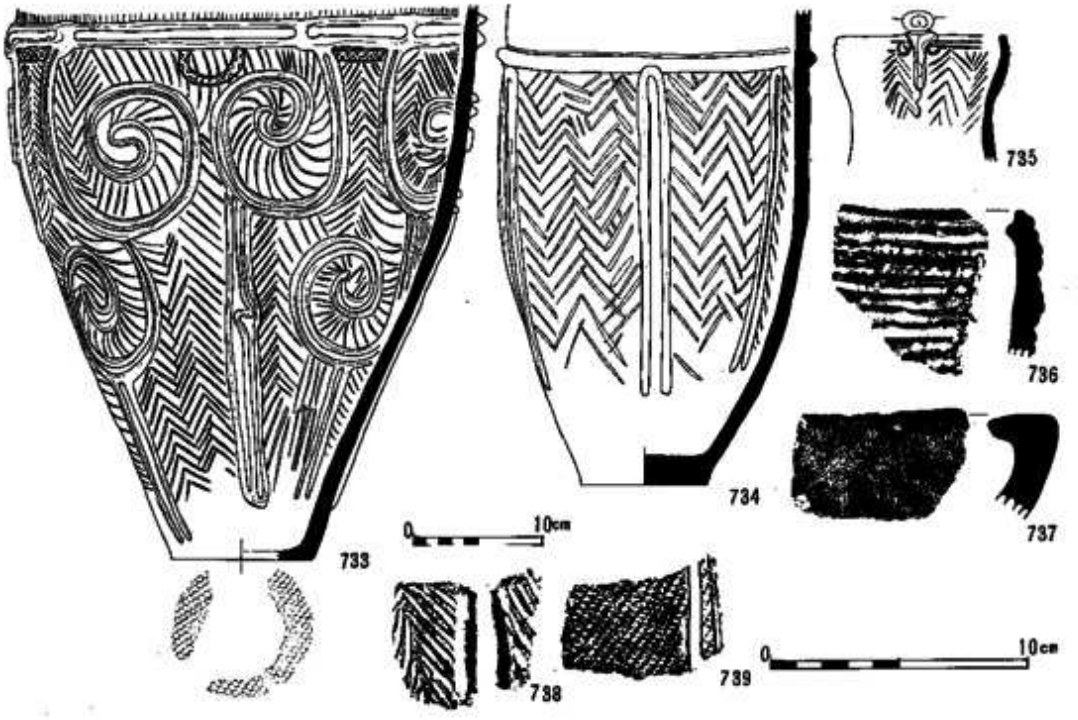
第83図　樋口内城館址遺跡 102号住居址出土土器（その1）
（700～703　1：6，他　1：3）



第84図　樋口内城館址遺跡 102号住居址出土土器(その２)
(731～ 732　1：6 ,他　1：3)



第85図　樋口内城館址遺跡 107・106号住居址，土壙76実測図（1：80）



第86図　樋口内城館址遺跡 107号住居址出土土器
（733～735　1：6，他　1：3）

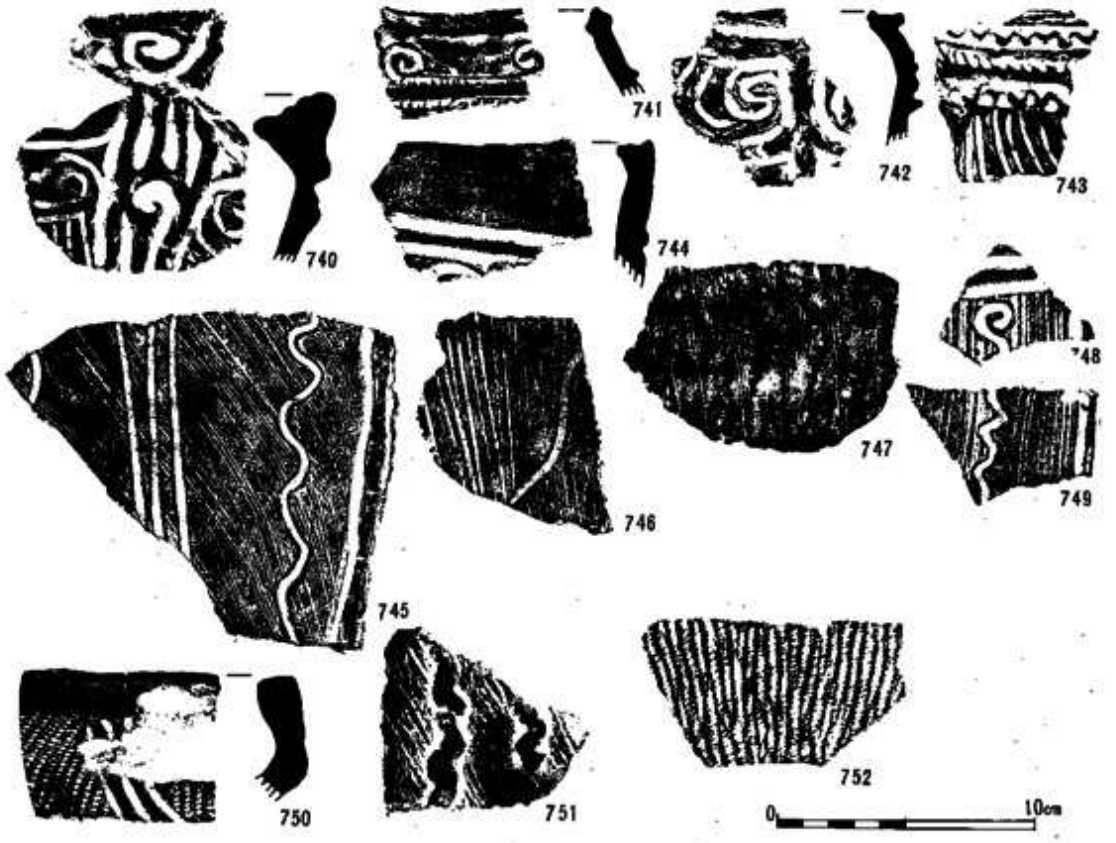
た。南側主柱穴間、南壁内、50cmに検出された734、西壁内に検出された733がそれである。北側主柱穴南に認められた浅い凹みをもつ焼土と共に、二埋甕間に若干の時期差を考慮すべきであろう。貼床の検出はなかったが、西壁内の埋甕の方が、南壁のものより、床面下10cmに口縁があり、やや深めという違いをみたにとどまった。いずれも正位の状態で埋設されている。

遺物、出土量は多くないが、埋甕が本址の時期決定の手がかりとなる。733は口縁部を欠き、底部穿孔がみられる懸垂渦巻文土器であり、734、735は、綾杉文をもつもので、いずれも加曽利E式土器である。

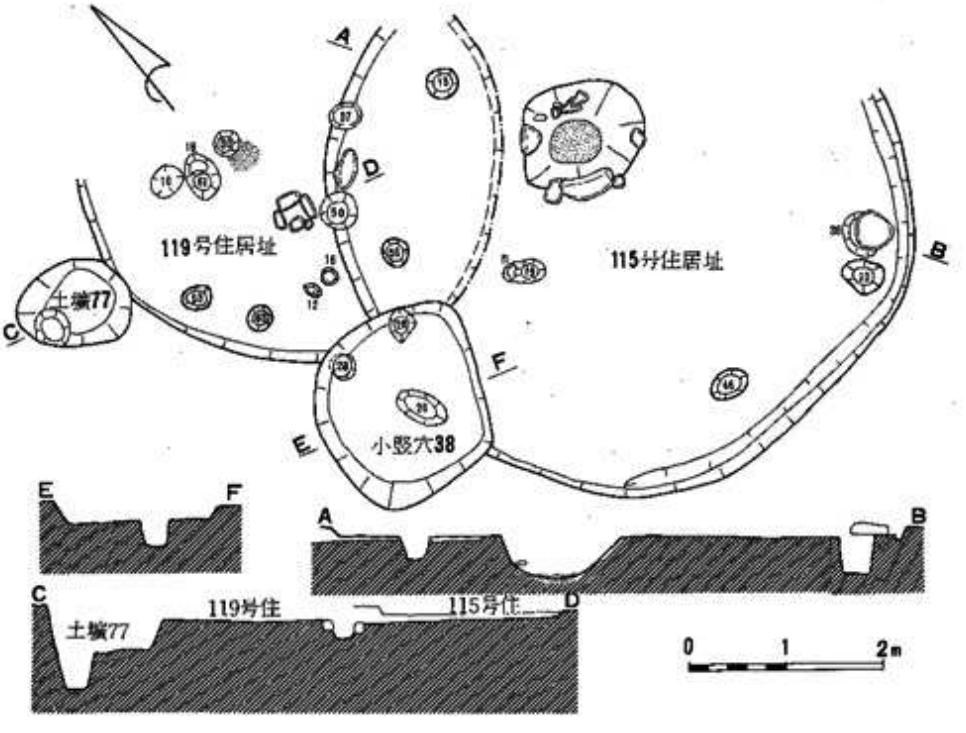
石器は石鏃2が覆土中から検出されている。（福沢）

ホ）115号住居址（図87、図版22の101）

遺構、丘陵北東寄りにあって、119号住居址、小竪穴38と切り合って検出され、119号住居址の東半を張って構築されている。円形プランで南北6.03mの規模を有する。残存壁高は約10cmを計り、南壁に沿って周溝が認められた。主柱穴は2本認められるが、4本であったと推定される。床面は平坦で堅緻であり入口部と推定される南東周溝内に接して平石がおかれ、その下に深さ36cmのピットが検出された。埋甕的な機能を有するものではなかろうか。炉址は、中央やや北寄りに位置し、一部炉縁石の残る断面擂り鉢状を呈する方形石囲竪穴炉である。



第87図　樋口内城館址遺跡 115号住居址出土土器（1：3）



第87図　樋口内城館址遺跡 115・119号住居址，小竪穴38，土壙77実測図
（1：80）および 115号住居址出土土器（1：3）

遺物、石器の出土はなく、土器の出土量も少ない。土器は、いずれも深鉢形土器片で、渦巻文、懸垂文をもつ加曽利E式土器である。（山岡）

マ）117号住居址（図198・88・92の181～184、105の196～197、図版22の100）

遺構、丘陵中程やや東に位置し、弥生期116号住居址に切られて検出された。径6.48mを有する円形プランの住居址であろう。西側を除く壁と床面が一部認められたにすぎず、内部状況は不明である。

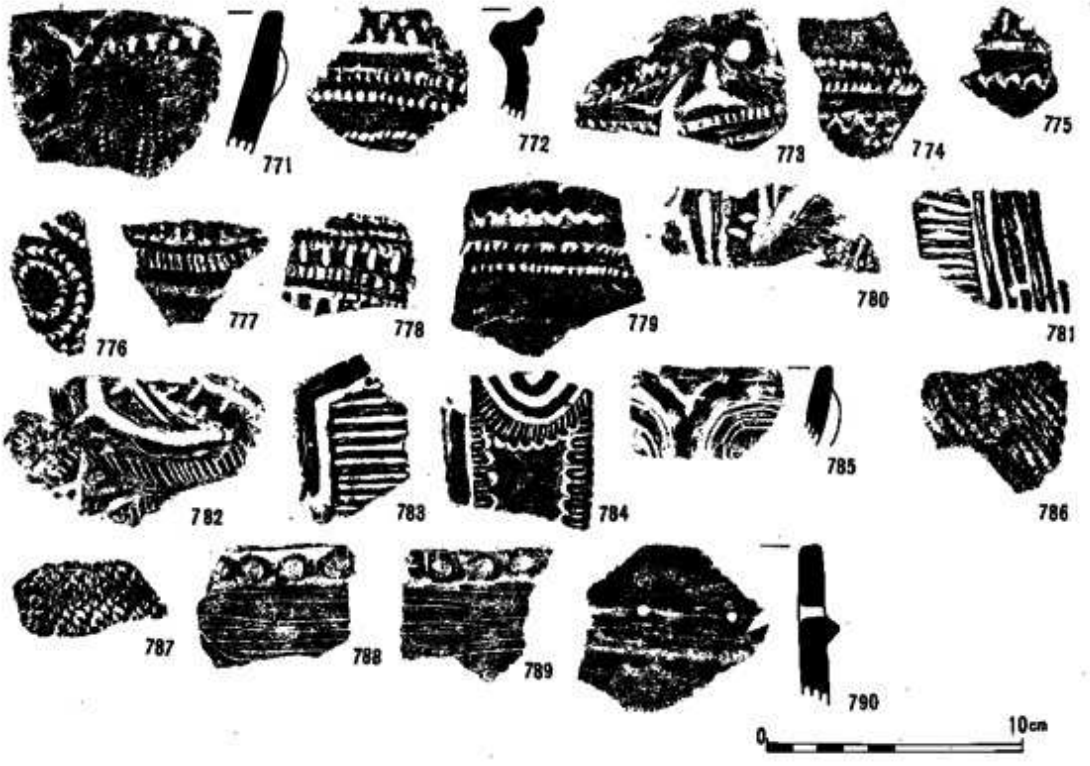
第88図　樋口内城館址遺跡 117号住居址出土土器（1：3）

遺物、土器と石器が出土している。土器は753～770の加曽利E式土器に比定されるもので、地文に縄文綾杉文をもち渦巻文、懸垂文を施したものである。753は胴部下半で、櫛形文の名残りと思える隆帯が施されている。底は網代痕をもつ。石器は覆土中から磨製石斧５、石鏃１が出土したが、116号住居址のものと判別するのが困難である。（福沢）

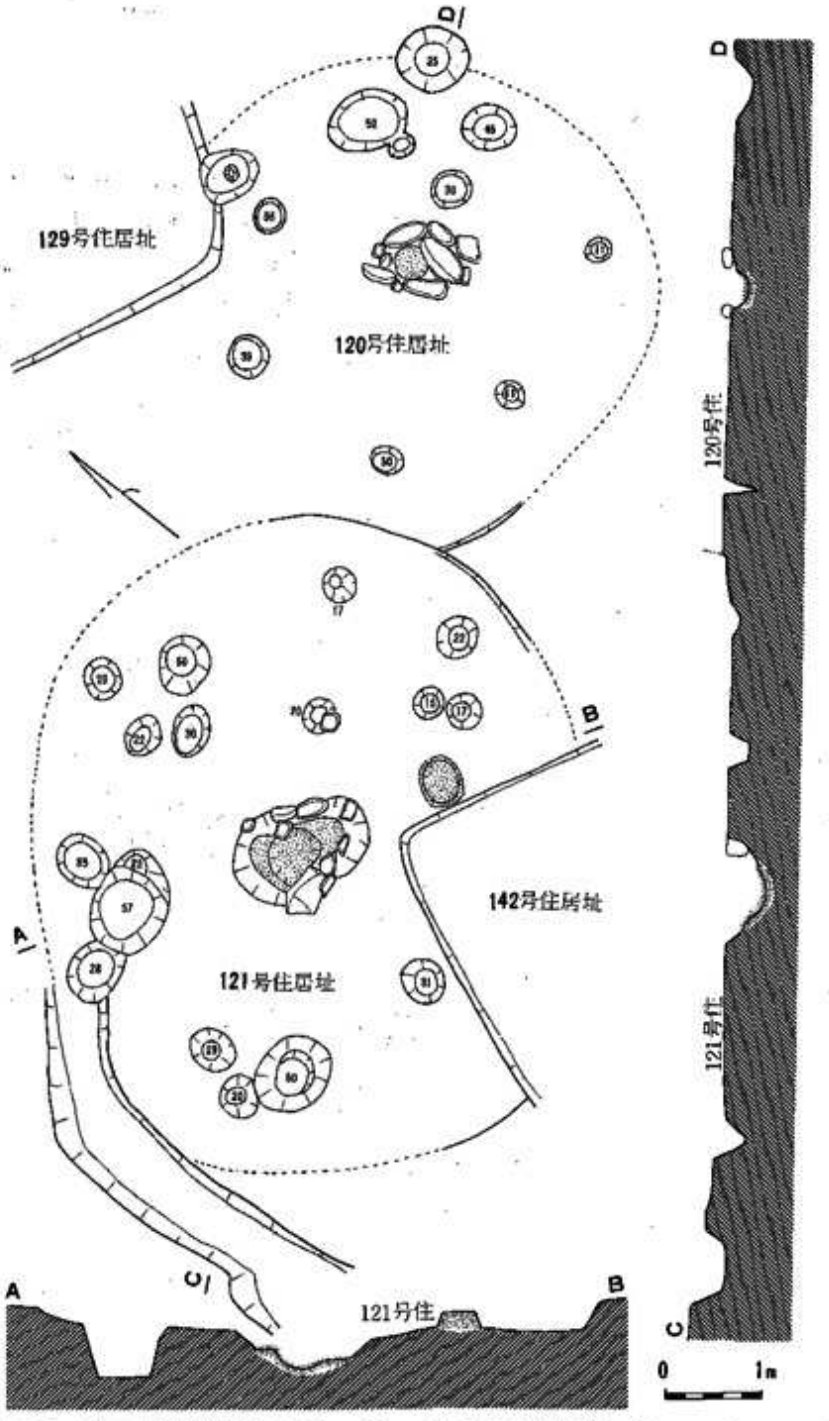
ミ）119号住居址（図87・89、図版22の101）

遺構、115号住居址の西に重複して検出された本址は、東西4.50mの規模をもつ円形プランの住居址である。壁は４～５cmのところもあって判然としない部分もある。床面は一部に堅い面も残しているが、おおむね軟弱である。本址床面上には115号住居址が貼床をして営なまれている。中央やや南寄りに石囲炉がある。方形を呈し、５個の石が用いられており、40×45cmと規模は小さい。内部には焼土と炭化物が混入しているが、焼けは余り強くない。炉の北側にも浅い凹みがあって中には焼土がつまり、凹みの表面も焼けている。

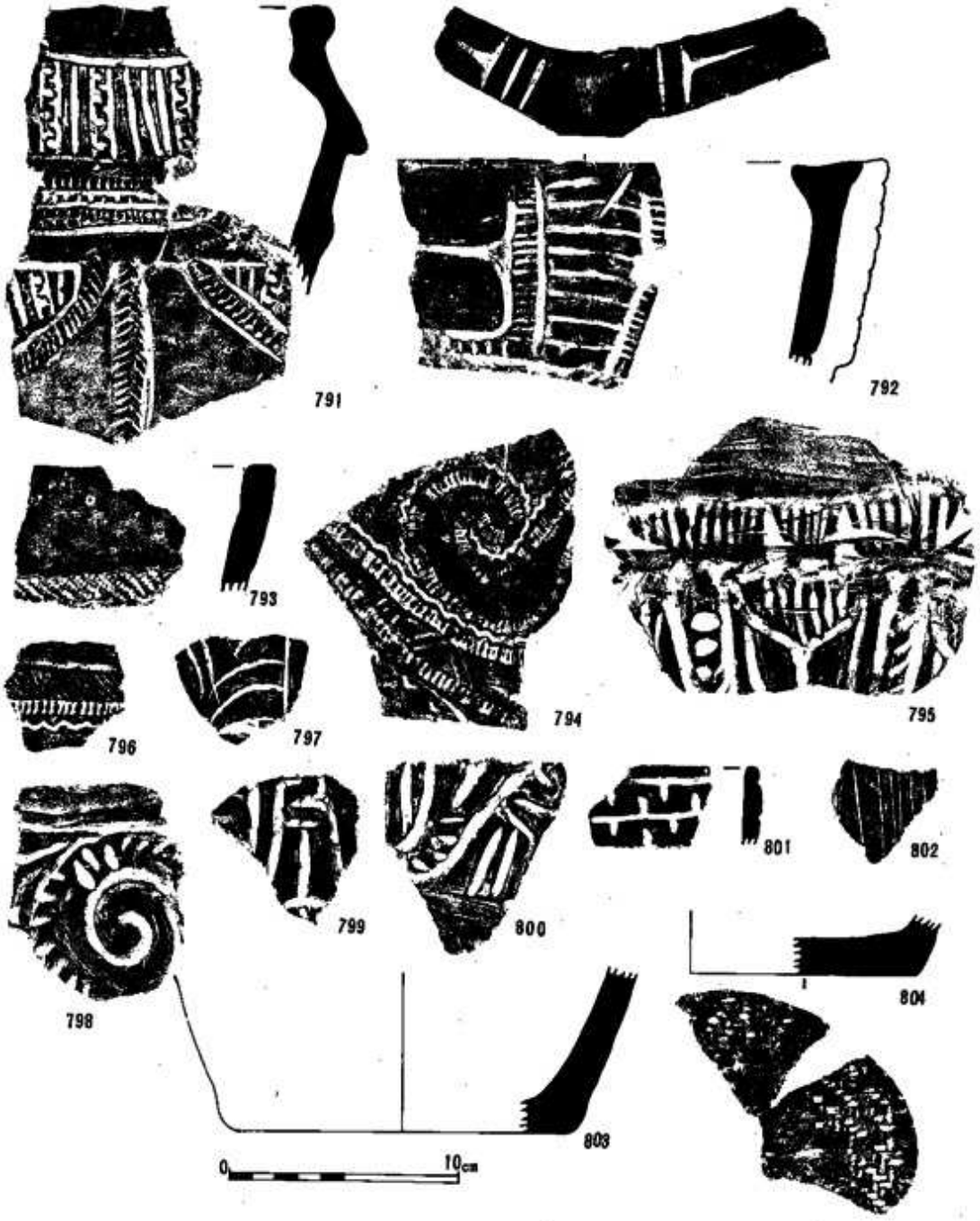
遺物、石囲炉北の焼土に混って、縄文中期勝坂式の深鉢片が出土している。半截竹管工具による連続爪形文が多い中で、788、789の平行沈線文も伴出している。胴部片で横走する隆帯上に指圧痕が施される。790は、有孔鍔付土器片で覆土中より出土した。（深沢）



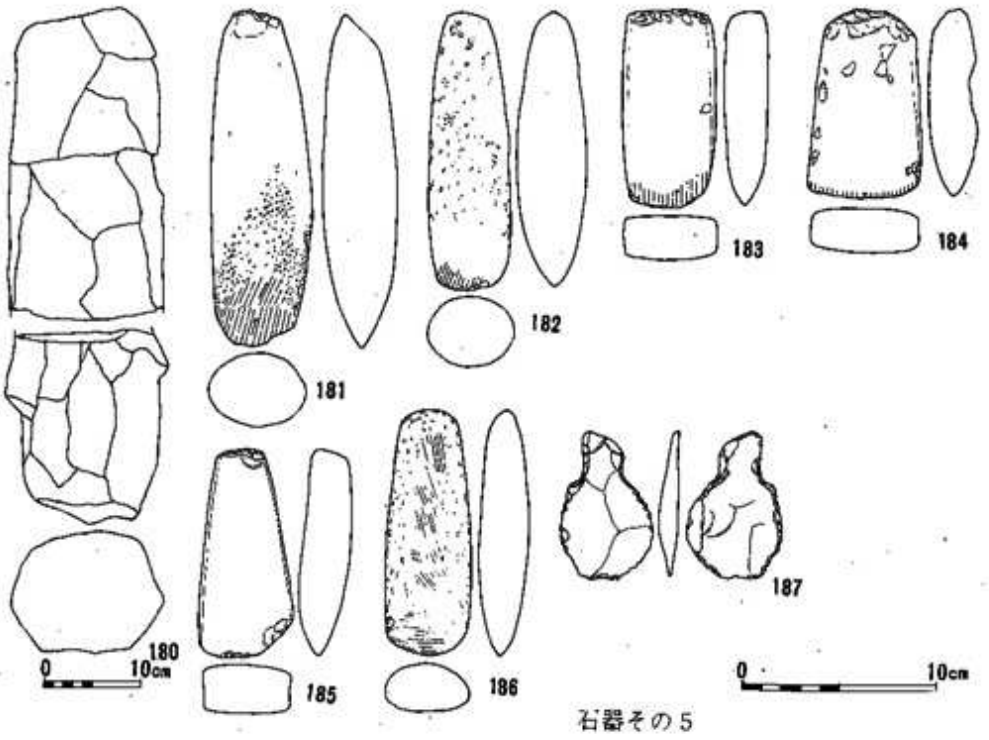
第89図　樋口内城館址遺跡址 119号住居址出土土器（１：３）



第90図　樋口内城館址遺跡 120・121・142号住居址実測図（1：80）



第91図　樋口内城館址遺跡 120号住居址出土土器（1：3）



第第92図　樋口内城館址遺跡 102・117・ 120・ 127号住居址出土石器（1：4）
（180　102号住居址覆土，181～184　117号住居址覆土，187　127号住居址覆土）

ム）120・121号住居址（図90）

a）120号住居址（図91・92の185～186）

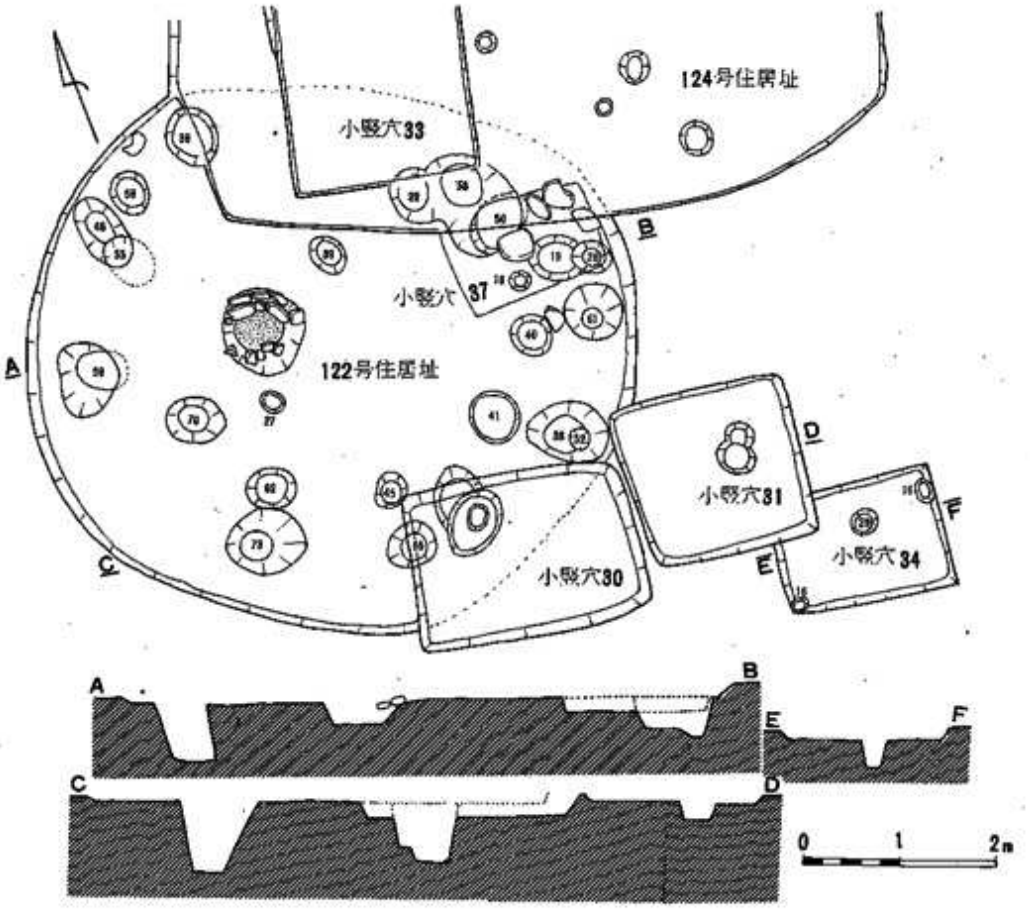
遺構、丘陵南東端に営なまれた本址は、南西部を121号住居址に、北西部を弥生期129号住居址に切られて検出された。耕作による破壊が進んでおり、南に一部分側壁を認めただけで東壁を認め得られなかった。推定、4.85×4.93mの円形プランと思われ、床面は、一部軟弱であるが概して堅く、判別し易かった。主柱穴6個所が検出され、炉はほぼ中央辺と思われる位置に10個の自然石で構築されている。炉址内は凹みをもち、焼土の堆積がみられた。

遺物、半截竹管工具による押引文、連続爪形文を施した勝坂式土器片で、791は櫛形文をもつ。平出3A式の802も伴出している。石器は覆土中から磨製石斧2点が出土した。（小松原）

b）121号住居址（図93、図版22の99）

遺構、丘陵南東端に位置し、120号住居地の南西を切って構築されている。南東部は142号住居址に切られ、南西には、溝状の遺構が掘られている。推定6mの規模をもつ円形プランであろう。壁も一部に認められただけで削り取られている。床面は凹凸がはげしく良好とはいえない。床面上には多くのピットが存するが、本址に伴うものか不明である。炉は断面摺り鉢状を呈する有段の石囲い竪穴炉で、本址中央辺に構築されている。焼土が堆積し、炭化物が若干量検出された。炉址東には床面上に堆積した焼土が20cmの厚さで認められた。

第93図　樋口内城館址遺跡 121号住居址出土土器（１：３）



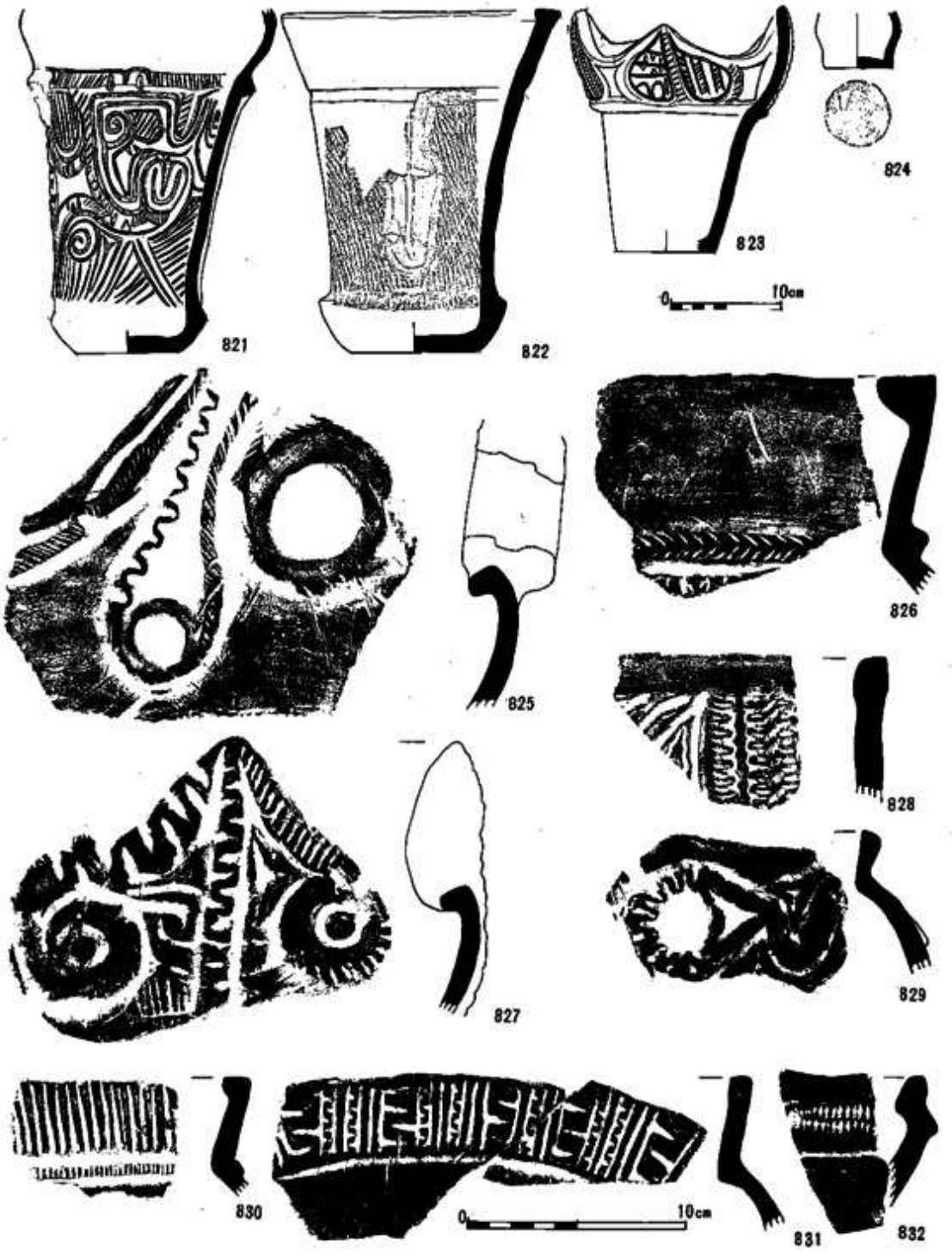
第94図　樋口内城館址遺跡 122号住居址，小竪穴30・31・32実測図（1：80）

遺物、805～820の土器片で加曽利E式土器に比定される。渦巻文、懸垂文が施され、綾杉文(805～813)縄文（815～818）で飾られている。805は大形把手であり、820には網代痕がみられる。　（小松原）

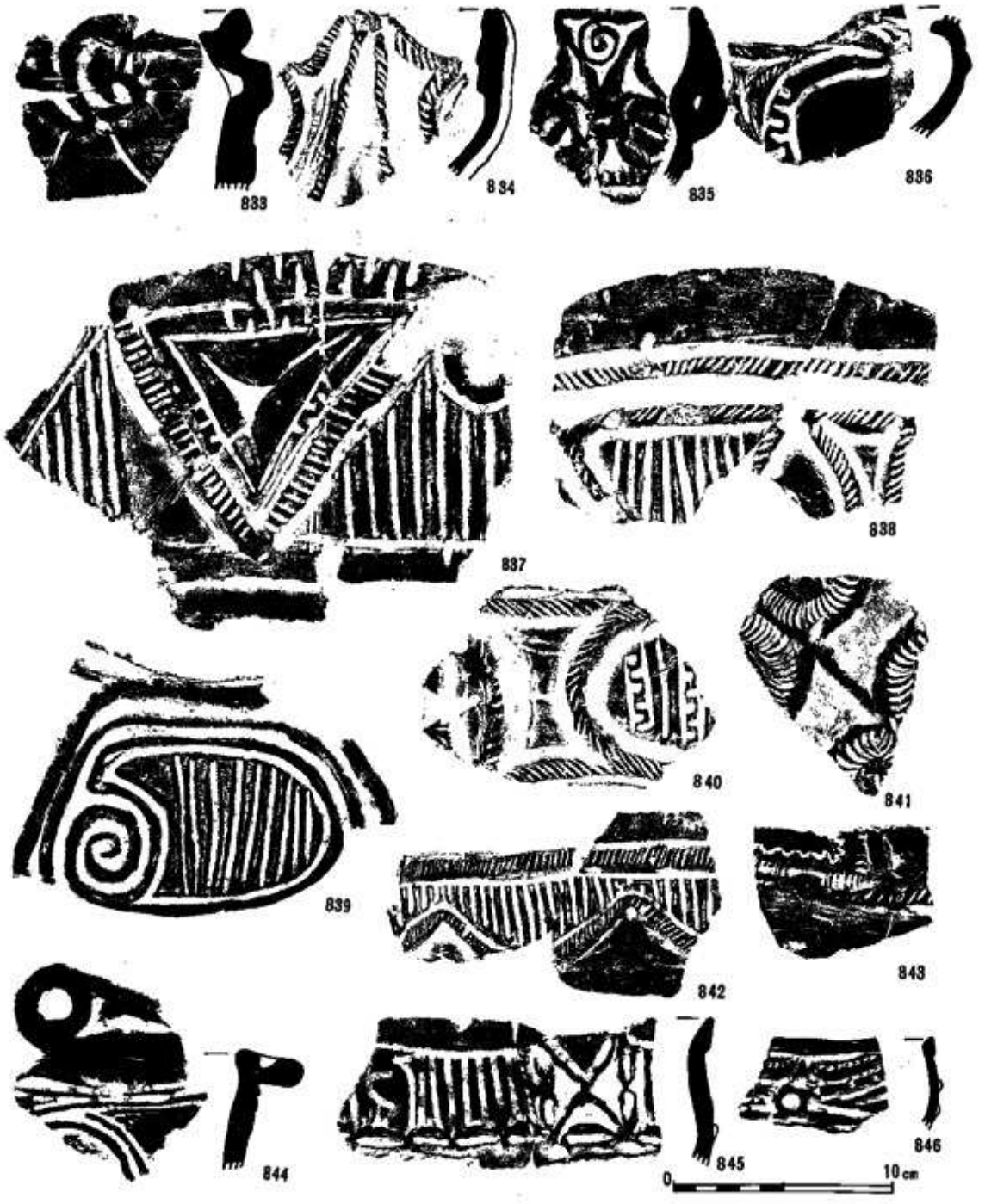
メ）122号住居址（図94～97、105の198～199、図版23の103～104、34の168～170）

遺構、丘陵南東部に位置した本址は、北東部を弥生期124号住居址と中世小竪穴33・37に、南東部を小竪穴30、31に切られている。ロームを基盤とした、6.30×5.55mの規模をもつ円形プランである。側壁は西から南にかけて7～5cmと低いが残り、傾斜も緩やかで床面に続く。床面は平坦だが軟弱で、壁に沿って不等間隔に十数個のピットが掘られており、主柱穴を決めるのに困難である。深さも38～73cmと比較的に深い。炉は中央やや北寄りに位置している。径85cm、深さ20cmの擂鉢状に掘り込まれて、北側には20～30cm大の石7個が二重に囲むように配置されているが、南側は抜き取られたのか5個の石が凹みに残されている。炉址内には焼土と炭化物が混入し、底部は強く焼けている。

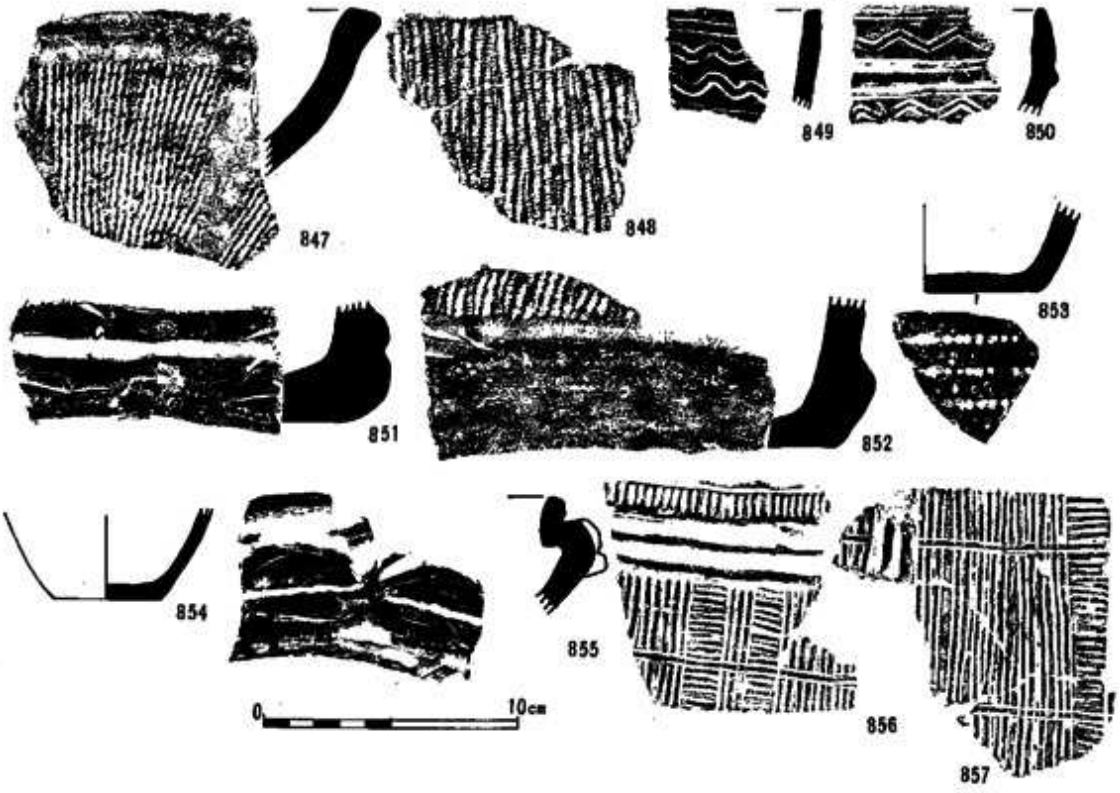
遺物、土器の出土量が多く、いわゆる吹上パターン状を呈した状態で検出された。炉址周辺が最も多く



第95図　樋口内城館址遺跡 122号住居址出土土器(その1)
(821～824　1：6，他　1：3)



第96図　樋口内城館址遺跡 122号住居址出土土器(その２)(１：３)



第97図　樋口内城館址遺跡 122号住居址出土土器（その３）（１：３）

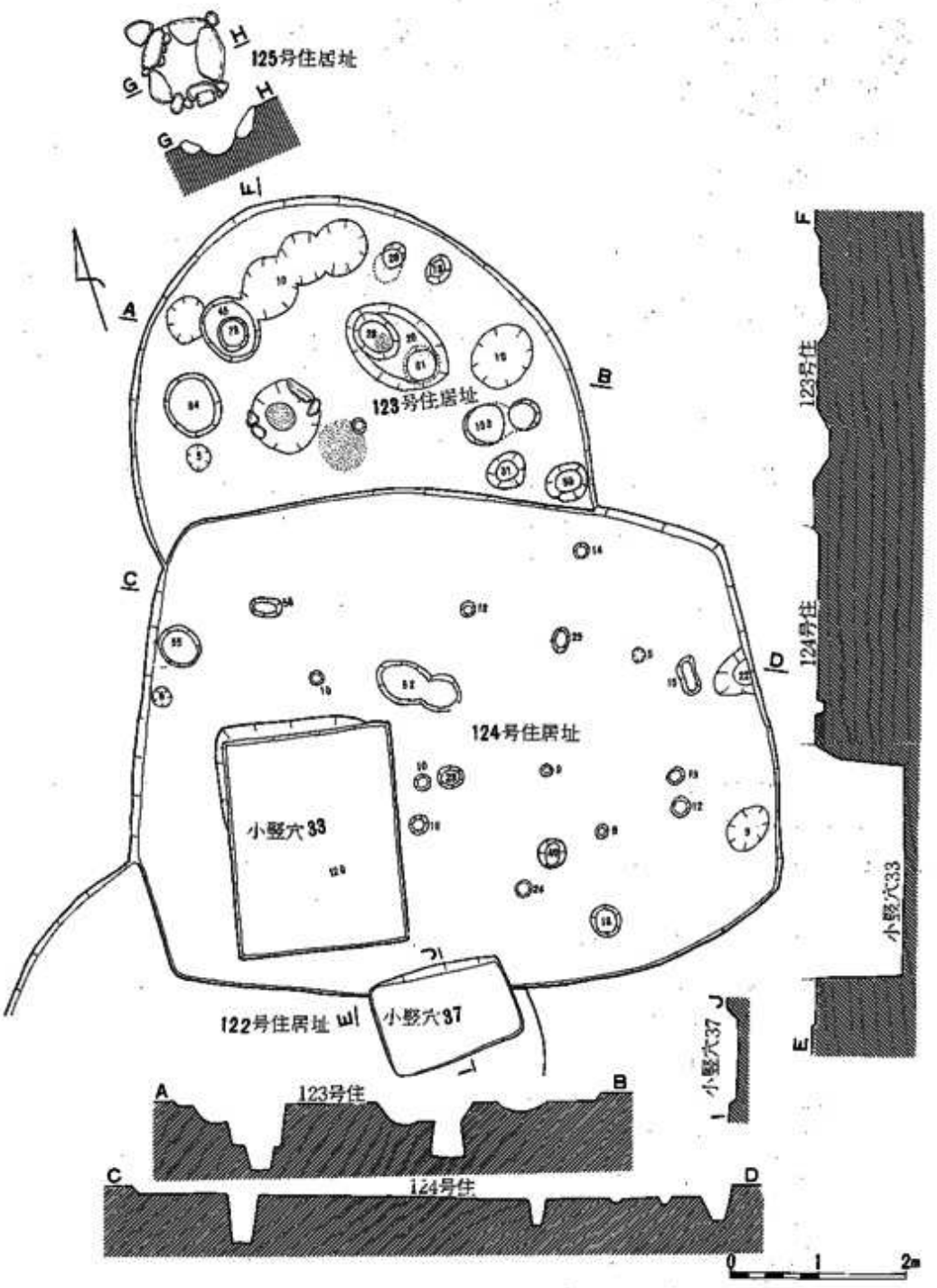
蝟集しており、炉址埋没後に捨てられたものと思える。炉址上からは完形の821、823が出土し、炉址東から822が破片となって出土した。区画文を有する勝坂式土器である。

石器は石鏃２点が覆土中から出土した。　（深沢）

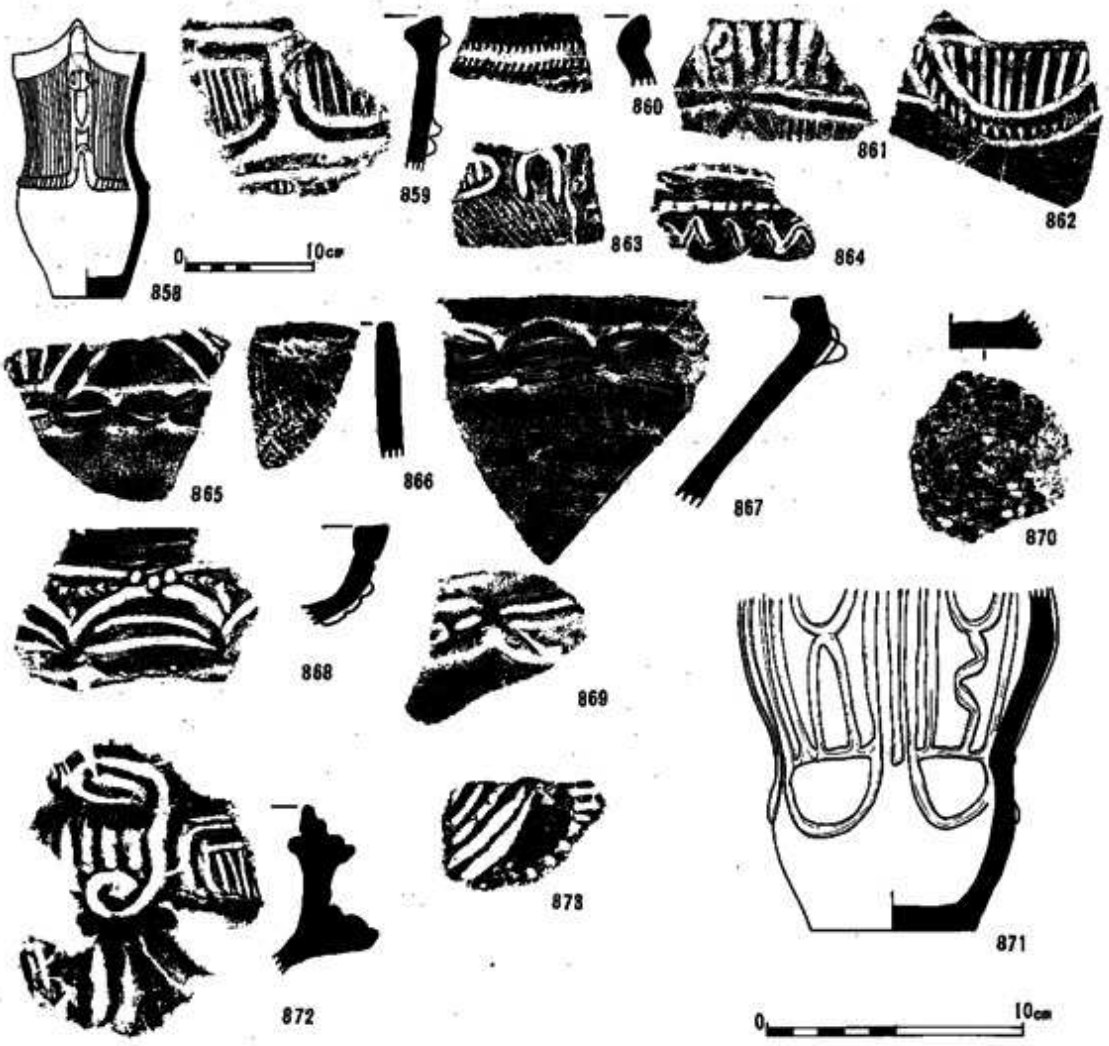
モ）123号住居址（図98・99、図版23の103・105、35の172）

遺構、125号住居址を切り、南半は124号住居址に切られて検出された本址は、東西5.20mを計る円形プランである。残存壁高は低く、床面上には大小十数個のピットがあって、いずれが主柱穴と判定し難い。凹凸がはげしく床面は良好とはいえないが、一部に堅緻な面をもつ。炉址は中央やや西寄りに構築された石囲炉で、４個の炉縁石が残る。浅い凹みで底面に焼土をもつが、余り強く焼けていない。炉の東に接して焼土面が検出され、また炉址東60cmの位置に２穴を有する凹みが存し、底部に焼土の含有がみられた。このピット内から871の小形深鉢が出土している。また北西の深い２ピット内よりも、若干の焼土と焼石が検出された。

遺物、出土土器は縄文中期勝坂式土器に比定されるものである。858は両端に山状把手を有し、刻目をもつ隆帯内を箆描き平行沈線で満している。871は口縁部を欠くが、口縁部から垂下する隆帯の下に半月形の隆帯をもつもので、先記ピット内より出土している。　（辰野）



第98図　樋口内城館址遺跡 123・ 125・ 124号住居址，小竪穴33・37実測図（1：80）



第99図　樋口内城館址遺跡 123・125号住居址 出土土器（858　1：6，他　1：3）
（858～871　123住，872～873　125住）

ヤ）125号住居址（図98、99の872～873）

遺構、123号住居址の北隣りに確認された炉址のみで、プラン等不明である。自然石を方形に組んだ堅固な石囲炉で径1mを数える。

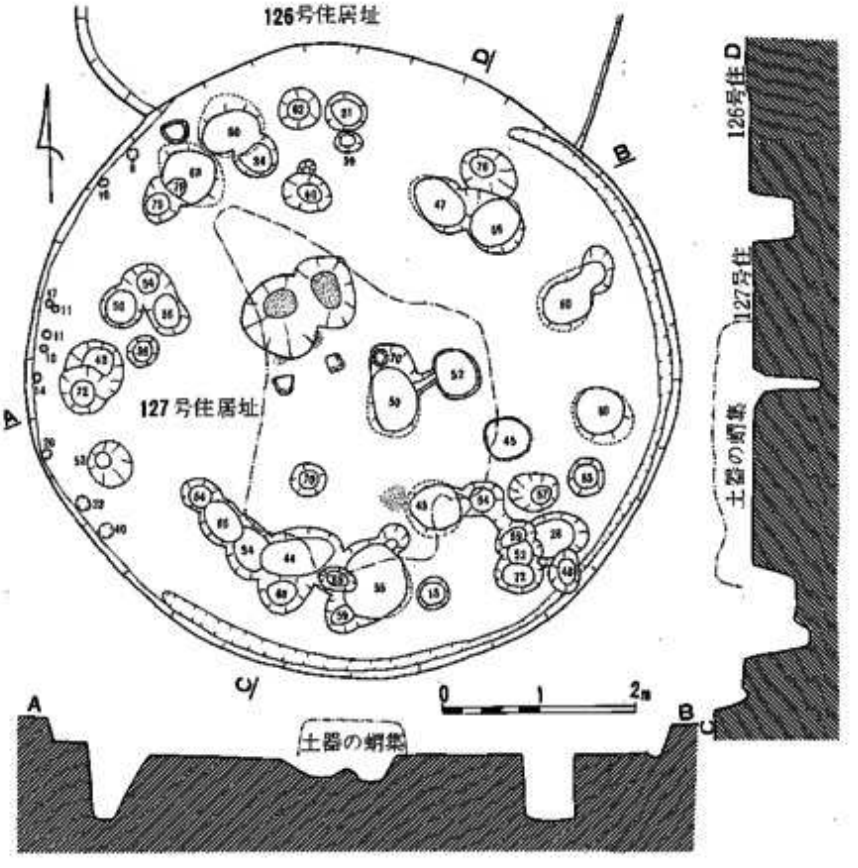
遺物、土器片2片の出土のみで、所属時期決定は困難である。（山田）

ユ)127号住居址(図100～104、92の187、105の200、図版24の109～112、35の173～177、36の178～180、40の217)

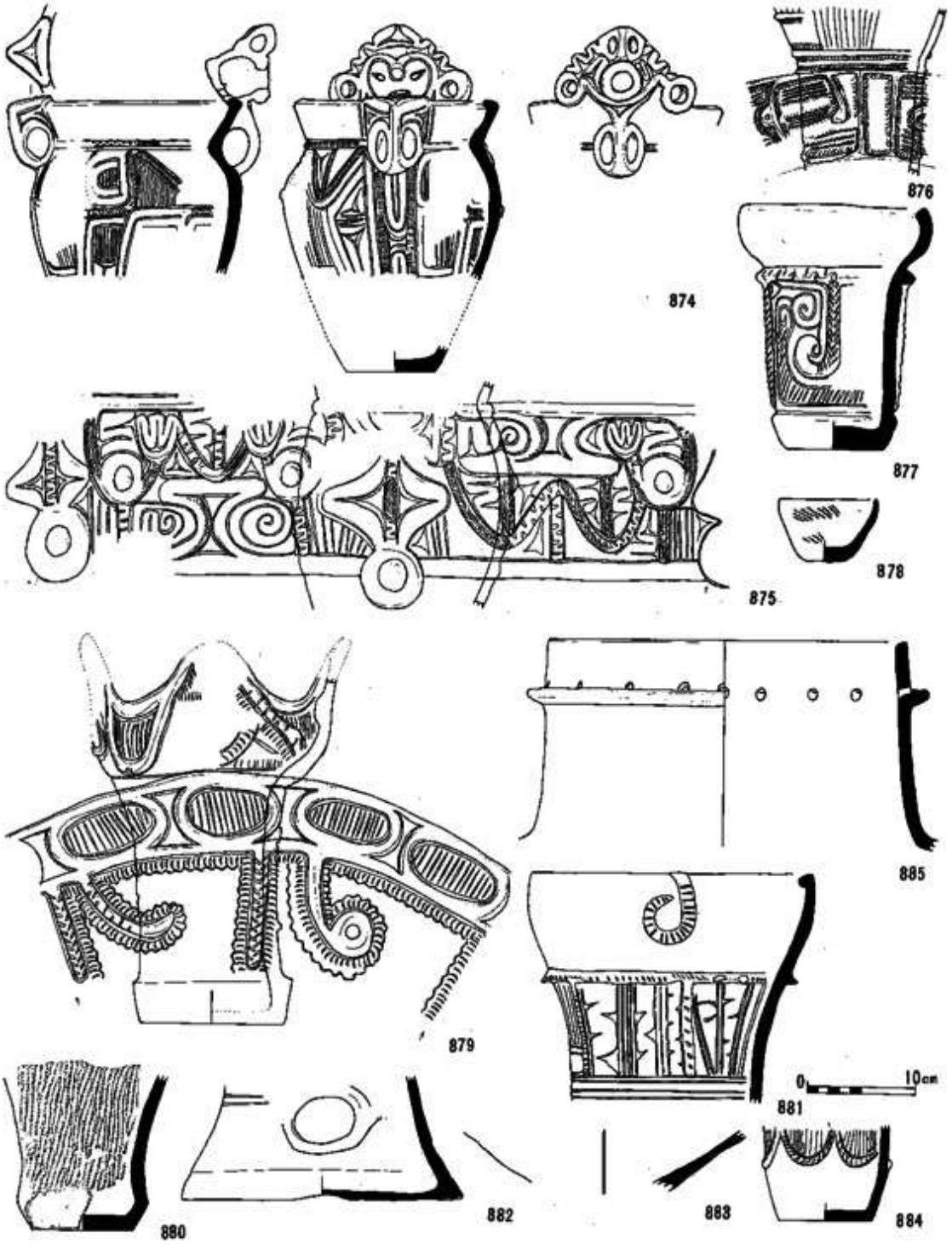
遺構、丘陵中央東寄りに営なまれた本址は、北壁を弥生期126号住居址に切られて検出された。本址廃屋後、土器、石等が投げ込まれた状態で中央部に多量に蝟集していた。床面と蝟集土器群との間には15～20cmの黒褐色土の間層がある。範囲は東西2.5m、東北4mを数える。

本址は、円形プランの6.84×6.53mという大きな規模をもつ。壁は垂直に近い掘り込みで、南から東壁内に周溝をめぐらす。床面上には大小のピットが壁に沿って多数検出された。大別して5ケ所に分けられることから主柱穴は5個所と思われる。再度に及ぶ建て替えの結果なのだろうか。また西壁に沿って、補助柱穴と思われる小ピットが検出されている。炉址は中央やや北西寄りに2個所の凹みと焼土をもって検出された。炉址南に炉縁石に使用されたと思われる自然石が2個、床面上に存した。

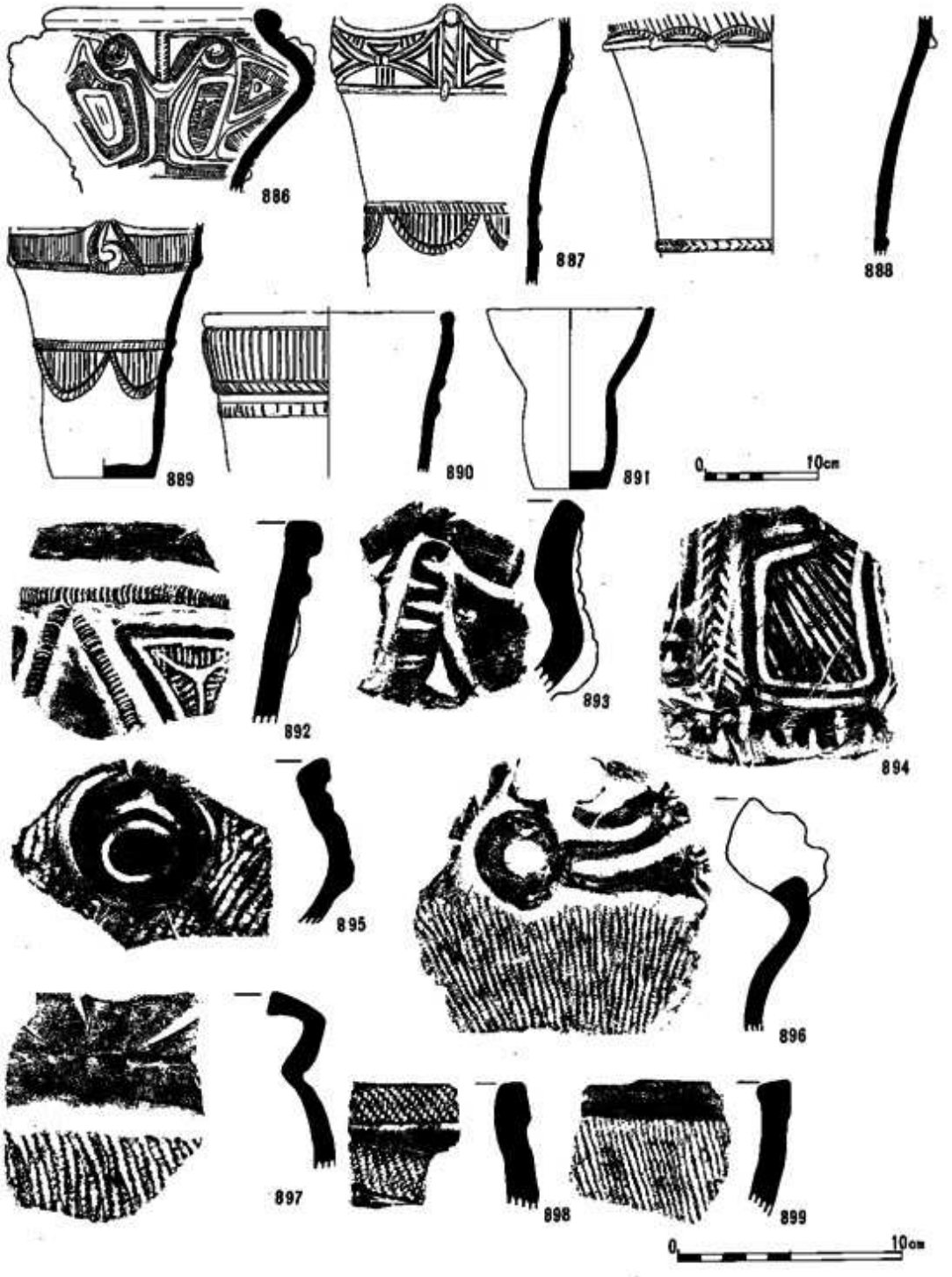
遺物、土器の出土はすこぶる多い。個体数にして30を越すものと思える。勝坂式土器が殆んどで深鉢形土器が主体を占めるが、878の小形浅鉢、882、885の有孔鍔付土器、883、930の浅鉢形土器もみられる。874は器形の判明する顔面把手付土器で、器内を見守る顔は穏和で、大きな耳は耳飾りであろうか。875は口縁部と底部を欠くもので、マジカルな文様構成をもつ。879は波状口縁をもつもので、胴部に楕円形の区画隆帯をもち内はヘラ描き平行条線をもつ。胴部から垂下する隆帯およびそれに沿って連続爪形文が施されている。884、889には櫛形文が施されている。912は顔面把手のみである。また覆土中から土器片と共に土偶胸部片（200）が出土している。石器は石匙がある。（根津）



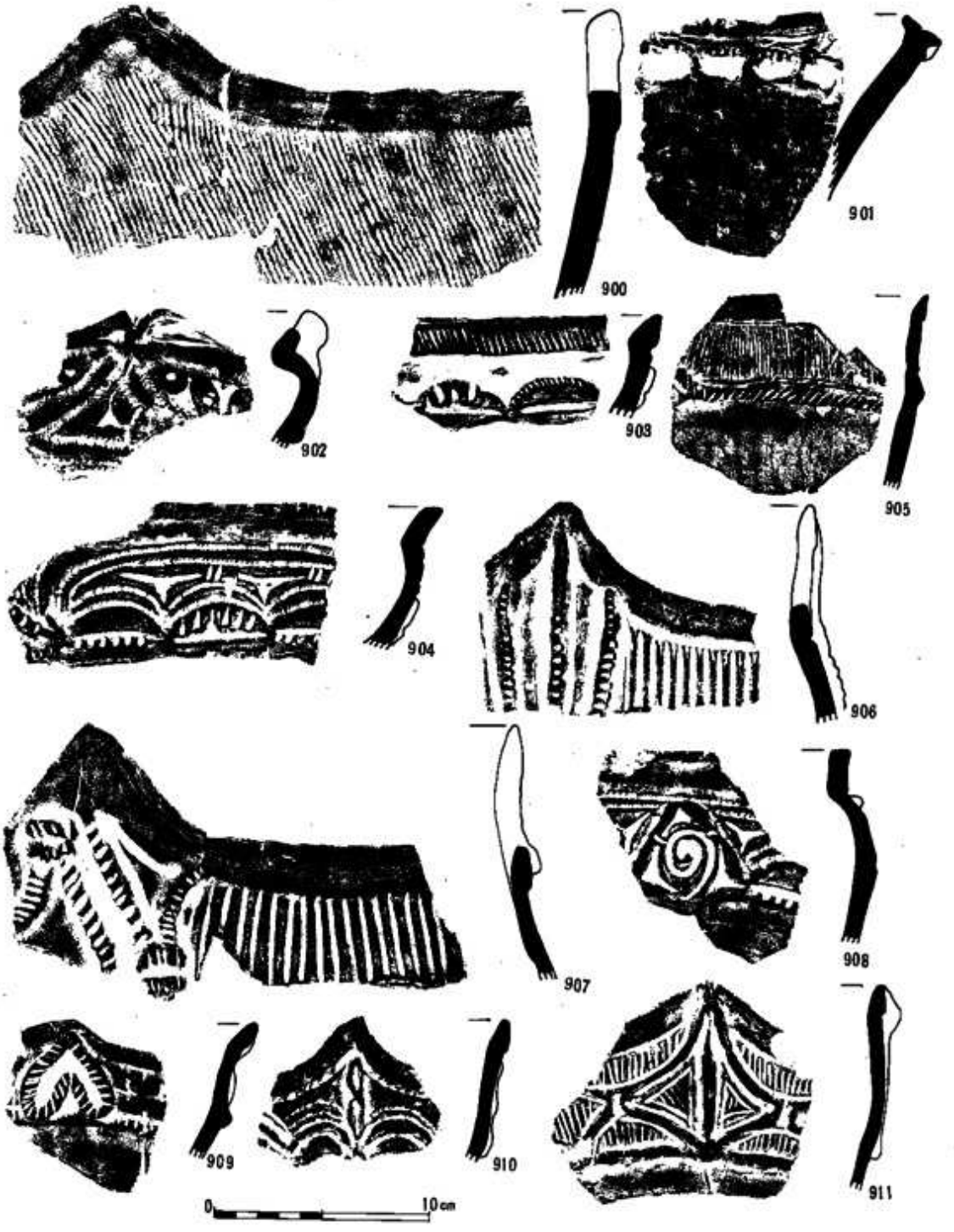
第 100図　樋口内城館址遺跡 127号住居址実測図（1：80）



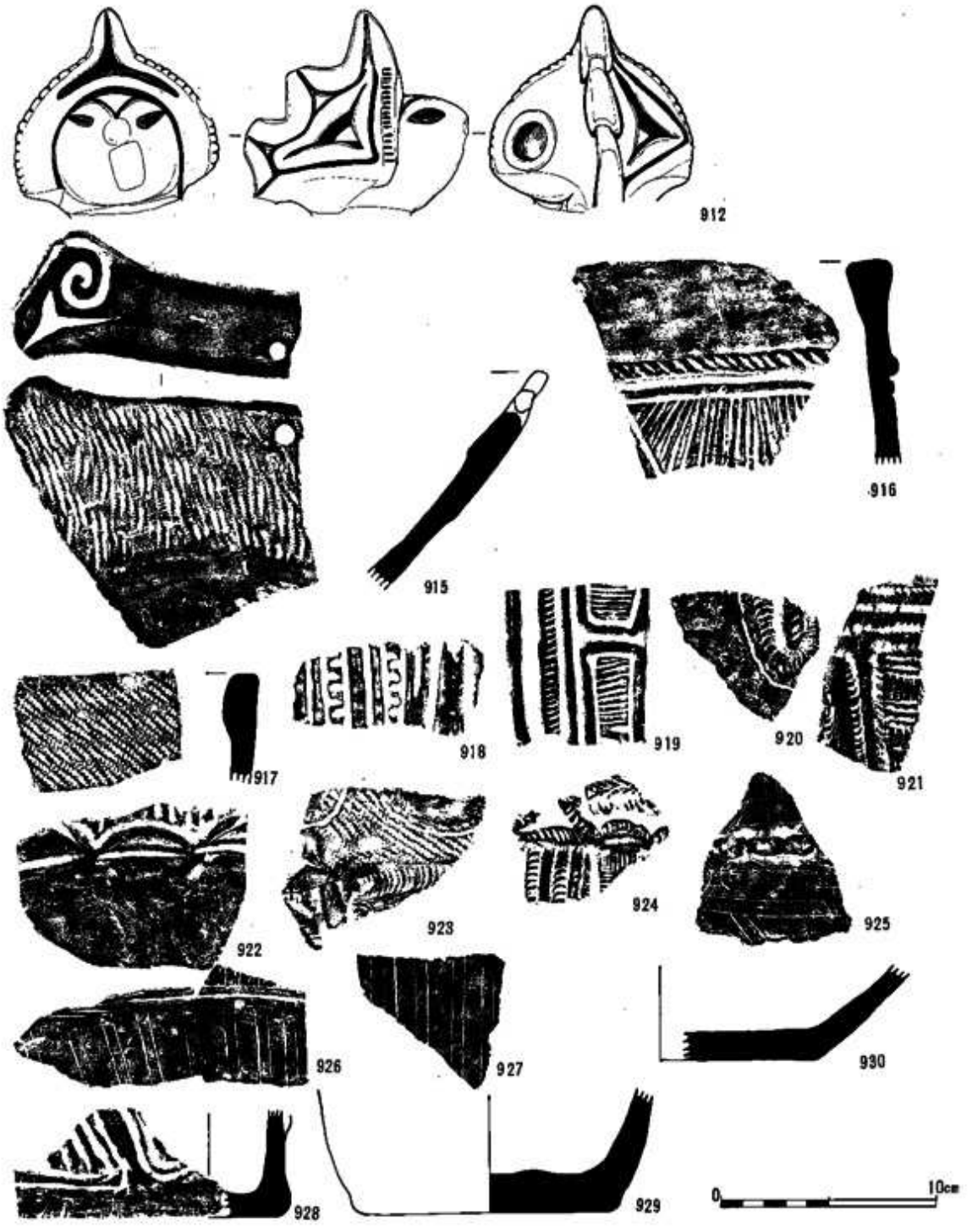
第 101号図樋口内城館址遺跡 127号住居址出土土器（その1）（1：6）



第 102図　樋口内城館址遺跡 127号住居址出土土器（その２）
（ 886～ 891　1：6，他　1：3）（ 886 ピット内，他　覆土）



第 103図　樋口内城館址遺跡 127号住居址出土土器（その３）
（１：３）（覆土出土）



第 104図　樋口内城館址遺跡 127号住居址出土土器（その４）
（１：３）（912～915 覆土 916～930 床面）

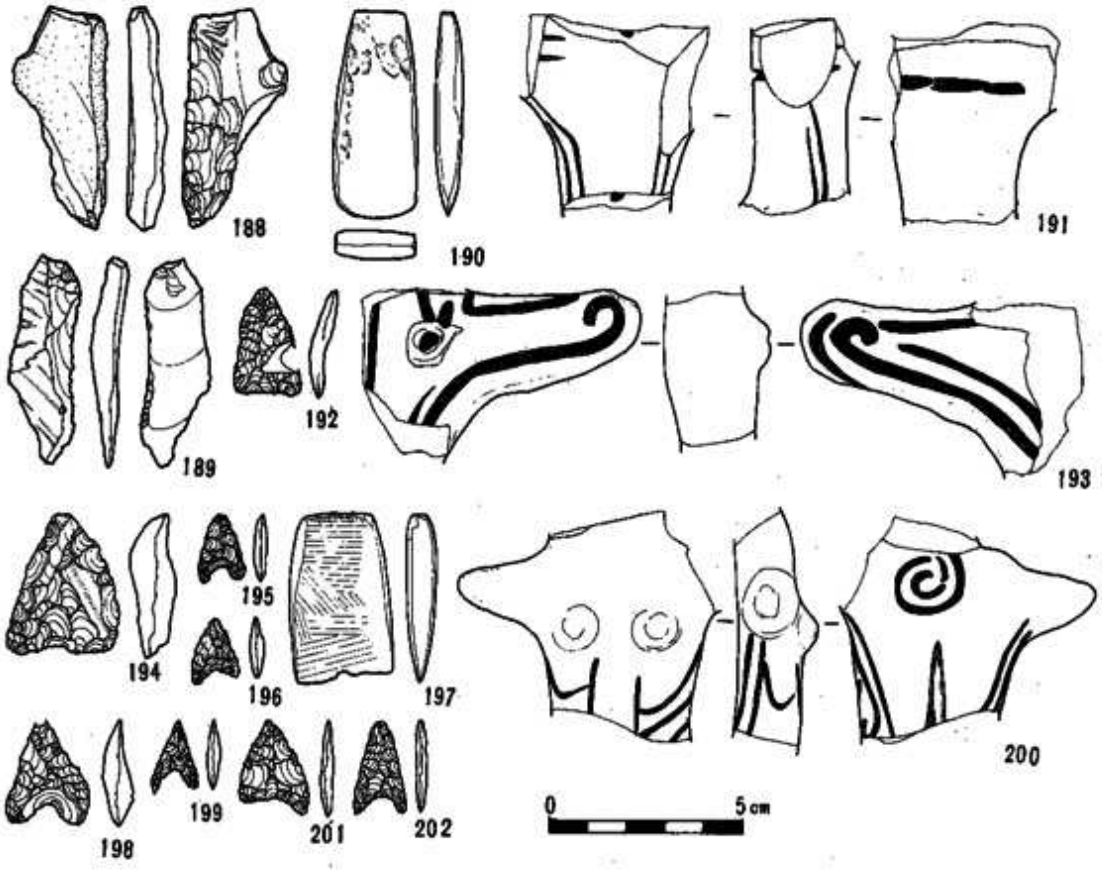
ヨ） 128号住居址（図106・107、図版23の106）

遺構、丘陵東部に位置して、北西壁を115号住居址に、南壁を小竪穴35に切られて検出された。5.28×5.21m の規模をもつ円形プランで、壁は10cm程しか残されていない。床面上にはピットが多く存し、床面は凹凸があるが概して堅い。主柱穴は6本と考えられよう。炉は中央やや東寄りの位置に11個の石で方形に組まれてあり、摺り鉢状を呈する内部には焼土のほか、灰・炭化物の残存がみられた。炉石は加熱の痕がみられる。炉址の西にも焼土が認められ、床面も焼けている。

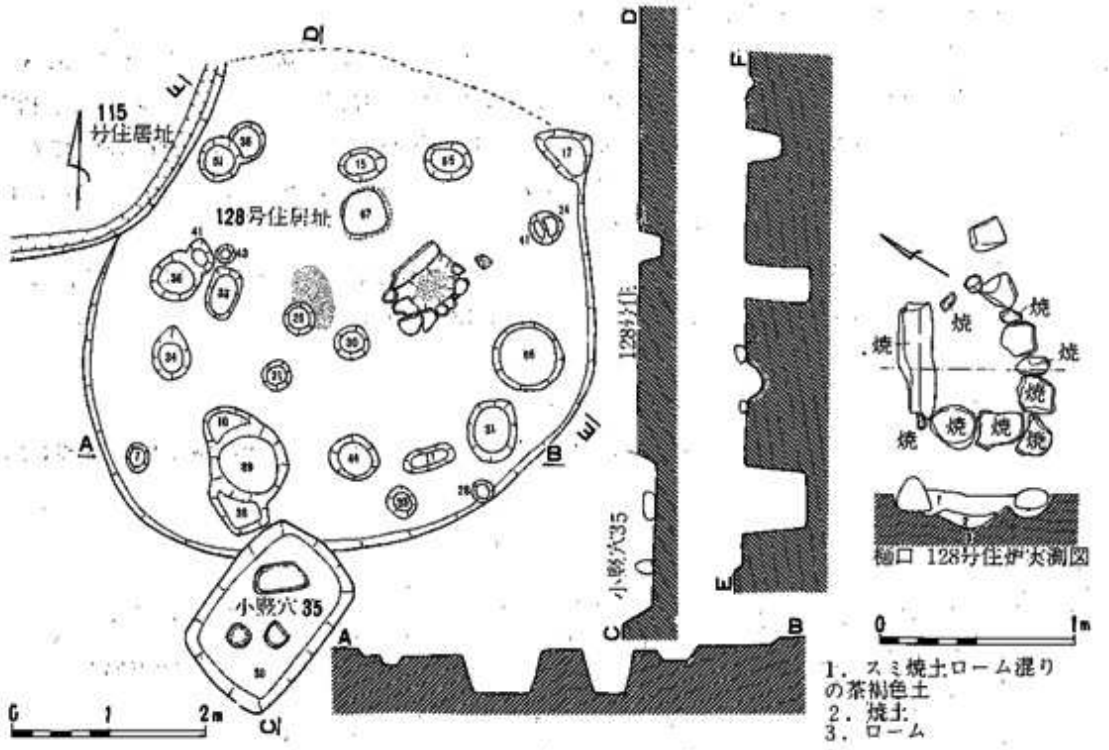
遺物、出土遺物は土器片でその量は少ない。935～944は同一個体と思われる胴部片である。上部にエ字文を思わせる特長的な文様が施されている。947 には木葉痕が認められる。（深　沢）

ラ） 131号住居址（図108・109、図版36の181・182）

遺構、丘陵北東部に位置し、130号住居址に南西部を切られて検出された。西側周溝を欠き、側壁は削



第 105図　樋口内城館址遺跡84・90・102・107・117・122・127・135・136号住居址出土石器および土製品（1：2）（188・189　84号住居址覆土，190・191　90号住居址覆土，192・193 102号住居址覆土194・195　107号住居址覆土，196・197　117号住居址覆土，198・199　122号住居址覆土200　127号住居址覆土，201　135号住居址覆土，202　136号住居址覆土）



第 106図　樋口内城館址遺跡 128号住居址，小竪穴35実測図（1：80）

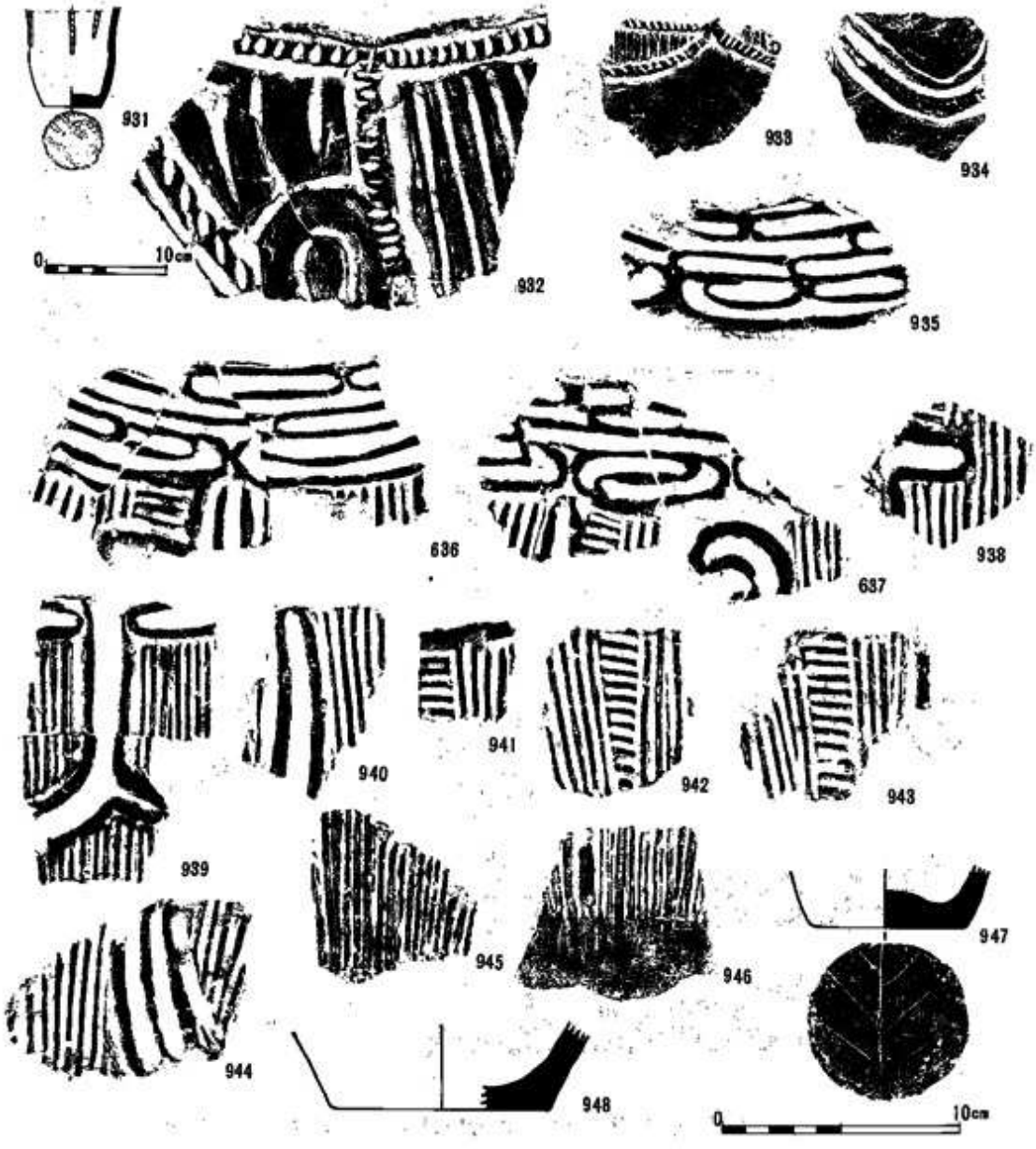
り取られて存しないが、周溝によってほぼプランは推定できる。南北径4.80m の規模をもつ四隅の張った円形プランで、四隅に柱穴がある。床面は平担で堅い。炉址は中央やや北寄りに位置し、断面摺り鉢状を呈する方形竪穴炉である。炉縁石は抜かれて北側に一個のみ残る。内部はよく焼け、焼土の堆積がみられた。南側柱穴間ほぼ中央の周溝に接して、正位の状態で埋甕が検出されている。

遺物、949～962の加曽利E式土器で、949は埋甕である。埋甕特有の懸垂渦巻文をもち、その間を重描平行沈線文が施されている。埋甕内は黒褐色土が充満しているが、遺物の出土はなかった。950は無文のもので、北東柱穴上から出土した。　（山　田）

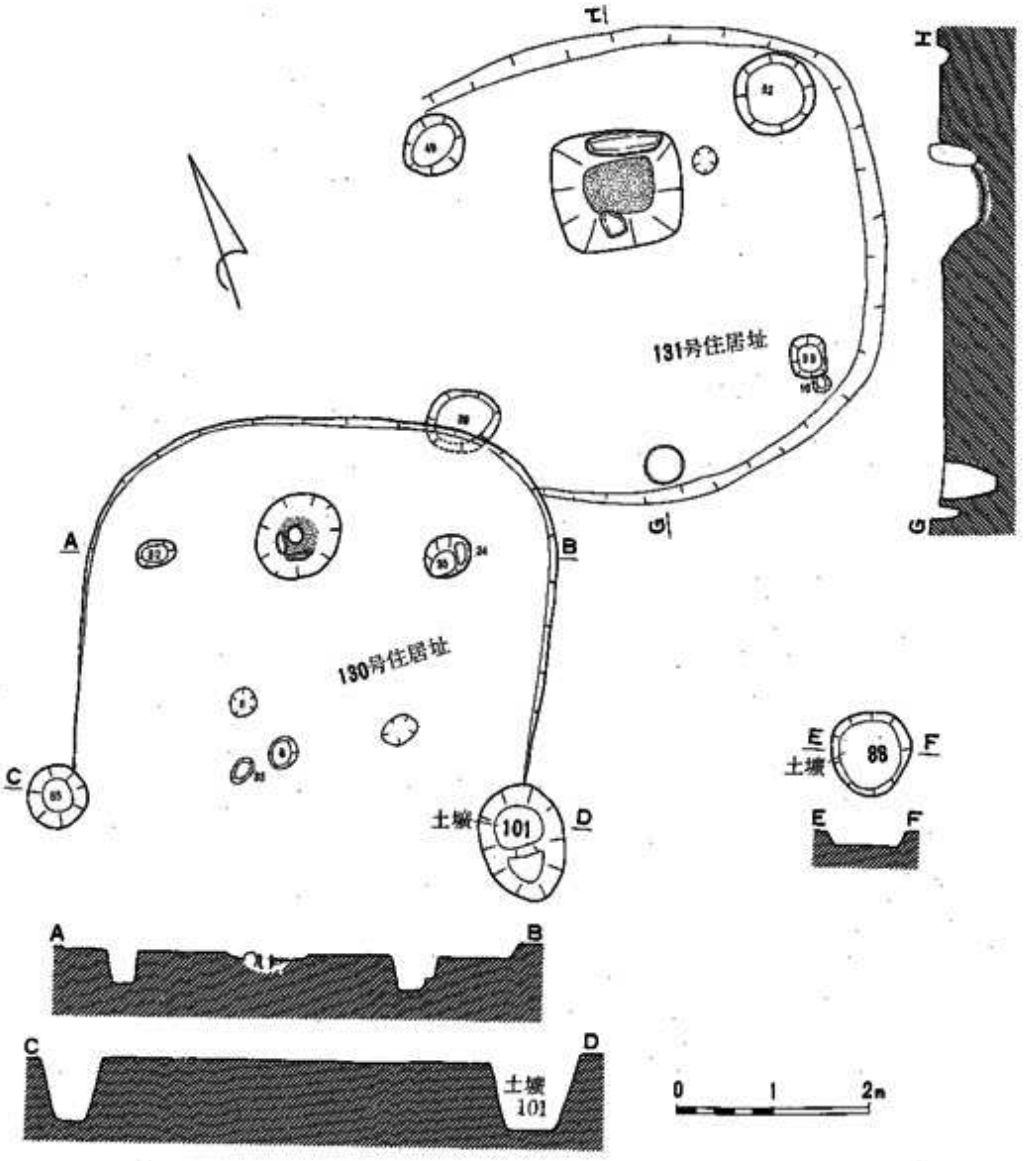
リ）133号住居址（図110・111、図版24の113・115・25の116・36の183）

遺構、丘陵最北東端に位置し西半分を弥生期132号住居址に切られて検出された。南北5.74m の径をもつ規模の円形プランで、主柱穴は6個所確認されている。壁に沿って深さ10～20cm の周溝がめぐり、床面は堅緻である。炉は中央北寄りに位置した、方形竪穴炉で、内部には焼土の堆積がみられる。南側主柱穴間、周溝に接して、正位の状態で埋甕が検出されている。

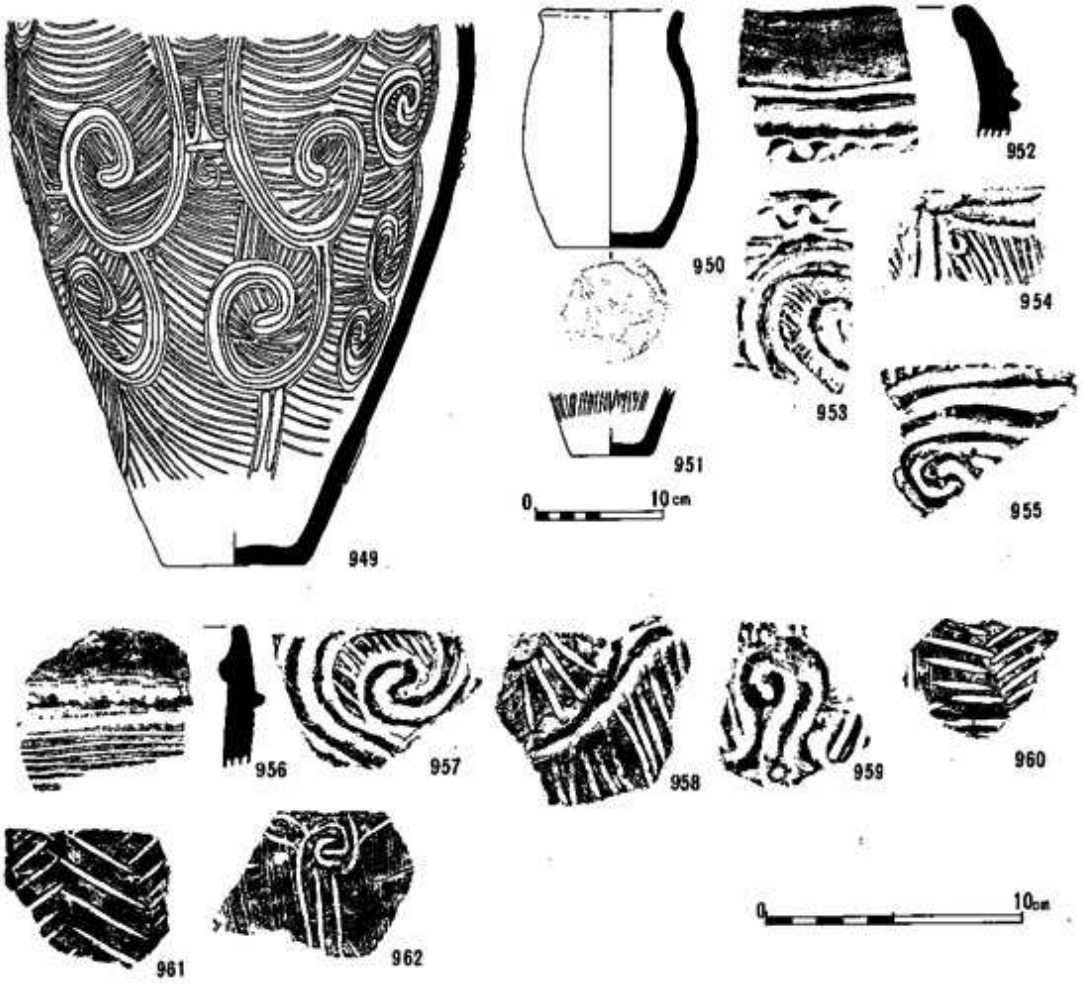
遺物、深鉢形土器と浅鉢形土器（972）が出土している。963は埋甕として用いられたもの、964はピット内から出土したもので、細かい縦の条線の他に、沈線の唐草文、懸垂渦巻文を施してある。加曽利E式土器に比定されるものである。　（山　岡）



第 107図　樋口内城館址遺跡28号住居址出土土器（ 931　1：6，他　1：3）



第 108図　樋口内城館址遺跡 130・131号住居址，土壙86実測図（1：80）



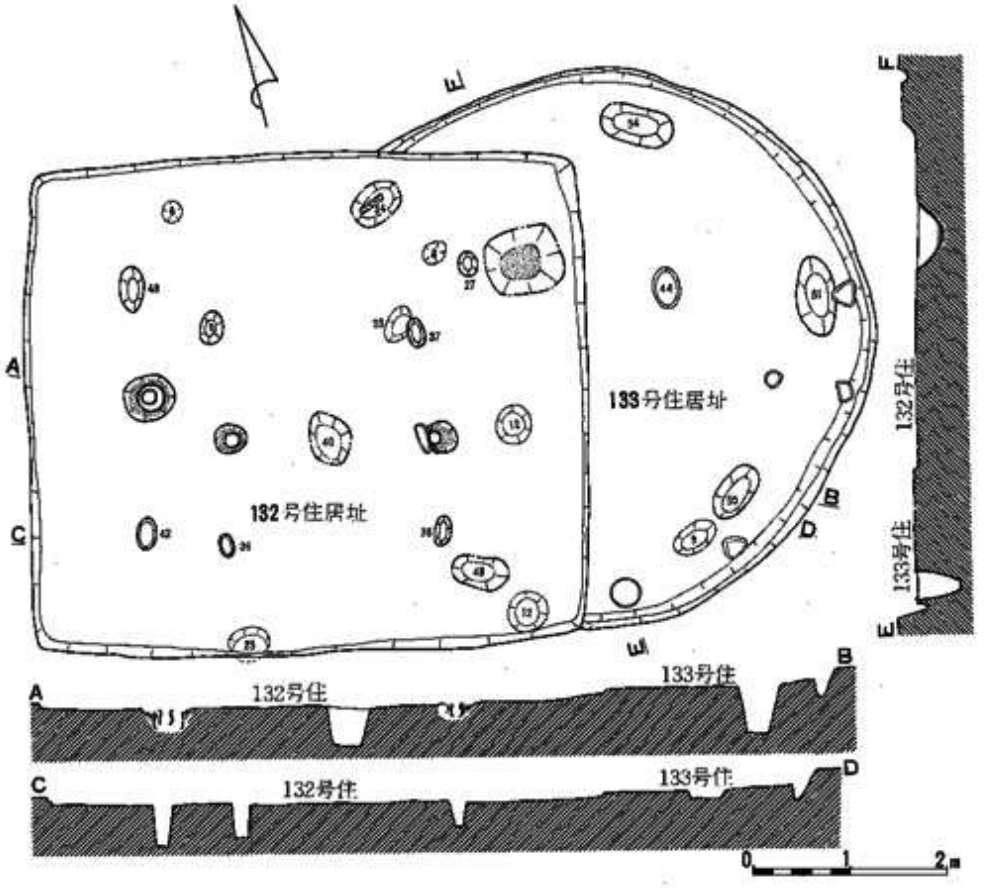
第 109図　横口内城館址遺跡 131号住居址出土土器（949～951　1：6
，他　1：3）

ル）134号・135号住居址

a）134号住居址（図112・113、図版25の117・118・37の184・185）

遺構、丘陵北縁近くに営なまれた本址は、炉を中心に改築された住居址で、発掘時の所見から一応2住居址にし、135号住居址と区別した。本址は、5.94m の径をもつ円形プランで、4主柱穴をもつ。東から南にかけて壁内に周溝をめぐらせてある。床面には土壙100・89・99が掘り込まれ、一部貼床が認められた。炉は中央やや北寄りに位置し、西側に有段をもつ摺鉢状の方形竪穴炉である。また西南の壁から50cmと1mの位置に2個の埋甕が、それぞれ正位の状態で検出された。埋設状態からして北側のものが135号住のものかもしれないが決め手はない。

遺物、加曽利E式土器に比定されるもので、973・974は埋甕に使われたものである。974には底部穿孔がみられる。　（根　津）



第 110図　樋口内城館址遺跡 132・133号住居址実測図（1：80）

b）135号住居址（図112・114の989・105の201、図版25の118）

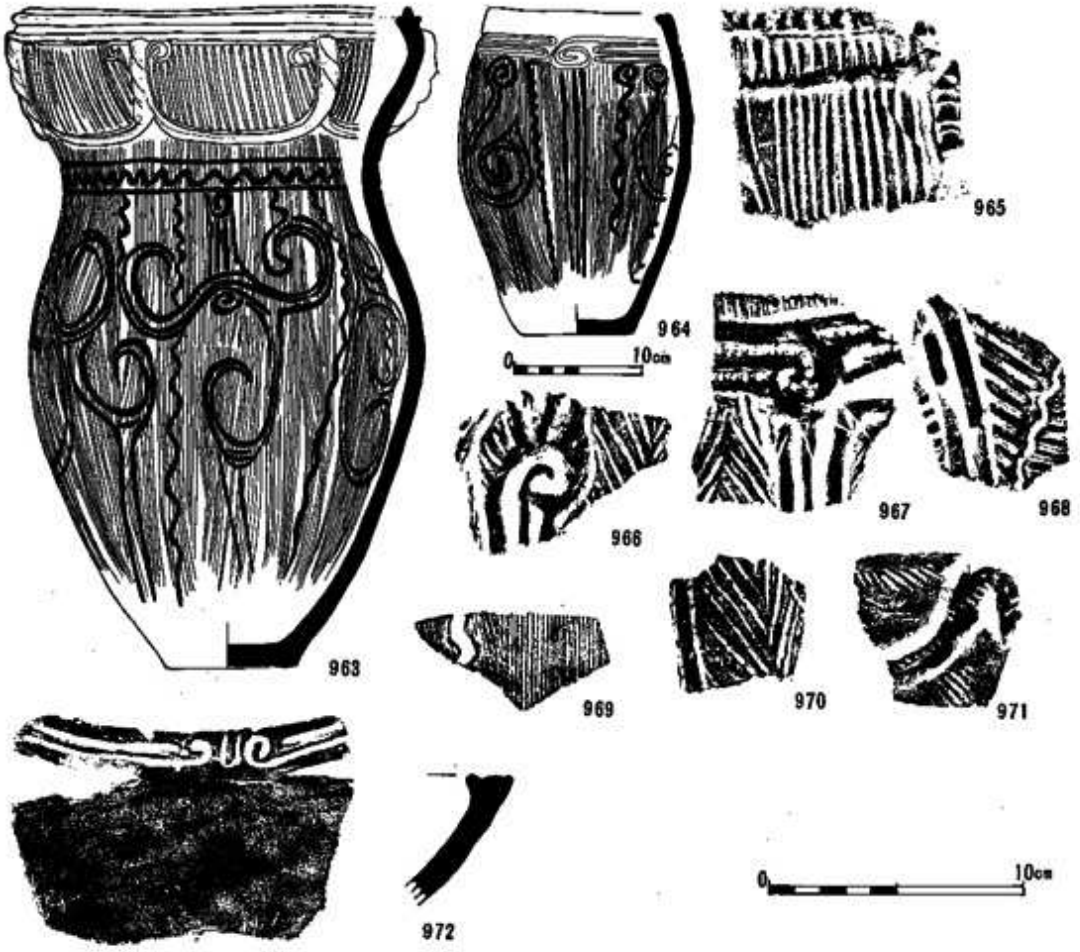
遺構、134号住居址と大部分が重複しており、北東部の一部が認められた。134号住居址上に一部貼床して営なまれ、プランは、ほぼ134号住居址と同じくするものであろう。

遺物、本址に直接関するものは989の加曽利E式土器片1片のみである。決め手を欠くが、北の埋甕974が本址のものかも知れない。覆土から石鏃が1点出土している。　（根　津）

レ）136号住居址（図123・114、105の202、図版25の120）

遺構、丘陵北縁に位置し、土壙90～98までが掘り込まれたり、未調査部分もあって、プラン等は不明である。側壁も削り取られて認められず、炉址の確認で終わった。炉は埋甕炉で深鉢形土器の口縁部破片を2個体使用している。焼土は土器周囲および南側に広がって検出された。

遺物、埋甕炉に使用された深鉢形土器が主なる遺物である。口縁部のみで一周しないが992にみる半月



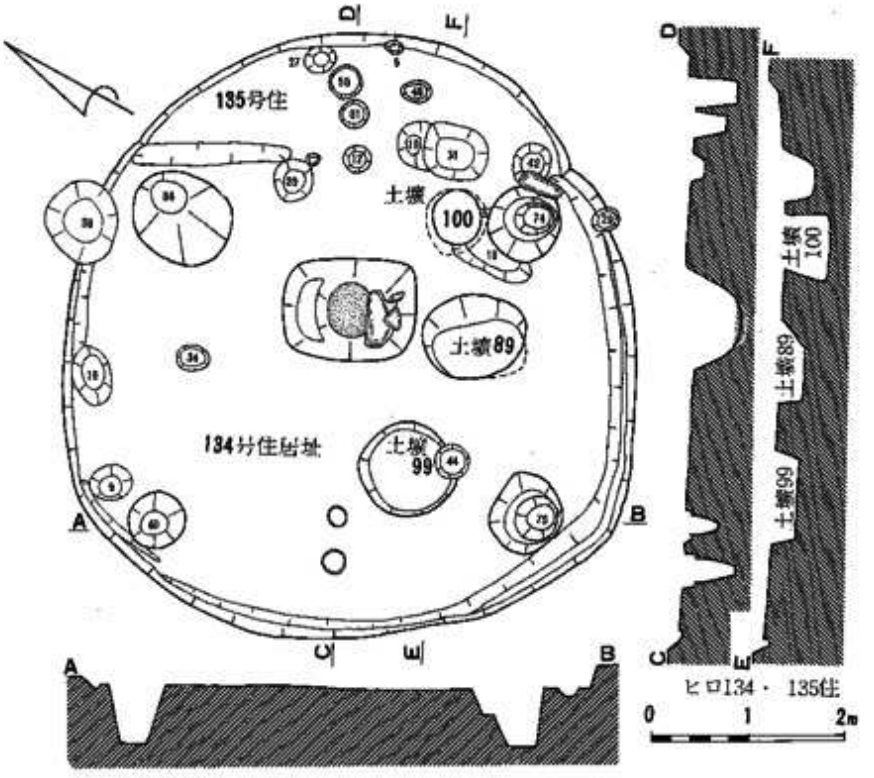
第 111図　樋口内城館址遺跡 133号住居址出土土器（ 963～ 965　1：6 ，他　1：3）

形の隆帯区画内に縄文と垂下する沈線をもつのが特長である。この半月形区画は4個でその間に撥形の同様区画を交互にもつものらしい。9号住居址の炉甕と類似文様構成を示し、本遺跡中、古い様相を示す住居址といえる。石鏃が1点覆土中から出土している。　（八　木）

ロ）138号住居址（図115・116、図版25の119・37の187～189）

遺構、丘陵北縁に営なまれた本址は、弥生期139号住居址に東部を切られて検出された。側壁にそって周溝をめぐらせた南北径6.15m の規模を有る住居址である。炉は半分139号住居址の貼床下にあり、断面摺り鉢状を呈する方形竪穴炉である。石組みであったと思われる石が付近に散在している。主柱穴は4個所確認され、その南西間、周溝内20cm に、石蓋をした正位の埋甕が検出された。

遺物、出土した土器は、渦巻文・懸垂文を特徴とする加曽利E式土器である。1003は、埋甕としたもの



第 112図　樋口内城館址遺跡 134・135号住居址実測図（1：80）

で口縁部を欠く。1004 は、口縁部を 6 分し、その分節部に渦巻文をもつ。胴部は懸垂文と縄文でまとめている。1005 は壺形土器で、口縁部無文で一条の横走隆帯をもって胴部につながっている。胴部には逆U字状に隆帯をつけ、中を縄文で満している。1006 は手づくねの小形土器で口縁部を欠く。　　（八　木）

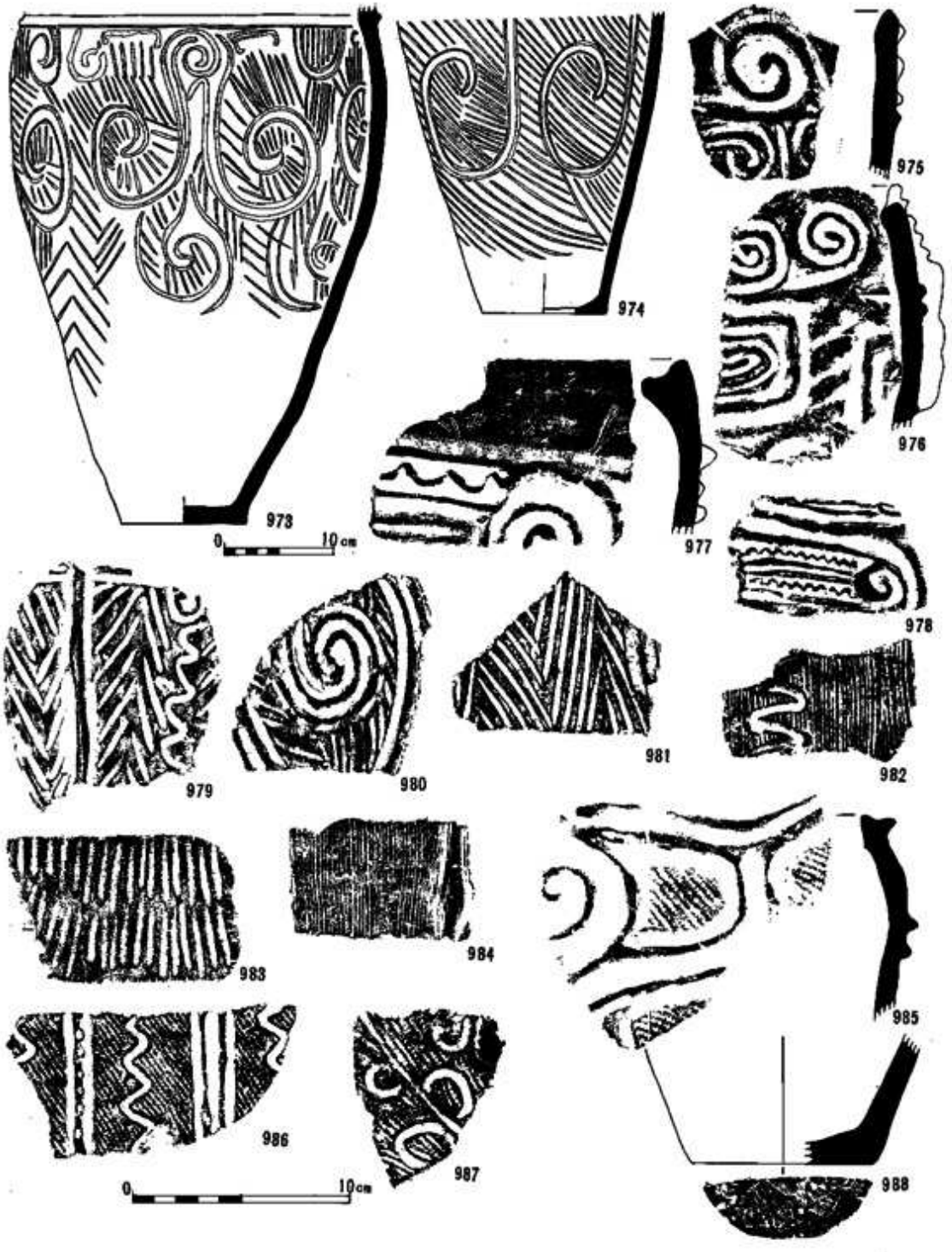
ワ）140 号住居址（図 117）

遺構、丘陵北東縁に営なまれた本址は、削り取られて側壁も確認できず、北側周溝、炉址、柱穴を検出できただけである。プランは、周溝、柱穴からして円形と思われる。炉は中央北寄りに浅い凹みをもって検出された。床面の状況からおして当初から余り深いものではない地床炉であろう。本址床面を掘り込んで中世小竪穴 39 があり、南壁外と思われる位置に土壙 87 が存した。遺物は認められなかった。（小松原）

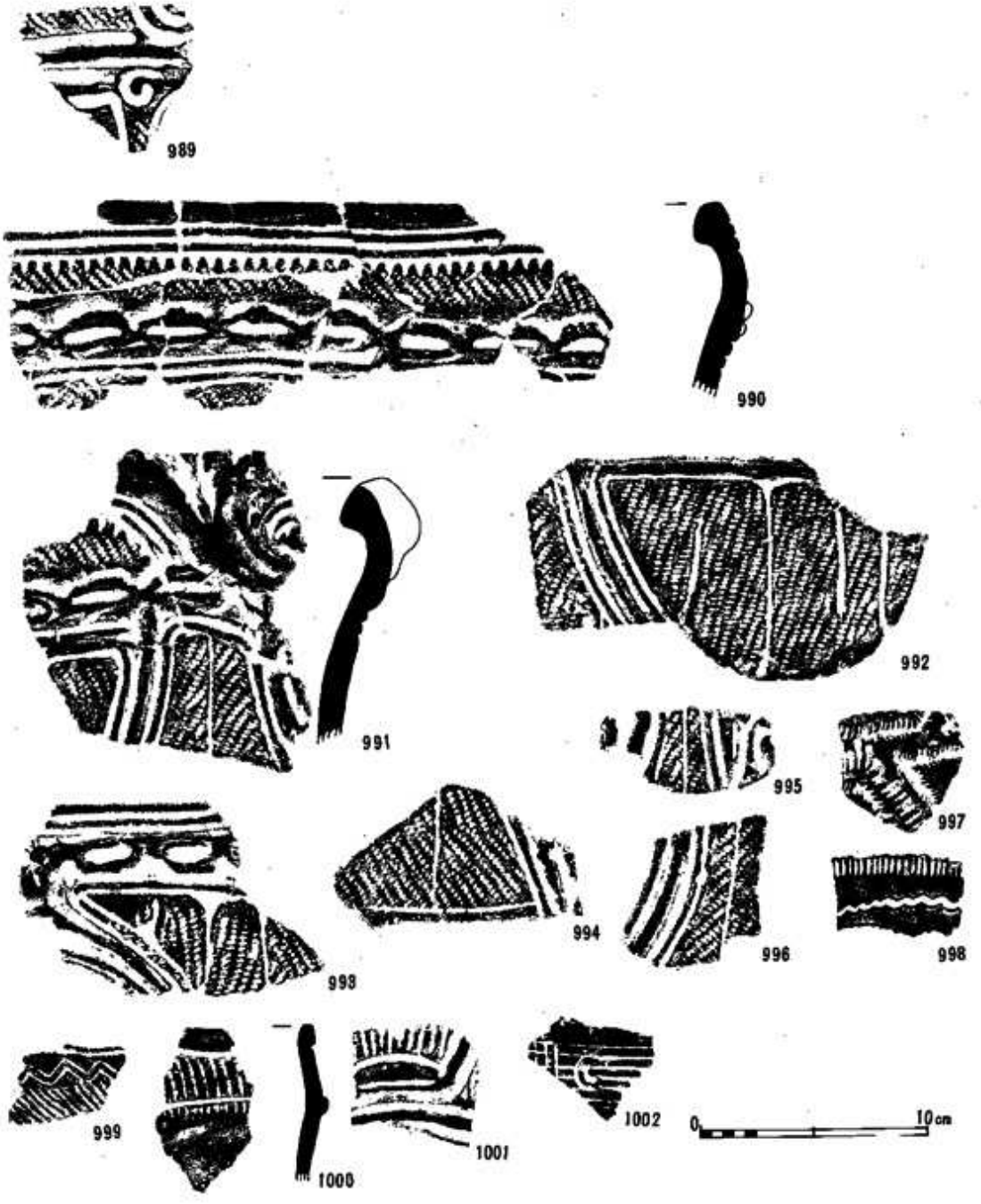
ヲ）141 号住居址（図 200・118、図版 37 の 186・23 の 108）

遺構、121 号住居址と 129 号住居址との間に、床面と 2 個の埋甕を確認して、本址とした。埋甕を中心にして堅いたたき床がわずかに残されているが、北は 129 号住居址に切られ、プラン等不明である。

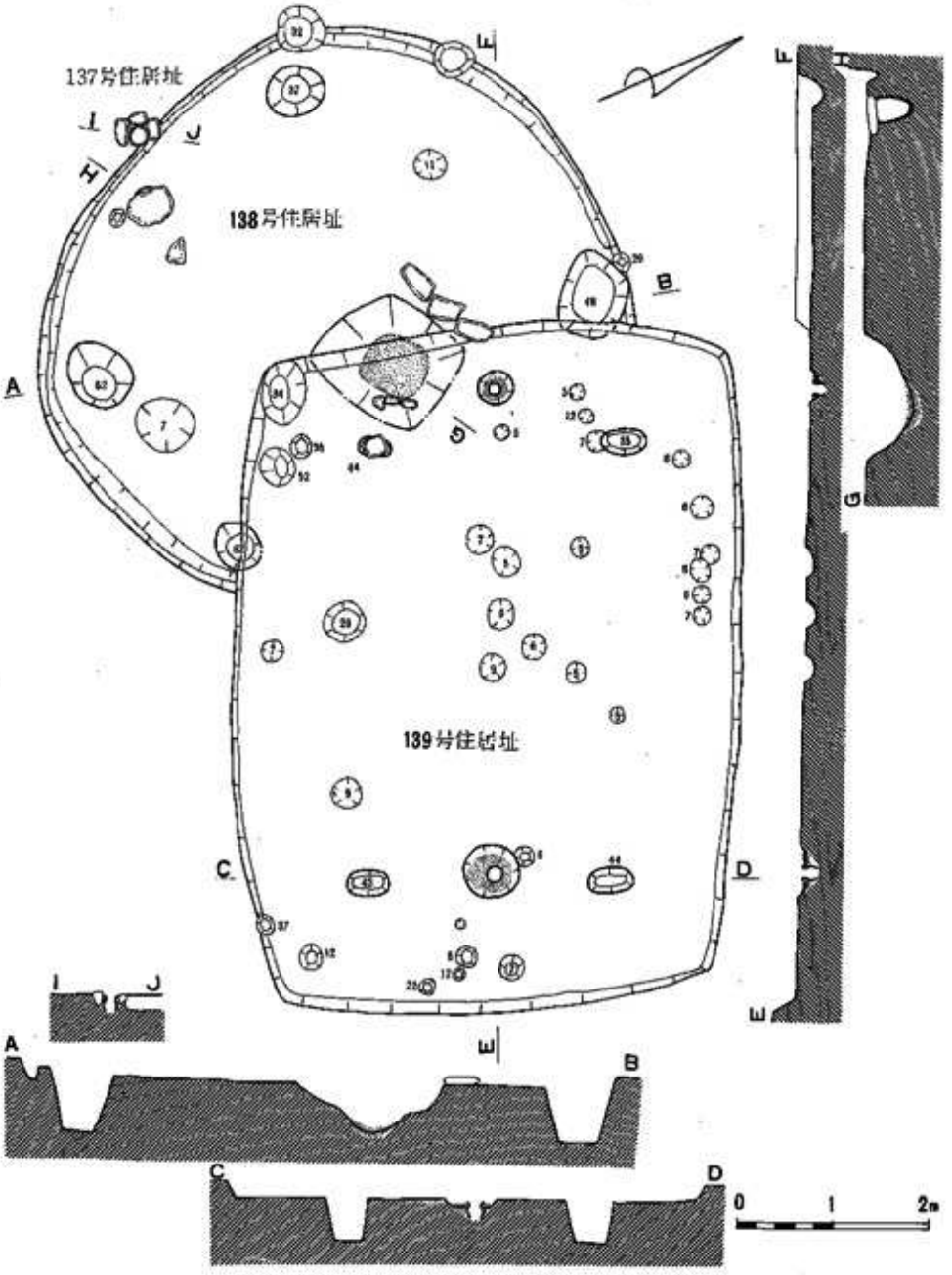
遺物、2 個の埋甕で渦巻文、懸垂文に特徴をもつ加曽利E式土器である。1018 は、底部を欠き、1019 は口縁部と底部を欠く。　　（深　沢）



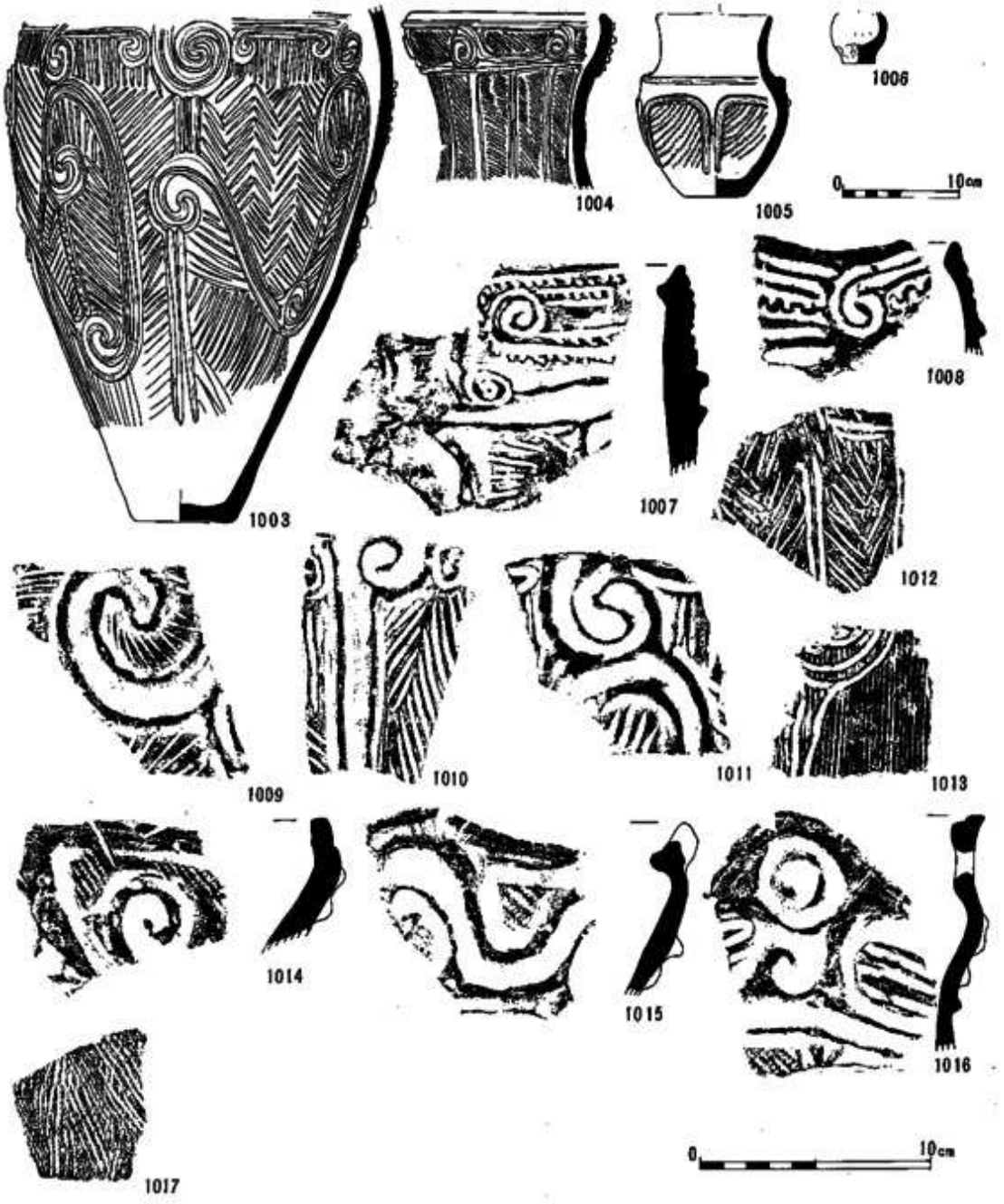
第 113図　樋口内城館址遺跡 134号住居址出土土器（ 973～ 974　1：6，他　1：3）



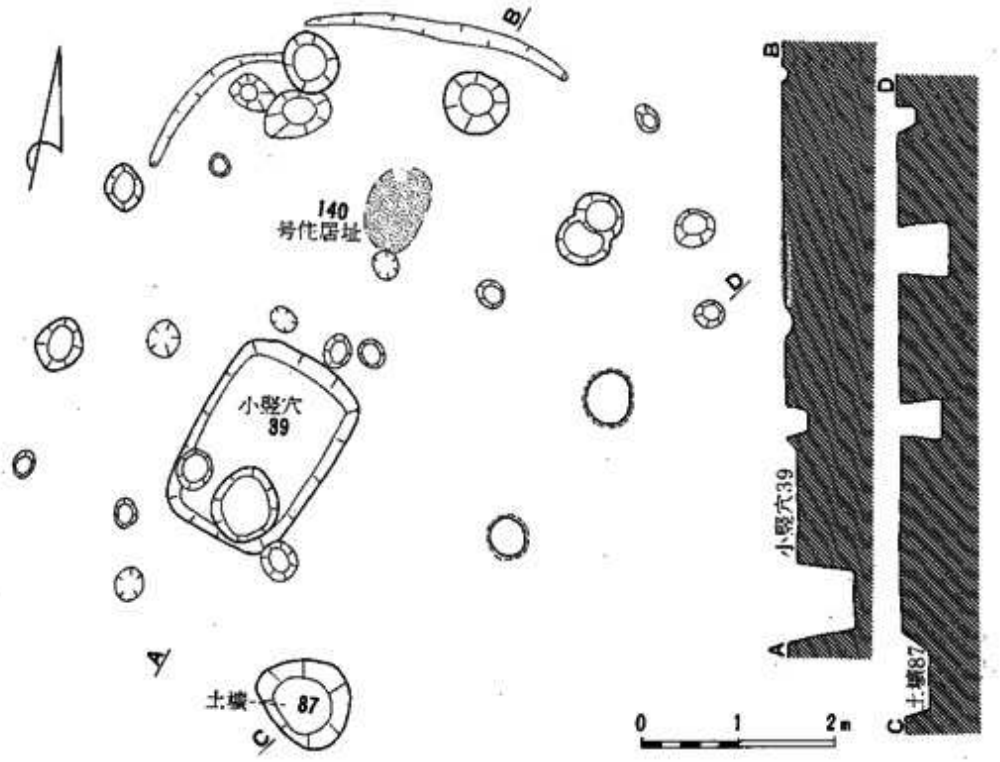
第 114図　樋口内城館址遺跡 135・136号住居址出土土器（1：3）
（989　135住，990～1002 136住）



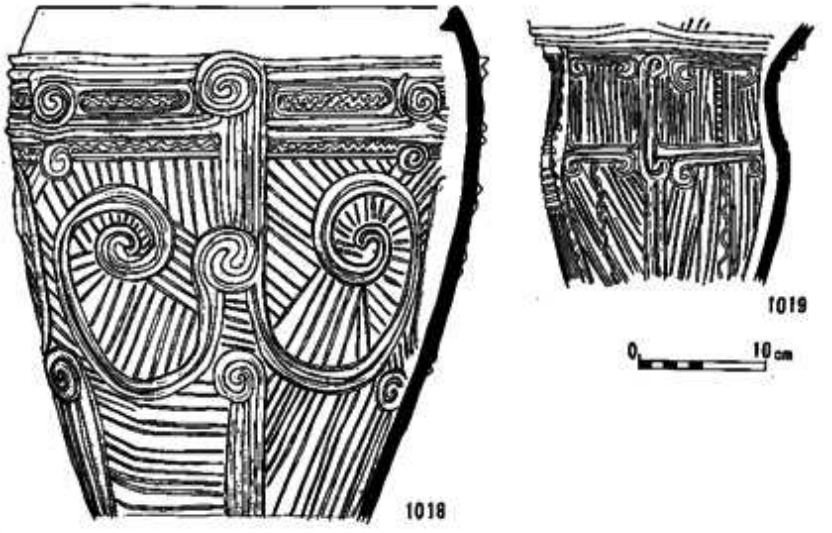
第 115図　樋口内城館址遺跡 137・138・139号住居址実測図（1：80）



第 116図 樋口内城館址遺跡 138号住居址出土土器（1003～1006　1：6，他　1：3）



第 117図　樋口内城館址遺跡 140号住居址，小竪穴39・土壙87実測図(1：80)



第 118図　樋口内城館址遺跡 141号住居址出土土器（1：6）

ン）その他の遺構と出土遺物

a）土　壙

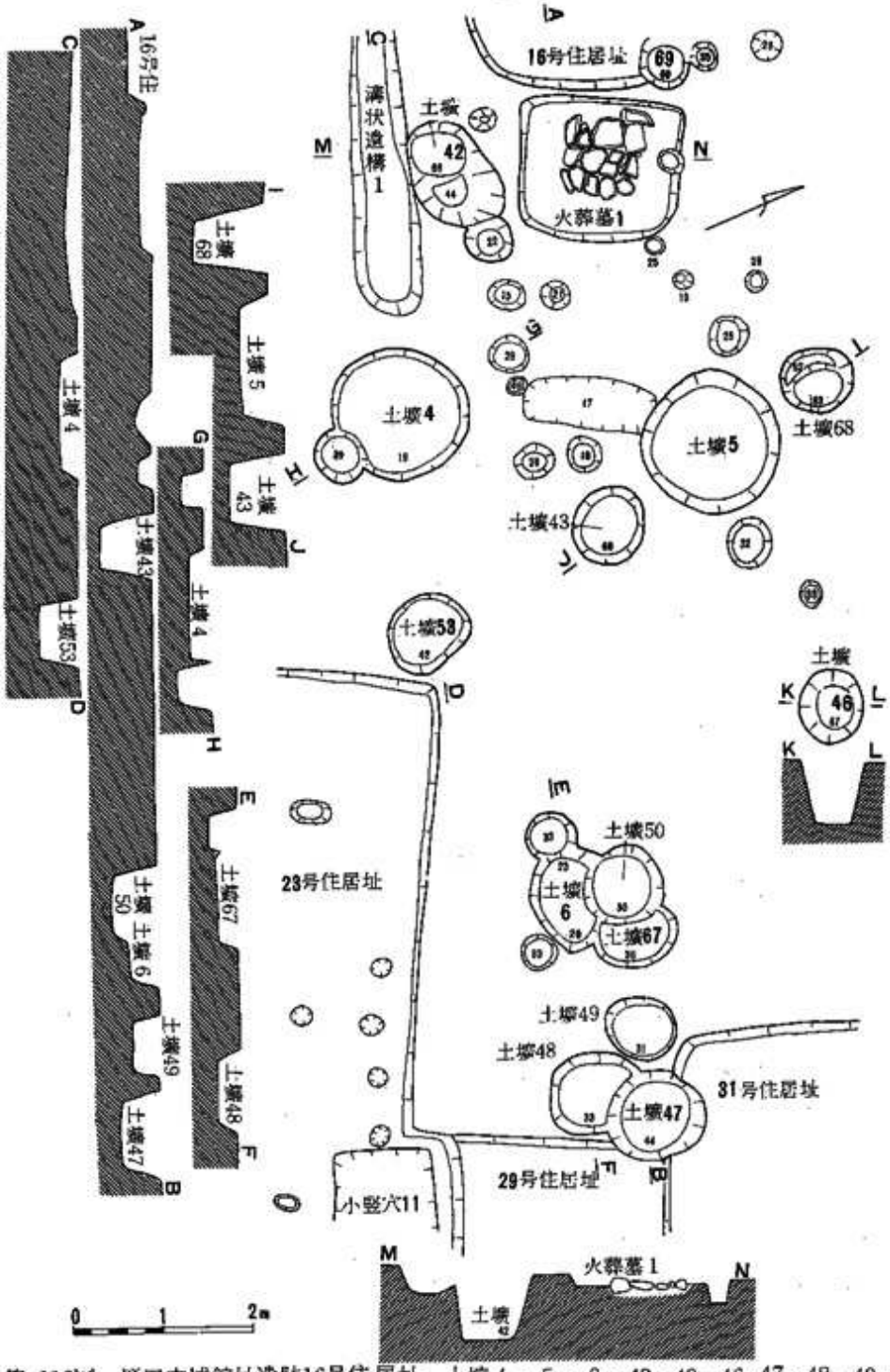
検出された土壙は103個所の多きを数え、時期的には縄文中期のものが多い。弥生期のもの、中世のものもあるが、便宜的に一覧表としたので了とされたい。

樋口内城館址遺跡　土壙一覧表

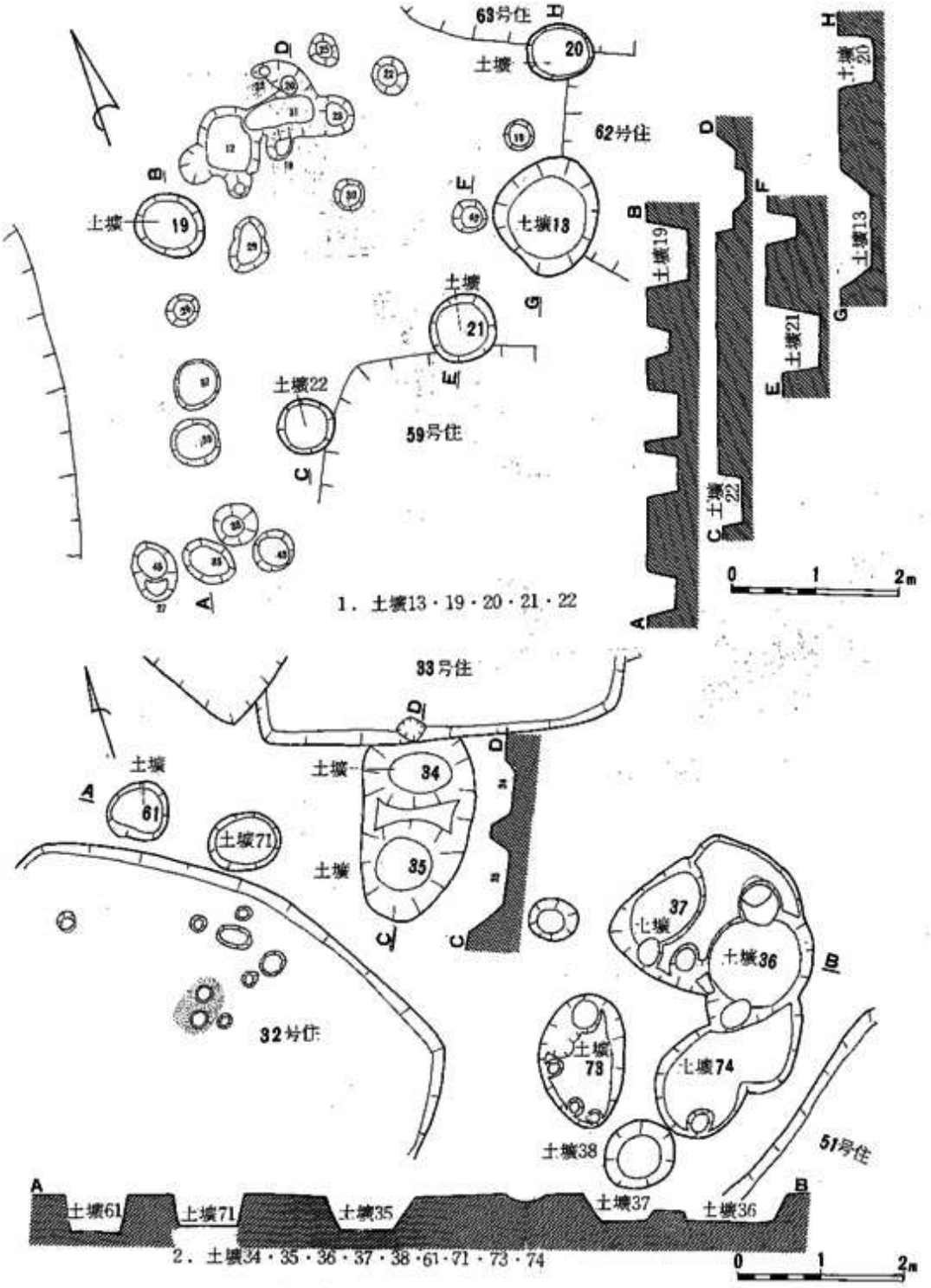
土壙番号	挿図番号	プラン		規模（cm）			状態	出土遺物	備考
		平面	断面	東西	南北	深さ			
1	147	円形		100	108	13		勝坂片、加E片	(縄文中期)
2	222	円形		136	114	21		勝坂片	(〃)
3	222	楕円形		180	124	18		勝坂片	(〃)
4	119	円形		148	150	18		加E片、黒燿石	(〃)
5	119	円形		151	152	45		勝坂片	(〃)
6	119	円形		107	99	20	土壙50、67と切り合う	加E深鉢1 (1028)	(〃)
7	163	円形		163	165	18	31号住の炉を切る		(時期不詳)
8	36	円形		142	150	20			(〃)
9	151	円形		163	180	32	ピットあり		(〃)
10	171	円形			95	20	57号住を切る		(縄文中期)
11	57	円形		95	95	50	上面に1個の自然石	加E片	(〃)
12	57	円形	2段	92	100		中位に1個の自然石	加E 1個体分 (1030)	(〃)
13	120	円形		128	127	37		加E片	(〃)
14	181	円形		105	93	32		加E片、打石斧1、敲打器2	(〃)
15	57	円形		110	116	25	土壙16と切り合う	加E片	(〃)
16	57	円形		100	112	35	土壙15と切り合う		(〃)
17	57	円形	摺り鉢状	100	100			磨石斧（ヒスイ製）(1035)	(〃)
18	183	円形		105	118	20	つぶれた状態で深鉢出土	深鉢 (1036) 1個体分	(〃)
19	120	円形		70	78	50			(〃)
20	120	円形		77	66	42	63号住に切られる		(〃)
21	120	円形		77	80	65	59号住に切られる		(〃)
22	120	円形		70	67	28	59号住に切られる		(〃)
23		円形		100	95	20	底に自然石、91号住の床面下	勝坂片、加E片	(〃)
24	177	円形		112	105	21		加E片	(〃)
25	177	円形		75	82	62		加E片、打石斧1	(〃)
26	51	楕円形		124	90	105		加E片	(〃)
27		円形		130	125	52			(〃)
28	121	円形	摺り鉢状	114	124	26		加E片	(〃)
29	121	楕円形		140	93	23	ピットあり		(〃)
30	121	円形		120	125	65	底から横倒しの状態で土器出土、ピットあり	弥生壺1 (1047)	(弥生中期)

土壙番号	持図番号	プラン		規模(cm)			状態	出土遺物	備考
		平面	断面	東西	南北	深さ			
31	121	円形		85	89	77			(時期不詳)
32	121	円形		122	138	38			(〃)
33	121	円形		77	83	45		石鏃1 (1048)	(縄文中期)
34	120	円形		120	140	18			(〃)
35	120	円形		115	115	36			(〃)
36	120	円形		134	120	36			(〃)
37	120	楕円形		133	75	31			(〃)
38	120	円形		92	78			加E片	(〃)
39	121	円形		120	112	71		加E片	(〃)
40	51	楕円形		72	91	113			(〃)
41	51	楕円形		85	127	103			(〃)
42	119	楕円形	2段	133	98	66/44			(〃)
43	119	円形		80	88	60		勝坂片(ツバ付)	(〃)
44	150	円形			88	28	8号住貼床下、45に切られる		(〃)
45	150	楕円形		118	90	40	〃 45を切る		(〃)
46	119	円形		78	70	67		加E片	(〃)
47	119	円形		96	110	44	48を切る	加E片	(〃)
48	119	円形		90	107	33	47に切られる		(〃)
49	119	円形		70	72	31			(〃)
50	119	円形		85	90	50	6・67を切る		(〃)
51	122	円形		81	78	35		加E片、底部片1	(〃)
52	122	三角形		100	68	21		敲打器1 (1059)	(〃)
53	119	円形		75	92	42			(〃)
54	30	楕円形		110	87	52	集石をもつ		(〃)
55	30	円形	袋状	72	82	89			(〃)
56	30	円形		115	115	16			(〃)
57	30	楕円形	袋状	65	94	105			(〃)
58	176	円形		120	148	117	炭と集石をもつ		(時期不詳)
59	122	円形		95	99	14	完形土器2個体出土	(1060・1061) の深鉢	(縄文中期)
60	36	楕円形			109	21	土器1個体分出土	深鉢 (1062) 石鏃1 (1063)	(〃)
61	120	円形		75	72	42			(〃)
62	176	円形		111	116	48			(〃)
63	176	円形		128	109	70			(〃)
64	176	円形			111	52			(〃)
65	176	楕円形		118	150	98			(〃)
66	167	楕円形		67	98				(時期不詳)
67	119	円形			95	36	50に切られる		(縄文中期)
68	119	円形	2段	73	80	88/83			(〃)
69	119	円形		62	58	60	16号住を切る		(時期不詳)
70	150	円形		105	93	85			(縄文中期?)

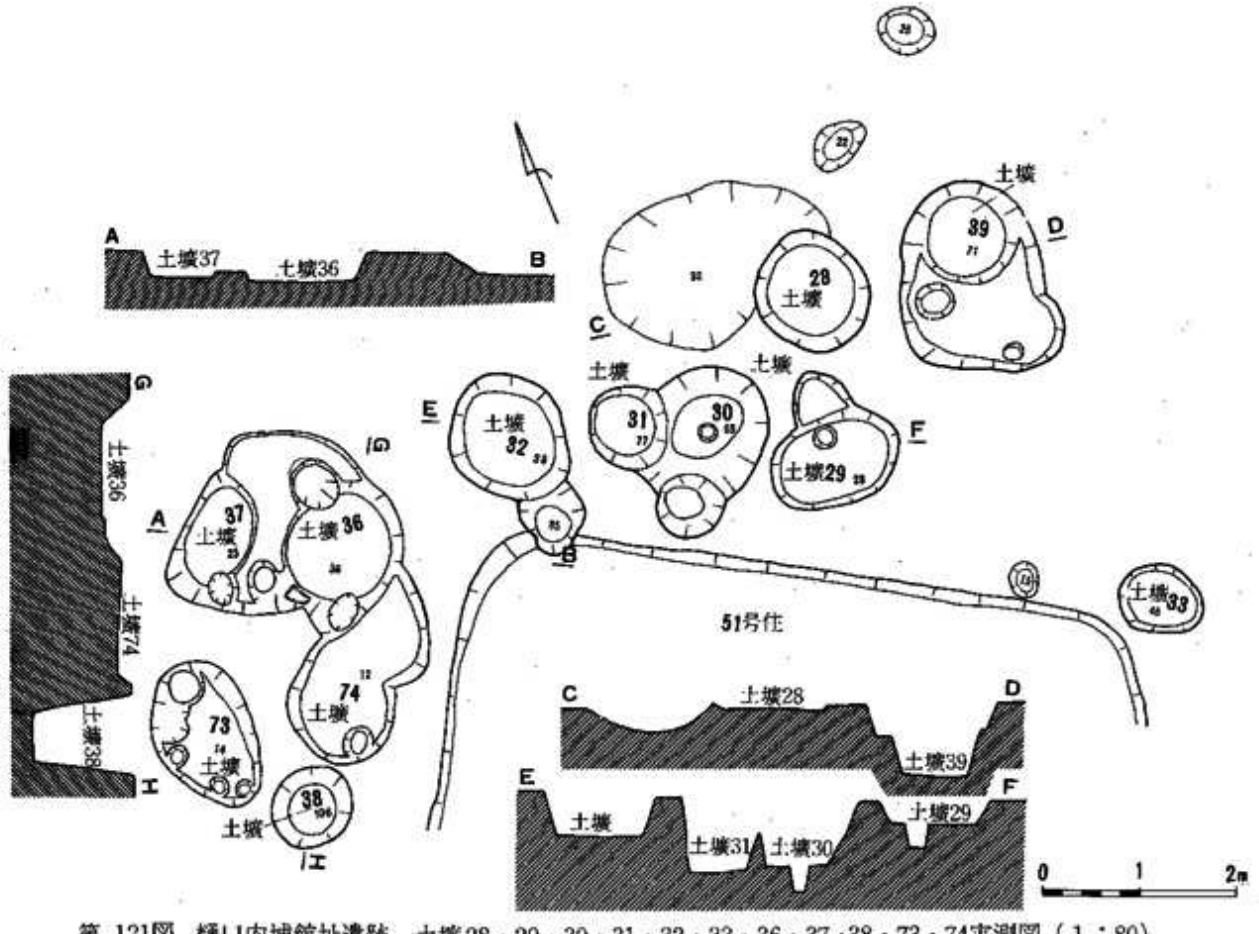
土壙番号	挿図番号	プラン		規模(cm)			状態	出土遺物	備考
		平面	断面	東西	南北	深さ			
71	120	楕円形		87	70	34			(縄文中期)
72	152	楕円形		135	210		ピットあり		(時期不詳)
73	120	楕円形		103	162		ピットあり		(縄文中期?)
74	120	円形		107	111		ピットあり		(〃)
75	191	円形		85	80	26			(時期不詳)
76	85	円形		112	105	30			(〃)
77	87	楕円形		120	91	37	ピットあり	加E片	(縄文中期)
78	195	円形		75	85	52			(時期不詳)
79		楕円形		132	95	40		縄文前期末土器1 (1063)	(縄文前期)
80	123	円形		90	92	8	ピットあり	勝坂片	(縄文中期)
81	123	長方形		117	77	31		加E片	(中世?)
82	123	長方形		98	127	15		勝坂片	(〃)
83	123	円形		86	84	10			(縄文中期)
84	123	方形		152	124	24		石臼 (1064)	(中世)
85	123	円形		97	94	15			(縄文中期)
86	123	円形		118	116	42	ピットあり	加E片	(〃)
87	117	円形		98	90	25			(〃)
88	108	円形		84	88	14			(〃)
89	112	楕円形	袋状	109	87	25			(〃)
90	123	円形		89	83	70		勝坂片	(〃)
91	123	円形		107	105	23		勝坂片、加E片、石錐1	(〃)
92	123	円形		134	138	22		勝坂片	(〃)
93	123	円形		95	88	45	上面に石		(〃)
94	123	円形		85	105	55			(〃)
95	123	円形		107	124	26	96を切る		(〃)
96	123	楕円形		80	111	17	95に切られる		(〃)
97	123	円形		75	78	10	98に切られる		(〃)
98	123	円形	袋状	84	94	55	97を切る		(〃)
99	112	円形		95	98	22			(〃)
100	112	円形	袋状	50	55	47			(〃)
101	108	楕円形	2段	88	122	86			(時期不詳)
102	195	楕円形		88	124	18	上面に石		(〃)
103	196	円形		108	88	28	上面に焼土		(〃)
火葬墓1	119	方形		160	177	13	石を方形に組んで敷いてある		(中世)
土壙墓1	122	円形		116	128	26		骨粉 (火葬骨)	(中世)



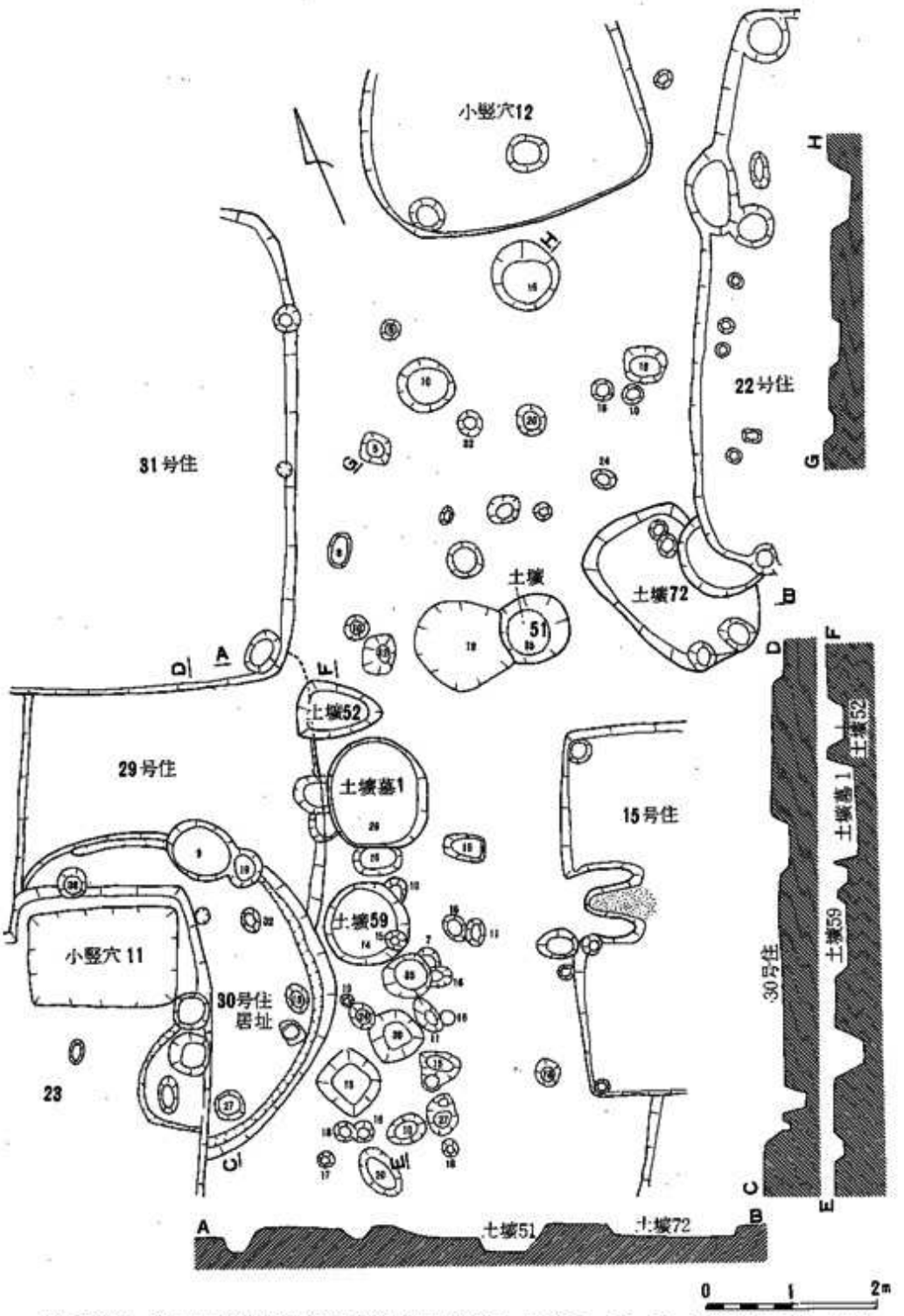
第 119図　樋口内城館址遺跡16号住居址，土壙4・5・6・42・43・46・47・48・49・50・53・67・68・69火葬墓1実測図（1：80）



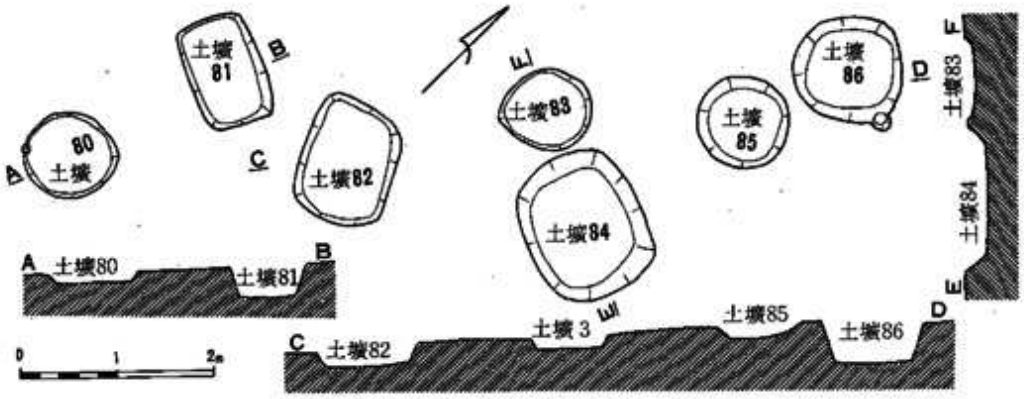
第 120図　樋口内城館址遺跡，土壙13・19・20・21・22・34・35・36・37・38・61・71・73・74実測図（1：80）



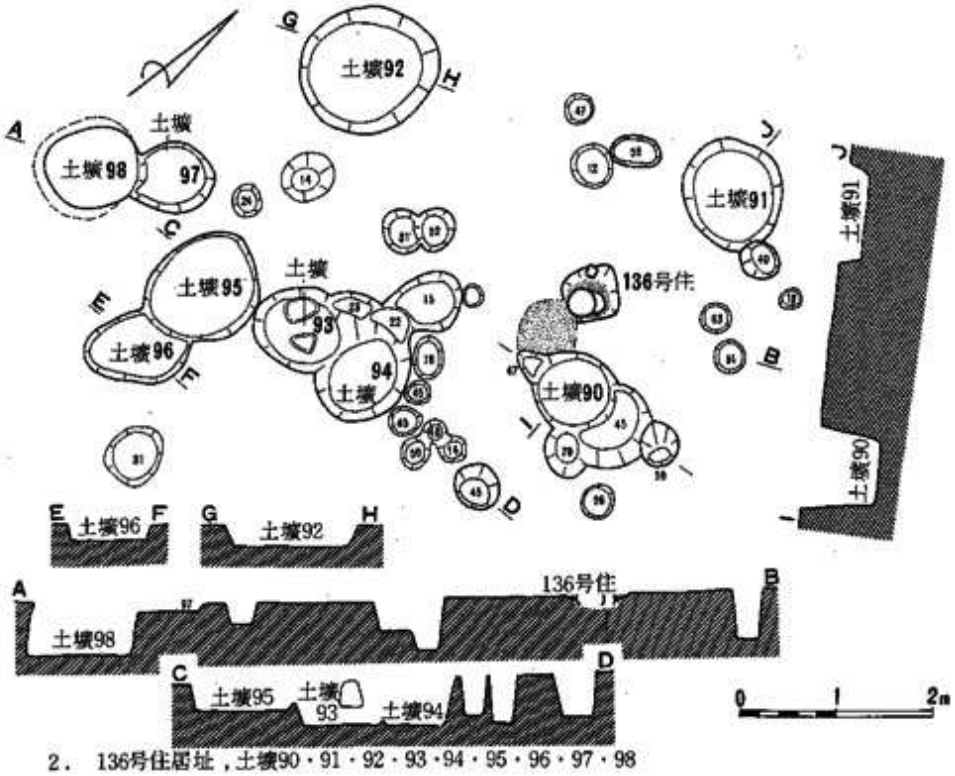
第 121図　樋口内城館址遺跡，土壙28・29・30・31・32・33・36・37・38・73・74実測図（1：80）



第 122図　樋口内城館址遺跡30号住居址土壙墓1，土壙51・52・59・72実測図（1：80）



1．土壙80・81・82・83・84・85・86



2．136号住居址，土壙90・91・92・93・94・95・96・97・98

第 123図　樋口内城館址遺跡，土壙 80～86，90～98実測図（1：80）

b) 土壙出土遺物（図124～126、図版26・38）

土壙の状態をみると、円形プランで断面が摺り鉢状を呈するものが圧倒的に多いが、中には袋状を呈するものもある。大別して集石をもつもの、もたないものに分けられる。遺物の出土状態からみると、完形土器が入っているもの、土器片を含むもの、石器を含むもの、何も入っていないものに大別できる。

1028は、土壙6からの出土で、条線文を縦方向に施した深鉢形土器であり、内部に立てられた状態で検出された。1030は土壙12からの出土で底部を欠く。1036は土壙18から出土し、口径42cm、高さ60cmという大きな深鉢で、土壙床面に　南に口縁部を向け　つぶれた状態で検出された。口縁に平行に文様帯が構成され、連続した三角形隆帯内に三角形印刻文が施される。三角形隆帯の上下には渦巻文を配して、文様構成をしてある。胴下半には楕形文を付している。土壙中注目すべきものである。1060・1061は土壙59出土で、2個体とも2把手を有する。いずれも横倒しの状態で検出された。1062は土壙60から出土し、口縁部のみで胴部以下を欠く区画文土器である。1063は土壙79からの出土で、土壙中最も古い時期に位置されよう。口縁は三角形を呈する小形浅鉢でその頂点に獣面を付けている。縄文前期末に比定される土器である。

石器では、土壙14から打製石斧と敲打器（1032～1034）、土壙17から1035のヒスイ製小形磨製石斧、土壙25から土器片と打製石斧の欠損したもの、土壙33から石鏃、土壙52から磨石兼敲打器でダメージ痕をもつ半欠が出土している。土壙91からは土器片と共に石錐の出土がある。

また土壙30からは、弥生中期に比定される口縁部欠損の壺形土器（1047）が出土し、土壙84からは石臼（1064）の出土をみた。　（市　沢）

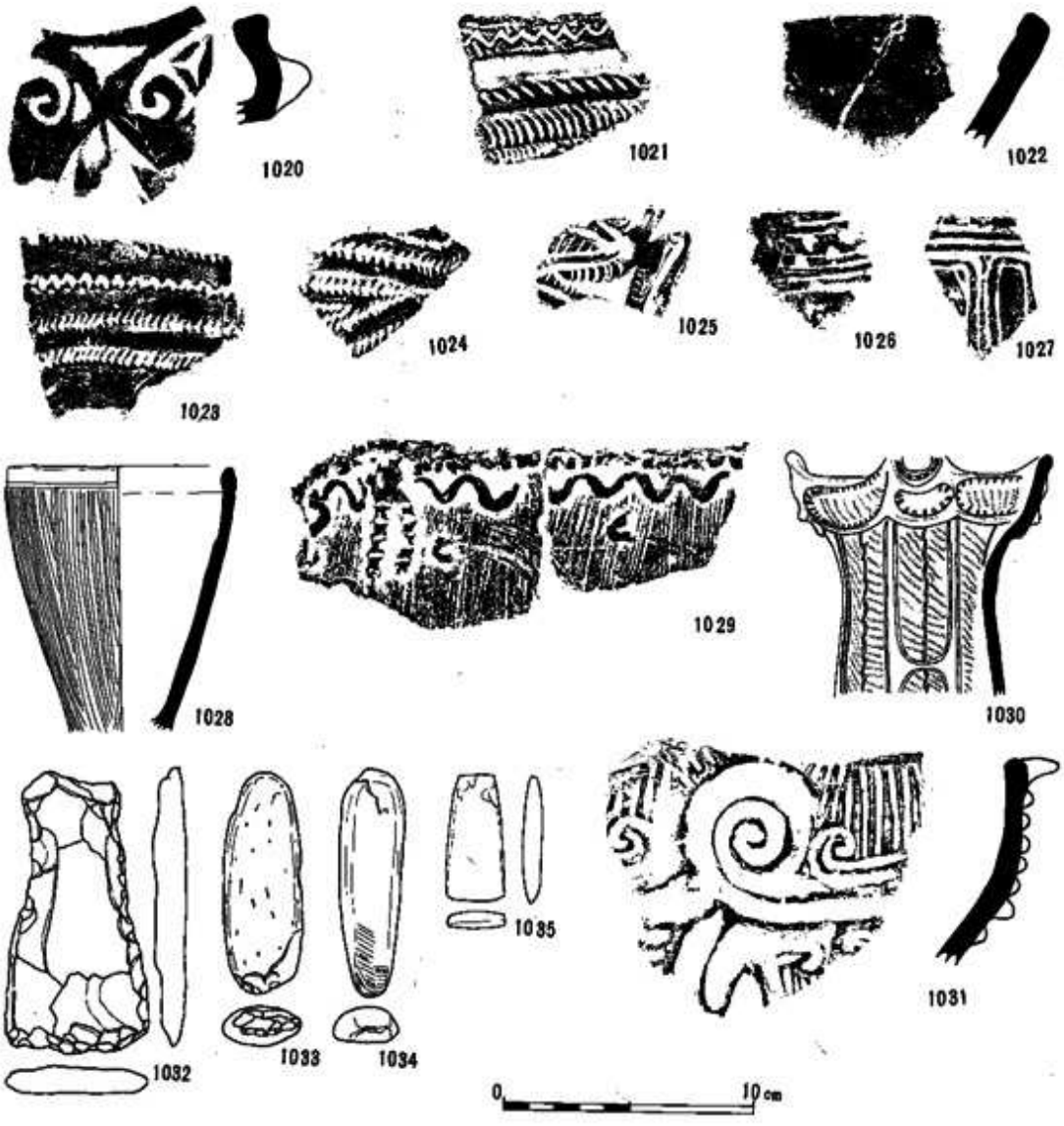
c) その他の出土遺物（図127～142、）

本遺跡からは、グリット掘りの際に多量の土器片と石器が出土している。1073～1084には、爪形文、縄文が施され、胎土に繊維を含有するもので、縄文早期末から前期初頭に比定される一群である。1085・1087は平行沈線を有する前期末の土器であり、これらは出土量も少ない。しかし当丘陵に古くから、これら土器を持つ人々の到来があった証となるものである。

出土量の多いのは縄文中期中葉から後半にかけてのもので、これが出土量の大部分を占める。器形は深鉢形土器が主体を占め、浅鉢形土器、有孔鍔付土器、手こねの小形土器が若干量ある。

1239～1269は、磨消し縄文や帯縄文を有する一群で、縄文後期前半に比定されるものである。

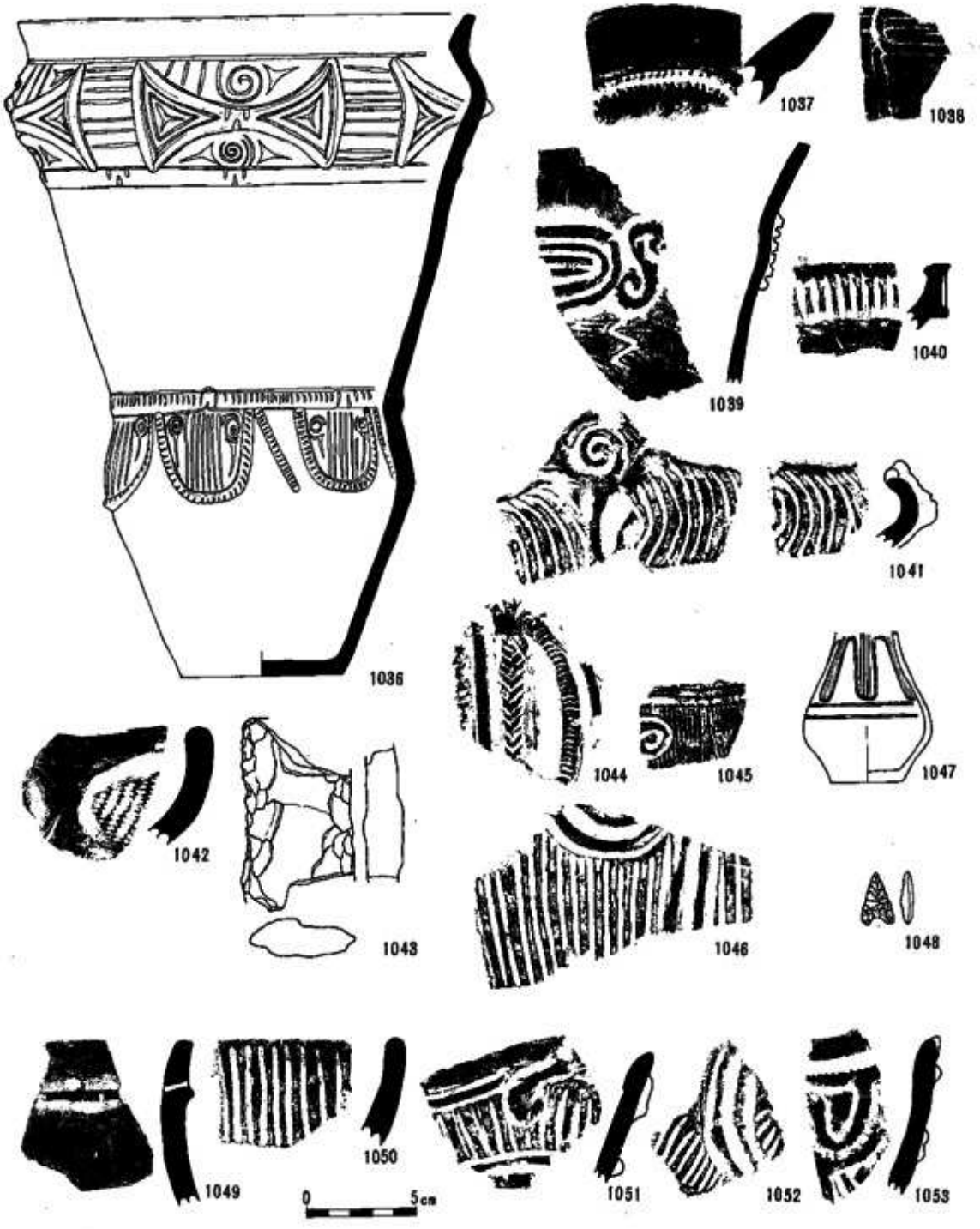
石器は、203～246の打製石斧、247～252の磨製石斧、253～257の横刃形石器、258～260の石匙、261の石錘が出土した他、敲打器、凹石、磨石、石鏃等の出土をみた。262～269は敲打器の一群で、使用擦痕と両端部に打痕を認める。270～284は凹石で形態から4別される。a種としたものは、円礫を使用し、両面に2～4個の凹部を残すもの（270～274）、b種は扁平円礫を使用し、片面にのみ凹部を残し反対面は断面円弧を描き、入念な整形が施されているもので側面は、敲打器、磨石としての機能も果しているものである（275～278）。　c種としたものは細長い円礫を使用し、長端部を敲打使用している。凹部は片面および両面にあるが比較的浅い。整形のための加工は殆んどみられないものである（279～283）。　d種は不定形のものとした（284）。　285～288は円礫利用の敲打器・磨石である。289～292は特殊磨石である。（例言参照）293は石皿片、294～354は石鏃である。基部によって、水平のもの、基部えぐりの浅いもの、深いものの三型態に分けられる。347は五角形鏃で部分磨製がみられる。355は石錐で先端部を欠く。356、



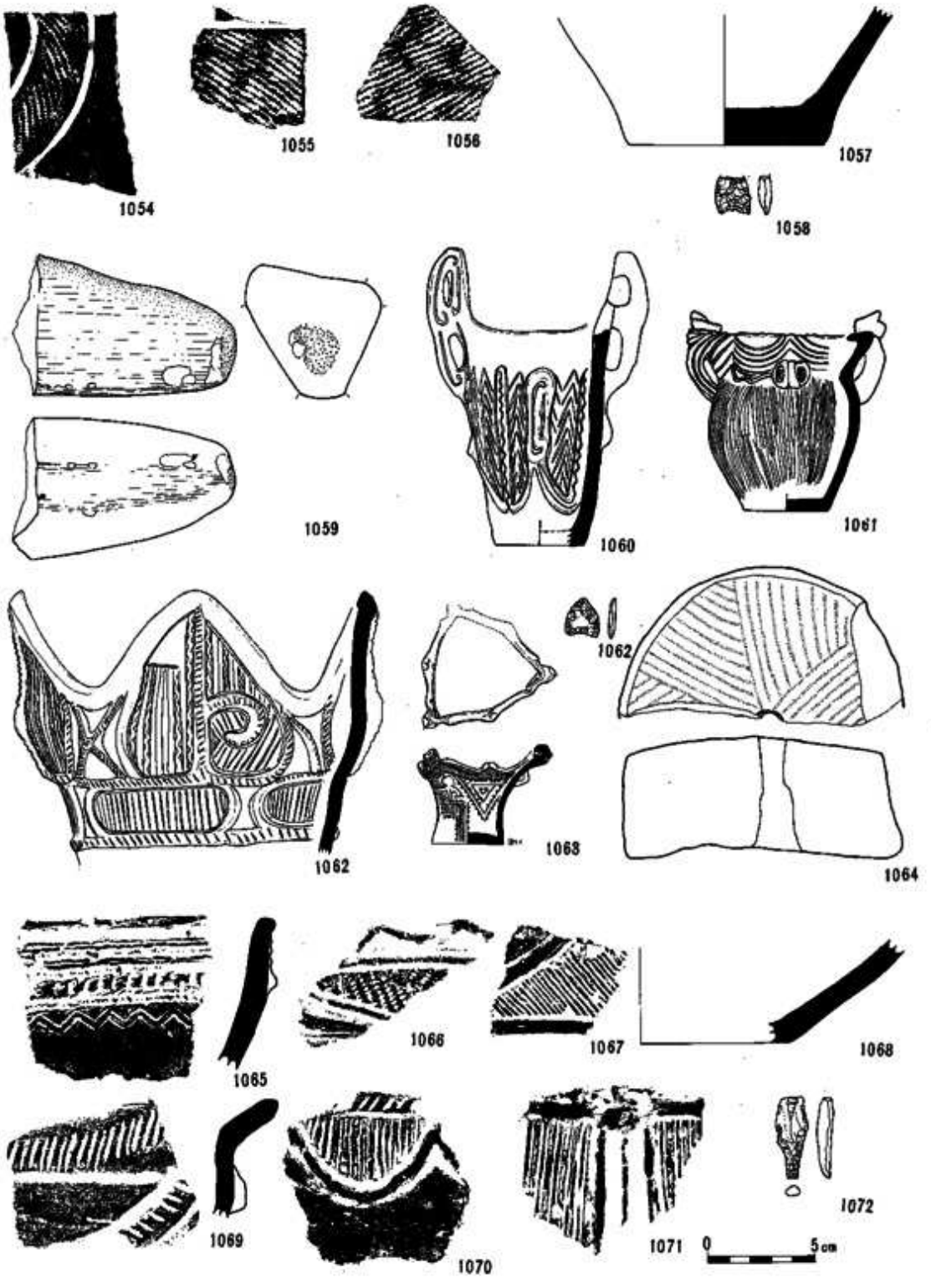
第 124図　樋口内城館址遺跡土壙出土遺物（その1）(1028・1030　1：6，他は　1：3）
（1020　土壙1，1021　土壙3，1022　土壙4，1023～1027　土壙5，1028　土壙6，1029　土壙11，1030～1031　土壙12，1032～1034　土壙14，1035　土壙 17）

は石匙的な機能をもつ石器であろう。357は両側に刃部がある鎌にもナイフにも使えるものである。358～351は石匙であり、362～364は両面調整の掻器の一種であろう。374～377は小形磨製石斧、378は玦状耳飾片、379は土偶頭部、380は土偶胸部である。また数少ない円板の出土もあり、382は有孔である。

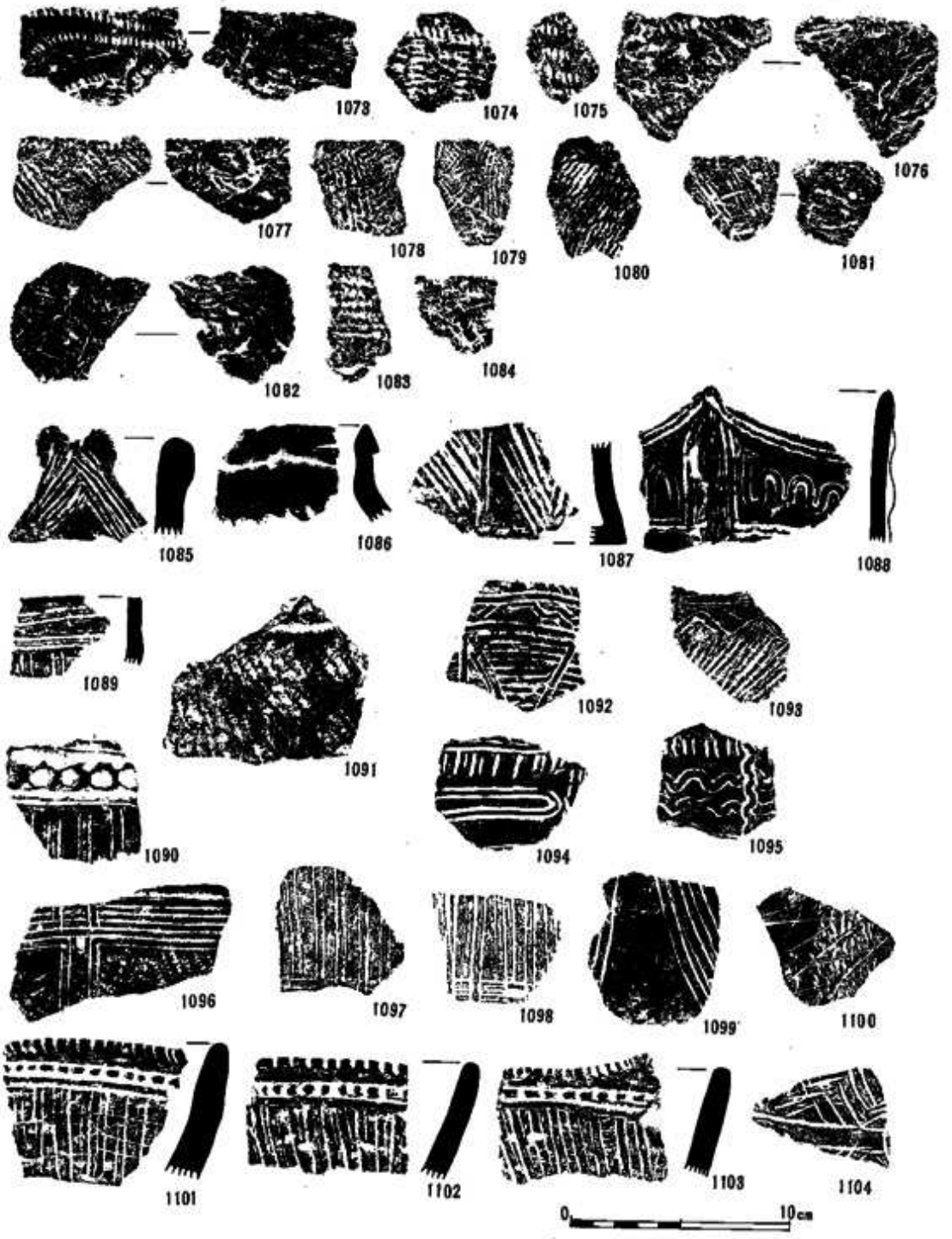
（市　沢）



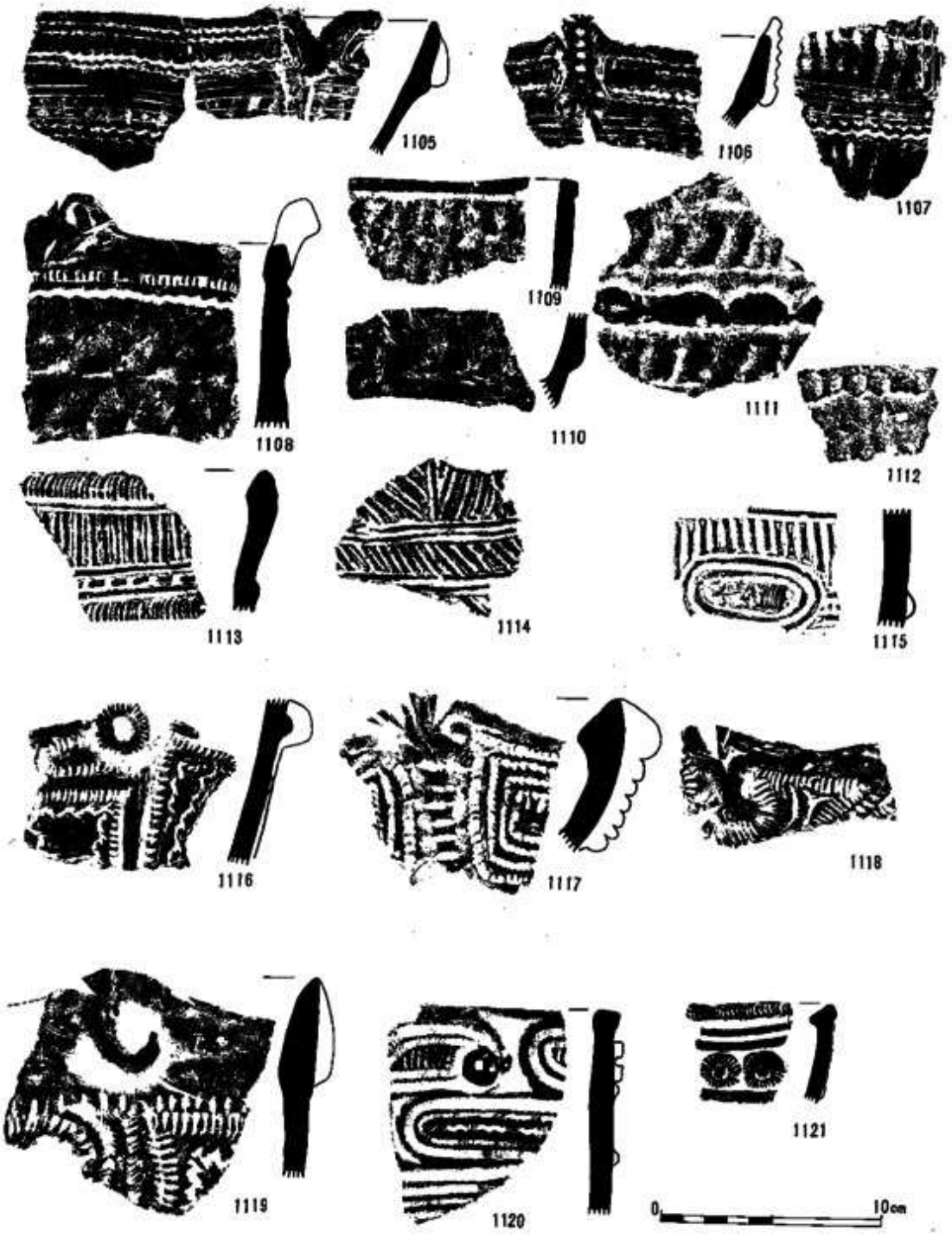
第 125図　樋口内城館址遺跡土壙出土遺物（その２）（1036・1047　１：６，他は　１：３）
（1036　土壙18，1037～1041　土壙23，1042～1043　土壙25，1044～1046　土壙26，1047　土壙30，1048　土壙33，1049～1050　土壙43，1051～1052　土壙46），1053土壙47）



第 126図　樋口内城館址遺跡土壙出土遺物（その３）（1060・1061・1062・1063・1064　1：6，他　1：3）（1054～1058　土壙51，1059　土壙52，1060～1061　土壙59，1062　土壙60，1063　土壙79，1064　土壙84，1065　土壙80，1066～1069　土壙90，1070～1072　土壙91）

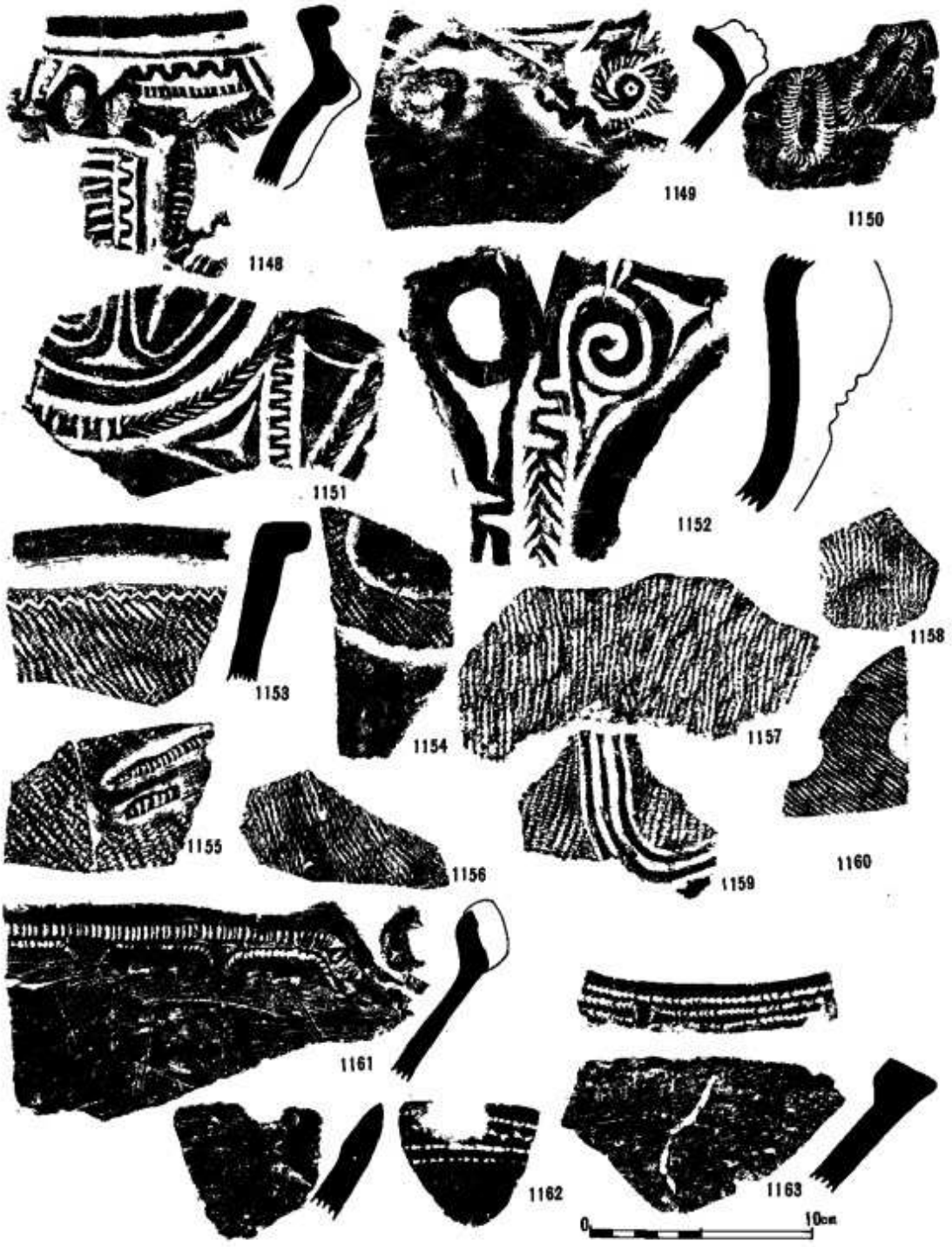


第 127図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その１）（１：３）



第 128図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その２）（１：３）

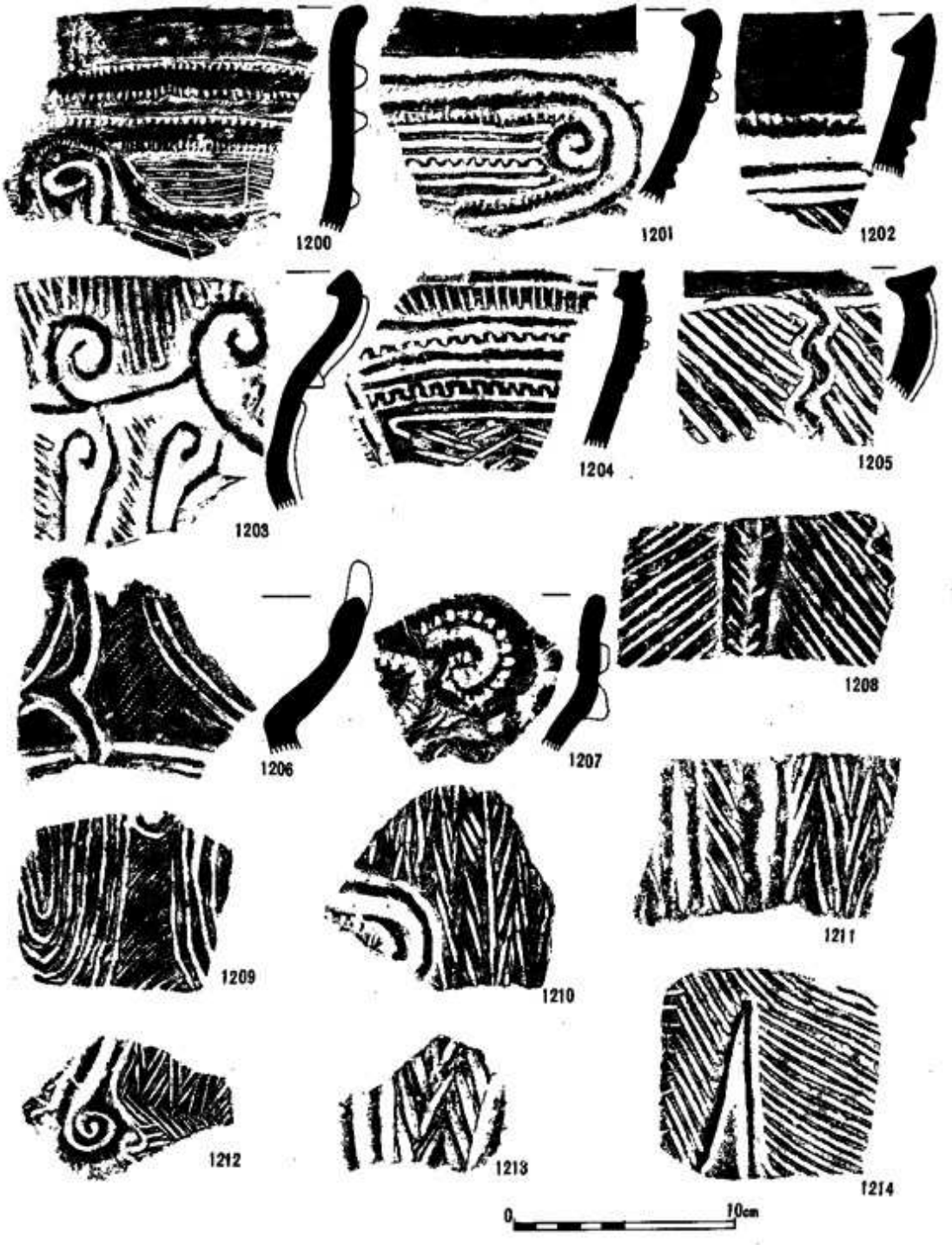
第 129図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その３）（１：３）



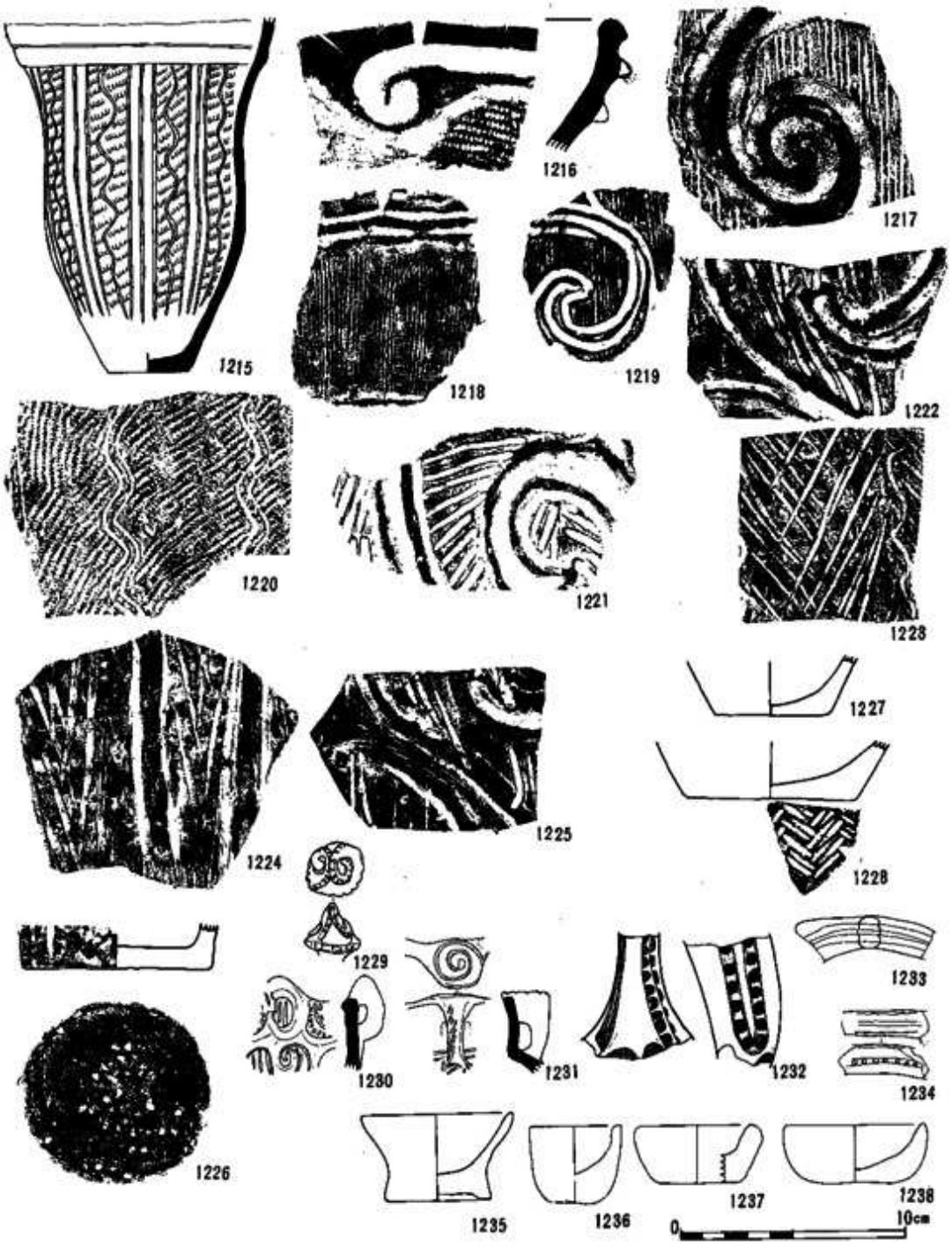
第 130図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その４）（１：３）

第 131図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その５）
（1173～1175　１：６，他　１：３）

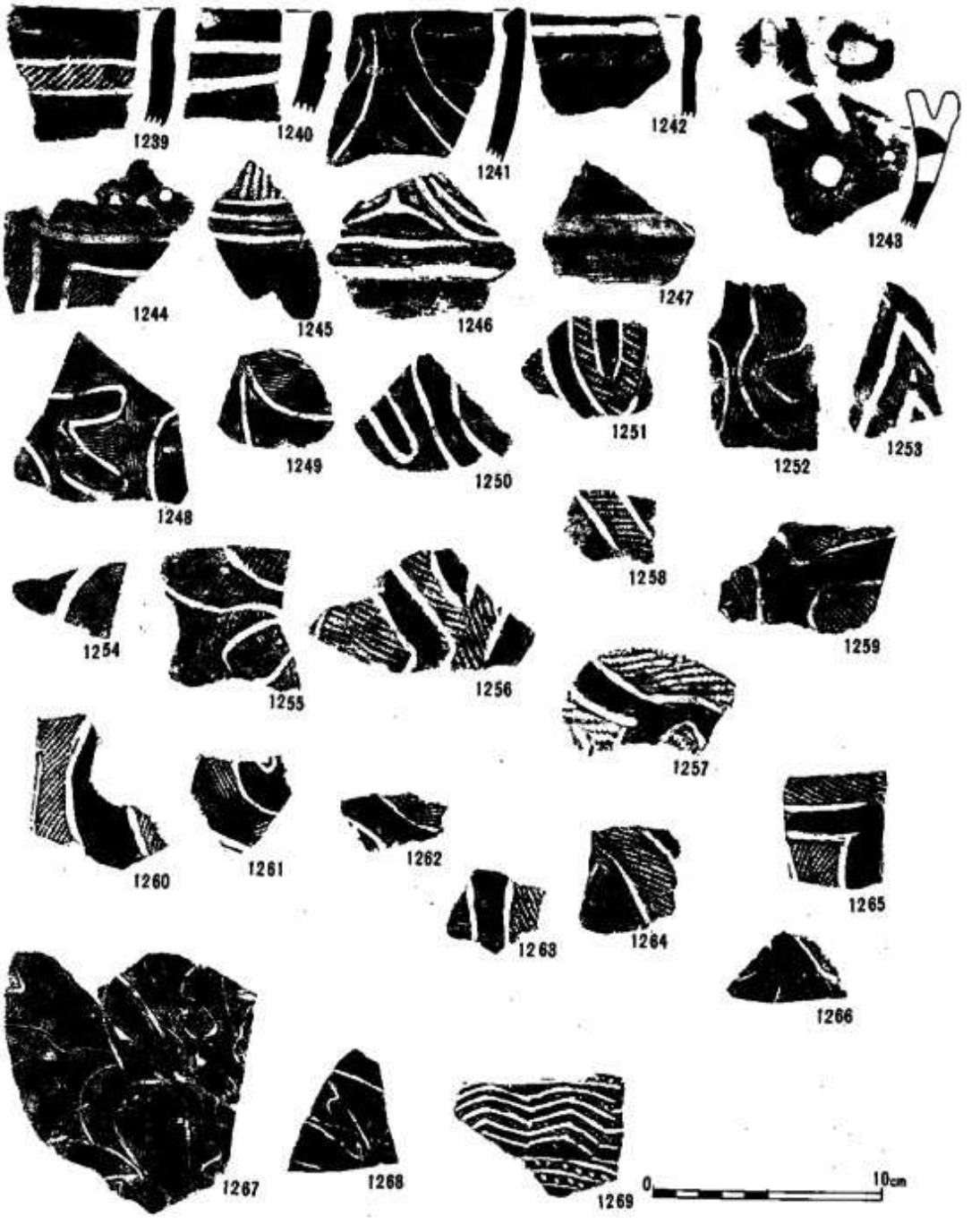
第 132図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その６）（1190～1191　１：６，他　１：３）



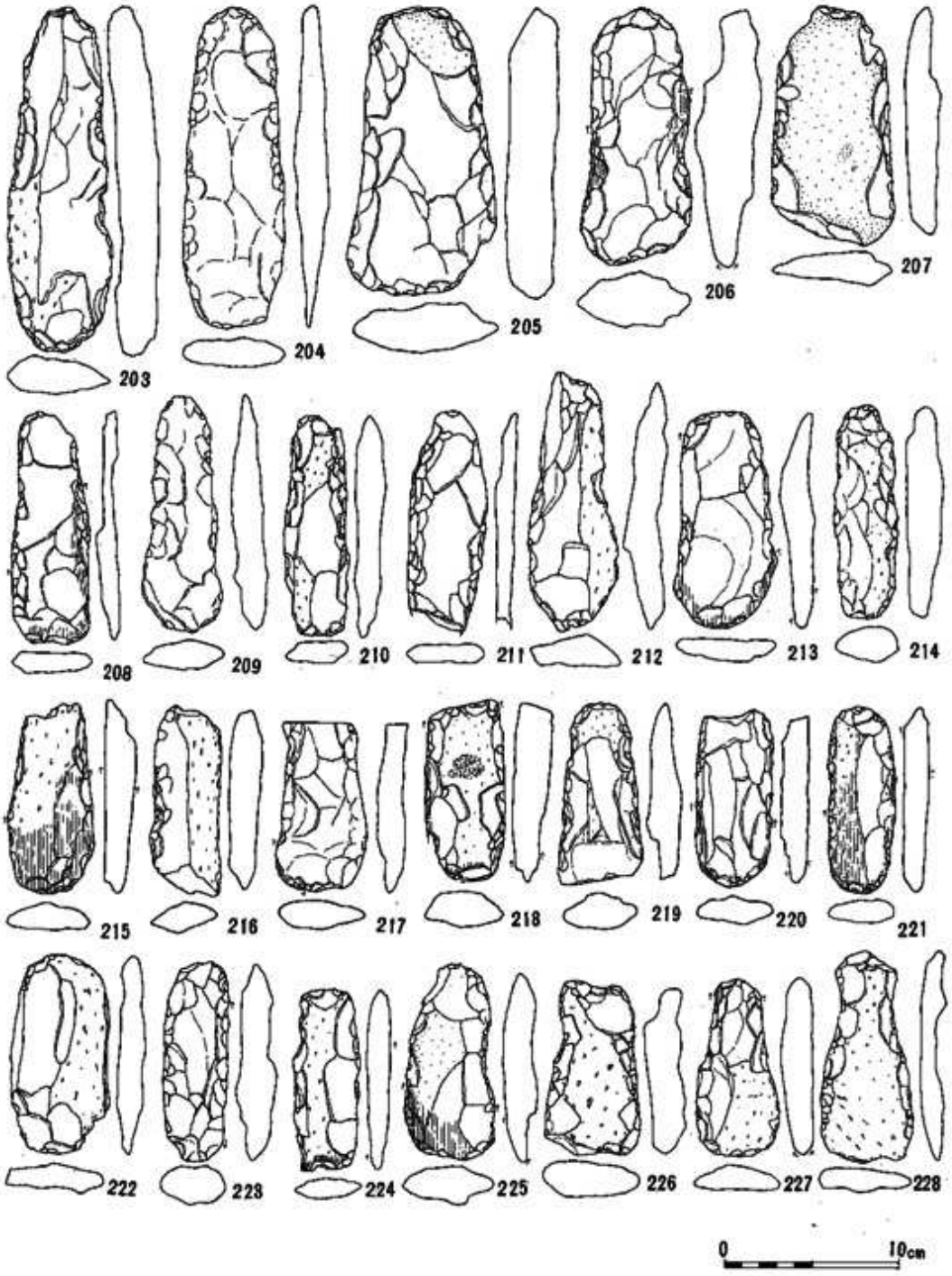
第 133図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その７）（１：３）



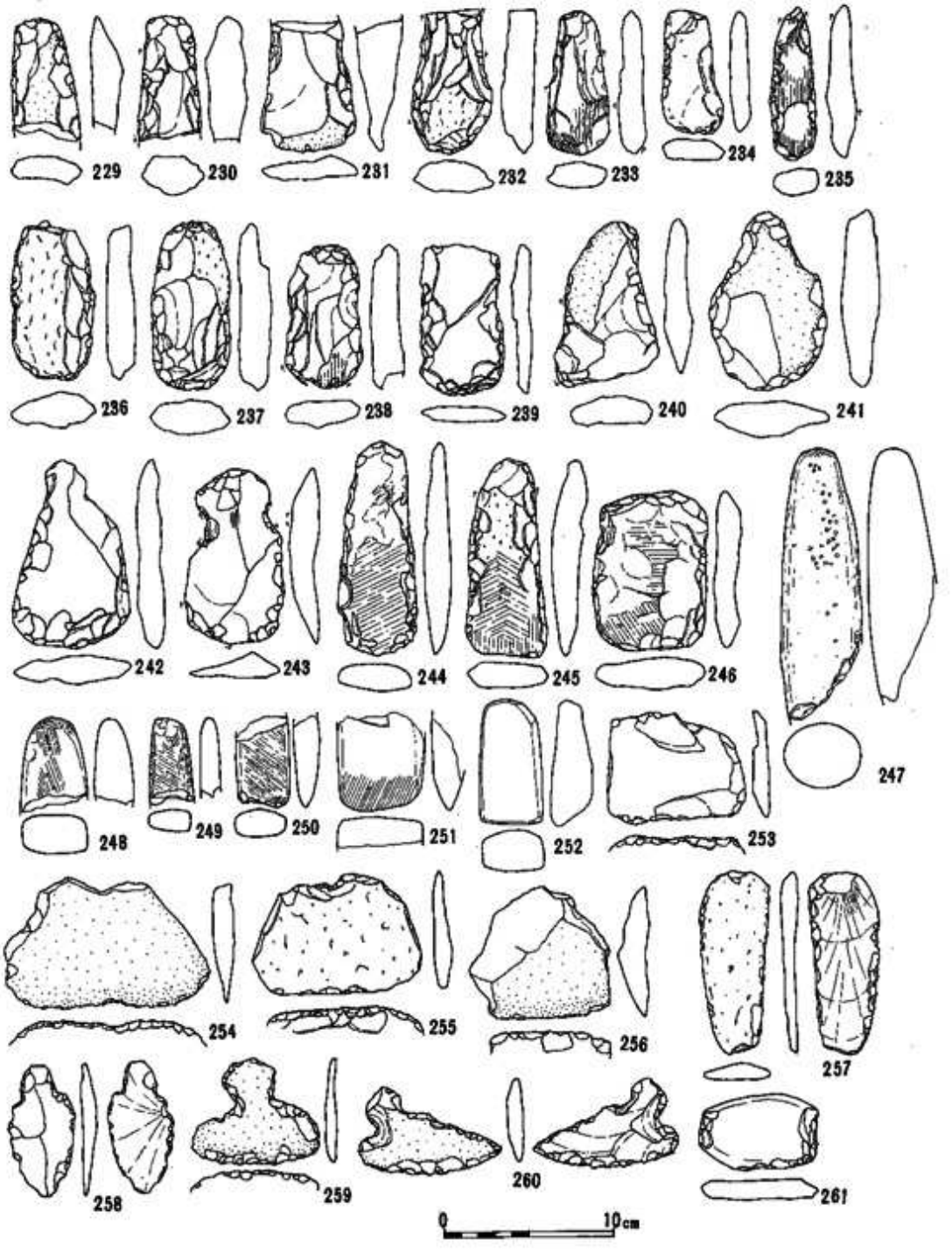
第 134図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その８）
（1215・1229～1234　1：6，他　1：3・）



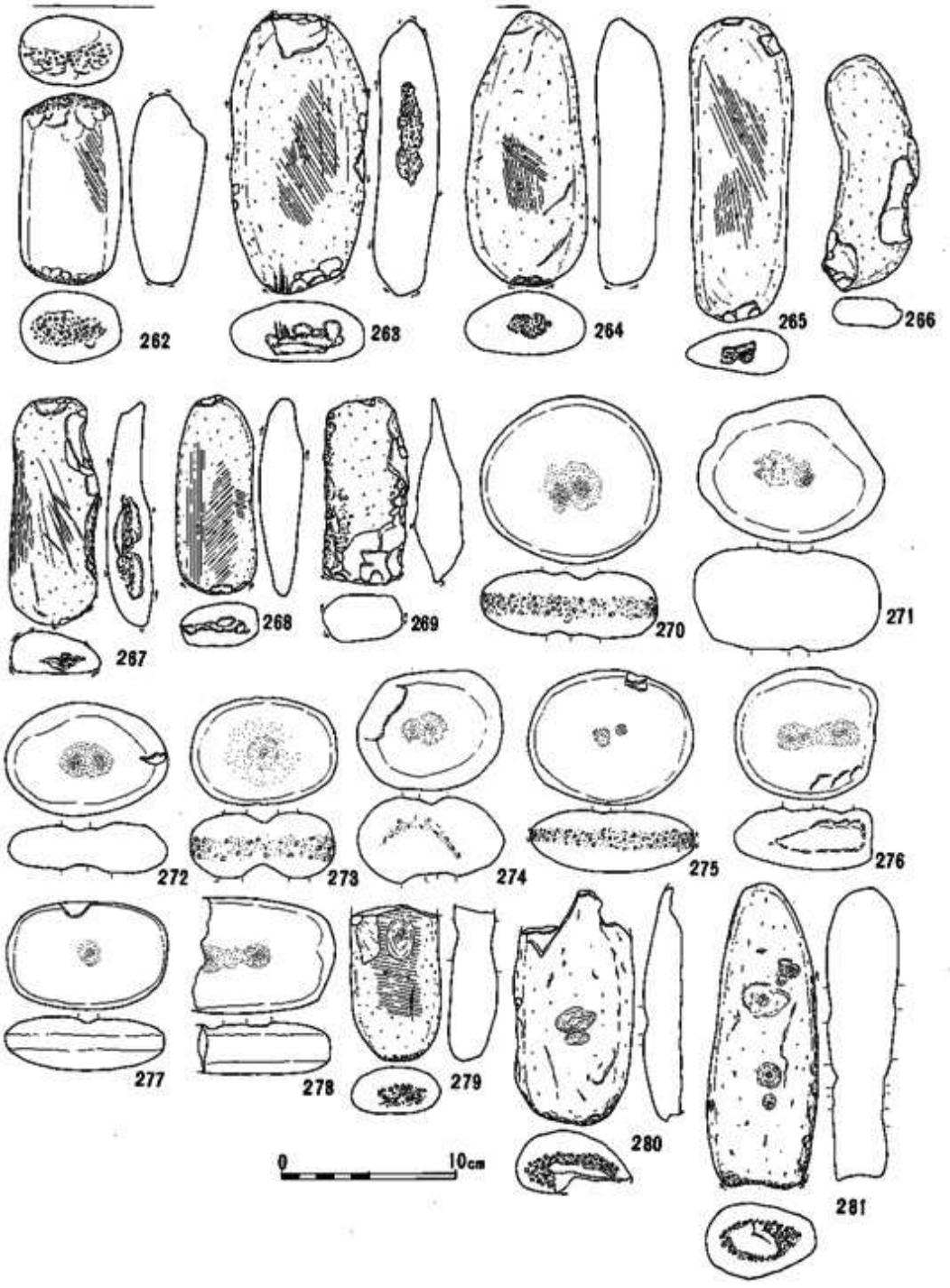
第 135図　樋口内城館址遺跡その他出土縄文式土器（その9）（1：3）



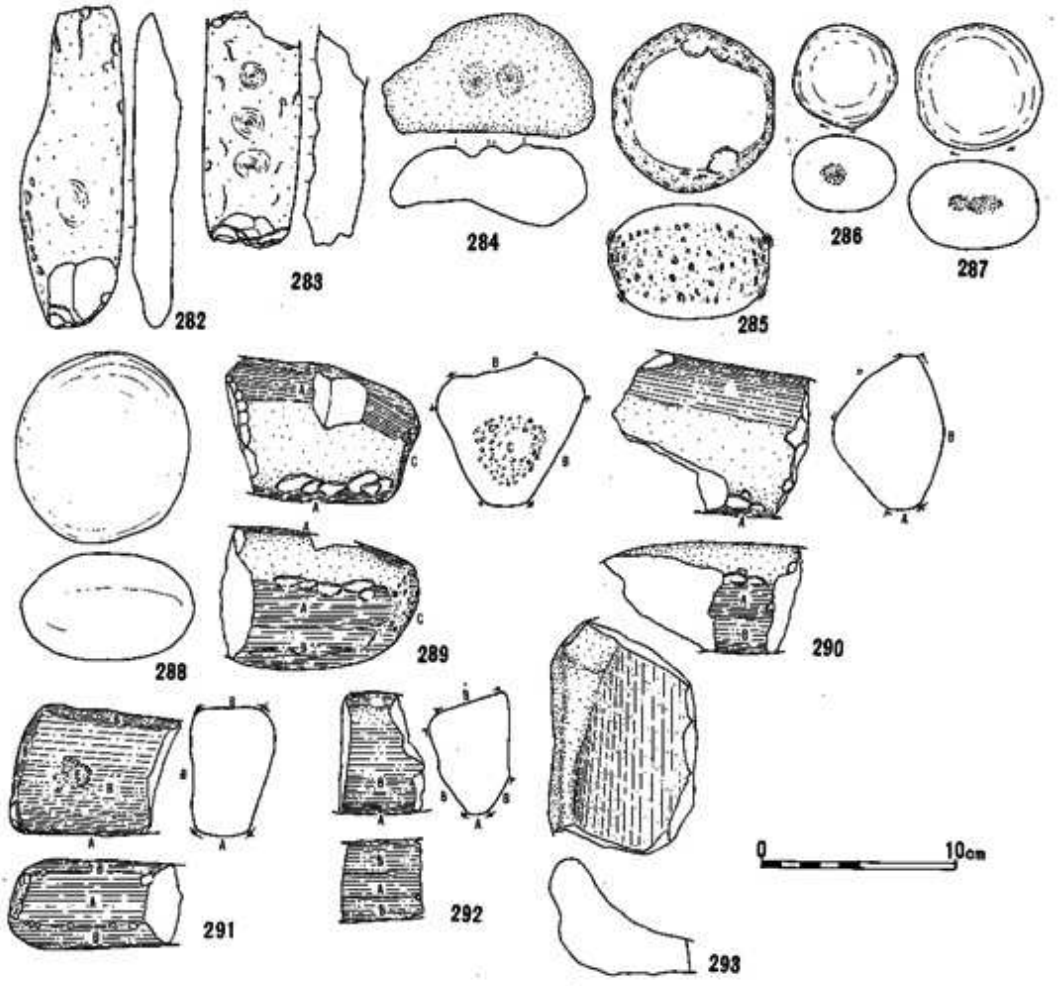
第 136図　樋口内域館址遺跡その他出土石器（その1）（1：4）



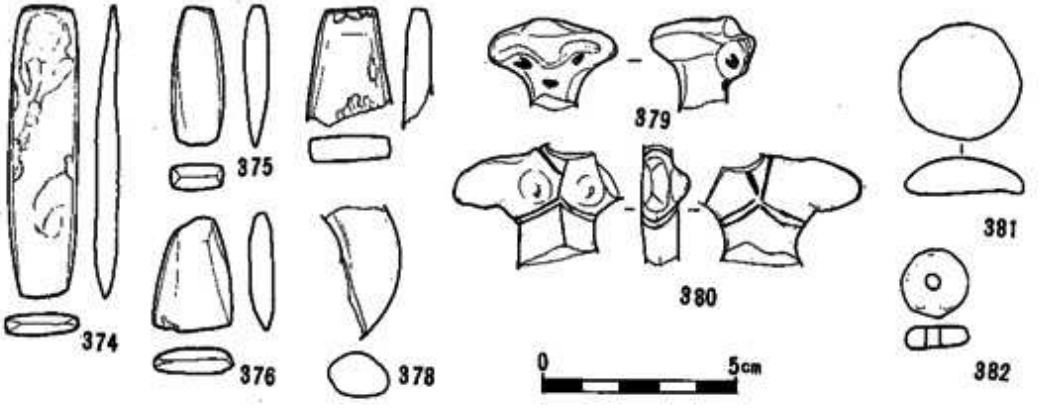
第 137図　樋口内城館址遺跡その他出土石器（その２）（１：４）



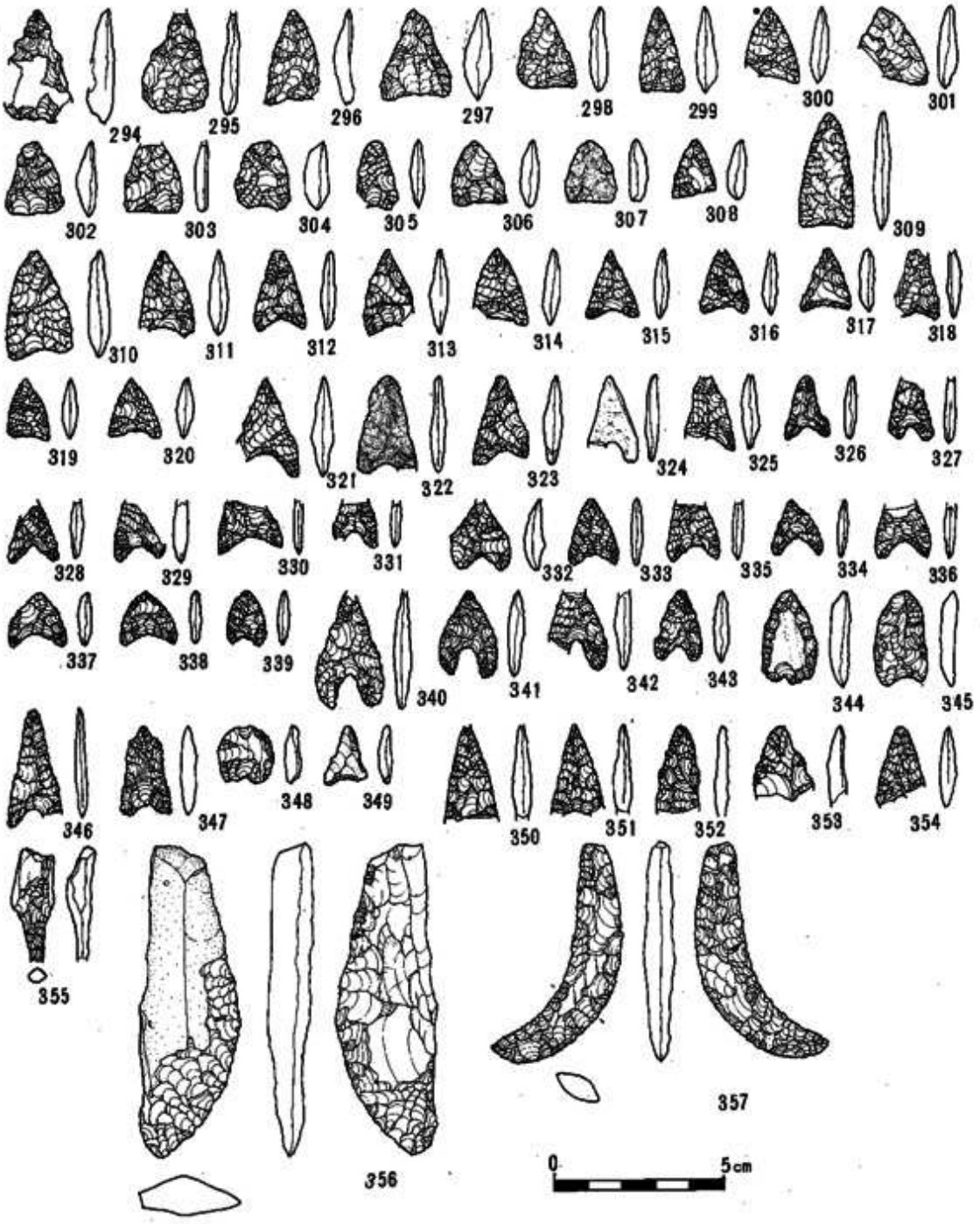
第 138図　樋口内城館址遺跡その他出土石器（その3）（1：4）



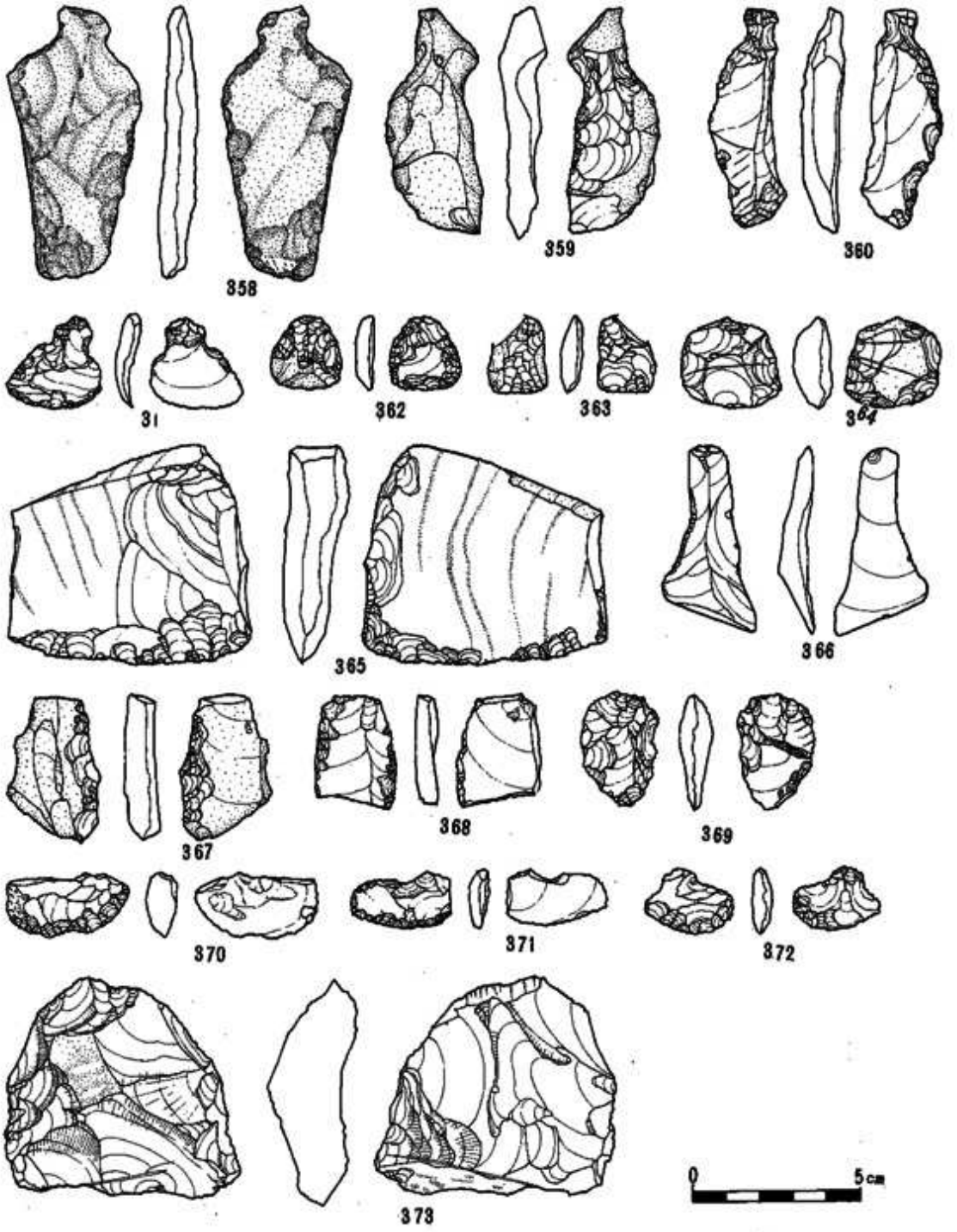
第 139図　樋口内城館址遺跡その他出土石器（その4）（1：4）



第 142図　樋口内城館址遺跡その他出土石器および土製品（1：2）



第 140図　樋口内城館址遺跡その他出土石器（その５）（１：２）



第 141図　樋口内城館址遺跡その他出土石器（その6）（1：2）

イ．弥生式時代の遺構と遺物

ア）１号住居址（図144、155の１～９、158の125～130）

遺構、用地内南部に位置している本址は、床面の一部を確認したのみで、プラン規模は把握できなかった。中世小竪穴22、平安期15号住居址、弥生期５号住居址に西半を切られている。

遺物、床面上から多量の土器片と石鏃３点が出土した。土器１は櫛状工具による波状文を施した壺形土器で口縁部と胴部下半を欠く。２、３には斜走短線文を口縁に施し、その下に波状文がみられる。口唇には刻目がある。８は無文であり、口唇に縄文を施す。石器は石鏃６の他、打製石斧３、磨製石斧１、敲打器１、石錘１、石匙１等が覆土中から出土した。石鏃は磨製のものが２点で、４には孔がみられる。北には縄文期の12号住があり、石器の中には、12号のものが入っているのかもしれないが、本址出土としてまとめた。（小松原）

イ）５号住居址（図146・147・155の10～21、図版10の38、45の220）

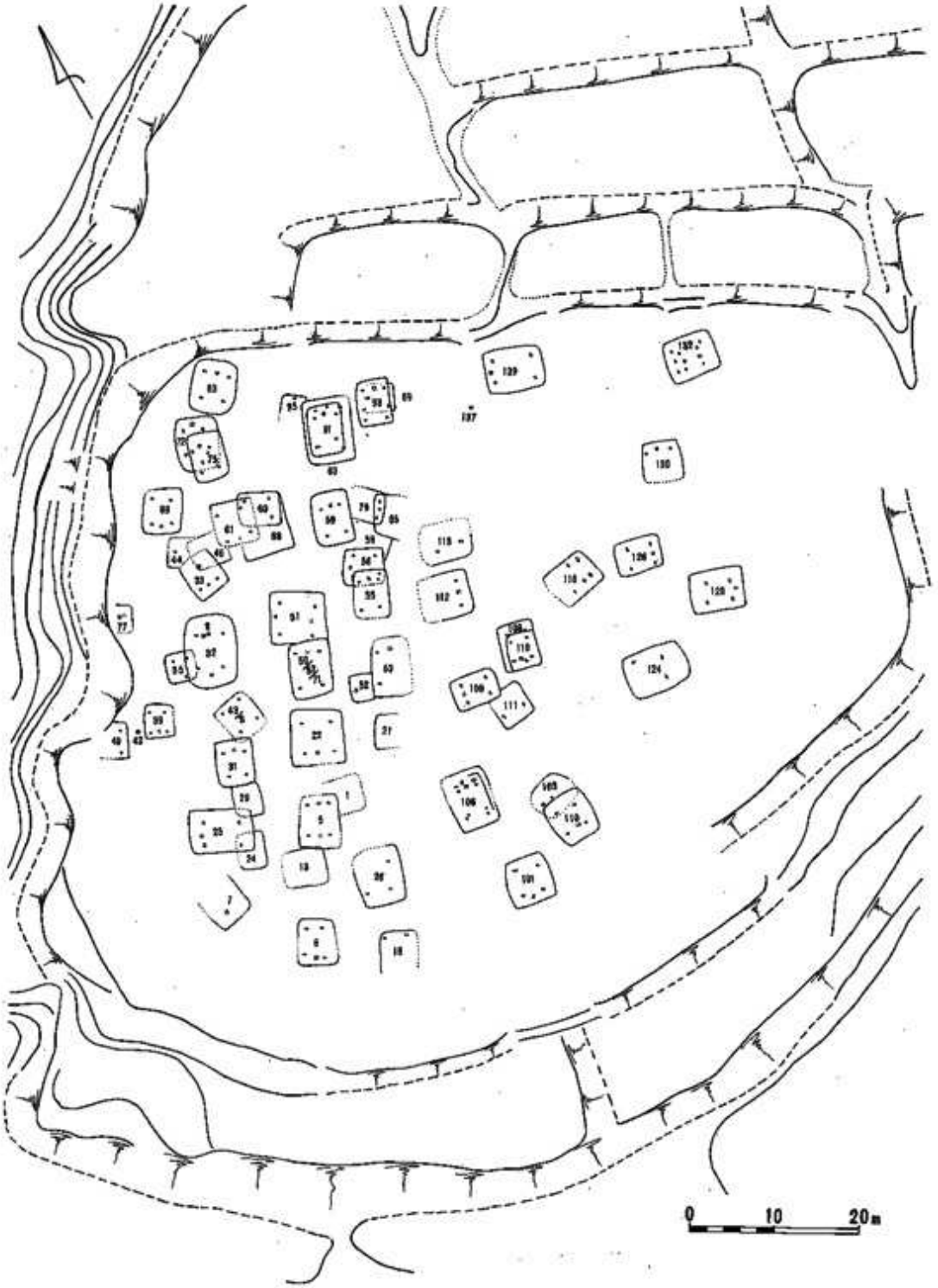
遺構、丘陵南西部に位置する本址は、１号住居址の西部を切って構築されている。また本址の北部は15号住居址に、南東隅は20号住居址にそれぞれ切られているが、壁の一部を失っただけで、床面にまでは及んでいない。掘り込みは、145図(下)のように、上から耕作土、水田床土、炭混り黒色土、茶褐色土の順でロームを基盤としている。主軸方向をＮ－29°－Ｅに示す長方形プランで、規模は5.20×6.64m を測る。壁はかなりの傾斜をもって掘られ、東壁高43、北壁12cmを測値する。床面は平坦で堅いたたき状となり、楕円形を呈する主柱穴が床面下深く据られている。堀窪炉は、南北に２個所あり、主柱穴間線上からやや壁寄りに堀設されている。南側のものが主要と思われ、大形甕のそばに小形の甕が併用されていて、周辺の床は強く焼けている。北側の炉は余り焼けておらず、甕は底部欠損のものを伏せて使用している。また炉の南には浅い擂鉢状ピットが２個所あって、内部に焼土が検出された、本址は火災に遭遇したものと思われ、床面上は多量の炭化材と炭化カヤが散在していた。

遺物、土器は櫛状工具による波状文、平行線文が主体をしめる、弥生後期のものである。32は南側炉甕として使用されたもので、口縁から胴部上半に波状文をもち、胴下半には縦方向の篦調整痕がみられる。48、49は覆土中からの出土で、綾杉状の平行線文をもち、弥生中期に位置づくものである。

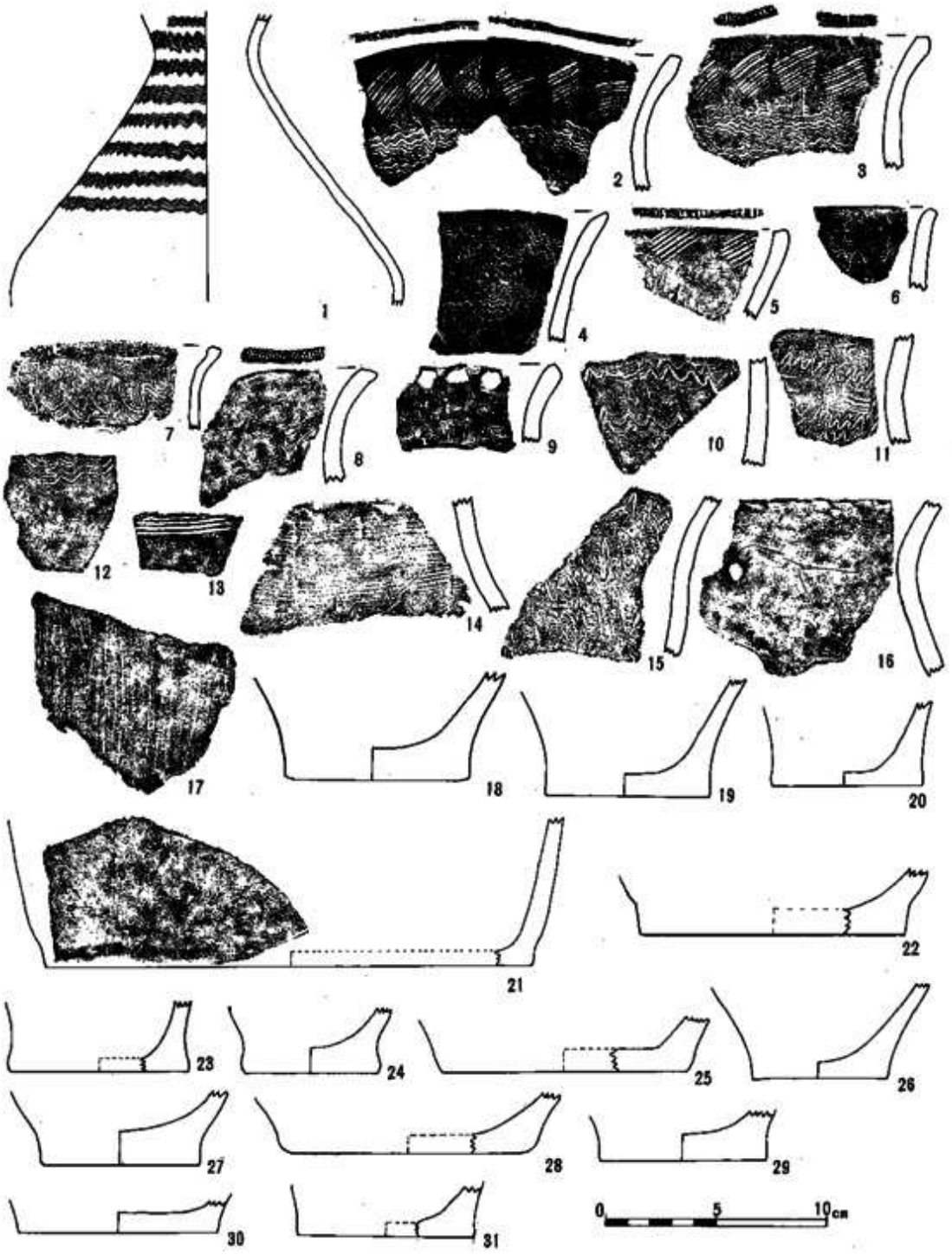
石器は、すべて覆土中からの出土である。磨製石鏃１、打製石鏃６、石錐２の他、シャモジ形をした小形の磨製石器１が出土している。また南側壁の縁には、径３cmほどの炭化した杭が斜めに入り込んでおりそれを取り囲むようにして多量の炭化ムギが検出された。（深沢）

ウ）６号住居址（図148、149の62～72、155の22～28、図版10の39、45の221）

遺構、丘陵南端に営なまれた本址は、褐色土層よりローム土へ掘り込んだ、4.53×6.50m の規模をもつ長方形プランの住居址である。東の一部は中世小竪穴16に、西側は小竪穴３に切られて検出された。残存壁は北側が高く良好であり、床面も北半は平坦堅緻である。床面には主柱穴４個所が規則性をもって掘られている。楕円形状を呈するものである。炉は、南側主柱穴間線上中央や・南寄りに、中形の甕を使用した



第 143図　樋口内城館址遺跡弥生期遺構全体図（1： 800）



第 144図　樋口内城館址遺跡１号住居址出土土器（１：３）

埋甕炉で、附近がかなり広く焼けている。

遺物、出土量は少ない。櫛状工具による波状文が施される弥生後期土器で、83、84は壺の口縁部片である。62は炉甕として使用されたものである。

石器として、打製石鏃5、石包丁半欠で有孔のもの1、紡錘車1が覆土中から出土した。　　（根津）

エ）7号住居址（図148・149の73～79、155の29～31、158の131～132）

遺構、本址は丘陵南西端にあり、耕作による破壊が進んでいて、南壁、東壁の一部と南東一部分の貼床を確認できたのみである。長方形を呈するものであろう。炉は、南壁内1.5mの所にわずかな掘り込みと焼土がある位置と思われる。小竪穴20に中央部を切られている。

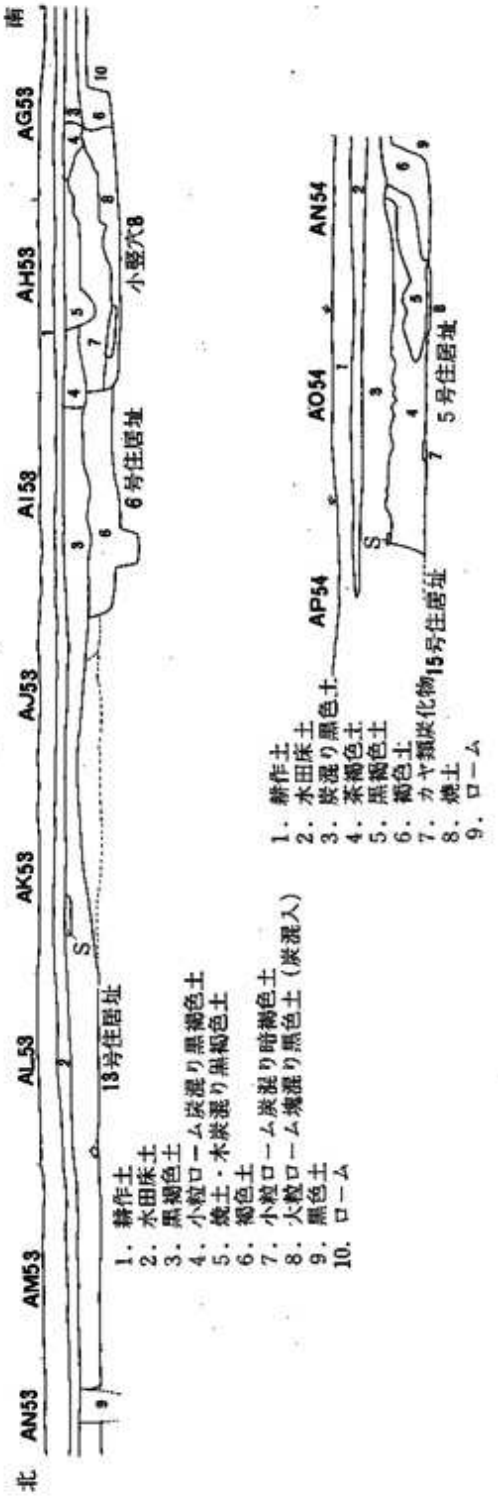
遺物、土器は、口縁部に沿って乱雑な波状文を施しその下に綾杉状平行沈線を付した甕形土器と口縁部に斜走短線文を付したものが出土している。弥生中期末に比定されよう。

石器は、小形磨製石斧1、石匙1、打製石鏃1、磨製石鏃2が出土している。磨製石鏃は2個とも有孔であり29は床面からの出土である。　　（一条）

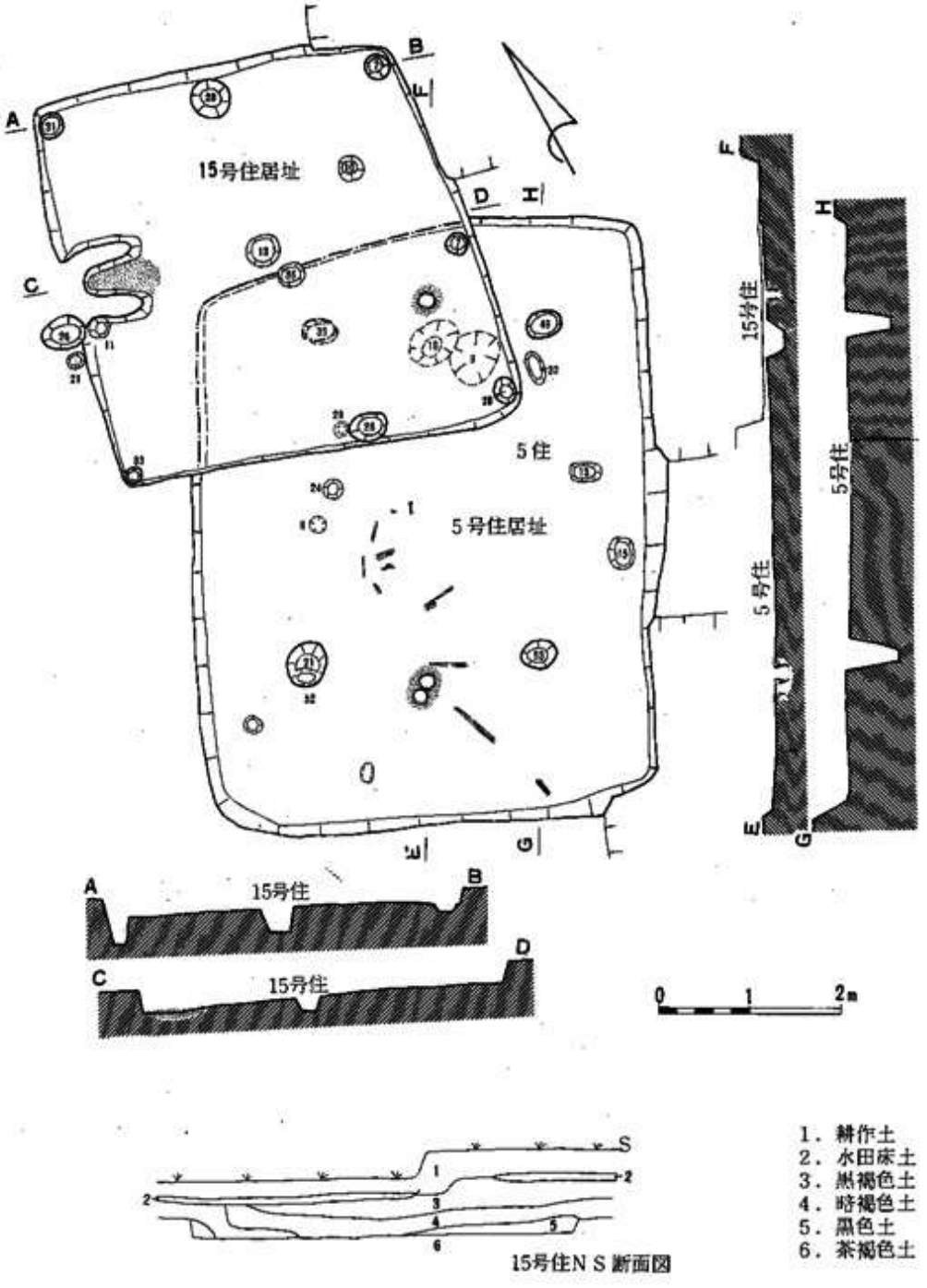
オ）8号・43号住居址

a）43号住居址(図163·170の321～330、155の32～36)

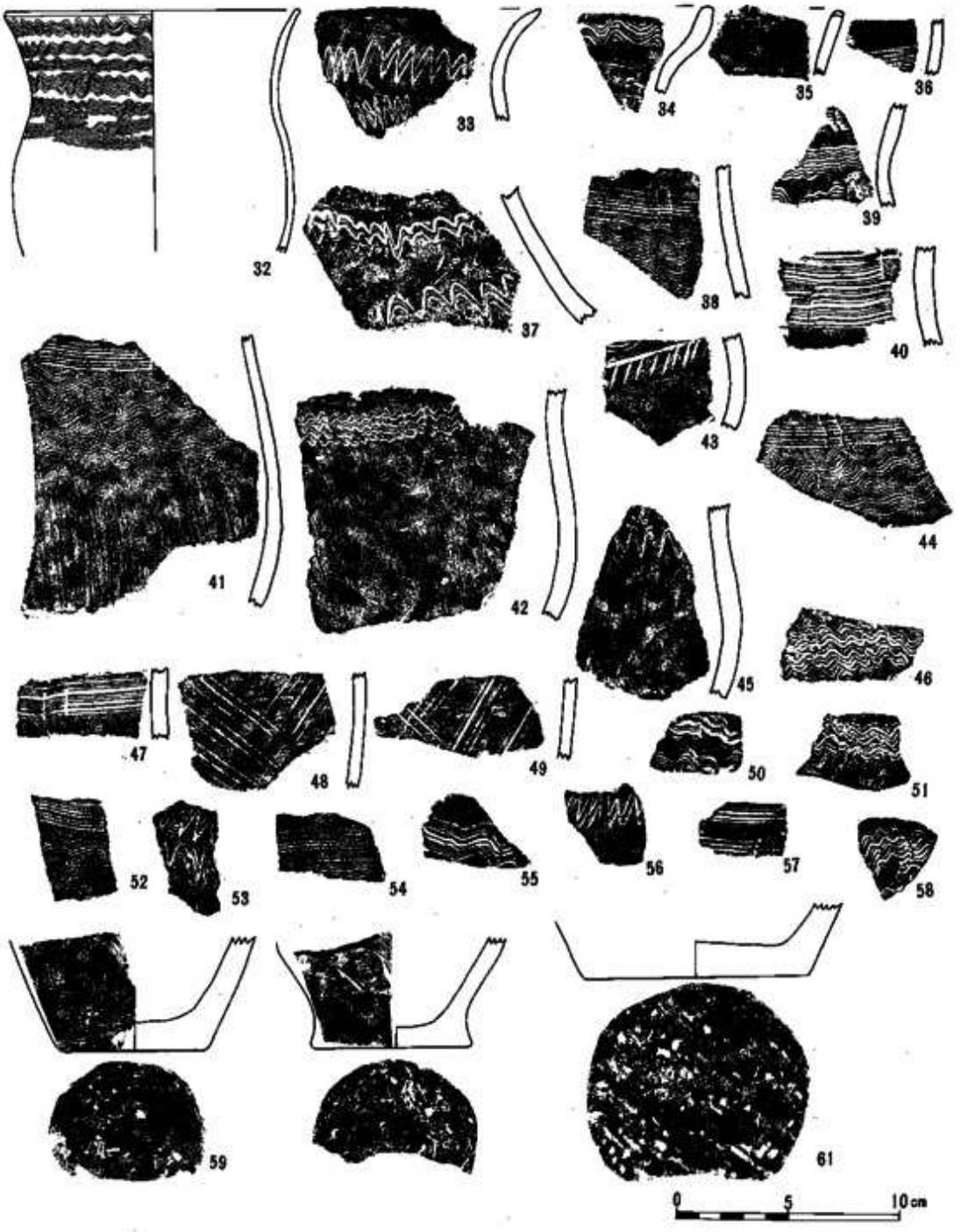
遺構、丘陵西端近くに位置する本址は、プランが、8号住居址と一致するので、8号住居址を造りかえたものと考えられる。壁は北側で10cmの高さを残しているが、南側は基盤ロームの傾斜で不明である。床は8号住居址の周溝や小ピットを埋めて貼床してあり、平坦で堅い。炉は住居ほぼ中央部にあって、8号住のものをそのまま使用したと考えられる。60×70cmの規模で、15cmほどに掘り込まれた擂り鉢状で、内部には焼土と炭化物が残存していた。火床と思われる焼土塊が底部南側に十ほど残っているが、北側にはない。主柱穴は4個所等間隔にあり、これも8号住居址と共用し



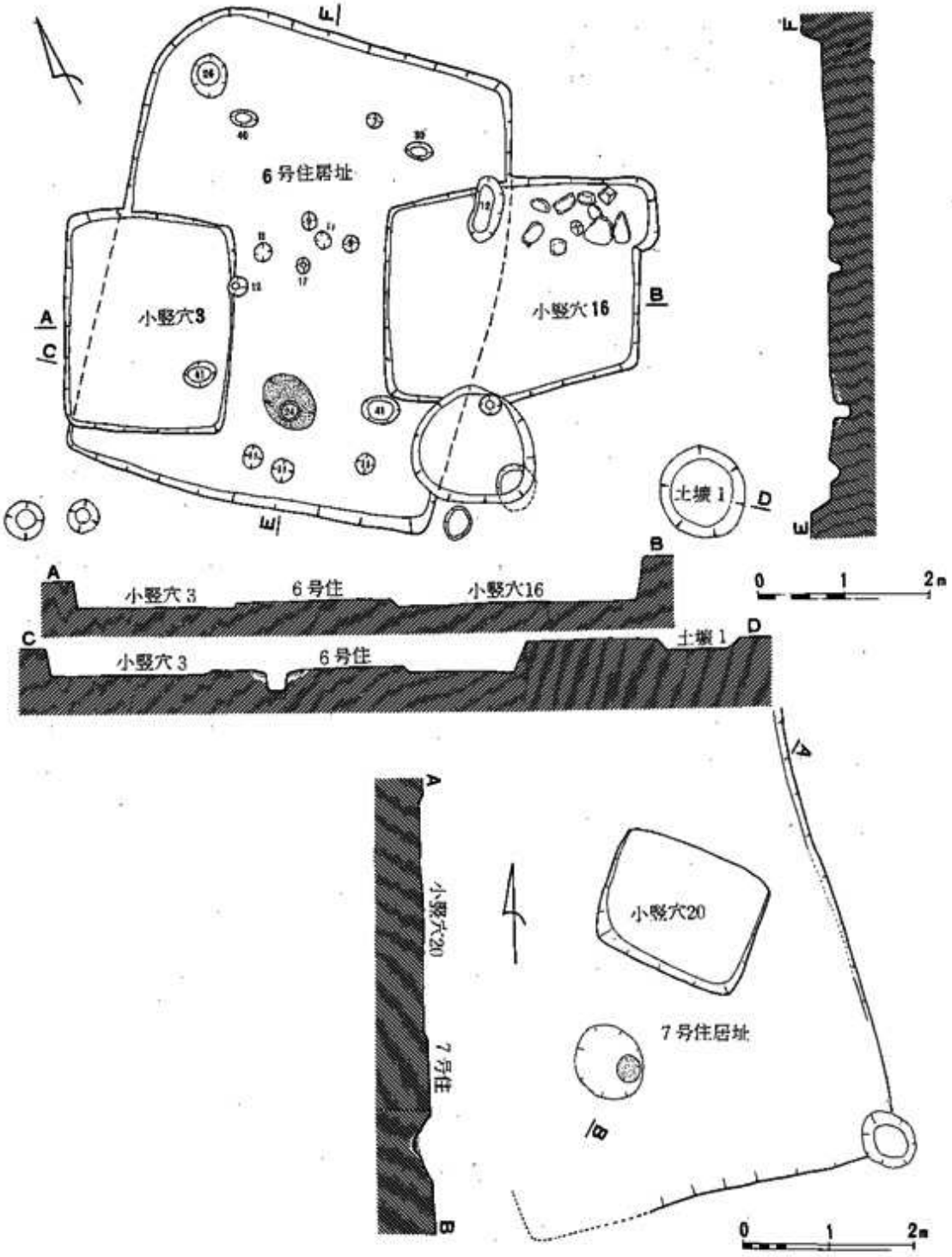
第145図　樋口内城館址遺跡，A地区53列および54列土層断面図（1：80）



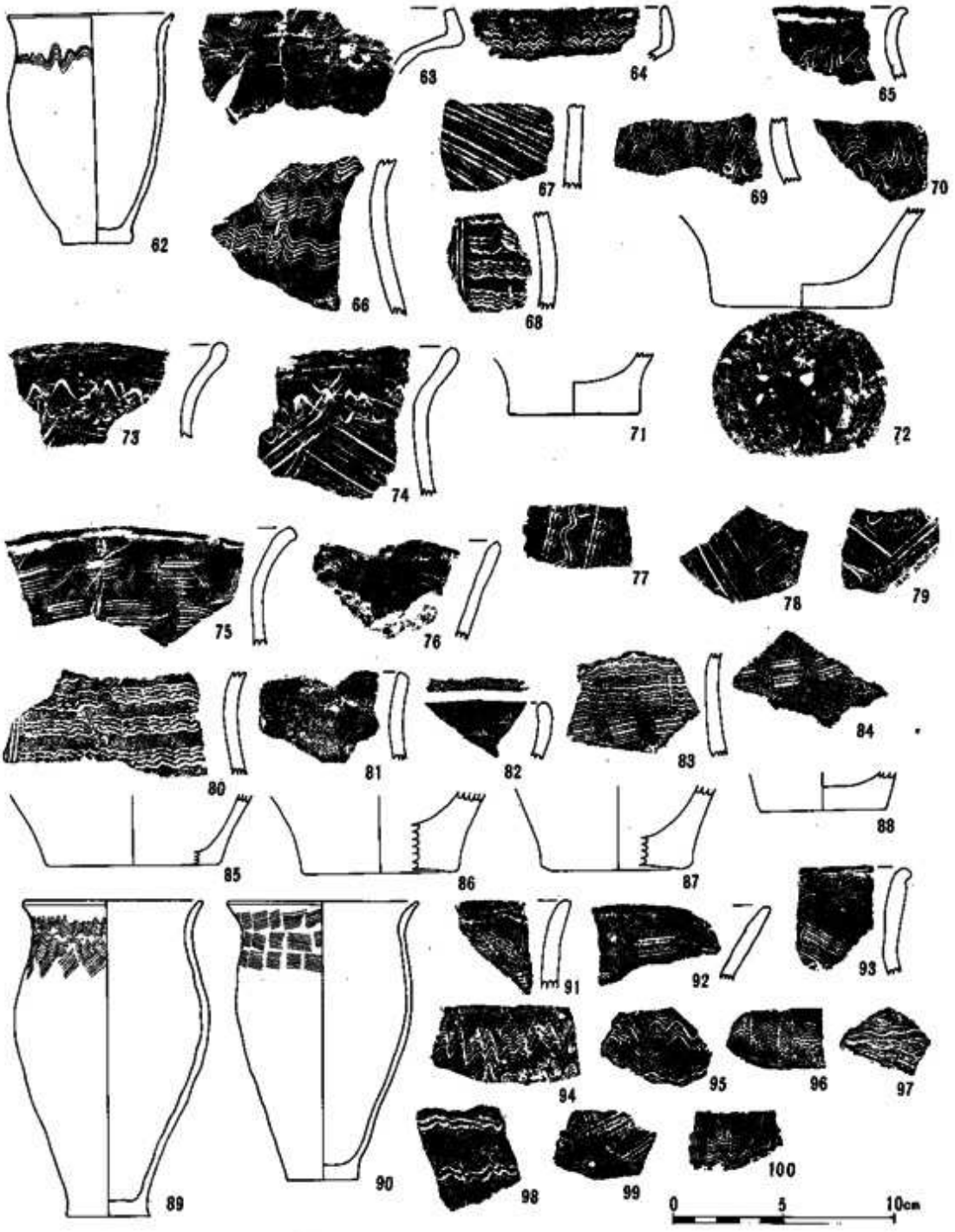
第 146図　樋口内城館址遺跡５・15号住居址実測図および15号住居址土層断面図（１：80）



第 147図　樋口内城館址遺跡５号住居址出土土器（32　1：6，33～61　1：3）



第 148図　樋口内城館址遺跡，6・7 号住居址，小竪穴 3・16・20実測図（1：80）



第 149図　樋口内城館址遺跡6・7・13・18号住居址出土土器
（62・89・90　1：6，他　1：3）（62～72　6号住居址，73～79　7号住居址
80～88　13号住居址，89～ 100　18号住居址）

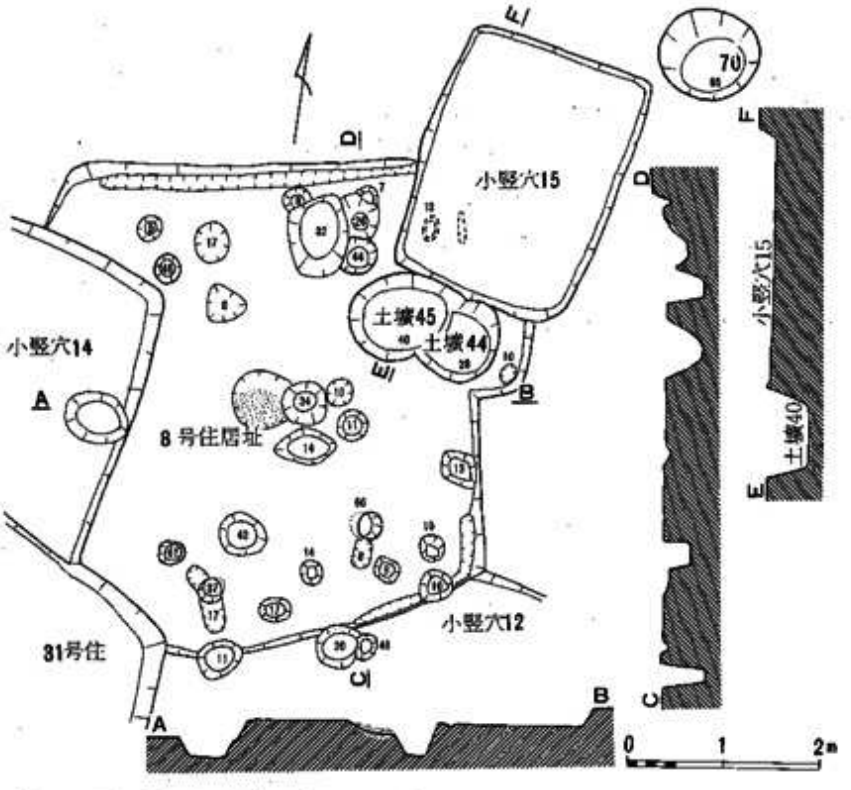
たと思える。31号住居址、小竪穴12、14、15に切られている。

遺物、出土したのは甕の破片であり、321、322には口唇に刻目文、縄文が施されている。324 には簾状文と波状文が組み合わされて付されている。弥生中期末から後期前半に比定されるものであろう。また南西柱穴から、磨製石斧の小破片が検出された。床面から石錐、覆土中から石鏃の出土をみた。（深沢）

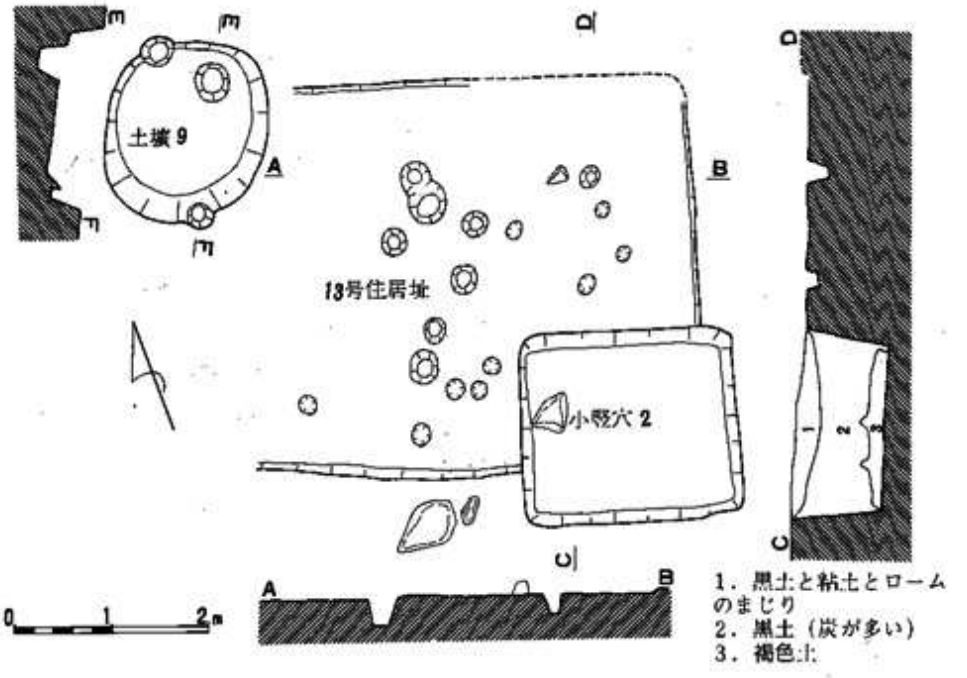
b ）8号住居址（図150、図版11の40）

遺構、43号住居址とプランを同じくするもので、43号住居址貼床下に本址床面が確認された。南北で5mを測値する規模の方形プランで、北壁は比較的良好で15cmの高さを残すが、南壁はわずか2cm程しか確認できなかった。南、北の壁に沿って浅い周溝がめぐらされ、床面は全体に軟弱で凹凸がある。炉は住居中央にあったと思われ、43号住居址としても使われていれ。主柱穴も同様43号住居址としても使われている。小ピットが炉附近と主柱穴近くに多数検出されている。北東側主柱穴のそばにあるピットは大きいが貯蔵穴的なものであろうか。土壙44、45が貼床下から検出され、本址より先行するものと考えられる。

遺物、全く検出されなかった。（深沢）



第 150図　樋口内城館址遺跡 8 号住居 址小竪穴15土壙44・45・70実測図
（1：80）



第 151図　樋口内城館址遺跡，13号住居址，小竪穴２，土壙９実測図（１：80）

カ）13号住居址（図151、149の80～88、155の37～43、158の133、図版11の42）

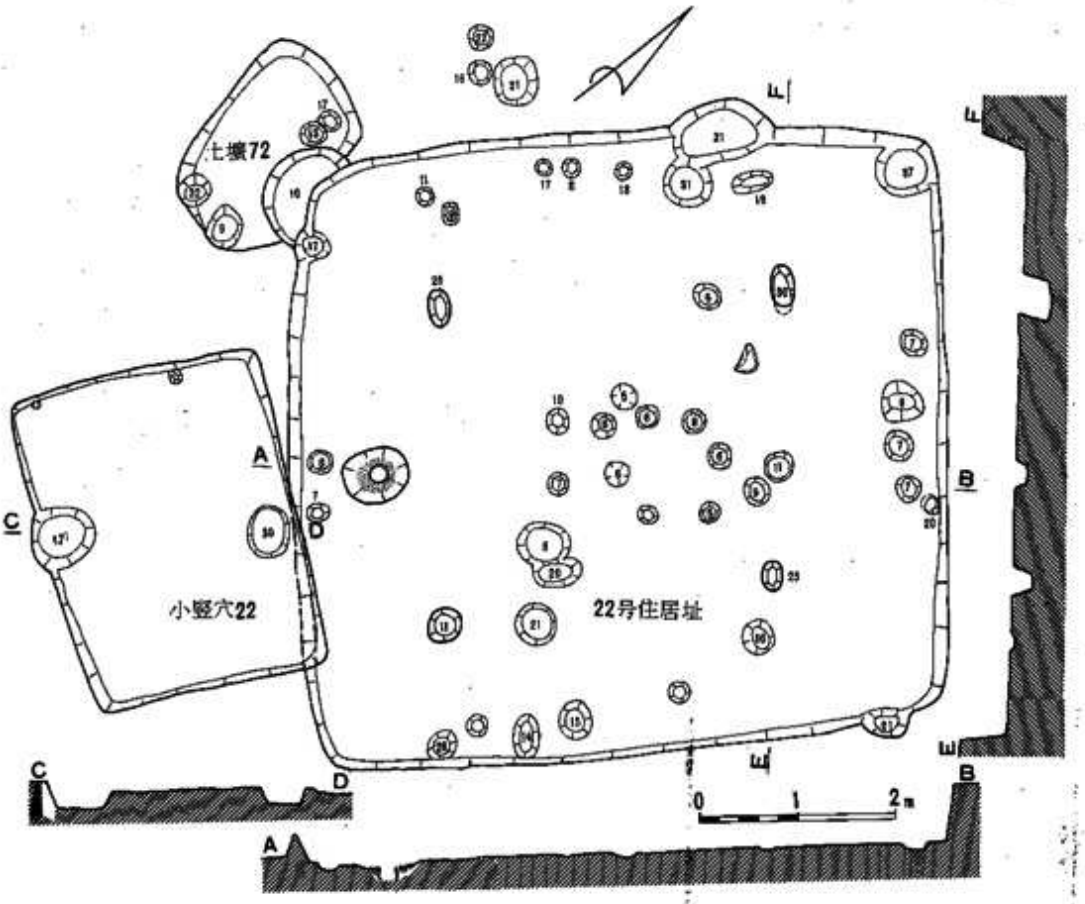
遺構、丘陵南西部に位置した本址は、耕作による破損がはげしく、また小竪穴２と土壙９と重複するため、検出に困難を極めた。北壁、東壁、南壁のそれぞれに一部分浅い壁が認められ、長方形プランの確認ができた。南北で4.14m を計り、床面は暗褐色土をたたいた非常に堅緻な面をもつ住居であるが、炉址、主柱穴は不明である。

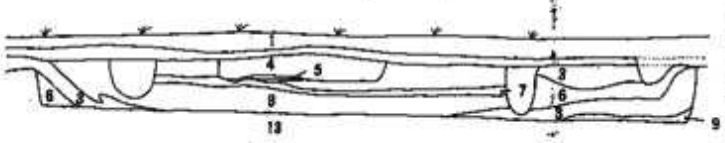
遺物、出土量は少ない。土器片は甕形土器のもので、80には幾重もの波状文を縦に切った平行線文がみられ、83には波状文と斜走短線文が施されている。82の口唇には縄文が付されている。弥生中期末から後期前半に比定されよう。石器は床面、覆土中から石鏃７点と局部磨製石斧１点が出土した。　（山岡）

キ）18号住居址（図38、149の89～100）

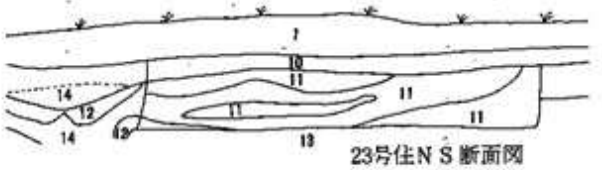
遺構、丘陵南縁に検出された本址は、北に位置した縄文中期19号住居址を切って構築されている。南は築城か開田の際に削り取られて急崖を呈し、検出不能であった。残存の北壁、西壁から推定して長方形プランのものであろう。床面は固くしまっており、床面上に楕円形の主柱穴２が確認された。炉址は南に存したと思われる。

遺物、遺物の出土量はさして多くない。甕形土器２個と同破片で、89は胴長の器形で頸部に波状文と斜走短線文が、90には斜走短線文が施されている。床面上に横転して出土したものである。また本址のものではないが、本址覆土上から、朱色の被膜のみで木質部腐植の漆器（天目茶椀台？）が出土したことは注目すべきである。中世以降のものであろう。　（根津）





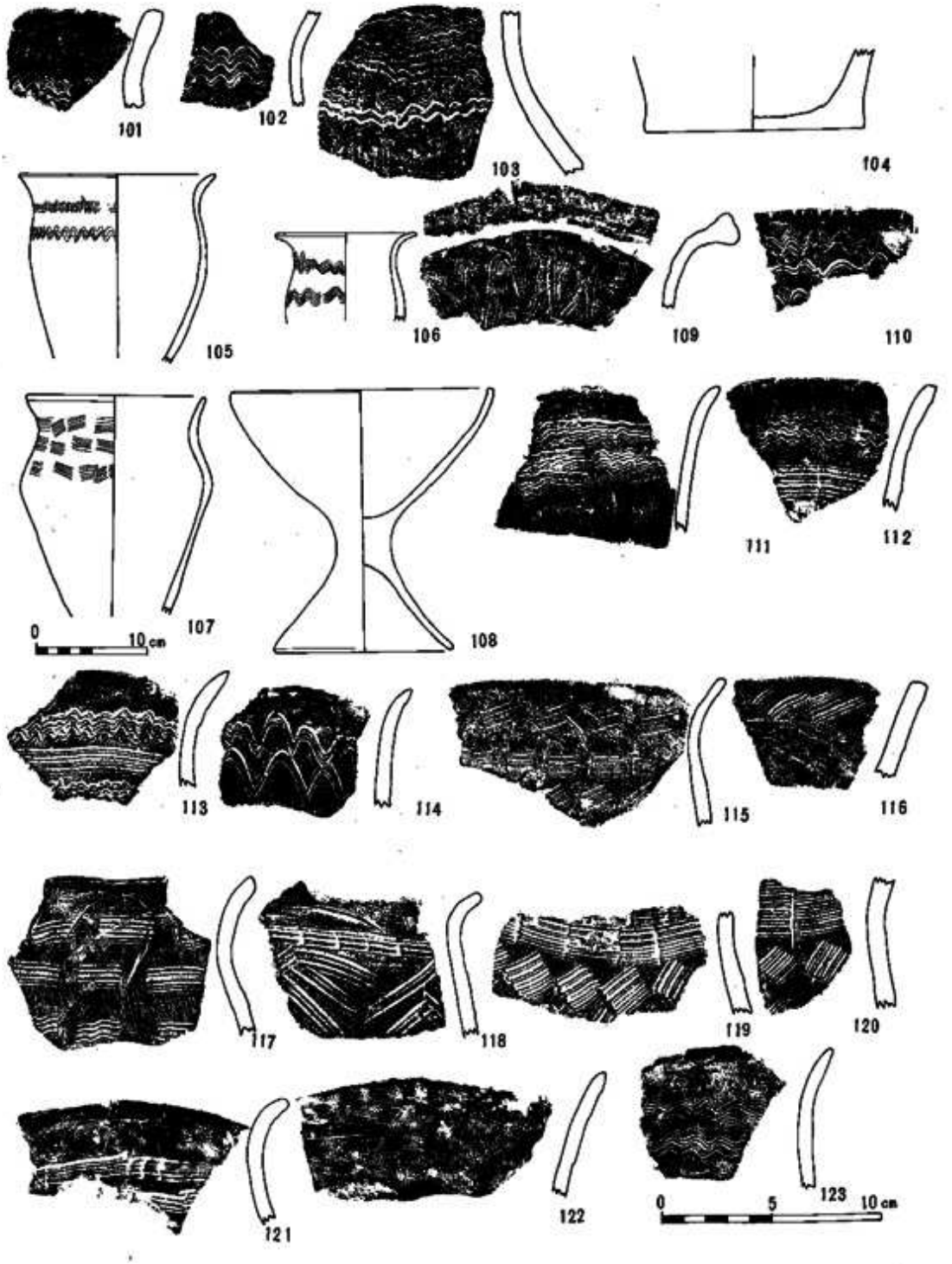
22号住断面図



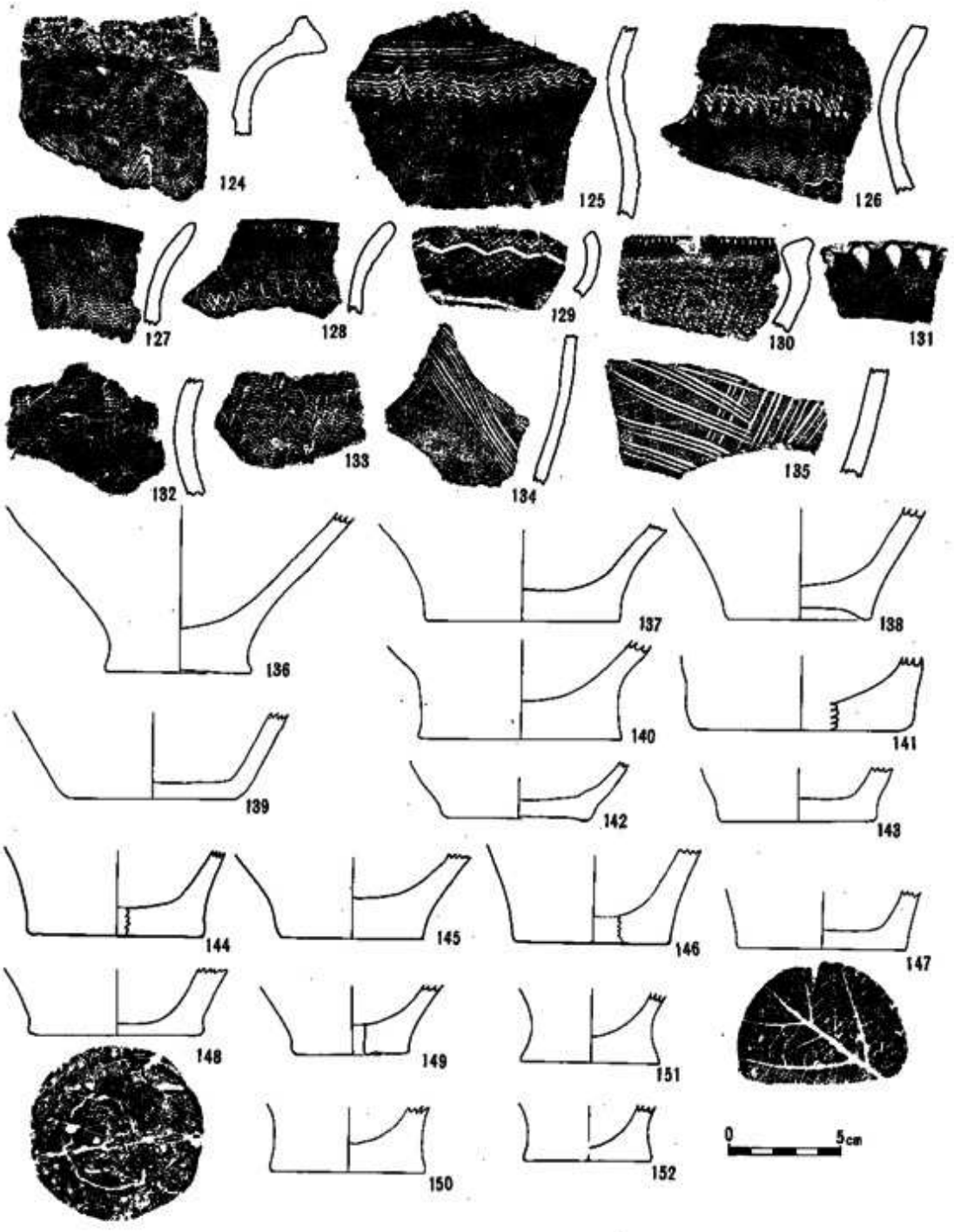
23号住ＮＳ断面図

1．耕作土
2．水田床土
3．暗褐色土
4．焼・スミ含有黒色土
5．焼土
6．茶褐色土
7．黒色土
8．ローム塊含有茶褐色土
9．やや固い暗茶褐色土
10．黒褐色土
11．ローム塊混り黒褐色土
12．ローム混り黒色土
13．ローム
14．ローム混り黒褐色土

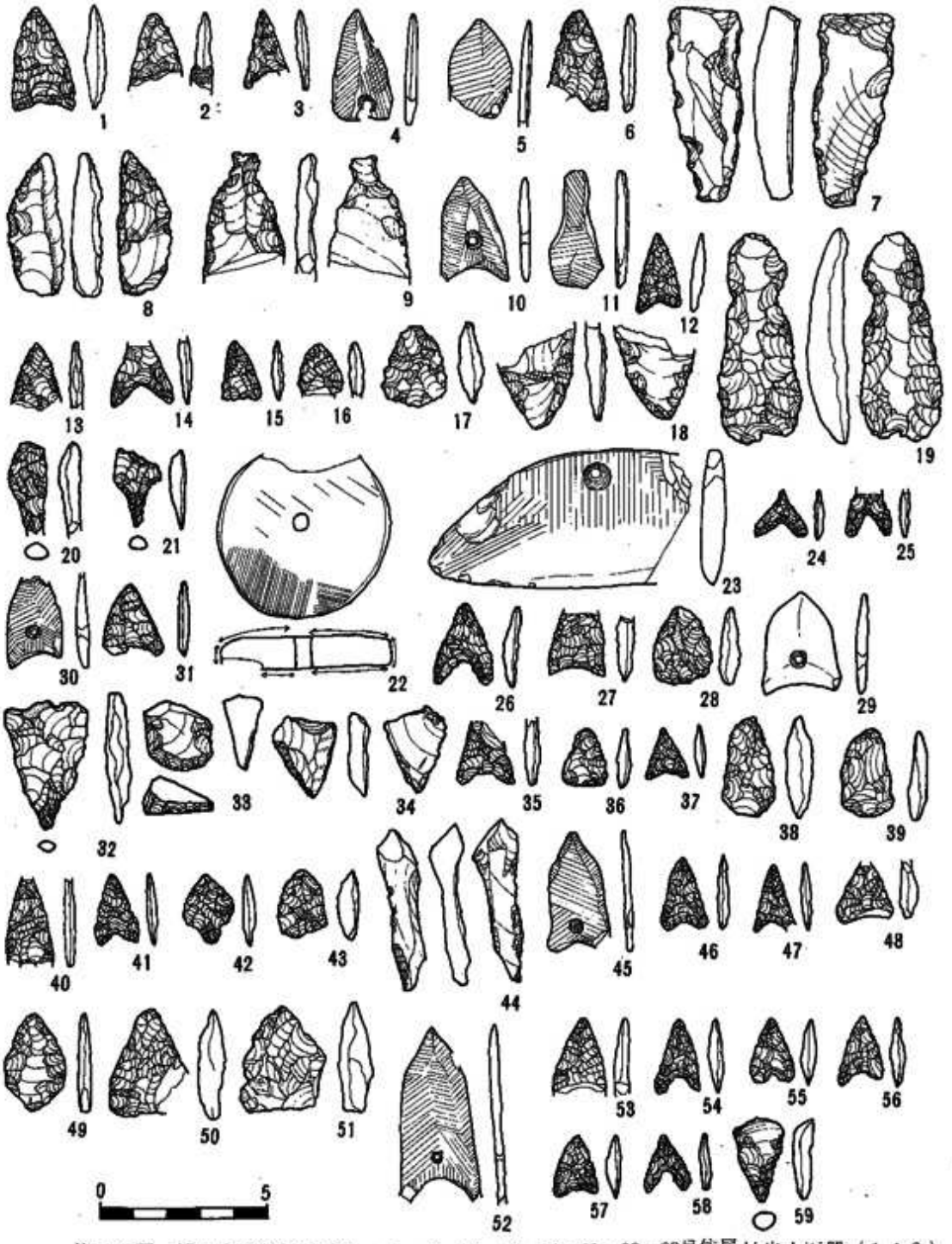
第 152図　樋口内城館址遺跡22号住居址，小竪穴22，土壙72実測図および22・23号住居址土層断面図（１：80）



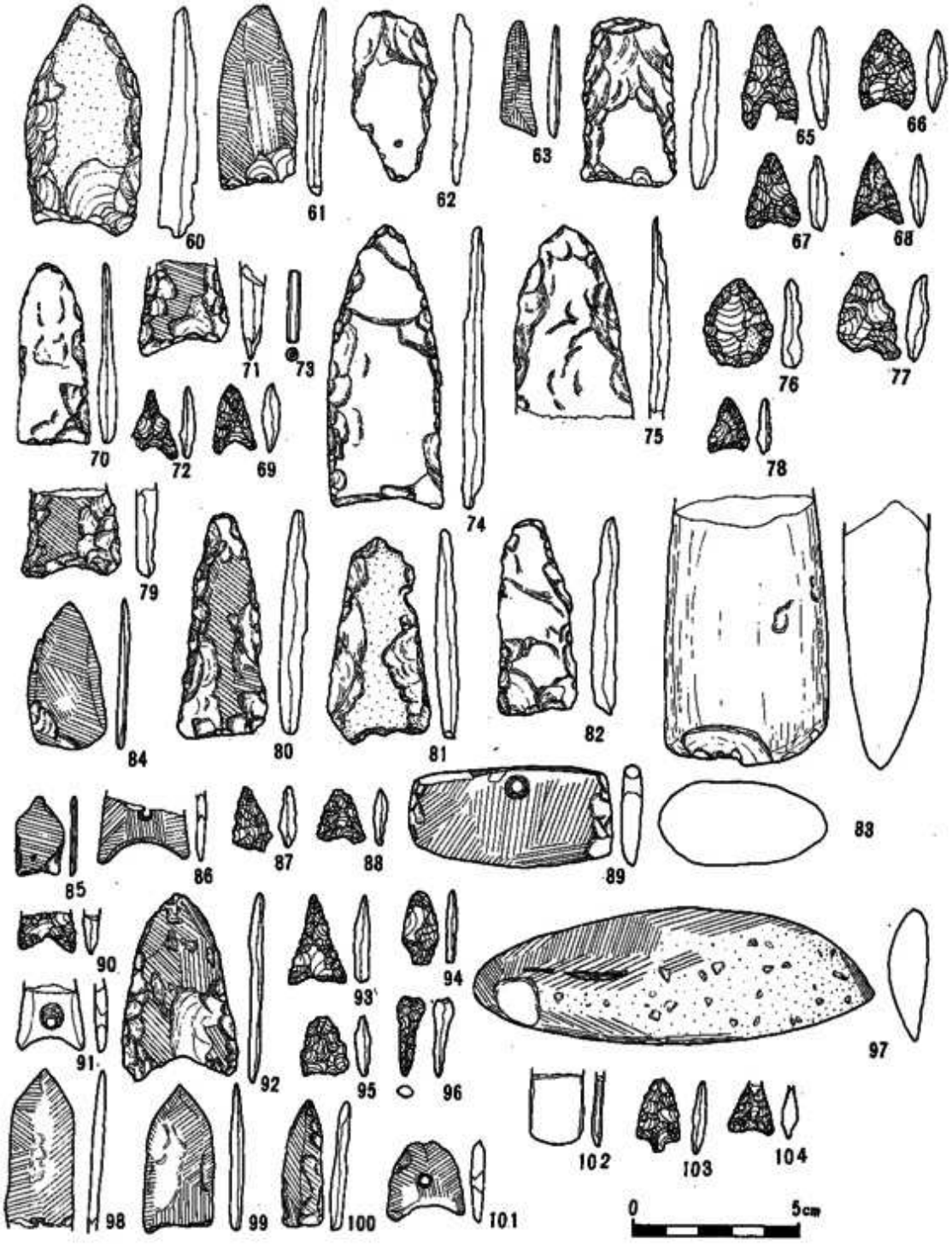
第 153図　樋口内城館址遺跡21・22号住居址出土土器（ 105～ 108　1：6，他　1：3）
（ 101～ 104　21住，105～ 123　22号住）



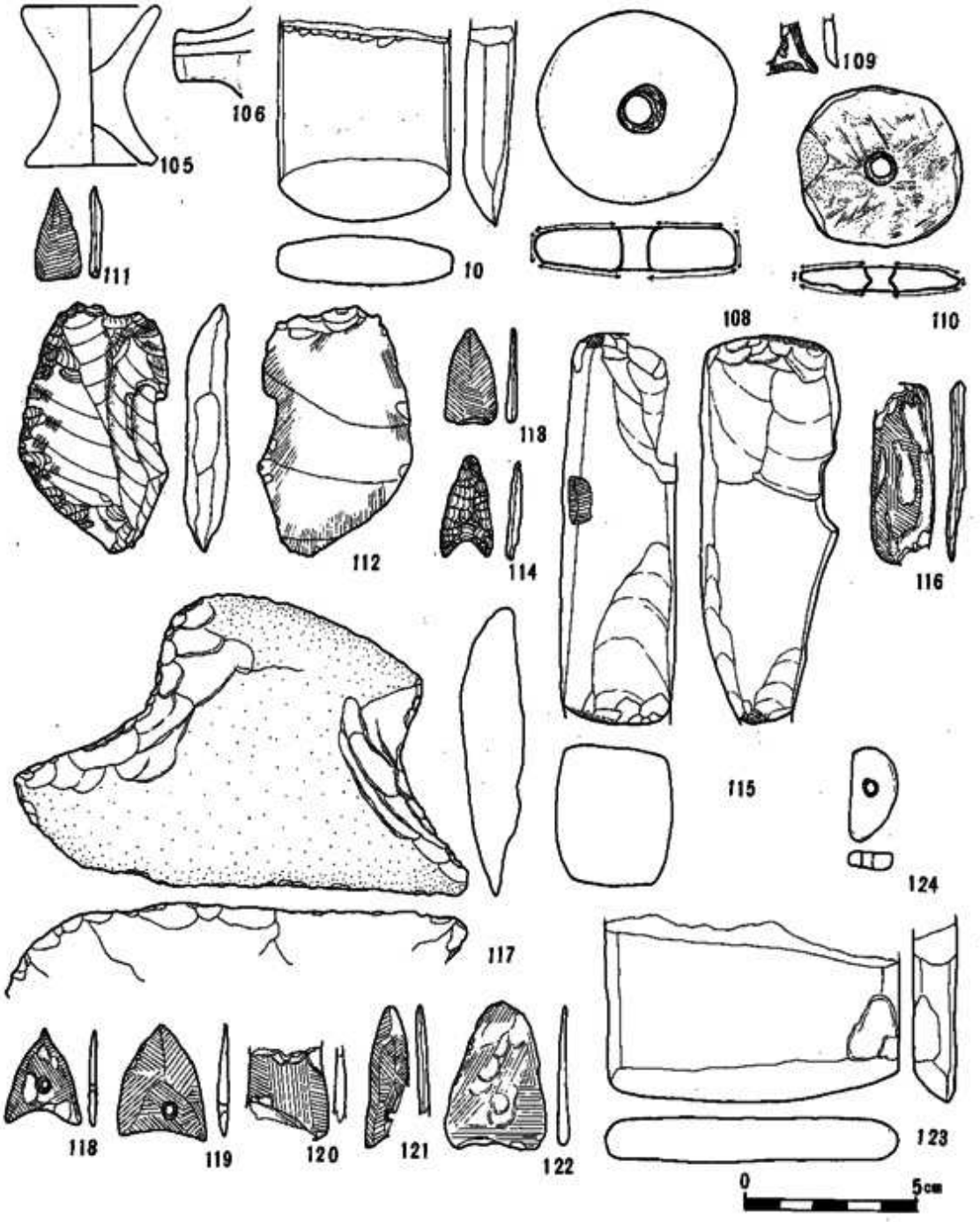
第 154図　樋口内城館址遺跡22号住居址出土土器（1：3）



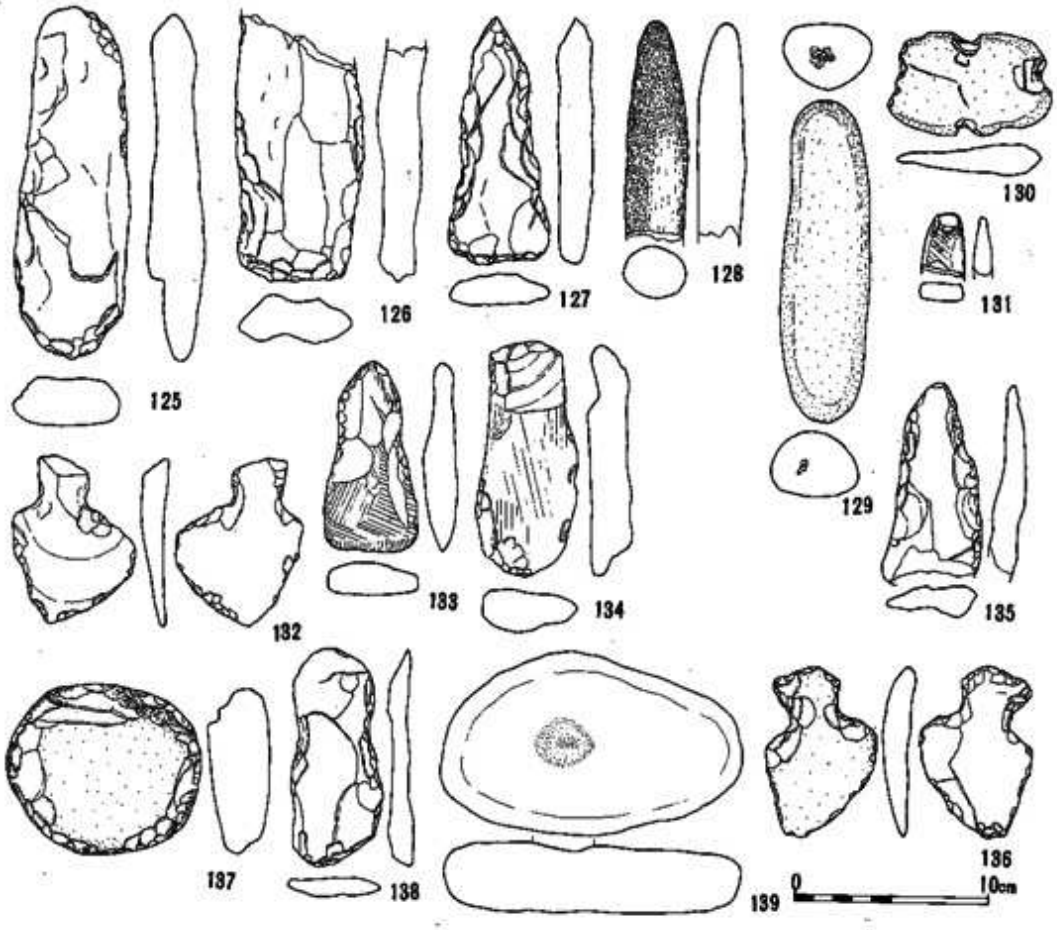
第 155図　樋口内城館址遺跡1・5・6・7・8・13・21・22・23号住居址出土石器（1：2）
（1～3　1号住居址床面，4～9　1号住居址覆土，10～21　5号住居址覆土
22～28　6号住居址覆土，29　7号住居址床面，30～31　7号住居址覆土
32～34　43号住居址床面 35～36　43号住居址覆土，37～39　13号住居址床面
40～43　13号住居址覆土，44　21号住居址覆土，45～51　22号住居址覆土 52～59 23号住居址覆土）



第 156図　樋口内城館址遺跡26・31・32・35・33・46・39・42・49・50・71・51・55・59・61号住居址出土石器（1：2）(60～68　26号住居址覆土，69　31号住居址床面，70～72　31号住居址覆土，73　32号住居址覆土　74～75　35号住居址覆土，76～78　33号住居址覆土，79　46号住居址床面覆土 80　39号住居址覆土 81　42号住居址床面，82　42号住居址覆土，83　49号住居址床面 84～88　50号住居址覆土 89～90　71号住居址覆土，91　51号住居址床面，92～94　51号住居址覆土，95　55号住居址覆土，96　59号住居址床面，97　59号住居址覆土，98～ 104　61号住居址覆土)



第 157図　樋口内城館址遺跡77・ 105・ 106・ 110・ 108・ 109・ 111・112・ 113・ 124号住居址およびその他出土土器・石器（1：2）105～ 106　77号住居址覆土，107　101号住居址覆土，108～ 109　106号住居址覆土，110　110号住居址覆土，111　108号住居址覆土，112　109号住居址覆土，113　111号住居址覆土　114　112号住居址覆土，115　113号住居址覆土，116～ 117　124号住居址床面，118～ 124　その他



第 158図　樋口内城館址遺跡1・7・13・23・24・59号住居址出土石器（1：4）
（125～130　1号住居址覆土，131～132　7号住居址覆土，133～13号住居址覆土，134～137　23号住居址覆土，138　24号住居址覆土，139　59号住居址覆土）

ク）21号住居址（図36、153の101～104、155の44）

遺構、本址は縄文期12号住居址の東に接して検出され、西壁の確認のみで終わったものである。南北で4.23mを計り、長方形プランが予想される。壁高20cm、床面は軟弱で、柱穴、炉は確認できなかった。

遺物、櫛状工具による波状文をもつ弥生後期の土器片が少量出土したのみである。103は壺形土器の頸部片である。石器は、石鏃状の剥片石器が1点覆土から出土した。（市沢）

ケ）22号住居址（図152・153・154、155の45～51、図版12の47～48、45の223～226）

遺構、丘陵の中央やや西寄りに位置し、小竪穴22に一部南壁を切られて検出された。本址上には貼床をして37号住居址が構築されている。東西6.68×南北6.36mのほぼ方形プランを呈する規模の大き目の住居址である。床面は非常に堅緻で良好、壁高は45～58cmを計り暗褐色土層からローム層を掘り込んでいる。壁

に沿った床面上には並んで浅い凹みが認められ補助的柱穴と思われる。主柱穴は楕円形を呈し４本等間隔に配置されている。炉は南側主柱穴間線上より南壁に寄って作られた埋甕炉である。

遺物、土器の出土量は多い。完形土器に近いものが甕形土器に３点、高坏形土器１点出土した。図版45の223は炉甕として使用されたもので、口縁から胴部に波状文が施され、その下に円弧に近い短線文がみられる。底部を欠損するが、縦方向に篦調整がなされている。105～106には波状文、107には斜走短線文が施されている。床面出土である。108の高坏は篦磨きが顕著で、外面と坏部内面に丹塗りがみられる。
破片の中には甑形土器底部(149)が出土し注意される。簾状文(118、119)縄文(129、130) をもつものも覆土から出土し、やや古い様相を示す。弥生後期前半に比定される住居址である。

石器は覆土中から打製石鏃６、磨製石鏃１が出土した。磨製石鏃は基部に両側から孔をあけはじめているが完通していないものである。 （山岡）

コ）23号・24号住居址

ａ）23号住居址（図159・160、162の177～180、155の52～59、158の134～137、図版13の49）

遺構、丘陵西南部に営なまれた本址は、東部にある30号、38号、24号住居址を切って構築している。北東隅には中世小竪穴が掘り込まれているが、全貌を把握できた。

7.49×5.08m の規模をもつ大き目の住居址で東西に長い長方形プランを呈する。主軸方向をＮ－65°－Ｗに示し、ローム土を掘り込む壁は急傾斜で床面に続く。床面はたたき状の堅緻な面であり、楕円形の主柱穴が４個所規則性をもって掘られている。壁沿いおよび中央辺には浅い凹みが多数認められる。炉は西側主柱穴間線上のほぼ中央に位置する埋甕炉で附近はよく焼けている。

遺物、土器は波状文を施した弥生後期に比定されるもので、153は炉甕として使われている。底部欠損である。155は壺の口縁部で山形波状文が付されている。171は底径22cmという大きさで、浅鉢ではないだろうか。石器はすべて覆土中からの出土で、打製石鏃６、磨製石鏃１、打製石斧２、敲打器１、石匙１がある。52の磨製石鏃は、大き目のもので基部に孔を有する。184の高坏は丹塗りである。 （福沢）

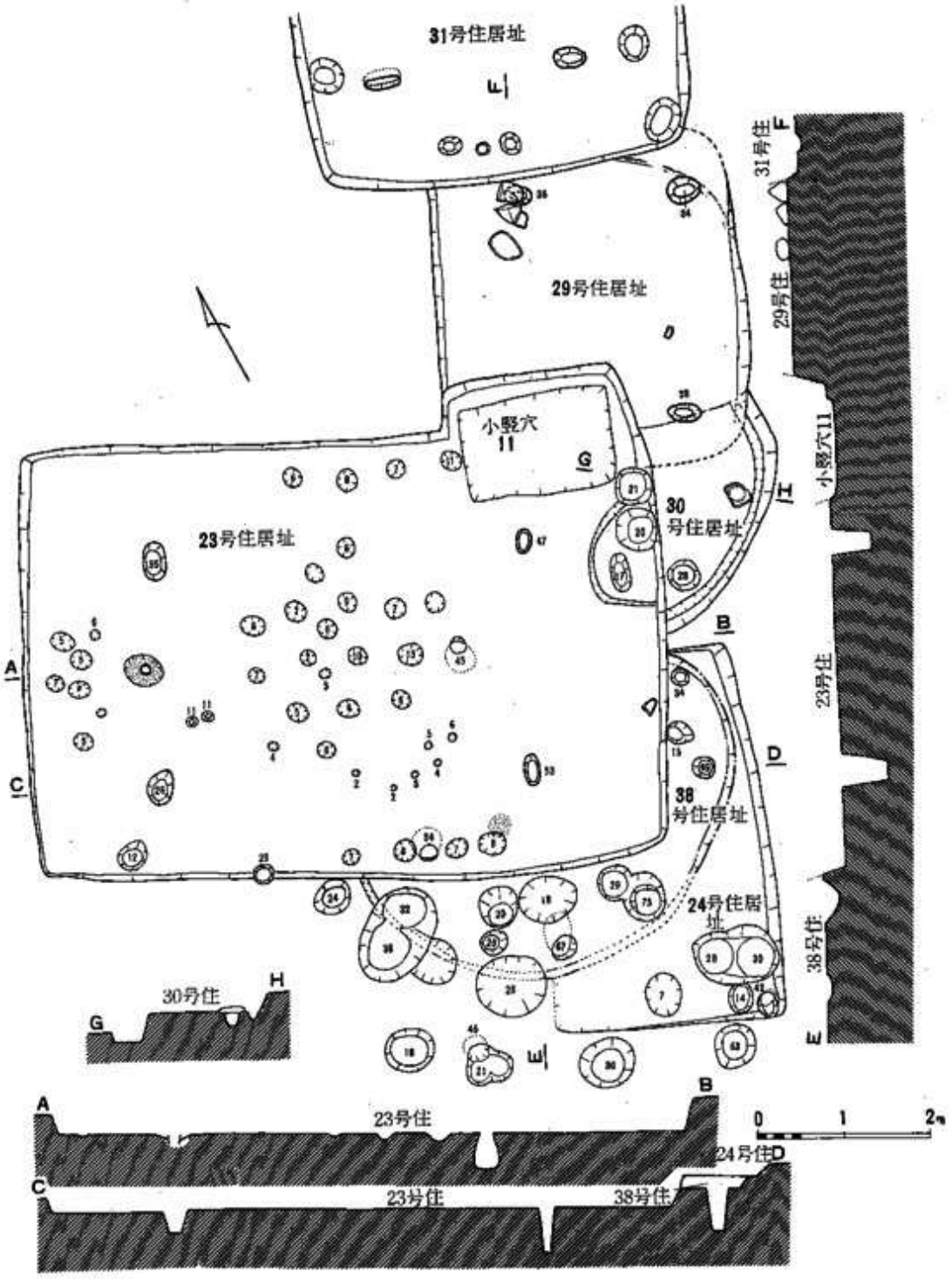
ｂ）24号住居址（図159、162の181～184、158の138、図版13の49）

遺構、縄文中期38号住居址上に貼床して営なまれた本址は、23号住居址に切られ、東半分を確認したのみである。南北で4.37m を測値するのみで、炉址、柱穴等不明であり、果して住居址かどうかも疑問なものである。

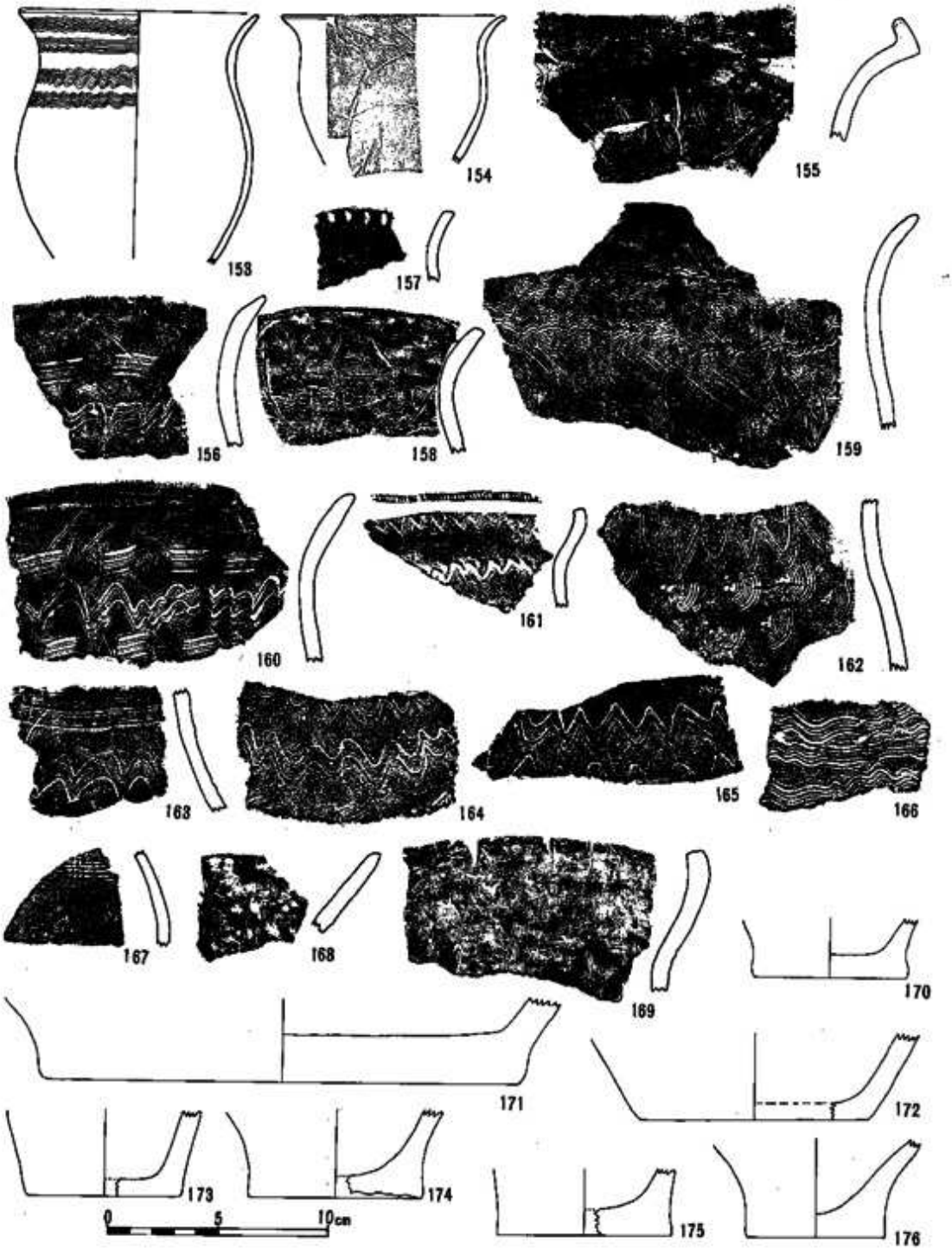
遺物、土器は波状文をもつ甕形土器片で弥生後期に比定される。石器は覆土中から打製石斧が１点出土したが、38号住居址のものかは判別が困難である。 （福沢）

サ）26号住居址（図161、162の185～200、156の60～68）

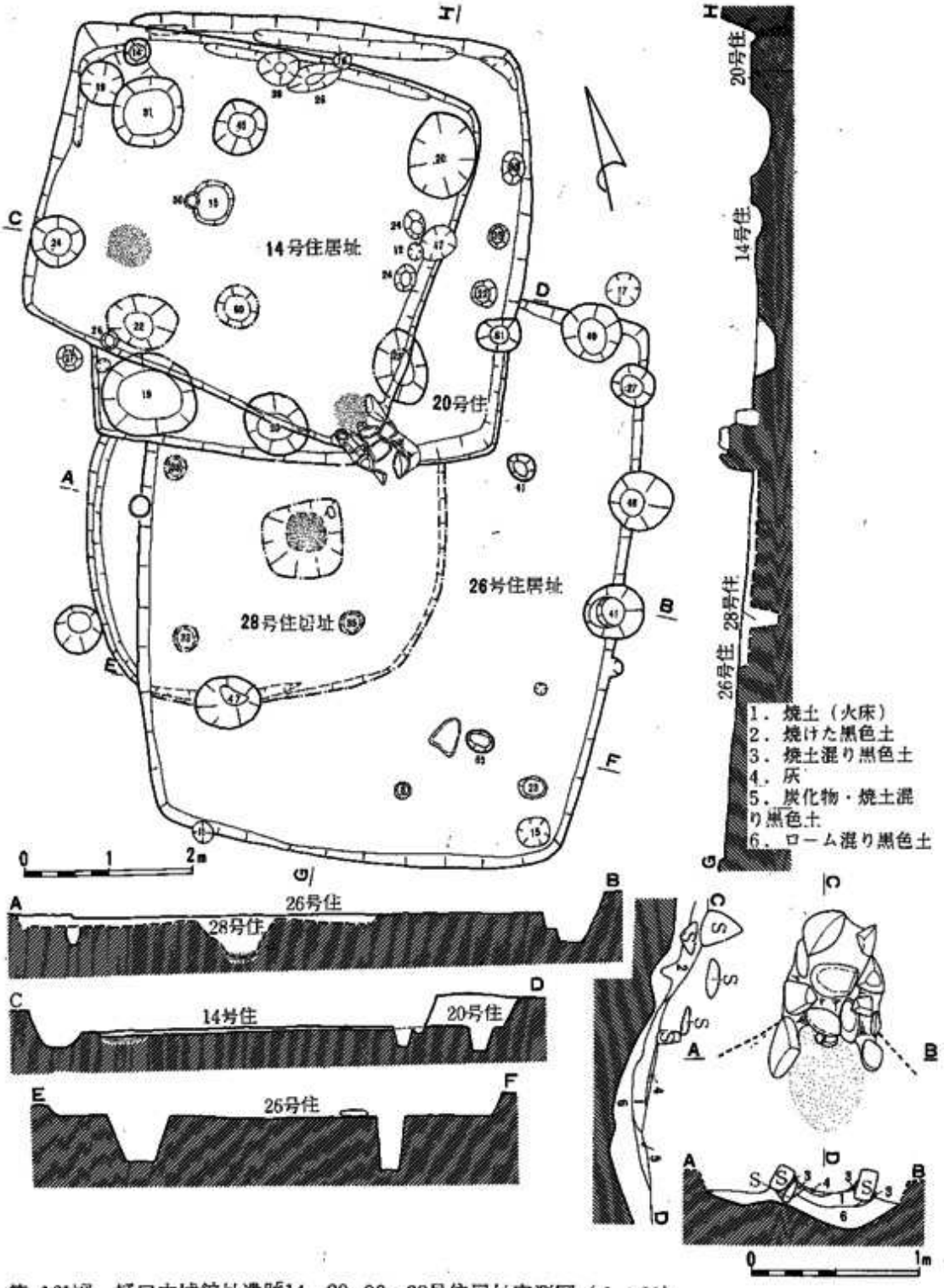
遺構、丘陵南端部に営なまれた本址は、縄文期28号住居址上に構築されている。北西部を20号住居址に切られ、南部は、19、27号住居址を切って検出された。5.83×6.90m の規模をもつ長方形プランで、主軸方向をＮ－22°－Ｅにとる。床面は、中央辺より西は貼床であり、平坦で堅緻な面をもつ。主柱穴は３個所確認されているが、配列からして４本であったろう。炉は北側主柱穴間にあったものと考えられる。また東



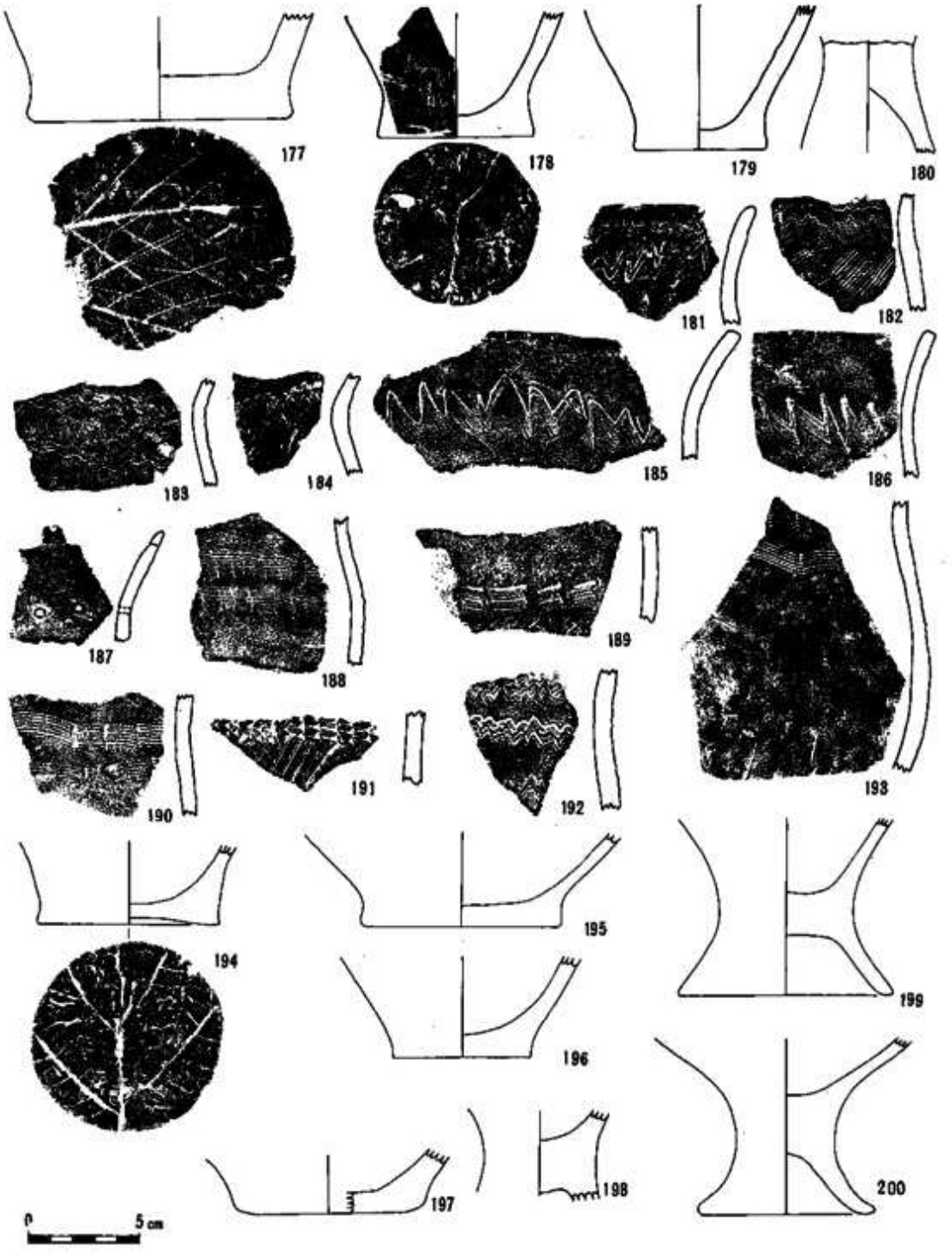
第 159図　樋口内城館址遺跡23・24 ・29・38号住居址実測図（1： 800）



第 160図　樋口内城館址遺跡23号住居址出土土器（ 153・ 154　1：6，他　1：3）



第 161図　樋口内城館址遺跡14・20・26・28号住居址実測図（1：80）
および14号住居址カマド実測図（1：40）



第 162図　樋口内城館址遺跡23・24・26号住居址出土土器（1：3）
（177～180　23号住，121～184 24号住，185～200　26号住）

壁にピットが検出されているが、黒褐色土層からの掘り込みで、本址との関連性はないものと考える。

遺物　土器の出土量は多くない。波状文・簾状文・斜走短線文を施した甕形土器片が多い。187は口縁に小突起をもち、口縁部に並んだ2個の穴が完通している。198～200は高坏形土器の底部片である。弥生後期に比定される住居址であろう。石器は打製石鏃4、磨製石鏃未完成品5が覆土中から出土している。

（根　津）

シ）29号・31号住居址

a ）29号住居址（図159、164の201～210、図版14の57・47の234）

遺構　本址は、北を31号住居址に、南を小竪穴11に切られて検出された。南部は縄文期30号住居址上に作られており、東西3.62mを計る規模で、長方形プランであったろう。壁は西側で9cmの高さをもつが東側は低く判然としない。床面は壁の際を除いてほぼ全面が堅いたたき状となっており、主柱穴は3個所に認められた。他の1穴と炉址は、小竪穴11に破壊されたものと思われる。

遺物　201は波状文を施した小形甕、203は斜走短線文をもつ壺形土器口縁部片、204は簾状文の下に斜走短線文を施すもの、208の口唇には縄文とやや古い様相をもった土器片が出土しているが、201からして弥生後期前半に比定できよう。

（深　沢）

b ）31号住居址（図163、164の211～217、156の69～72、図版46の227）

遺構　29号住居址の北に位置した本址は、29号住居址の北部を切り、北は43号住居址を切って構築されている。プランは、わずかに胴張りの長方形で、規模は4.65×5.82m、主軸方向をN－26°－Eに示す。掘り込みはローム表面で発見されたが覆土には黒色土が堆積していた。壁は比較的堅く、ほゞ垂直に掘られてその高さは17～27cmである。床面は平坦で堅いたたき状を呈し、四隅内側には、楕円形の主柱穴が規則的に掘られて深い。北側主柱穴間線上よりやや壁へ寄った位置に埋甕炉がある。甕の南半分は、土壙7に切られて失っているが、残された甕の内部には焼土と炭化物が入っており、また甕周辺の床も赤く焼けている。南と西の壁に沿って小ピットが3個所ずつ並んで掘られているのが支柱穴であろうか。

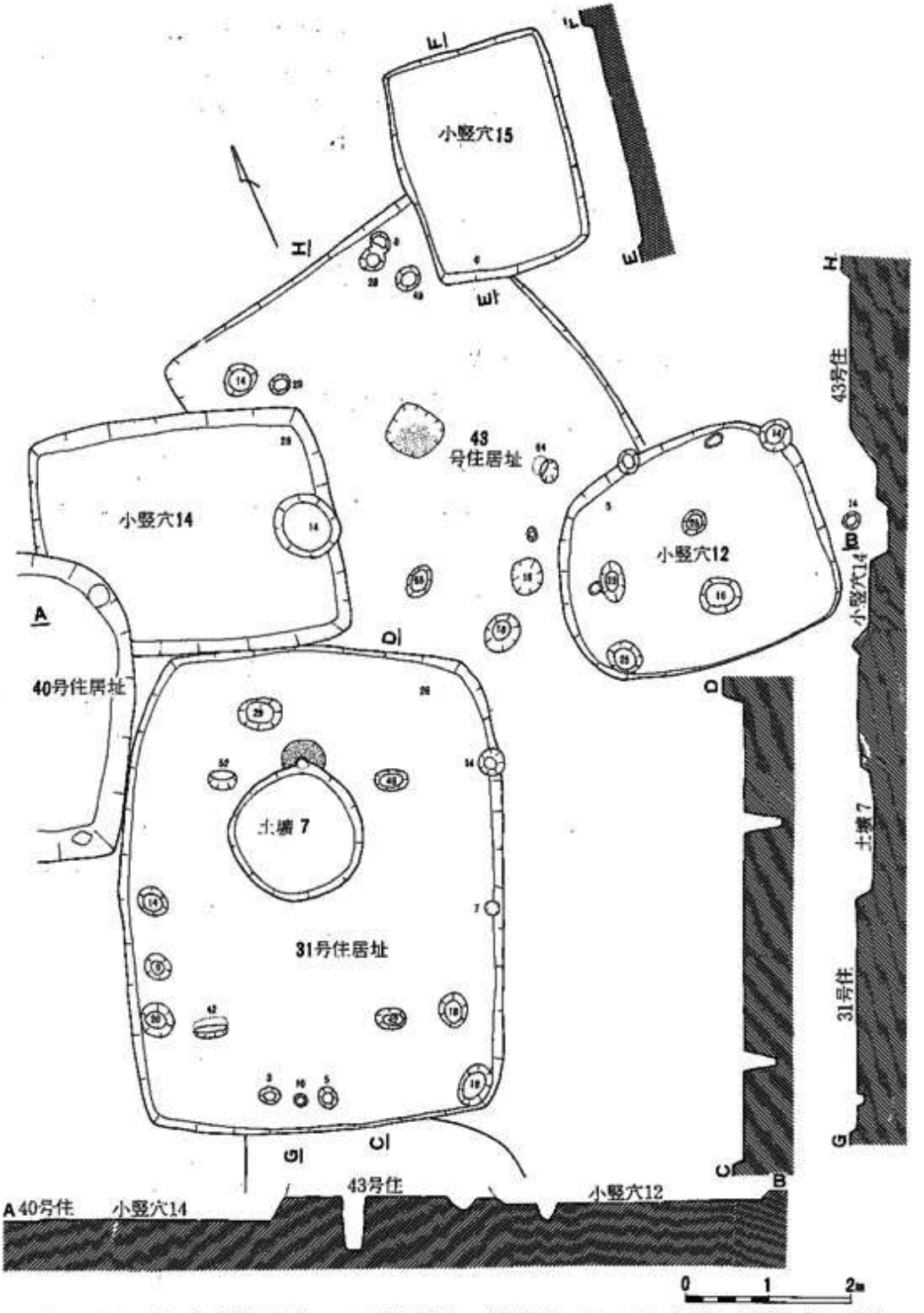
遺物　土器は弥生後期に比定されるもので、大形の壺の破片が重なり合って覆土上部から出土しているが他にまとまって出土したものはない。216はその壺で頸部に櫛状工具による平行条線文がみられる。217は炉甕である。石器は床面から打製石鏃が1点、覆土中から磨製石鏃2点と打製石鏃1点が出土している。磨製石鏃は未完成品と思われるもので、孔はない。

（深　沢）

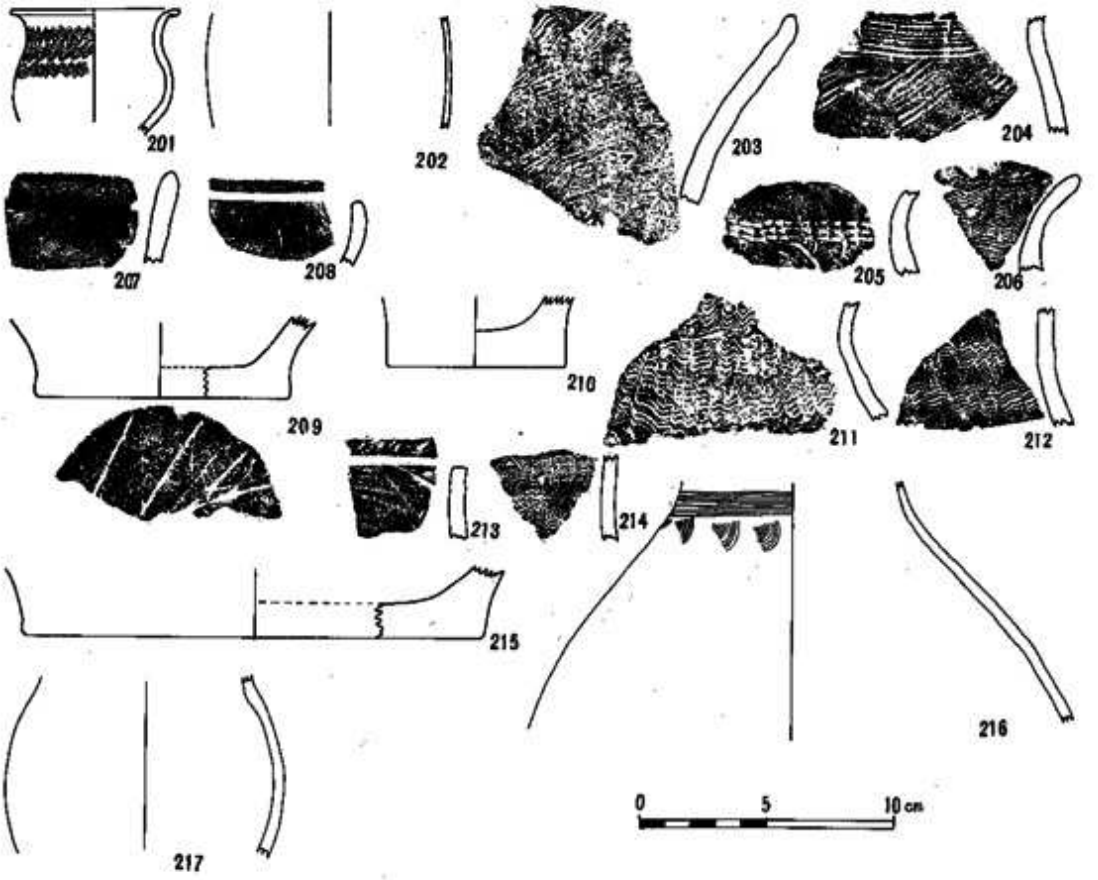
ス）32号・35号住居址

a ）32号住居址（図165・166・156の73、図版13の52・46の228～231）

遺構　丘陵西端近くに営なまれた本址は、規模の大きい住居で、東西6.21、南北8.74mを測値する。プランは、北と南に張り出した長方形で、壁は垂直に近い角度で掘り込まれて床面に続く。床面は中央より北に一部貼床部分を認めたが、平坦で堅緻である。主柱穴は四個所だが、南北の張った壁内に対称的に2穴あるのは、棟持柱なのかもしれない。床面中央辺と壁沿いに浅い小ピットが数多く検出されたが、補助支柱、間仕切り用のものではないだろうか。炉は北側主柱穴間線上に2個の甕、更に北壁寄りに南北に並



第 163図　樋口内城館址遺跡31・43号住居址，小竪穴12・14・15・土壙7実測図（1：80）



第 164図　樋口内城館址遺跡29・31号住居址出土土器（201・202・216・217　1：6，他1：3）（201～210　29号住，211～217　31号住）

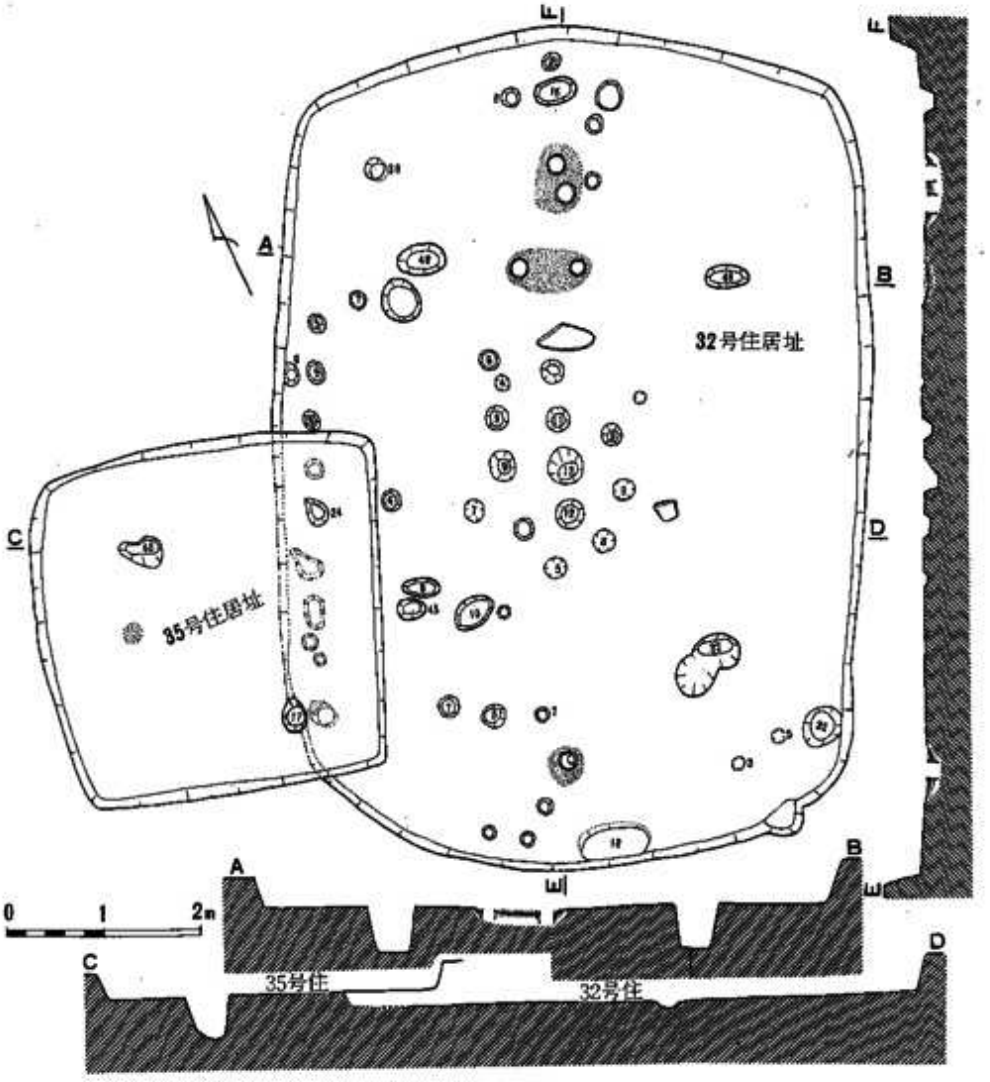
んで2個の甕、南壁寄りに1個の甕と計5個の炉甕を使った3個所の炉址が検出された。一部貼床もあり時間差を考える必要があろうが、このような例は余りみない。

なお、本址南西部には、本址床面上に35号住居址が営なまれ、南東部には溝状遺構2が掘り込まれている。本址主軸方向はN－26°－Eを示す。

遺物　波状文を施した弥生後期に比定される土器が出土している。240～242、250は炉甕として使用されたもので、口縁部と底部を欠損する。いずれも波状文を横走させるが、250にはその下に斜走短線文が付されている。251はふくらみをもった口縁に指圧痕があり、胴部には格子状沈線文が施されたもので炉甕との間に時期差を有するが、本址は炉甕からして弥生後期に比定できる。また床面近くの覆土から、極く細い赤褐色をした管玉が1個検出された。（156図73）　（根　津）

b）35号住居址（図165・169の317～320・156の74～75）

遺構　本址は、32号住居址の南西壁を一部切って、32号上に構築したもので、方形プランを呈する。

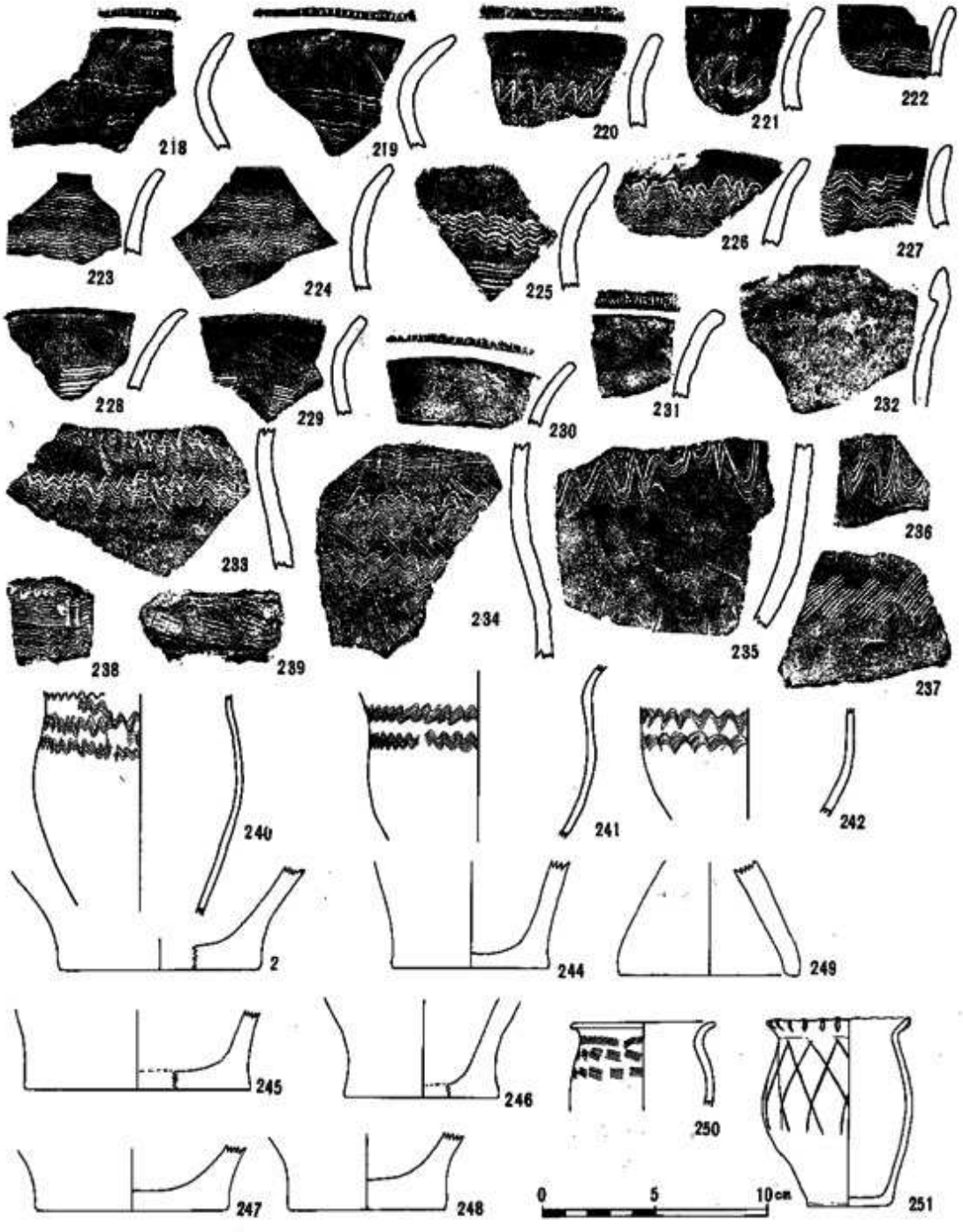


第 165図　樋口内城館址遺跡32・35号 住居址実測図（1：80）

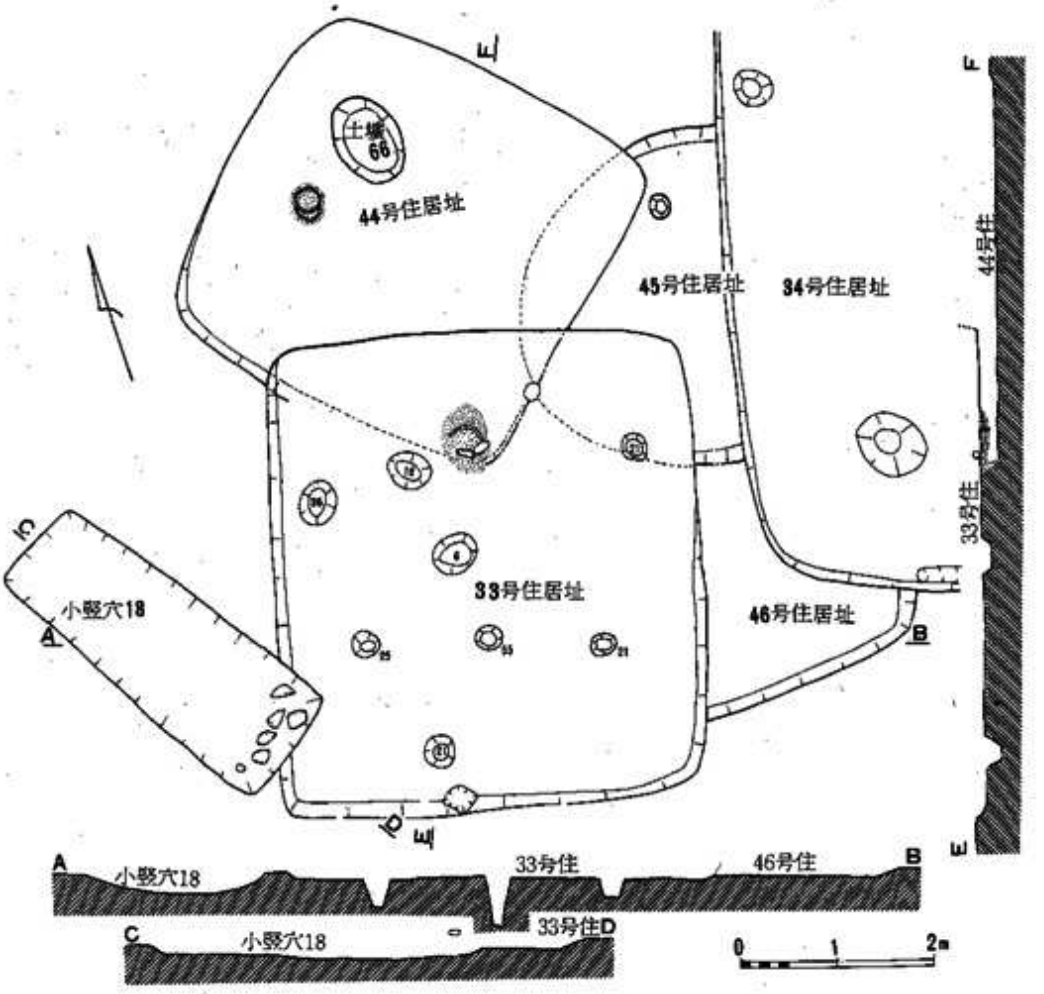
床面はたたいた堅い面をもち、主柱穴が3個所確認された。西側柱穴の南には浅い凹みと焼土が小範囲にあることから炉址と考えてよかろう。

遺物　すべて覆土中からの出土である。土器は波状文・平行沈線文が施されたものであり、石器は磨製石鏃の未完成品と思えるもの2点が出土した。　（根　津）

セ）33号・44号・46号住居址



第 166図　樋口内城館址遺跡32号住居址出土土器（240～ 242 250・ 251　1：6・他 1：3）



第 167図　樋口内城館址遺跡33・44・45・46号住居址，小竪穴18実測図（1：80）

a ）33号住居址（図167・168の252～273・156の76～78、図版14の56、46の232）

遺構　丘陵北西部に営なまれた本址は、住居址の密集地帯で、北部から東部にある44・45・46号住居址を切って構築されている。西壁南部を小竪穴18に切られて検出された。壁は緩傾斜で浅いため、プラン検出に困難であったが、4.45×4.94m の規模をもつ方形プランであることが判明した。主軸方向はN－16°－E を示す。床面は南半分は堅くしまっていたが、北半特に44号住居址上の貼床は軟弱である。主柱穴は4本と考えるが、2列に並ぶ6本かもしれない。炉は北側主柱穴間線上よりやや北寄りに、2個の石と壺形土器頸部片を逆にして使った埋甕炉である。

遺物　273は炉甕として使った壺形土器の頸部で、平行条線を縦に垂下する沈線でアクセントをつけ、そ

の下に斜走短線文を綾杉状に配した文様構成をとっている。弥生中期的な様相を示すものである。
石器は覆土中から石鏃が2点出土している。（小松原）

b ）44号住居址（図167・168の275～282、図版47の239）

遺構　丘陵北西部に営なまれた本址は、33号住居址の床面下に南壁があり、北側はローム面とほぼ同一でプランを決めるのに困難な住居址であった。壁は西隅に一部認められるのみで、他は5㎝程の浅いものである。主軸方向をN－45°－Wに示す。3.97×3.95mの規模の方形プランで、主柱穴は検出出来得なかった。床面は軟弱であり、炉は西壁内80㎝に位置する埋甕炉である。

遺物　土器は波状文と斜走短線文をもつもので、275・276は炉甕として使われたものである。279は低い隆帯上に刺突文が施されている。弥生中期に比定されるものであろう。（小松原）

c ）46号住居址（図167・168の283～286・156の79）

遺構　33号住居址・34号住居址に大きく切られ、南東隅の一部壁と床面を確認したのみで、プラン等不明である。45号住居址上に貼床が存したと思われるが、検出でき得なかった。

遺物　土器は無文片と底部が出土したのみで、時期決定は困難であるが、33号住居址は、弥生中期に比定されるので、それ以前ということになり、やはり弥生中期と考えたい。

覆土から磨製石鏃の半欠が1点出土している。（小松原）

ソ）39号・42号・49号住居址

a ）39号住居址（図51・169の287～304・156の80、図版14の55、47の235・237）

遺構　丘陵西縁部に位置し、西は42号住居址を、北は48号住居址を、南東は47号住居址を切って構築されている。褐色土層からローム層に深く掘り込まれた4.28×3.75mの長方形プランの住居址で、主軸方向はN－150°－Wに示す。壁は垂直に近く、西・南壁は30㎝を計る。床面は平坦で堅い。土壙40・41が認められ貼床を施していることから縄文期のものと考えられる。主柱穴は四隅に楕円形を呈する深さ40～45㎝のものが規則的に配置されている。炉は南側主柱穴間線上やや南に寄って位置する埋甕炉である。二個の甕を埋めて二重にしてある。

遺物　土器は287・288が炉甕として使用したもので、波状文をもつ。弥生後期に比定されるものである。覆土から磨製石鏃が1点出土した。（辰　野）

b ）42号住居址（図51・169の305～316・156の81～82、図版14の55・47の236・238）

遺構　39号住居址の壁外清掃中に埋甕炉を検出したもので、プラン等は不明である。主柱穴は2個所確認され、炉址との配置からして、西側主柱穴と思われる。炉は壺形土器の頸部を逆にし、その中へ甕を収めた二重のものである。炉甕の中と周辺に焼土の堆積が5～10㎝認められた。

遺物　305・306は炉甕として使われたもので、305は壺形土器頸部である。306には籠状文の下に斜走短線文が施されている。307は床面出土で波状文をもつ。弥生後期前半に位置される住居であろう。石器は床面と覆土から1点ずつ磨製石鏃が出土している。（辰　野）